兵庫県文化財調査報告　第223冊

龍野市

宝林寺北遺跡Ⅱ

—道路改良事業及び揖保川流域下水道事業に伴う発掘調査報告書—

平成14年3月

兵庫県教育委員会

遺跡の遠景（北北東から）

遺跡の全景（東から）

遺跡の全景（北から）

A 地区居館部の全景（上方が西）

龍野市

宝林寺北遺跡Ⅱ

例　言

1　本書は、龍野市揖保町中臣61-３ほかに所在する宝林寺北遺跡の発掘調査報告書である。宝林寺北遺跡は、太子竜野バイパス建設に伴って周知され、その際の調査成果は既に刊行されている。本書の対象とした調査区はこれに近接する場所であることから、同一の遺跡名を付した。

2　発掘調査は、道路改良事業及び揖保川流域下水道事業に関連するもので、兵庫県竜野土木事務所(平成13年４月１日以降は、兵庫県西播磨県民局県土整備部龍野土木事務所)の委託を受けて、平成４・５年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。

3　出土品整理作業は、平成12・13年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

4　遺物写真撮影は、株式会社タニグチ・フォトに委託して実施した。

5　本書の執筆は、本文目次に記したとおり甲斐・長濱が行い、編集は甲斐昭光が行った。

6　本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

7　現地調査および整理作業の際には、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表する。

荻　能幸（上郡町教育委員会）・小栗栖健治（兵庫県立歴史博物館）・岸本道昭（龍野市教育委員会）・小林基伸（兵庫県立歴史博物館）・芝　香寿人（御津町教育委員会）・古本　寛（龍野市教育委員会）・三村修次（太子町教育委員会）・福井英治（尼崎市教育委員会）・山上真子（尼崎市教育委員会）

以上敬称略・五十音順・括弧内は当時の所属

凡　例

1　本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基とし、方位は座標北を指す。なお本地域は、国土座標第Ｖ系に属している。

2　遺物には通し番号を付けている。ただし石製品・金属製品には、その頭にそれぞれＳ・Ｍをつけて、土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

3　土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。

土師器・弥生土器：白抜き　／　須恵器：黒塗り　／　瓦器：濃い網掛け　／　陶磁器：薄い網掛け

4　遺構名称はアルファベットによる略号と数字で表記する場合がある。

略号の意味は以下のとおりである。

SA：柵　　SB：掘立柱建物　　SD：溝　　SK：土坑　　SX：土壙墓・木棺墓　　P：柱穴

5　土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1992年版を使用した。

6　遺物の記述にあたり、輸入陶磁器、備前焼、石鍋については以下の文献による分類等に基づいた。

輸入陶磁器：山本信夫　2000『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会

瓦　器　椀：尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』古代を考える会

備　前　焼：間壁忠彦　1991『備前焼』考古学ライブラリー60　ニューサイエンス社

石　　鍋：木戸雅寿　1995「石鍋」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

本文目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1

第１節　遺跡の位置 ……（甲斐昭光）… 1

第２節　遺跡の歴史的環境 ……（長濱誠司）… 2

第２章　調査の経過 …… 6

第１節　調査に至る経緯 ……（甲斐）… 6

第２節　第１次確認調査 ……（長濱）… 6

１．調査の方法　２．調査体制　３．調査の結果

第３節　第２次確認調査 ……（甲斐）… 7

１．調査の方法　２．調査体制　３．調査の結果

第４節　全面調査の経過と体制 ……（甲斐）… 10

１．概略　２．平成４年度の調査　３．平成５年度の調査

第５節　整理作業の経過と体制 ……（甲斐）… 12

１．平成12年度の整理作業　２．平成13年度の整理作業

第３章　調査の結果 …… 13

第１節　調査区の概観 ……（甲斐）… 13

１．調査区の位置　２．地形環境　３．既往の調査 …… 13

第２節　Ａ地区の調査 ……（甲斐）… 19

１．概要 …… 19

２．遺構と遺物 …… 20

３．小結 …… 30

第３節　Ｂ地区の調査 …… 33

１．概要 ……（甲斐）… 33

２．遺構と遺物 ……（甲斐・長濱）… 34

３．小結 ……（甲斐）… 50

第４節　Ｃ地区の調査 …… 53

１．概要 ……（甲斐）… 53

２．遺構と遺物 ……（甲斐・長濱）… 53

３．小結 ……（甲斐）… 63

第４章　遺物の検討 …… 64

第１節　中世以前の土器 ……（長濱）… 64

１．弥生時代　２．古墳時代　３．奈良・平安時代

第２節　中世の土器 ……（甲斐）… 64

１．時期決定の根拠 …… 64

2．土師器皿の変遷について …… 65
3．瓦器について …… 65
第3節　石製品 ……（甲斐）… 67
1．滑石製品について …… 67
2．銘をもつ石硯について …… 67
第4節　金属製品 ……（長濱）… 68
1．中世の鉄製品　2．古墳時代後期の鉄製品

第5章　遺跡の検討 …… 69
第1節　中世以前の遺跡 ……（長濱）… 69
1．古墳時代以前　2．古墳時代以降
第2節　中世の遺跡 ……（甲斐）… 70
1．文献にみえる浦上荘の概要 …… 70
2．ふたつの方形区画をめぐって …… 71
3．浦上荘の水利システム …… 71

第6章　総　括 ……（甲斐）… 73
参考文献 …… 75
付　表 …… 76
図版・写真図版・報告書抄録 ……

挿図目次

第1章　遺跡の位置と環境
第1図　遺跡の位置 …… 1
第2図　周辺の遺跡 …… 4

第2章　調査の経過
第3図　確認調査位置図 …… 8

第3章　調査の結果
第4図　調査区の位置 …… 15
第5図　調査区周辺の微地形復元図 … 16
第6図　調査区全体図 …… 17
第7図　A地区の遺構全体図・土層図 …… 18
第8図　B地区の遺構全体図・土層図 …… 31
第9図　B地区の主要遺構全体図 …… 32
第10図　C地区の遺構全体図・土層図 …… 52

第5章　遺跡の検討
第11図　浦上荘の位置と調査地 …… 70
第12図　浦上荘の中心部における主要水路復元図 …… 72

第6章　総括
第13図　時期別遺構分布状況 …… 74

表　目　次

第１章　遺跡の位置と環境
第１表　昭和58・59年度の調査概要 … 14
第２表　Ａ地区 SD01出土土器組成表 …… 25
第４章　遺跡の位置と環境
第３表　土師器小皿と須恵器椀の共伴関係 …… 66

付　表

付表１　遺構名対照表 …… 76
付表２　掘立柱建物一覧 …… 81
付表３　出土遺物観察表 …… 82

図版目次

図版１　Ａ地区遺構(1)　SB01.05
図版２　Ａ地区遺構(2)　SB02.03
図版３　Ａ地区遺構(3)　SB04.06
図版４　Ａ地区遺構(4)　SK01.02.03
図版５　Ａ地区遺構(5)　SX01.02
図版６　Ａ地区遺構(6)　SD01.03～05
図版７　Ｂ地区遺構(1)　SB07
図版８　Ｂ地区遺構(2)　SB08.09
図版９　Ｂ地区遺構(3)　SB10.11
図版10　Ｂ地区遺構(1)　SB12.14
図版11　Ｂ地区遺構(2)　SB13.15.16
図版12　Ｂ地区遺構(3)　SB17.18
図版13　Ｂ地区遺構(4)　SB21.22.24
図版14　Ｂ地区遺構(5)　SB19.20.23.25.26
図版15　Ｂ地区遺構(6)　SK11.14～16.18～20.23.24.30
図版16　Ｂ地区遺構(7)　SK26～28
図版17　Ｂ地区遺構(8)　SK12.21.22.29.SE01
図版18　Ｂ地区遺構(9)　SD06.07.09.10.12.14.16
図版19　Ｃ地区遺構(1)　SB27～29
図版20　Ｃ地区遺構(2)　SB30.31
図版21　Ｃ地区遺構(3)　SB32.33.35.36
図版22　Ｃ地区遺構(4)　SB34.37
図版23　Ｃ地区遺構(5)　SK31～35
図版24　Ｃ地区遺構(6)　SX03～05
図版25　Ｃ地区遺構(7)　SD19～22.24.25
図版26　Ａ地区遺物(1)　SB01.05.SK01～05.08.SX01.02
図版27　Ａ地区遺物(2)　SD01
図版28　Ａ地区遺物(3)　SD01
図版29　Ａ地区遺物(4)　SD03～05.包含層
図版30　Ｂ地区遺物(1)　SB07.08.11～17.20.22.25.SP05.07.12～14.16.19.22.25～29
図版31　Ｂ地区遺物(2)　SK09.11～14.17.20～22.24.26.28～30
図版32　Ｂ地区遺物(3)　SE01.SD06.07
図版33　Ｂ地区遺物(4)　SD09～14
図版34　Ｂ地区遺物(5)／Ｃ地区遺物(1)　SD14.16.包含層／SB29.30.34.SP36.SK31.33
図版35　Ｃ地区遺物(2)　SK35.37.38.40.42～45.47～50
図版36　Ｃ地区遺物(3)　SX03.04.SD17.20.21.24.25.確認調査
図版37　Ａ・Ｂ地区出土鉄器　SB11.SD01～05.07　10.13.SK08.25.SE01.包含層
図版38　Ｂ・Ｃ地区出土鉄器　SB30.SD09.SK48.SX03.包含層

写真図版目次

カラー写真図版１
　１　遺跡の遠景（北北東から）
　２　遺跡の全景（東から）
カラー写真図版２
　１　遺跡の全景（北から）
　２　A 地区居館部の全景（上方が西）
写真図版１　遺跡の遠景(1)
　１　揖保川河口付近から遺跡を望む
　２　東方から遺跡を望む
写真図版２　遺跡の遠景(2)
　１　東方から遺跡を望む
　２　北方から遺跡を望む
写真図版３　遺跡の全景(1)
　１　平成４年度調査区を南方から望む
　２　平成５年度調査区を北方から望む
写真図版４　遺跡の全景(2)
　１　平成４年度調査区（上方が北）
　２　平成５年度調査区（上方が東）
写真図版５　A 地区全景
　１　空中写真（上方が西）
　２　全景（北から）
　３　全景（南から）
写真図版６　A 地区遺構(1)
　１　SB04（西から）
　２　SB05（西から）
　３　SD01北西屈曲部（西から）
写真図版７　A 地区遺構(2)
　１　SK01・02（東から）
　２　SK02土器出土状況（東から）
　３　SD04温石出土状況（北から）
　４　SD04温石出土状況（西から）
写真図版８　A 地区遺構(3)
　１　SX01（南から）
　２　SX02（西から）
　３　SD05（北から）
　４　SD05屈曲部（西から）
写真図版９　B 地区全景(1)
　１　西半部（上方が北）
　２　東半部（上方が北）
写真図版10　B 地区全景(2)
　１　西半部（南から）
　２　東半部（南から）
写真図版11　B 地区遺構(1)
　１　居館内部の遺構（北から）
　２　居館東側の区画溝（北から）
写真図版12　B 地区遺構(2)
　１　SK12（北から）
　２　SK21（北東から）
　３　SK22（北から）
　４　SK24（東から）
　５　SK29（西から）
写真図版13　B 地区遺構(3)
　１　SK27・28西半部（西から）
　２　SK27東半部（西から）
　３　SD14（南から）
写真図版14　B 地区遺構(4)
　１　SE01（南から）
　２　SE01土器出土状況
　３　柱穴土器出土状況
写真図版15　C 地区全景(1)
　１　平成４年度調査区（上方が南）
　２　平成５年度の調査区（上方が東）
写真図版16　C 地区全景(2)
　１　平成４年度調査区北半（南から）
　２　平成４年度調査区南半（北から）
　３　平成５年度調査区（北から）
写真図版17　C 地区遺構(1)
　１　SB27（東から）
　２　SB28（東から）
　３　SB35・36・37（北から）
写真図版18　C 地区遺構(2)
　１　SB33（西から）
　２　SB34（東から）
　３　SK35（南東から）

写真図版19　C地区遺構(3)

1　SK31（西から）

2　SK32・33・34（東から）

3　SK50（南東から）

写真図版20　C地区遺構(4)

1　SX02（西から）

2　SX03（東から）

3　SX04（東から）

写真図版21　A地区遺物(1)

SK01(5.6)/SK02(7.9.13)/SK03(22)/SX01(32.33.34.35)/SD01(37.38.39.44.45.48.56.57)

写真図版22　A地区遺物(2)

SD01(58.59.60.63-65.69.72-75.81.82)

写真図版23　A地区遺物(3)

SD03(84.85)/SD05(88.96)/包含層(97)/SK02(10)/SD01(41)

土錘:SK01(8)/SD01(53-55)/SD05(94)

写真図版24　A地区遺物(4)

土師器：SD01(49.52)

瓦器：SK01(7)/SD05(92)

写真図版25　A地区遺物(5)

須恵器：SD01(61.66.67.68.)/SD05(91)

写真図版26　A地区遺物(6)

陶磁器：SB01(2.3)/SK02(17)/SK03(27.28)/SK04(29)/SK05(30)/SD01(78-80)/SD05(93)

写真図版27　A地区遺物(7)

石製品：SK01(S1)/SD01(S2.3.4)/SD04(S5)/包含層(S6)

写真図版28　B地区遺物(1)

SB07(99)/SP12(123)/SP13(124)/SP16(126)/SP29(134)/SK12(137.138.139)/SK17(142)/SK20(144)/SK21(146)/SK22(148-150)

写真図版29　B地区遺物(2)

SK26(155)/SK29(161)/SE01(164-166.168-172.174.178.180.181.183)

写真図版30　B地区遺物(3)

SD06(187)/SD09(203.204.210)/SD14(230.234.237.239.241)

写真図版31　B地区遺物(4)

土師器：SK14(141)/SK20(145)/SD07(189)

須恵器：SD09(212)/SD10(221)/SD14(235)

写真図版32　B地区遺物(5)

陶磁器：SB07(101)/SK28(158.159)/SE01(182)/SD07(192)/SD09(213.214.215)/SD10(222)/SD14(240)

写真図版33　B地区遺物(6)

陶磁器：SP25(130)/SK28(160)/SK29(162)/SD06(186)/SD07(193.195.196.199.201)

写真図版34　B地区遺物(7)

土師器：SB11(106)/SK28(157)

石製品：SD07(S8)

写真図版35　C地区遺物(1)

SB34(248)/SK31(251)/SK33(252)/SK35(253)/SK43(258)/SK44(260.262)/SK47(264)

写真図版36　C地区遺物(2)

SK50(269.270)/SX03(272)/SX04(273.274.275)/SD20(277.280)/SD25(290)/確認調査(292)

写真図版37　C地区遺物(3)

SK42(257)/SK44(261)/SK47(266)/SK49(268)/SD25(284.285.289.291)

写真図版38　C地区遺物(4)

SK37(254)/SK40(256)/SK45(263)/SK47(265)/SK48(267)/SD25(286)

写真図版39　C地区遺物(5)

SK47(S9.10)/SD24(283)

写真図版40　出土鉄器

包含層(M1.3.16.20)/SK08(M2)/SD01(M4.5)/SD03(M6)/SD04(M7)/SD05(M8)/SD02(M9)/SB11(M10)/SE01(M11)/SK25(M12.17)/SK29(M13)/SD07(M14.18)/SD10(M15)/SD13(M19)/SD09(M21)/SD09(M22.23)/SB30(M24)/SK48(M25)/SX03(M26.27)

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

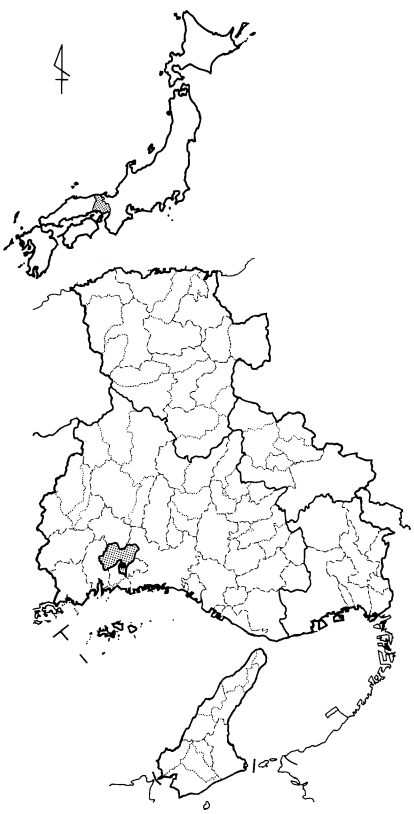
龍野市　宝林寺北遺跡の所在する龍野市は、兵庫県南西部にあり、東は姫路市、南東は揖保郡太子町、南は同郡揖保川町、西は相生市、北は揖保郡新宮町と各々境を接している。面積は70.31㎢を測り、人口は41,255人（平成13年７月末日現在）を数える。

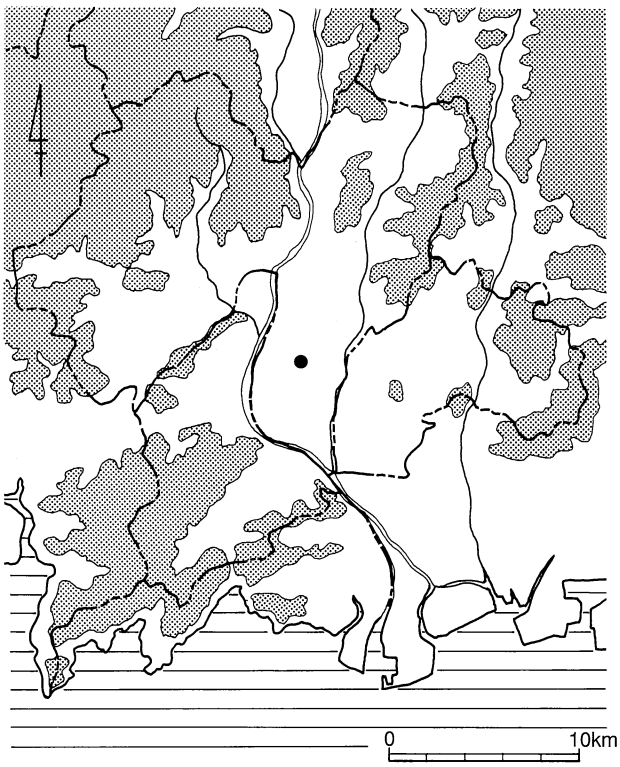
地　形　市域の西、北西部は西播山地が占め、南および南東部には沖積平野が発達する。この平野は、氷ノ山に源を発して市域中央を南流する揖保川によって形成されたものである。

宝林寺北遺跡は、市域の南東隅に位置し、周辺一帯は、太子町との境である林田川と揖保川とに挟まれた、条里地割が残存する田園地帯である。

交通路　当遺跡の南方で太子龍野バイパスと国道２号線が合流している。現在市域には、このほかの東西方向の交通路として山陽自動車道、山陽新幹線とJR山陽本線があり、揖保川に沿った南北方向の交通路として国道179号線、JR姫新線がある。

近世・中世・古代の各時代に使用された山陽道の位置も判明している。当遺跡の中心的な時代である中世における山陽道は遺跡の北約1.6㎞である。揖保川の河口には中世に盛んに活動した網干の港が知られるなど、港との関係も当時の物流を考えるうえで重要な視点といえる。ちなみに当遺跡から海岸線までの距離は、揖保川沿いに約８㎞を測る。





第１図　遺跡の位置

第２節　遺跡の歴史的環境

旧石器時代　遺跡の数は多くないが、龍野市周辺ではナイフ形石器などが単独で採集されている。碇岩南山遺跡（21）では播磨では発掘例の少ない石器ブロックが検出され、今後この地域でも同様のブロックが検出される可能性がある。

縄文時代　龍野市周辺では、主に河川の自然堤防上などに集落が営まれ、県内の平野部でも比較的遺跡数が多い。前期末から晩期の片吹遺跡（５）、中期末の清水遺跡（16）、後期中葉の東南遺跡（40）があり、住居跡、埋甕などが検出されている。丁・柳ヶ瀬遺跡（51）では流路内から中期から晩期の土器群が出土した。立岡遺跡（41）でも晩期の埋甕が１基検出されている。

弥生時代　前期の段階では縄文時代から継続する遺跡が多い。丁・柳ヶ瀬遺跡（51）の流路からは多量の前期の土器が出土したが、中に縄文と弥生の特色を兼ね備えた土器があり、縄文から弥生への移行を考える上で重要な資料となっている。門前遺跡（６）では土壙墓と思われる土坑内から前期の土器が一括して出土した。また半田山墳墓群（17）には前期の土器棺・土壙墓がある。

中期以降集落数は増加し、遺跡の検出例も多い。このうち清水遺跡(16)、鵤遺跡(39)、立岡遺跡（41）などは地域の中核となる集落であるが、清水遺跡などを除いて後期まで存続する集落は少ない。川島遺跡（48）では周溝墓群などが検出された。壇特山遺跡（46）は、遠望のきく独立丘陵上の高地性集落である。中臣山遺跡（３）は丘陵の南斜面で多量の土器が採集され、集落の存在が想定される。

後期の集落は片吹遺跡（５）、門前遺跡（６）などがある。また、この時期には丘陵上に数多くの墳墓が作られる。養久山古墳群（18）は古墳とともに複数の墳丘墓が築造されている。白鷺山墳丘墓（８）検出の箱式石棺からは小型倣製内行花文鏡が出土している。隣接する西宮山古墳（９）の下層には土器棺群があり、一帯に墳墓群を形成していたようである。揖保川左岸では中臣山（３）で合口の壷棺が出土している。

古墳時代　龍野市周辺では、弥生時代後期から終末期の墳丘墓に続き、養久山１号墳（18）など前方部が撥形をした初期の前方後円（方）墳が複数みられる。養久山１号墳と同じく揖保川右岸の権現山古墳群(20)の最高所に位置する50号・51号墳は最古級の前方後方墳であり、調査が行われた51号墳からは三角縁神獣鏡や特殊器台形埴輪が出土している。次いで瀬戸内海を見下ろす山頂にある輿塚古墳（26)、その西側の綾部山古墳群（25）へと首長墓が移動する。山王山古墳（24）も前期古墳と思われる。揖保川左岸では丁瓢塚古墳（50）があるが、以後前方後円墳の築造は途絶え、中期以降は卓越した古墳は見られなくなる。

西宮山古墳（９）は後期における揖保川下流域の首長墓と推定され、穹窿状の横穴式石室をもつ前方後円墳である。小丸山古墳（24）も同様の前方後円墳であり、西宮山古墳と副葬品など類似する点が多い。後期には丘陵部などに群集墳が多数築造され、終末期になると、西脇古墳群（42）のような小石室をもつ古墳が築造される。西脇古墳群は平安時代初頭まで墓域として継続する。

奈良時代　播磨国は715年以前に編纂された『播磨国風土記』が残り、当時の状況をうかがうこと

ができる。「揖保郡」条では、渡来人に関する伝承が多く記録されているが、西宮山古墳の副葬品など記載内容が考古資料から傍証できる事実もある。『播磨国風土記』によれば、揖保郡には18の里があり、その数は播磨国の中で最多である。郡の中心は記述の順序から日下部里と考えられ、その比定地は揖保川右岸の揖西町小神付近とされる。この地は西宮山古墳から小神廃寺まで、揖保郡の中核をなす集団が古墳から寺院へと造営の変遷がみてとれる地域でもある。

小神廃寺（12）は古代山陽道（A）に面し、飛鳥様式の軒瓦が出土した播磨最古の寺院として知られている。この小神廃寺の西側に揖保郡衙を比定する説がある。現在のところ、郡衙に結びつく遺構・遺物は確認できていないが、古代山陽道を挟んだ南側の小神芦原・小神南遺跡（14）では、多数の奈良時代の掘立柱建物跡、井戸を検出している。これらの遺構は郡衙関連施設または官人の集落と考えられ、郡衙所在説を有力なものとしている。

古代山陽道沿いには、駅家が設置されるが、揖保郡内には、布勢駅家、大市駅家がある。布勢駅家は検出された遺構・遺物から小犬丸遺跡でほぼ確定し、大市駅家は国府系瓦の出土する向山遺跡（44）が有力視されている。

小神廃寺にみられるように、この地域には仏教を早い時期から広く受容した様子が伺える。山陽道沿いには小神廃寺の他、西脇廃寺（43）、中井廃寺（27）、中垣内廃寺、小犬丸中谷廃寺が造営される。山陽道沿い以外では下太田廃寺（49）、金剛山廃寺（19）、大道寺跡(11)がある。宮脇遺跡付近でも瓦などが採取され、古代寺院の存在が想定されるなど、郡内の大半の里に寺院が造営されている。また、中井瓦窯（30）、碇岩南山瓦窯（22）など寺院に瓦を供給した窯跡がある。丁・柳ヶ瀬遺跡（51）は旧流路から多量の遺物が出土しているが、出土した墨書土器などから周辺に官衙の存在も想定される。一般集落は亀田遺跡（45）、片吹遺跡（５）などがあり、掘立柱建物跡群が検出されている。

中　世

当地域を特色づけるものは荘園遺跡であろう。法隆寺領鵤荘（a）など14世紀代の荘園絵図が現存し、絵図に描かれたランドマークや景観が今日も残る希有な地域である。鵤荘と弘山荘（b）の荘域の福田片岡遺跡（35）、鵤荘内の福田天神遺跡（34）、弘山荘内の阿曽北遺跡（36）、阿曽南遺跡（37）、小宅荘（c）内の宮脇遺跡（４）など、荘域内の中世集落の発掘調査も行われ、居館跡や条坊に一致する溝などが検出された。伝円勝寺跡(32)は鵤荘内にある斑鳩寺と関連をもつ寺院とされ、周辺には笹山経塚などが存在する。

龍野市域は、中世山陽道である「筑紫大道」（B）が東西にはしり、荘園絵図にもその位置が記されている。福田片岡遺跡（35）、平方遺跡（38）では「筑紫大道」と推定される道代が検出された。揖保川右岸では、小神出屋敷遺跡（15）は堀で区画された屋敷、近接する小神芦原遺跡（14）では区画施設をもたない集落を検出した。調査は行われていないが、西構遺跡（７）、岩見構遺跡（53）は方形に堀を巡らせた集落とされる。揖保川河口近くに所在する古網干遺跡（54）は、13～15世紀の中国製磁器や国産陶磁器が多量に出土し、港関係の遺跡と推定されている。

第２図　周辺の遺跡

（国土地理院　平成８年発行　１／25,000地形図「龍野」「網干」を使用）

参考文献

龍野市史編纂専門委員会『龍野市史』第１巻　龍野市　1978年

龍野市史編纂専門委員会『龍野市史』第４巻　龍野市　1984年

太子町史編集専門委員会『太子町史』第３巻　太子町　1989年

兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史考古資料編』　兵庫県　1992年

龍野市教育委員会『小神芦原遺跡』　1993年

櫃本誠一編『風土記の考古学』２　播磨国風土記の巻　同成社　1994年

兵庫県教育委員会『宮脇遺跡』　兵庫県文化財調査報告書第138冊　1995年

姫路市教育委員会『TUBOHORI』平成10年度姫路市埋蔵文化財調査略報　2000年

龍野市教育委員会『龍野市埋蔵文化財分布地図および町別遺跡地名表』　2001年

兵庫県教育委員会『亀田遺跡』（第１分冊）　兵庫県文化財調査報告書第210冊　2001年

遺　跡

１.**宝林寺北遺跡**　２.桜ヶ坪遺跡　３.中臣遺跡･古墳群　４.宮脇遺跡　５.片吹遺跡　６.門前遺跡　７.西構遺跡　８.白鷺山墳丘墓　９.西宮山古墳　10.慶雲寺･中垣内古墳群　11.大道寺跡　12.小神廃寺　13.揖保郡衙推定地　14.小神南･小神芦原遺跡　15.小神出屋敷遺跡　16.清水遺跡　17.半田山墳墓群　18.養久山古墳群　19.金剛山廃寺　20.権現山古墳群　21.碇岩南山遺跡　22.碇岩南山瓦窯　23.碇岩相地窯跡　24.山王山･小丸山古墳　25.綾部山古墳群　26.輿塚古墳　27.中井廃寺　28.中井瓦窯　29.中井奥池窯跡　30.中井鴨池窯跡　31.中井古墳群　32.伝円勝寺跡･笹山経塚　33.笹山遺跡　34.福田天神遺跡　35.福田片岡遺跡　36.阿曽北遺跡　37.阿曽南遺跡　38.平方遺跡　39.鵤遺跡　40.東南遺跡　41.立岡遺跡　42.西脇古墳群　43.西脇廃寺　44.向山遺跡（大市駅家推定地）　45.亀田遺跡　46.壇特山遺跡　47.壇特山古墳群　48.川島遺跡　49.下太田廃寺　50.丁瓢塚古墳　51.丁・柳ヶ瀬遺跡　52.上構遺跡　53.岩見構遺跡　54.古網干遺跡

山陽道（推定ルート）

Ａ.古代山陽道　Ｂ.中世山陽道(筑紫大道)　Ｃ.近世山陽道

荘園

ａ.法隆寺領鵤荘　ｂ.一条院領弘山荘　ｃ.大徳寺領小宅荘　ｄ.山科家領揖保上荘　ｅ.新熊野社領浦上荘

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

兵庫県竜野土木事務所によって、揖保川流域下水道の建設事業が昭和53年度から開始された。これは、揖保川の水質保全ならびに流域諸都市の生活環境改善を目的とした事業であり、終末処理場である揖保川浄化センターと数本の幹線下水道の建設からなる。揖保町山下・中臣・門前地区にかけても、幅24mの下水道および道路の敷設工事が行われることとなった。当該地区は、宝林寺北遺跡（渡辺ほか　1987）・桜ケ坪遺跡に隣接しており、兵庫県竜野土木事務所からの依頼に基づいて、平成３年11月に遺跡の範囲確認調査を実施した。

第２節　第１次確認調査

１．調査の方法

調査は竜野土木事務所職員立会のもと、道路センター杭を復原し、グリッドを設定することから始めた。グリッドはすべて２ｍ×２ｍで、用地の制約はあるが、20m間隔を原則とし、合計74箇所設定した。グリッド番号は、掘削した順につけたが、調査の制約上、掘削は機械搬入の都合に合わせたため、グリッド番号は一方から順序よくついていない。

作業はバックホウ２台、作業員４名程度で行った。各グリッドとも表土以下すべて機械（バックホウ）で掘り下げ、遺構面と想定される面に達すると、人力で精査を行った。その後、一部を砂礫層まで深掘りして掘削を終え、壁面の精査と写真撮影・実測を行った。当事務所職員は１日３名が調査に従事し、２名が掘削・精査の指示、１名が記録作業を行った。１日の調査が終わるごとに、その日掘削したグリッドはすべて埋め戻した。

調査期間などの都合上、追加して確認調査を行うことはできなかった。

２．調査体制

兵庫県竜野土木事務所より職員派遣の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、以下の体制で調査を実施した。

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所　長　内田隆義

副所長　駒井　功（事務担当）

才木　繁（技術担当）

総務課　課長　田中豊英／主任　小林亮介

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第２課　課長　池田正男／主査　水口富夫／主任　村上賢治

技術職員　藤田　淳・長濱誠司

3．調査の結果

No.1～No.49　ほぼ全域にわたって現水田の下で、旧水田面と考えられる土層の堆積が認められた。旧水田層の下は旧河道の堆積をみせ、砂礫の厚い堆積が認められた。この範囲は現水田畦畔の形状も条里制地割が乱れ、旧河道の痕跡が明瞭なことから、遺構が存在する可能性は低いと判断した。遺物の出土もほとんど認められない。

No.38～No.49付近は、周知の埋蔵文化財包蔵地である桜ヶ坪遺跡の範囲と重複する可能性があった。しかし調査の結果、他のグリッド同様に旧河道の堆積をみせ、遺跡が本事業対象地内まで広がらないことが判明した。

また、No.17北側の道路は中世山陽道「筑紫大道」の推定ルートにあたるが、その道代は確認できなかった。

No.50～No.55　溝を１本検出しただけだが、水田土壌層と思われる比較的安定した土層の堆積がみられる。No.55は通称島畑と呼ばれる周囲よりも高まった畑地に設定した。遺構は検出できなかったが、島畑を構成する土層内からは微細片ながら多くの土器片が出土した。

No.56～No.74　島畑南側のNo.56・57は現水田面直下まで礫層が隆起し、遺構は確認できなかった。No.58以南では、安定した遺構面が対象地南端の国道２号線付近まで続き、大半のグリッドでピットを主体とする遺構が検出されるか、遺物が出土した。

出土遺物　292は、須恵器甕である口縁端部は面をもち、体部外面はタタキの後カキ目を施す。内面には規則的に当て具を当てた痕跡が残る。No.69グリッドから出土したが、これは全面調査Ｂ地区のSD16にあたる。293は、弥生土器甕である。く字状に外反する口縁部で、内面には炭化物が付着する。No.52グリッドから出土した（図版36）。

第３節　第２次確認調査

1．調査の方法

平成３年度の第１次確認調査では、調査区を下水道設置予定地に設けた。これは路線西端部にあたるため、遺跡の範囲等を限定することができなかった場所もある。このため、その不備を補う目的で、平成４年度の全面調査時に、第２次確認調査を実施したものである。

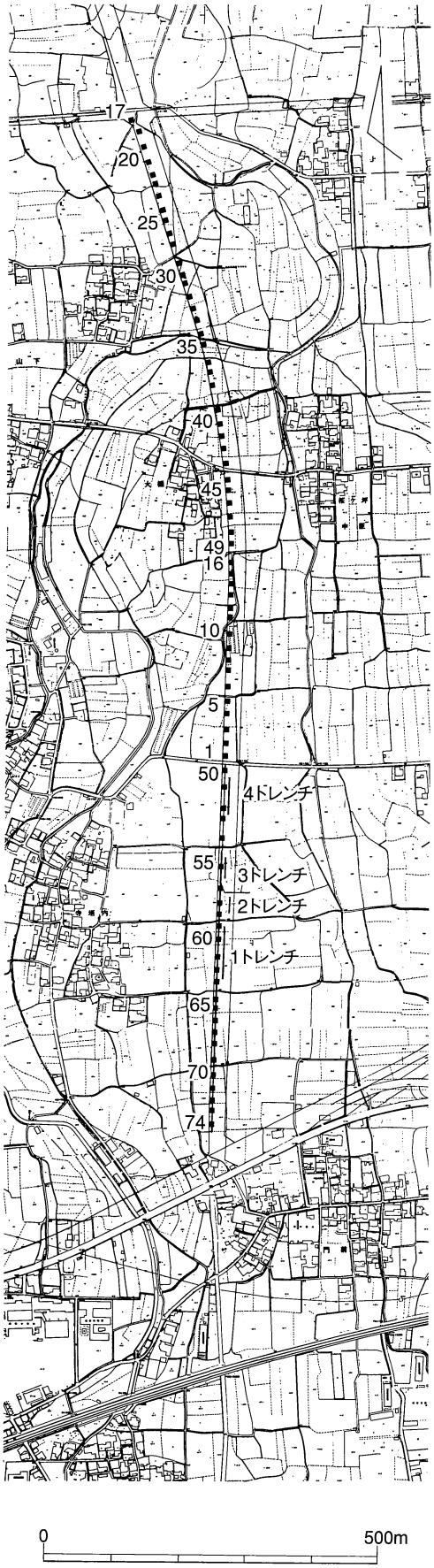
南北方向に長いトレンチを４箇所設定した。各調査区の幅は２ｍ、総延長は約190ｍを測る。調査にあたっては、バックホウによる機械掘削と人力掘削を併用した。

2．調査体制

兵庫県竜野土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、以下の体制で調査を実施した。

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所　長　　内田隆義



第３図　確認調査位置図

第１次確認調査
（遺跡調査番号　910087）

調査区（北から）	遺　構	遺　物	取扱い
坪17～22	なし	なし	調査不要
坪23	土坑（近現代？）	なし	
坪24～44	なし	なし	
坪45・46	溝（近現代？）	なし	
坪47～49	なし	なし	
坪16～10	なし	なし	
坪９	土坑（近現代？）	なし	
坪８	なし	なし	
坪７	溝（近現代？）	なし	
坪６～１	なし	なし	
坪50～52	なし	なし	
坪53	溝	土器（奈良後半～中世）	２次確認
坪54～57	なし	土器	
坪58	土坑？	土器（奈良後半～中世）	
坪59	なし	土器	
坪60	柱穴？	土器（奈良後半～中世）	
坪61	なし	土器	
坪62	溝	土器（奈良後半～中世）	
坪63～66	なし	土器	全面調査（B 地区）
坪67・68	柱穴など	土器（奈良後半～中世）	
坪69	土器溜まり	土器（奈良後半～中世）	
坪70	柱穴？	土器（奈良後半～中世）	全面調査（C 地区）
坪71	溝？・土坑	土器（奈良後半～中世）	
坪72・73	なし	土器	
坪74	柱穴など	土器（奈良後半～中世）	

第２次確認調査
（遺跡調査番号　920329）

調査区	遺　構	遺　物	全面調査
１トレンチ	土坑・溝	平安末～鎌倉初頭土師器・須恵器・瓦器・白磁など	A 地区
２トレンチ	遺構なし	なし	不要
３トレンチ	遺構なし	小片のみ	不要
４トレンチ	溝	小片のみ	不要

副所長　　駒井　功（事務担当）
　　三木正則（技術担当）
主任調査専門員　　大村敬通（調査第１班長兼務）
総務課　　課長　田中豊英／主任　津守芳輝
企画調整班　調査専門員　池田正男
調査第３班　調査専門員　輔老拓治

調査担当　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
調査第３班　技術職員　　甲斐昭光・長濱誠司
　　事務職員　　高井治巳
調査補助員　辻本有哉・安川俊介・清水一文
現場事務員　甲斐由起子
室内作業員　横山春美・渡辺佳子

３．調査の結果

１トレンチ　基本層序は、上層から、耕土、床土、旧耕土、旧床土であり、その下層には礫層および灰黄褐色のシルト質極細砂が存在する。遺構面は旧床土層の下面であり、水田造成時に削平を受けているために本来の生活面は残存していない。遺構は、礫が隆起している北限にあたる場所よりも北側に集中的に検出され、柱穴、土坑、溝などが挙げられる。

土坑および溝の埋土からは、平安時代末頃の土師器・瓦器・須恵器・白磁など比較的多くの遺物が出土した。

２トレンチ　１トレンチの北側で、島畑の南斜面に位置する。基本層序は１トレンチと同様で、旧床土層の直下には直径10cm程度の礫層が堆積しており、遺構・遺物とも認められなかった。

３トレンチ　２トレンチの北側で、島畑の頂部に位置する。耕土の下約60～70cmには、直径10cm程度の礫層が厚く堆積している。遺構は確認されなかった。遺物の出土量も少なく、時期も特定できない小片ばかりである。

４トレンチ　島畑の北側の水田に設定した調査区である。基本土層は１トレンチと同様で、旧床土層直下で溝が２条検出された。しかしながら、遺物の出土が少ないことや、柱穴などの、居住に関する遺構が認められないことなどから、当地は主に水田として長く使用され、検出された溝も用排水路などの、水田に伴う施設である可能性が高い。出土遺物には、小片に混じって、９世紀末頃の須恵器椀も含まれている。

以上のように、１トレンチ以外には明確な遺構は確認されなかった。これに基づく協議の結果、平成４年度に１トレンチを含む全面調査を実施することとなった。

第４節　全面調査の経過と体制

１．概　略

平成３・４年度に実施した確認調査の結果、約7,000㎡に及ぶ全面調査が必要と判断された。この確認調査の結果をもとに行われた県教育委員会と県竜野土木事務所との協議結果をふまえて、平成４・５年の２年度に、当該地区の全面調査を実施した。用排水路や通路の確保の必要上、調査範囲を３箇所に分断することになった。北から順にＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区と呼ぶ。

平成４年度は、下水道の敷設工事を優先させる可能性のあった路線の西半部の調査を実施し、５年度は４年度調査箇所に東接する範囲及び、第２次確認調査によって必要とされたＡ地区を全面調査区に加えた。

全面調査は、県竜野土木事務所からの依頼に基づくものであり、県教育委員会が事業を実施した。発掘調査は山陽建設株式会社と請負契約を結び、平成４年度の空中写真撮影は写測エンジニアリング株式会社と、平成５年度の空中写真撮影は株式会社パスコと、それぞれ委託契約を締結して実施した。

平成４年度　平成４年度の調査体制は、前節で記した第２次確認調査と同様である。

平成５年度　平成５年度の調査体制は以下のとおりである。

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所　長　池水義輝

副所長　渡邊　清（事務担当）

三木正則（技術担当）

主任調査専門員　大村敬通

総務課　課長　田中豊英／主任　津守芳輝

企画調整班　調査専門員　池田正男／主任　吉田　昇

調査第３班　調査専門員　輔老拓治

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　技術職員　甲斐昭光

事務職員　高井治巳

調査補助員　横山春美・西口亜佳音・橘　一隆

現場事務員　甲斐由起子

室内作業員　古阪美生・古川賀律子

２．平成４年度の調査

調査にあたっては、まず道路センター杭を復元する作業から開始し、調査区の設定や、平面実測にあたっても、この道路センター杭を基準とした。

Ｂ地区西半（調査時は「全面②」と呼称）、Ｃ地区西半（調査時は「全面①」と呼称）の

順に作業を進め、３月19日には、ヘリコプターによる空中写真撮影を含む諸記録の作成を終え、３月24日に機械による埋戻し作業を完了した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成４年　１月11日(月)　確認調査に着手（～19日）。
１月18日(月)　Ｂ地区の機械掘削開始（～25日）。
１月20日(水)　Ｂ地区の人力掘削開始。
２月１日(月)　Ｃ地区の機械掘削開始（～10日）。深夜から大雪。積雪と路面凍結のため、３日まで作業中止。
２月５日(金)　Ｃ地区の人力掘削開始。
２月９日(火)　Ｂ地区の清掃、全景写真撮影実施。
２月12日(金)　Ｂ地区の１/20平面実測開始（～19日）。
２月24日(水)　Ｃ地区清掃、全景写真撮影実施。Ｂ・Ｃ地区の空中写真撮影実施。
３月４日(木)　Ｃ地区の遺構掘削終了。
３月８日(月)　１/20平面実測開始（～11日）。
３月12日(金)　中間検査受検。
３月17日(水)　確認調査区の埋め戻し（～22日）。
３月24日(水)　撤収。

３．平成５年度の調査

調査にあたっては、まず道路センター杭を復元する作業から開始し、調査区の設定や、平面実測にあたっても、この道路センター杭を基準とした。

調査区は現存する２本の畦道を確保する必要から、大きく３地区（Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区）に分割し、調査の必要上、Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ地区を設定した。Ｄ・Ｅ地区は、遺構の有無を確認するため、Ｆ・Ｇ地区は、Ａ地区で検出した溝の延長部分を調査するために設定したものである。

Ａ地区から調査を開始し、順次南方に作業を進めた。８月18日にはヘリコプターによる空中写真撮影を含む諸記録の作成を終え、８月21日に機械による埋戻し作業を完了した。

また、調査成果の公開のため、７月31日(土)に現地説明会を実施した。地元住民を中心とした約200名の参加を得て、出土遺構および遺物の説明を行い、参加者からも有益な教示を得た。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成５年　５月11日(火)　Ａ地区の機械掘削開始（～17日）。
５月19日(水)　Ａ地区の人力掘削開始。
６月３日(木)　幾何学文を施した温石が出土。
６月11日(金)　Ｂ・Ｄ地区の機械掘削開始（～15日）。
６月15日(火)　Ｂ・Ｄ地区の人力掘削開始（～15日）。
６月16日(水)　Ａ地区南拡張の調査開始（～22日）。
６月28日(月)　Ｃ地区の機械掘削開始（～７月５日）。
７月１日(木)　Ｃ地区の人力掘削開始。
７月16日(金)　Ｂ・Ｃ地区の遺構掘削完了。
７月21日(水)　Ａ地区の清掃と全景写真撮影。
７月22日(木)　本日より、実測のため調査員を増員（～８月６日）。
７月23日(金)　Ｂ地区の清掃と全景写真撮影。
７月26日(月)　Ｃ地区の清掃と全景写真撮影。

7月30日(金)　調査成果の記者発表。
7月31日(土)　現地説明会を開催し、地元住民を中心に約150名の参加を得る。
8月2日(月)　F・G地区の調査を開始（～3日）。
8月5日(木)　空中写真撮影を実施。
8月19日(木)　撤収。

第5節　整理作業の経過と体制

遺物の整理にあたっては、発掘調査時に監督員詰所において土器の水洗作業を実施することから開始した。本格的な整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて平成12・13年度に行い、平成12年度は兵庫県竜野土木事務所と、平成13年度は兵庫県西播磨県民局及び兵庫県中播磨県民局との整理契約に基づいて実施した。

1．平成12年度の整理作業

ネーミング、接合補強および土器・石製品の実測作業、土器の復元を実施した。ネーミングはそれぞれの遺跡調査番号のあとに通し番号を付した。番号の内容はネーミング台帳に記載している。

実測点数は土器293点、石製品10点である。

整理担当職員	整理普及班　主　査	菱田淳子（工程管理担当）
	企画調整班　主　査	甲斐昭光
	調査第3班　主　任	長濱誠司
整理技術嘱託員	主任技術員	増田麻子
	企画技術員	吉田優子・喜多山好子・大前篤子
	図化技術員	石野照代・早川亜紀子・蔵　幾子・島村順子・大仁克子・小寺恵美子・岡井とし子・蓬莱洋子

2．平成13年度の整理作業

土器の写真撮影、金属器の保存処理と実測、写真撮影、トレース、レイアウト作業を行い、編集作業を実施した。

金属器の実測点数は27点であり、遺物写真撮影は総計136カットである。

整理担当職員	整理普及班　主　査	菱田淳子（工程管理担当）
	整理普及班　技術職員	岡本一秀（金属器保存処理担当）
	企画調整班　主　査	甲斐昭光
	調査第2班　主　任	長濱誠司
整理技術嘱託員	主任技術員	増田麻子
	図化技術員	西野淳子・三好綾子・藤井光代
	図化補助技術員	野上裕子・三島重美

第３章　調査の結果

第１節　調査区の概観

１．調査区の位置

全面調査区は、A～G 地区に分かれ、現在の行政区分でいえば、A・G・F 地区は龍野市中臣字連宇寺、B・D 地区は同字駒所、C・E 地区は門前字熊代となる。

また、谷岡氏の条坊復原（谷岡　1964）によれば揖保郡14条10坊にあたり、上記各地区はそれぞれ、そのなかの30坪、19坪、18・７坪に該当する。なお、『大徳寺領小宅庄三職方条坊坪付図』（文和３年、1354年）によれば、バイパス建設に伴う調査の東地区に東接する南北畦畔が荘境である。これより東が小宅荘、西が浦上荘であり、当遺跡が浦上荘に含まれることが明白である。

２．地形環境

宝林寺北遺跡とその周辺の地形環境については、発掘調査の成果をふまえた高橋学氏による分析（高橋　1985・1987）がなされている。その概略は以下のとおりである。

- 当遺跡の位置する揖保川左岸下流域の地形は、河川の氾濫堆積を受けて形成された扇状地形である。そしてそののち、ある時期に段丘化が進行し、完新世段丘上に当遺跡が立地していること。
- 古墳時代前期以前には、旧中州と旧河道といった起伏に富んだ地形が形成されており、古墳時代前期頃にはそれがほぼ平坦化すること。
- 12世紀末～13世紀初頭頃には土砂の供給が減少することなどから、この時期までに完新世段丘が形成されること。
- 段丘化の時期と条里型土地割施工時期との先後関係については、確実な根拠がないため保留。

今回の調査区は、前回の調査区に隣接することから、ほぼ上記の内容をあてはめることが可能である。

より細かな土地の微起伏を確認するために、調査区の位置、調査直前の土地区画および、20cm間隔の等高線を重ねた図を作成した（第４・５図）。これから以下のことを読み取ることができる。調査区西側に顕著な幅広の窪みがみられ、これは完新世段丘崖下を流れた揖保川本流の旧河道であると思われる。また、調査区東方にも段丘化以前の旧流路である浅い埋没旧河道を見いだすことができる。調査区は、この両者に挟まれた場所にあり、条里地割がよく残る広い平坦地の中央西寄りに位置していることが分かる。段丘化以前には旧中州であることが推測できる。

3．既往の調査

宝林寺北遺跡は、太子竜野バイパス建設に伴って周知された遺跡で、昭和58・59年度にわたって約4,800㎡の調査が実施された。

その調査成果は既に刊行されている（渡辺ほか　1987)。今回の調査内容の記述の前に、深く関係する既往の調査内容の確認をする（第１表)。

第１表　昭和58・59年度の調査概要

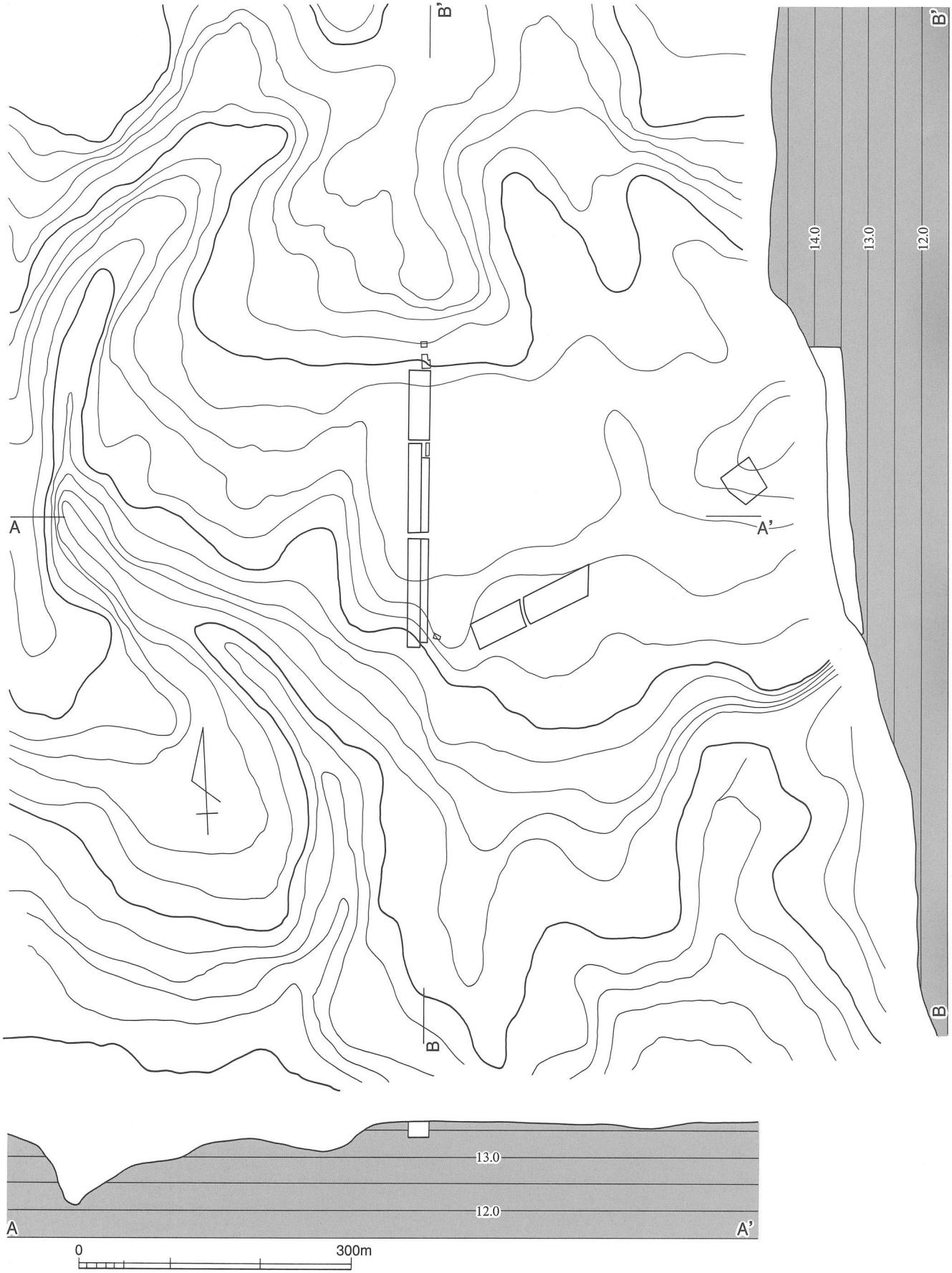
地区	遺跡調査番号 調査面積	時代	遺構と遺物	地形環境と遺跡
中央地区	830045 2,550㎡	古墳時代	• 遺物のみ	• 起伏激しい
		奈良時代	• 少数ピット	
		平安時代後期～ 鎌倉時代前半	• 掘立柱建物８ • 石積み井戸１ • 屋外炉１ • 集石土坑（墓？）４ • 火葬墓１ • 土坑42 • 柵１　など	• 南側ほど遺構少なく、石列による整地層南端（遺跡南端）を確認。 • 居住域と墓域が混在
		室町時代・近世以降	• 遺構少ない	
東地区	830045 690㎡	平安時代後期～ 鎌倉時代前半	• 掘立柱建物１ • 石積み井戸２ • 集石土坑（墓？）３ • 土坑17　など	• 居住域から墓域へ
西地区	830045 840019 1,550㎡	古墳時代	• 遺物のみ	• 起伏激しい
		奈良時代	• 土坑５　など	• 南調査区外へ遺構続く
		平安時代後期～鎌倉時代前半	• 掘立柱建物１ • 方形区画墓１ • 土壙墓？４ • 土坑６　など	• 居住域から墓域へ

出土遺物

弥生時代	後期後半～庄内併行	
古墳時代	須恵器	TK217, TK43
奈良時代	須恵器	円面硯あり
平安時代後期～鎌倉時代前半	須恵器	西播・東播・備前の各地域産
	土師器	皿・椀・杯・鍋・甕
	瓦器	皿・鍋・甕・こね鉢　羽釜
	陶磁器	白磁・青磁・青白磁・青花磁器・褐釉陶器・灰釉陶器
	金属製品	鉄釘・鉄鏃・鉄鎌　・銭貨（開通元宝）
	石製品	砥石・石鍋
	土製品	土錘80・硯
	瓦	軒瓦は２点

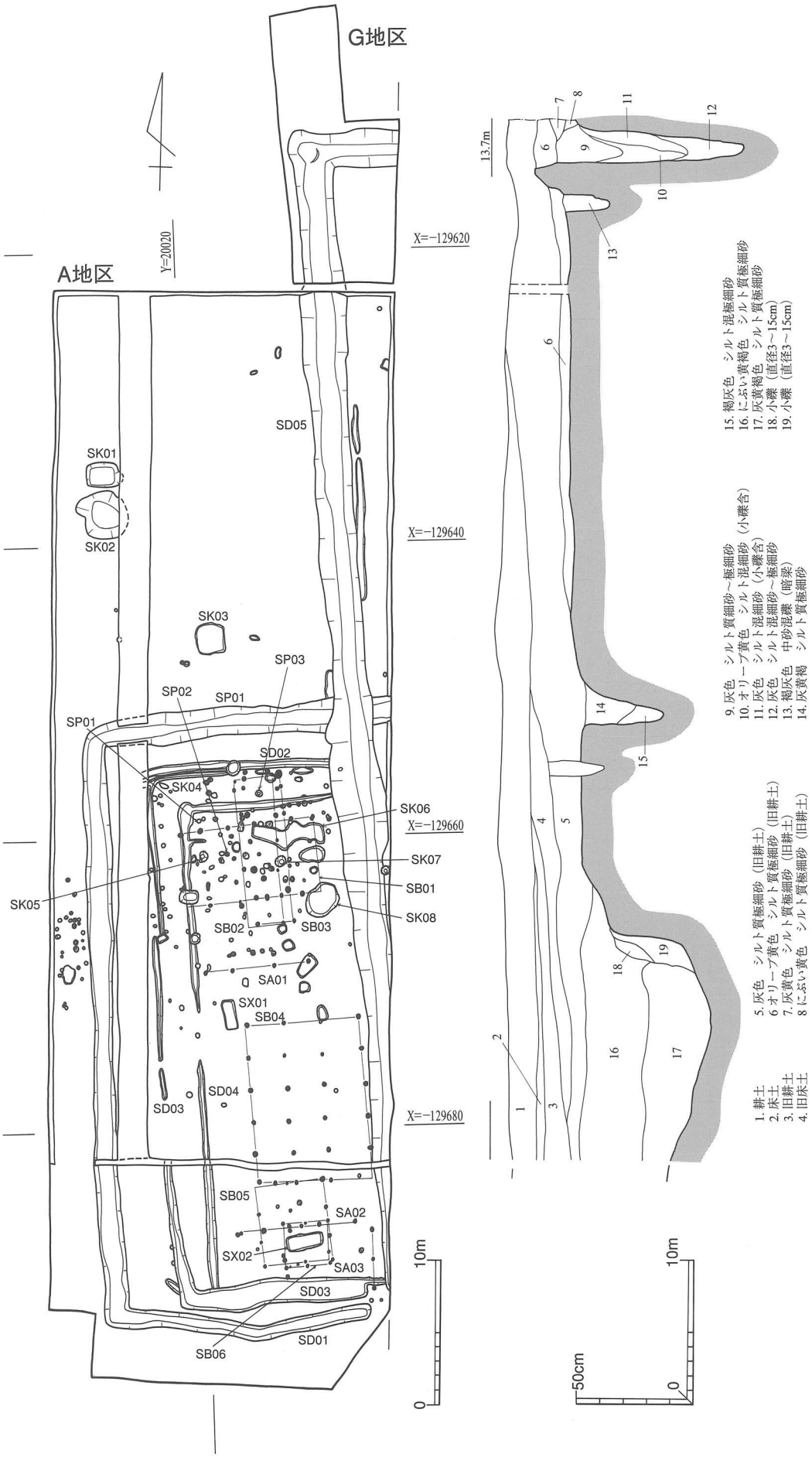
6
7
1
4
2
10
3
9
8
5
1 A地区 (平成5年度調査)
2 B地区 (平成4・5年度調査)
3 C地区 (平成4・5年度調査)
4 D地区 (平成5年度調査)
5 E地区 (平成5年度調査)
6 F地区 (平成5年度調査)
7 G地区 (平成5年度調査)
8 西地区 (昭和58年度調査)
9 中央地区 (昭和58年度調査)
10 東地区 (昭和58年度調査)
0
300m

第4図　調査区の位置



第５図　調査区周辺の微地形復元図

第６図　調査区全体図



第７図　Ａ地区の遺構全体図・土層図

第2節　A地区の調査

1．概　要

位　置　最も北側の調査区である。龍野市揖保町中臣字連宇寺に位置し、復元条坊でいえば、揖保郡14条10坊30坪のほぼ中央にあたる。

A地区は、平成4年度の第2次確認調査（1トレンチ）で遺構の存在が確かめられた地区であり、東西23.0m、南北74.5mにわたって調査を行った。調査面積は約1700㎡を測る。

基本層序　調査直前はほ場として利用されていた。当地の基本層序は、以下のとおりである。

1．暗灰黄色　シルト質極細砂（現耕土）

2．黄褐色　シルト質極細砂（旧耕土・床土）

3．にぶい黄褐色　シルト質極細砂

4．礫層

遺構はこの第3層上面より切り込んでいるが、後世の水田化により当初の生活面は削平を受けているものとみられ、いわゆる遺物包含層も存在しない。

調査の経緯　当初設定した調査区では、居館の環濠の北辺と西辺しか含まれていなかったが、のちに調査区を南へ拡張した。すなわち、30坪と19坪の坪境に該当する畔道部分の調査を行い、その直下から環濠南辺を検出した。

また、先述したSD05が事業地内に延びることが判明したため、この北伸部分を確認するためにF・G地区を設定した。まず、30坪の北端部分にF地区（28㎡）を設定したものの、ここではSD05が確認できなかったため、さらに南に設定したG地区（114㎡）において、SD05の延長部と東方への屈曲部を検出しえた。

遺構の概要　A地区は、北半約30mの遺構分布が希薄な地区と、それ以南の遺構密集部に分けられる。

検出された遺構は、掘立柱建物6棟、柵3列、土坑8基、墓2基、溝5条、柱穴である。時期的には、これらの大半がほぼ同一時期のもので鎌倉時代初頭頃のものである。

遺構の大半は、幅約2mの「コ」字状に巡る溝（SD01）の内側に位置するもので、この溝が一辺約40mの居館の区画溝となる。居館の外に位置するのは土坑3基、柱穴数基にすぎない。遺構の密集度は、B地区ほど高くなく、遺構相互の切り合いも激しいとはいえない。これは、この居館の利用時期の相対的な短さを示している。

この居館内を縦断する形で、条里方向の、幅約3mの直線的な南北溝（SD05）が検出された。埋土出土遺物の検討からは、屋敷地の廃絶と溝の掘削の間には大きな時期差は認められない。その形態・規模等から、この居館をとりまく環濠の埋没後に掘削された用水路と判断できる。

出土遺物　先述したように、いわゆる遺物包含層がほとんど残存していなかったため、遺物の大半は遺構埋土から出土したものである。なかでも、居館を取り巻く最も外側の区画溝からは、12世紀末から13世紀初頭頃の多量の遺物が出土した。土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器のほか、滑石製の石鍋8片も出土しており、その量の多さが注目される。この他、石鍋を再加工した温石も出土しており、墨書土器も数点出土している。

2．遺構と遺物

【SB01】図版１・26・写真図版26

検出状況　SD01に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB02・03、居館内部の区画溝SD04と重複するため、これらと同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。SK05に切られる。

形状・規模　３×５間の規模をもつ東西棟であり、床面積は約47㎡を測る。

柱　穴　束柱、側柱とも欠損する場所があり、16個の柱穴を確認したのみである。柱間寸法も不揃いである。

陶　器　１はP11から出土した甕の体部小片である。外面に綾杉状の押印文が粗く施されたようで、SD01出土の57に類似する。

磁　器　２はＰ１から出土した龍泉窯系の青磁碗Ｉ類である。高台畳付と高台内側は露胎である。

３はＰ７から出土した青白磁合子蓋である。型押しにより整形されたもので、天井部に花文を表現する。花弁は大小２種を交互に配置するもので、これと対応して体部にも花文が連続する。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB02】図版２

検出状況　SD01に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB01・03、居館内部の区画溝SD04と重複するため、これらと同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。SK05に切られる。

形状・規模　１×５間の規模をもつ南北棟であり、床面積は約26㎡を測る。

柱　穴　東側柱の通りは比較的よい。北端の柱間は他より半分程度と狭い。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB03】図版２

検出状況　SD01に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB01・02、居館内部の区画溝SD04と重複するため、これらと同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　１×５間の規模をもつ南北棟であり、床面積は約25㎡を測る。

柱　穴　西側柱の通りは比較的よい。北端の柱間は他より半分程度と狭い。通りのよいSB02の東側柱、SB03の西側柱を１つの掘立柱建物の東西両側柱とし、東西北の３方向に庇をもつ建物を復元する考えも否定できない。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB04】図版３・写真図版６

検出状況　SD01に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB05と重複するため、同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　３×５間の規模をもつ南北棟である。床面積は約86㎡を測り、居館内で最大規模をもつ。

柱　穴　南東隅の柱のみを欠く。桁行き方向の柱間寸法は、最も南の柱間が他より約40㎝狭く、梁行き方向については、東の柱間が他より約40㎝広い点を指摘できる。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB05】図版１・26・写真図版６

検出状況　SD01に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB04・06、柵SA02と重複するため、これらと同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　２×３間の規模をもつ南北棟であり、床面積は約26㎡を測る。

柱　穴　最も南の柱間寸法は他より約40㎝狭い点はSB04と同様である。

磁　器　４はＰ８から出土した青白磁合子の底部片である。底部外面には低い高台が削り出されている。外面には釉は及ばない。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB06】図版３

検出状況　SD01に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB05の南東隅に重複するもので、これ以外にも柵SA02と重なるため、これらと同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　１×２間の規模をもつ小規模な建物であり、床面積は約９㎡を測る。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SA01】

検出状況　SB01～03とSB04の間にある柵である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　４個の柱穴からなり、東西方向に約7.2m延びる。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SA02】

検出状況　SB04と区画溝SD03の間にある柵である。SB05・SB06と重複するが、切り合い関係にないため、これらとの先後関係は不明である。

形状・規模　５個の柱穴からなり、東西方向に約7.9m延びる。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であ

ろう。

【SA03】

検出状況　区画溝SD03が幅を狭める場所で、これと直交する形で検出された柵である。SD03と重複するが、切り合い関係にないため、先後関係は不明である。同時並存し、出入口に関わる何らかの施設である可能性が高い。ただし、調査区東外方へ柱が連なり、掘立柱建物が復元される可能性は否定できない。

形状・規模　3個の柱穴からなり、南北方向に約4.0m延びる。

時　期　時期の判明する遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SK01】図版4・26・写真図版7・21・23・24・27

検出状況　SD01に囲まれた居館外の北方に位置する土坑である。SK02に隣接するが、他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　1.7×2.1mの規模をもつ長方形の土坑である。土坑底は平坦であり、深さは35cmである。

埋　土　埋土にはいずれも地山のブロックを含んでおり、人為的に埋められたことが分かる。

土師器　5は手づくねの小皿である。

須恵器　6は完形の椀である。胎土には砂粒を比較的多く含む。

瓦　器　7は完形の小皿である。見込みにはヘラミガキが顕著であり、残存状況もよい。

土製品　8は土師質の土錘である。重量は24.5gを量り、当遺跡で最も重いものである。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK02】図版4・26・写真図版7・21・23・26

検出状況　SD01に囲まれた居館外の北方に位置する土坑である。SK01に隣接するが、他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　約3.5m四方の規模をもつ方形の土坑である。土坑底は平坦であり、壁の立ち上がりは比較的緩い。深さは40cmである。

埋　土　埋土には地山のブロックを含んでおり、人為的に埋められたことが分かる。埋土からは比較的多くの土器が出土した。

土師器　9は手づくねの小皿である。

10は断面三角形の貼り付け高台をもつ椀の底部である。底部の円盤の側面から体部の積み上げを行っている。

11は内湾する口縁部と明瞭な口縁端面をもつ鍋である。12は外傾する口縁部をもつ甕である。

須恵器　13は完形の小皿である。底部の切り離しはヘラ切りによる。

14は鉢である。口縁端部と体部のなす角度はほぼ直角である。

15は椀である。胎土は灰白色であり、見込みを広くつくる意識のみられる非東播系の椀である。龍野市竹原窯産と推定される。

瓦　器　　16は小皿である。見込みにはヘラミガキが残るが、残存状況は悪い。

磁　器　　17は白磁椀Ⅴ-2a類である。外反する口縁部をもつ。

石製品　　S1は滑石製品である。幅の狭い調整痕跡が多数認められる。片面は剥離が激しく、石鍋の再加工品であるかどうかは判断できない。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK03】図版4・26・写真図版21・26

検出状況　　SD01に囲まれた居館外の北方に位置する土坑である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　1.9×2.2mの規模をもつ方形の土坑である。土坑底は平坦であり、深さは10cmである。

埋　土　　埋土下層には炭片を含む。埋土からは比較的多くの土器が出土した。

土師器　　18は手づくねの小皿、19・20は底部糸切りの小皿である。

21は口縁部が外傾する甕である。

須恵器　　22は完形の小皿である。底部は突出しない。

23は東播系の椀である。

24は口縁端面が外側に傾斜する鉢である。

瓦　器　　25は小皿である。残存状況が悪く、内面のヘラミガキの有無も定かではない。

26は口縁部を欠失する椀である。底部外面には断面三角形の貼り付け高台をもつ。

磁　器　　27は白磁椀Ⅷ類である。高台は細く低い。見込み外縁の釉を掻き取り、その部分で小さな段をもつ。28は白磁碗Ⅴ-4b類である。口縁の端部は外反し、水平となる。見込みの外周に低い段をもつ。内面には櫛目により草花文を施す。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK04】図版26・写真図版26

検出状況　　SD01に囲まれた居館内の区画溝SD03の北西隅付近に位置する土坑である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　0.3×0.7mの規模をもつ楕円形の土坑である。深さは10cmである。

磁　器　　29は青磁である。太い脚部分のみの破片であり、内面に屈曲点をもつ。この屈曲点より上にきわめて薄い底部の一部が残存している。外面には蓮弁文が描かれる。中国製青磁の酒会壺と思われる。

時　期　　出土遺物から14世紀頃の遺構と思われる。

【SK05】図版26・写真図版26

検出状況　　SD01に囲まれた居館内の北半に位置する土坑である。SB01・02の柱穴を切る。

形状・規模　　1.0×4.9mの規模をもつ大型で不整形の土坑である。土坑底は平坦であり、深さは15cmである。

磁　器　　30は龍泉窯系の青磁坏Ⅲ-4類である。ほぼ水平にのびる口縁部をもつ。体部外面には蓮弁文をもつ。

時　期　　出土遺物から14世紀頃の遺構と思われる。

【SK08】図版26・37・写真図版40

検出状況　SD01に囲まれた居館内の北半に位置する土坑である。SB01の柱穴を切る。

形状・規模　1.9×2.1mの規模をもつ大型で楕円形の土坑である。土坑底は平坦であり、深さは26cmである。

瓦　器　31は瓦器の羽釜である。口縁部直下に短い鍔がめぐる。残存状況は不良である。

鉄　器　M2は角釘である。頭部の折り曲げ部分と基部を欠く。断面は0.5×0.6cmの方形を呈する。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SX01】図版5・26・写真図版8・21

検出状況　SD01に囲まれた居館内中央西寄りに位置する土坑墓である。A地区で最大規模をもつ掘立柱建物SB04の北西に近接する位置にあり、方位も他の遺構と同じくほぼ南北方向を指す。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　0.78×2.02mの長方形の掘り方をもつ。幅は南北両端で差はないが、土坑底は北端が南端より3cm程度高い。深さは11cmである。

埋　土　埋土の観察からは木棺痕跡は認められない。

出土状況　北端部から約60cm南あたりの土坑底において、副葬品である土師器の大皿2枚、小皿4枚の出土をみた。32～35はいずれも完形であるが、大皿の下に置かれていた小皿2点は半分以下の破片である。すべて正位に置かれていた。

土師器　32・33はともに手づくねの小皿であり、法量もほぼ等しい。図化できなかった小皿2点も同じ整形手法であり、ほぼ同一法量である。

34・35も同一形態、同一法量の、手づくねの大皿である。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SX02】図版5・26・写真図版8・20

検出状況　SD01に囲まれた居館内の南半に位置する土坑墓である。形態から墓であると判断した。SB05・SB06に重なる位置にあるが、これら建物との先後関係は不明である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　1.14×2.43mの長方形の掘り方をもつ。幅は西端で1.14m、東端で0.90mである。土坑底はほぼ平坦であり、高低差は認められない。深さは10cmである。

埋　土　埋土の観察からは木棺痕跡は認められない。

土師器　36は埋土中から出土した甕である。口縁部が厚いこと、赤褐色の胎土に雲母片を多く含む点は、竈である251に似た特徴である。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SD01】図版6・27・28・37・写真図版6・21・22・23・24・25・26・27・40

検出状況　A地区の南半で検出された「コ」字形の溝である。この溝は東方へ延び、溝内部に掘立

柱建物等の遺構が密集し、この外にそれが顕著でないことから判断すれば、SD01は方形に完結する区画溝であり、居館の外周を巡るものと考えるのが自然である。溝の方向は、残存していた条里型地割りに平行しており、溝の南辺は現在のほ場の畦道直下に位置していた。この畦道は揖保郡条坊の14条10坊のうち、30坪と19坪の境に該当する。

また、南辺の東端は溝が途切れているが、内側に平行する溝SD03も同様の状況を示すうえに、ここに柱穴が検出されたため、門等の施設と評価すべきであろう。この溝が正方形に巡るとすれば、この門は南辺の中央やや西寄りに位置することになる。

なお、A地区を縦断するSD05は、このSD01の埋没後に掘削された溝である。

形状・規模　溝は幅1.1～2.2mを測り、深さは25～45cmである。当時の生活面がどの程度後世に削平されているかは確かめる術がないが、他の遺構の残存状況を参考にすると、この溝が1mを大きく越える深さをもっていたとは考えがたい。

溝の西辺の長さは約42mである。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

出土状況　多くの遺物が出土したが、場所によって遺物の多寡の差があるとはいえない。埋没過程との関係でいえば、埋土下層から中層での出土が多い傾向にある。

第2表は口縁部の破片数をもとにした器種別の集計である。多種多様な土器が出土している。このほか滑石製品が6点、土錘が7点出土している。

第2表　A地区SD01出土土器組成表（口縁部破片数）

須恵器			土師器				瓦器		輸入陶磁器		合計
椀	鉢	小皿	大皿	小皿	堝・釜	その他	椀	小皿	椀	壺・甕	
604	11	2	25	489	265	5	175	17	13	1	1607

土師器　小皿は3点を図化した。37・38は手づくねによる整形で、胎土に砂粒を多く含む。39は底部に回転糸切りを行う小皿で砂粒の含有は少ない。

40・42・43は杯に分類する。40は底部に貼り付け輪高台をもつ。42は底部に回転糸切りを行う椀である。43も42と同様の調整と思われる。

41は手づくねの大皿である。

44・45は托の底部である。いずれも、底部の切り離しには回転糸切りを用いる。44には縦方向の亀裂が2箇所みられる。

47～52は鍋である。体部との間に明瞭な稜をもって口縁部が低くのびる47・48・50、同様に明瞭な稜をもつが、口縁部が内湾しながら水平な端面にいたる49、体部から口縁部になだらかに移行する51など、口縁部の形態に差異がみられる。51の口縁部と体部の境外面には1条の沈線が巡っている。48は外面への煤の付着が顕著である。52は鍋の脚部である。体部と同様ハケ仕上げである。

土製品　土錘3点を図化している（53～55）。いずれも土師質である。大小の別がみられる。重量は、53が当遺跡での平均的な重さであり5.0g、54が5.7g、55がかなり大型で16.7gを量る。

須恵器　小皿は2点を図化した（56・57）。ともに底部は回転糸切りによる切り離しであるが、

わずかに突出する底部をもち、短く立ち上がる体部をもつ56に対し、57は底部が突出せず、直線的に低く外傾する体部をもつ。

椀は11点を図化した。いずれも、内外面横ナデ仕上げで、底部の切り離しには回転糸切りを使用する。ただし、以下のように形状差が認められる。すなわち、底径・器高とも小さな値を示し、体部が大きく斜めに開くもの（58～61）と、底径・器高がより大きいもの（62～65・67・68）の二者である。前者は、灰色の胎土に砂粒を多く含む東播系の椀であり、後者は明るい灰白色を呈する精良な胎土をもつ非東播系の椀である。なかでも、62・64・65は備前産と思われる。64は底部から体部にかけての丸みから、備前焼Ⅱ期（平井1984）に属するが、他はⅠ期のものと判断できる。見込みがわずかに窪むものに58・60・61がある。なお、外面横ナデの際についた稜が顕著な65がある。また、底部外面に板の木目をもつものが4点ある（62・65・67・68）。これは、整形後の乾燥段階での圧痕と思われる。なお、底部外面に墨書をもつものが4点認められ（61・66～68）、いずれも判読は困難であるが、うち67と68は同一の文字と思われる。

鉢は3点を図化した。69は焼成不良の鉢である。斜めに立ち上がる体部をもち、これと直角をなす口縁端部をもつ。さらにその外側を強くナデて面を形成している。器表面の摩滅が激しいため、調整の観察は困難だが、体部外面にはユビオサエがみられ、口縁部内面には斜め方向のハケが残存している。70・71はともに、体部内面と口縁端面がほぼ直角をなすもので、70は端部が突出せず、71は端部が外側に突出するものである。

瓦　器　小皿は3点を図化した（72～74）。横ナデが強いため口縁部は外反する。内面のヘラミガキは、72・73で観察される。瓦器小皿は正円でないものが多いが、特に72のひずみは大きい。

椀は3点を図化した（75～77）。いずれも和泉型の瓦器椀である。底部への貼り付け高台は低く、断面三角形を呈する。外面のヘラミガキがなく、器高が高いことからⅢ-1期のものと考えられる。

磁　器　78は白磁瓶Ⅱ類の口縁部である。

79は白磁碗の口縁部である。80は白磁碗Ⅳ-1a類である。玉縁は大きく、高台は幅広で削り出しは浅い。底部内面には沈線をもつ。

陶　器　81は甕の体部下半の破片である。外面に綾杉状の押印文が粗く施されている。SB01出土の1に類似する。82は甕の体部下半の破片である。外面に10cm間隔をおいて2列の斜格子形の押印文が粗く施されている。ともに還元焔焼成であり、東播・西播産の須恵器、丹波焼、備前焼等にみられない押印文の存在から、常滑などの東海系の陶器と考えておく。

石製品　滑石製品は図化した3点のほかに、石鍋体部下半の破片が3点がある。S2は石鍋の体部上半の破片である。鍔は、断面正台形を呈し厚く大きい。また、鍔から内湾する口縁部までの距離も長いため、Ⅲ-a-1類に分類されるものである。S3は石鍋の底部の破片である。外面への煤の付着は顕著である。S4はいわゆる「ペン立て状製品」であり、同一形状の遺物は畿内では土製品で、九州では石製品が知られている（木戸　1993）。長辺の一部を欠失する。直方体の一面に非貫通の方形孔を2個穿ったものである。下面が緩く弧を描くこと等から、曲面をもつ石鍋の体部の破片を再加工したものと判断できる。

このほか、図化していないが、砥石の小片が２点出土している。

鉄　器　　Ｍ４、Ｍ５は角釘である。Ｍ４は基部を、Ｍ５は頭部を欠くが、断面形はいずれも0.5×0.6cmとほぼ同一である。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SD02】図版37・写真図版40

検出状況　　SD01北辺の1.8m南に、これと平行して検出された溝である。東端はSD05に切られて、それ以東には続かない。また、西端も確認調査のトレンチ内で終息する。このため、他の区画溝のように「L」字形に屈曲するか否かは不明である。

なお、埋没後にSD05が掘削されている。

形状・規模　　溝は幅60cmを測り、深さは10～20cmである。

埋　土　　SD01と同様、埋土には細粒の堆積物が認められた。

鉄　器　　Ｍ９は雁又式鉄鏃である。切先と茎の大半を欠く。茎の断面形は方形を呈する。

時　期　　時期を特定できる遺物は出土していないが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SD03】図版６・29・37・写真図版23・40

検出状況　　SD01に平行する「コ」字形の溝である。北辺はSD02に南接し、SD01とは約２ｍの間隔がある。同様に西辺は約３ｍ、南辺は最も狭い部分では0.3mしか離れていない。

確証は得られなかったものの、SD03とSD01の間に遺構がほとんど営まれていないこと、両者が切り合わないこと、両者の規模の間には大きな差があることから、同様な性格をもつ区画溝の拡張あるいは縮小現象の結果と捉えるのではなく、両者は同時に機能しており、間に土塁等の施設があった可能性を考えたい。

南辺はSD01と同じ位置で溝の幅が極端に狭くなる。

なお、埋没後にSD05が掘削されている。

形状・規模　　溝は幅30cm程度、深さ20cm以下であるが、南辺は最大180cm、深さ約30cmを測る。

埋　土　　SD01・SD02等と同様、埋土には細粒の堆積物が認められた。

須恵器　　椀83と鉢84を図化した。83は底径・器高とも小さく、体部が大きく斜めに開く。見込みがわずかに窪む。

84は斜めに立ち上がる体部と、これと直角をなす口縁端部をもつ。口縁端部は上下にわずかに肥厚する。底部の回転糸切りののち、体部との境外面をヘラケズリしている。底部外面には板の圧痕が観察できる。体部内面から見込みにかけては使用による摩滅が顕著である。

瓦　器　　椀85を図化した。和泉型の瓦器椀である。底部への貼り付け高台は低く、断面三角形を呈する。器面の残存状況が悪いものの、内面にヘラミガキが観察できる。Ⅲ-１期のものである。

鉄　器　　Ｍ６は角釘である。頭部の折り曲げ部分と基部を欠く。断面は１辺0.5～0.6cmの方形を呈する。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SD04】図版６・29・37・写真図版７・27・40

検出状況　　SD03の内側約２ｍの位置に、これと平行する形で掘削された「L」字形の溝である。ただし、南端はSD03に切られており、その先が本来どういう形状であったかは不明である。

なお、埋没後にSD05が掘削されている。

形状・規模　　溝は幅40cm程度、深さは５～12cmである。北西隅から南へ２ｍ付近で、東方へ枝状に延びる小規模な溝があるが、ここから温石（Ｓ５）が出土した。

埋　土　　SD01・SD02等と同様、埋土には細粒の堆積物が認められた。

石製品　　Ｓ５は鍔をもつ滑石製石鍋の体部上半の破片を再加工した温石である。再加工前の石鍋の形状についてまず触れる。鍔はやや下向きであり、石鍋Ⅲ-b類に分類される。このような石鍋片の破断面である左右両側辺および下辺は、縦方向の細かい擦痕を伴いながら平滑化されている。この細かい擦痕は鋸による切断に伴うものと思われる。口縁部外面には縦方向に平行する２条の溝が掘られ、さらに鍔を貫通する穿孔へと連続する。内面には線刻による３段の文様帯がみられる。上部は横３列縦３段、計９個の車輪文である。この車輪文は直径１cm強の円形文と、これを７あるいは８分割する直線文からなる。中部は格子状あるいは「×」状の直線文、不完全な車輪文等からなる。下部文様帯は、上部と同様の車輪文５個からなる。

『大鏡　第二』『十訓　巻二』『明月記』などには、冬の暖房や風邪、腰痛の時などに焼石（温石）を身につけたことが記されている（長勝寺遺跡発掘調査団　1978）。文献にある温石の大半は、Ｓ５のような保温性の高い滑石製品であったと思われる。外面の溝と孔は、体に固定するための紐を通す工夫であると思われ、さらに、体に触れる内面に描かれた数種の文様は、患部の痛みを和らげる等の効果を期待しての施文と捉えるのが自然であろう。

鉄　器　　Ｍ７は角釘である。頭部の折り曲げ部分と基部を欠く。断面は１辺0.4～0.6cmの方形を呈する。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SD05】図版６・29・37・写真図版８・23・24・25・26・40

検出状況　　Ａ地区の東端を南北に縦断する溝である。条里型地割りに平行する。

南端の状況は不明だが、北端は、Ｇ地区のなかで直角に屈曲しており、東方へ延びている。屈曲部から南については、約80mの間に約１ｍの比高差をもち南へ低くなっている。

SD02・SD03・SD04の埋没後にSD05が掘削されている。

形状・規模　　溝は幅2.5～3.8m程度、深さは0.5～0.9mである。Ａ地区の他の溝と異なり、大規模であること、溝底に比高差があること、出土遺物が比較的少ないことから、区画溝ではなく、用水路としての性格を考えるのが自然である。Ｇ地区で屈曲するのは、これより北側にある島畑の高まりを迂回するためであったと思われる。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が認められた。

須恵器　86は碗である。底部は回転糸切りで、体部は内外面とも横ナデを施す。

土師器　87は羽釜体部上半の破片である。

88は小壺である。底径が比較的大きく、口縁部はわずかに外反する。

89は甕である。外反する口縁部の端部は上方につまみあげられる。外面に煤の付着が顕著である。

須恵器　90は小皿であり、胎土は青灰色を呈する。

91は壺の肩部の小片である。断面方形の突帯をもち、その上下に施文がみられる。突帯の下には縦および横方向に線刻がみられ、横方向の線刻の上下には列点文がみられるものの、全容は不明である。突帯の上方にはこれよりも細い線刻が確認できる。２つの文字のようにもみえるが釈読は不可能である。

瓦　器　92は鍔の短い羽釜である。

磁　器　93は青白磁の合子である。体部には細かな花文が表現される。

土製品　94は土師質の土錘である。重量は22.2gを量り、当遺跡で最も重い部類に属する。

土師器　95は堝である。口縁部内面に断面三角形の粘土帯を貼り付ける。外面には右上がりの平行タタキが施されるが、口縁部への横ナデによって上端は消されている。15世紀後半の所産とされる。

瓦　器　96はいわゆる奈良火鉢である。平面方形を呈し、器高14.3cmの浅鉢Ⅶである。口縁部外面には花文が押印されている。15世紀後半の所産とされる。

鉄　器　Ｍ８は不明鉄製品である。両端とも欠損する。厚さ0.3～0.4cmの板状を呈し、幅のある側は上方に曲がる。

時　期　遺構の切り合い関係の観察から、当遺構は居館の区画溝SD01の埋没後に掘削されたことが明らかである。居館の存続時期以降の遺物が出土し、15世紀後半まで完全には埋没していなかったことを示している。

【包含層出土遺物】図版29・写真図版23・27

土師器　97はかなり大型の托である。

瓦　器　98は鍔の短い羽釜である。

石製品　Ｓ６は滑石製の温石と思われる。一部が残存する２側面は加工痕跡を明瞭にとどめる。また、２つの穿孔が行われている。表面は部分的に剥離しており、石鍋の再加工品かどうかについては不明である。

鉄　器　Ｍ１、Ｍ３は角釘である。Ｍ１は頭部を若干欠く。断面は0.4×0.6cmの方形を呈する。全長は4.4cmである。Ｍ３は基部を若干欠く。断面は0.5×0.6cmの方形を呈する。全長は５cm程度になる。

3．小　結

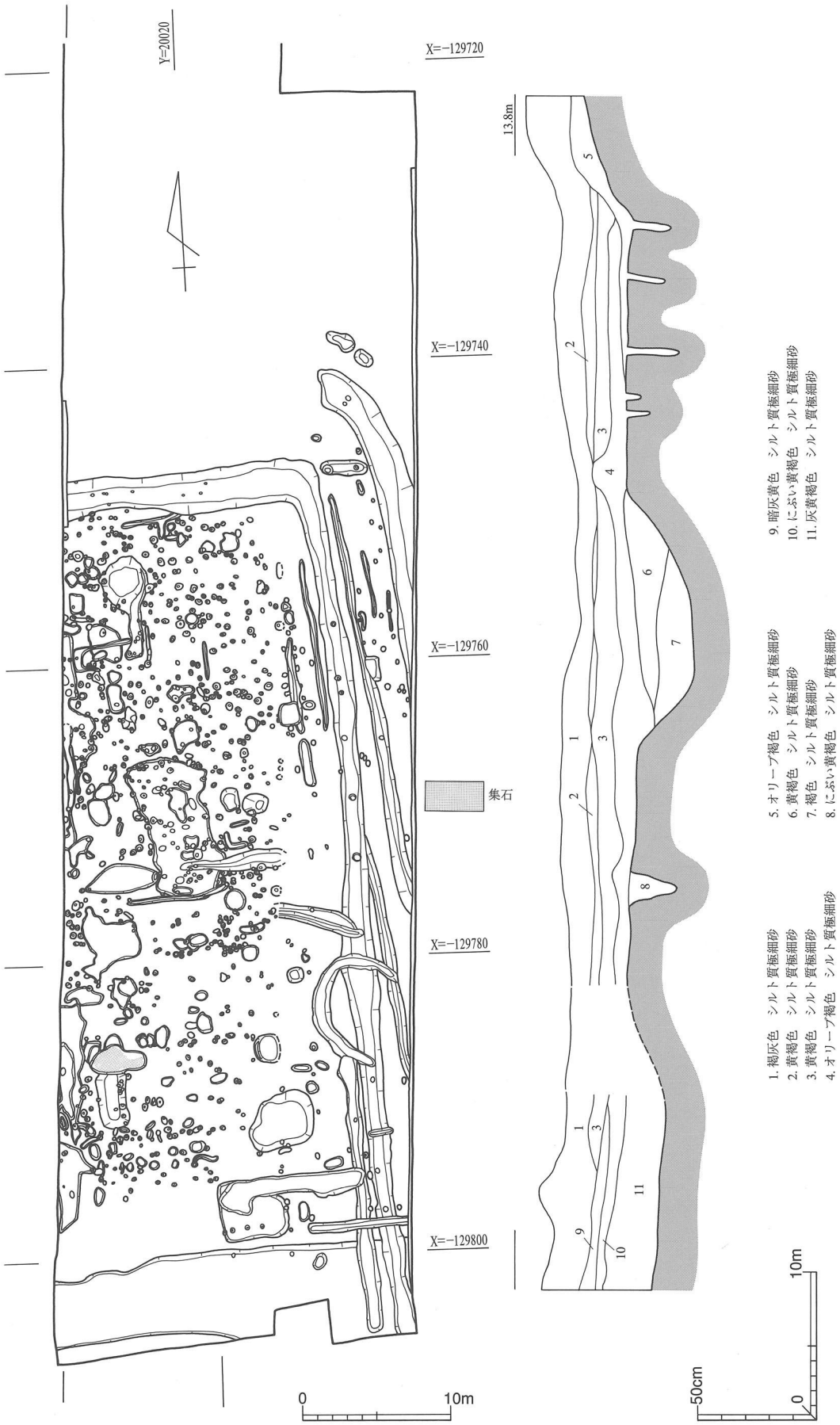
調査区南半で、12世紀末から13世紀初頭にかけて営まれた居館の西半が検出された。一辺約42mと推定される区画溝の南辺は、揖保郡復元条坊の14条10坊30坪と19坪の坪境に重なっている。

居館内部では、掘立柱建物６棟、柵３列、土坑８基、土坑墓２基、溝５条等が検出された。14世紀代の遺構もわずかに存在するが、大半は12世紀末から13世紀初頭にかけて営まれたものである。土坑墓はいわゆる屋敷墓とよばれるものである。

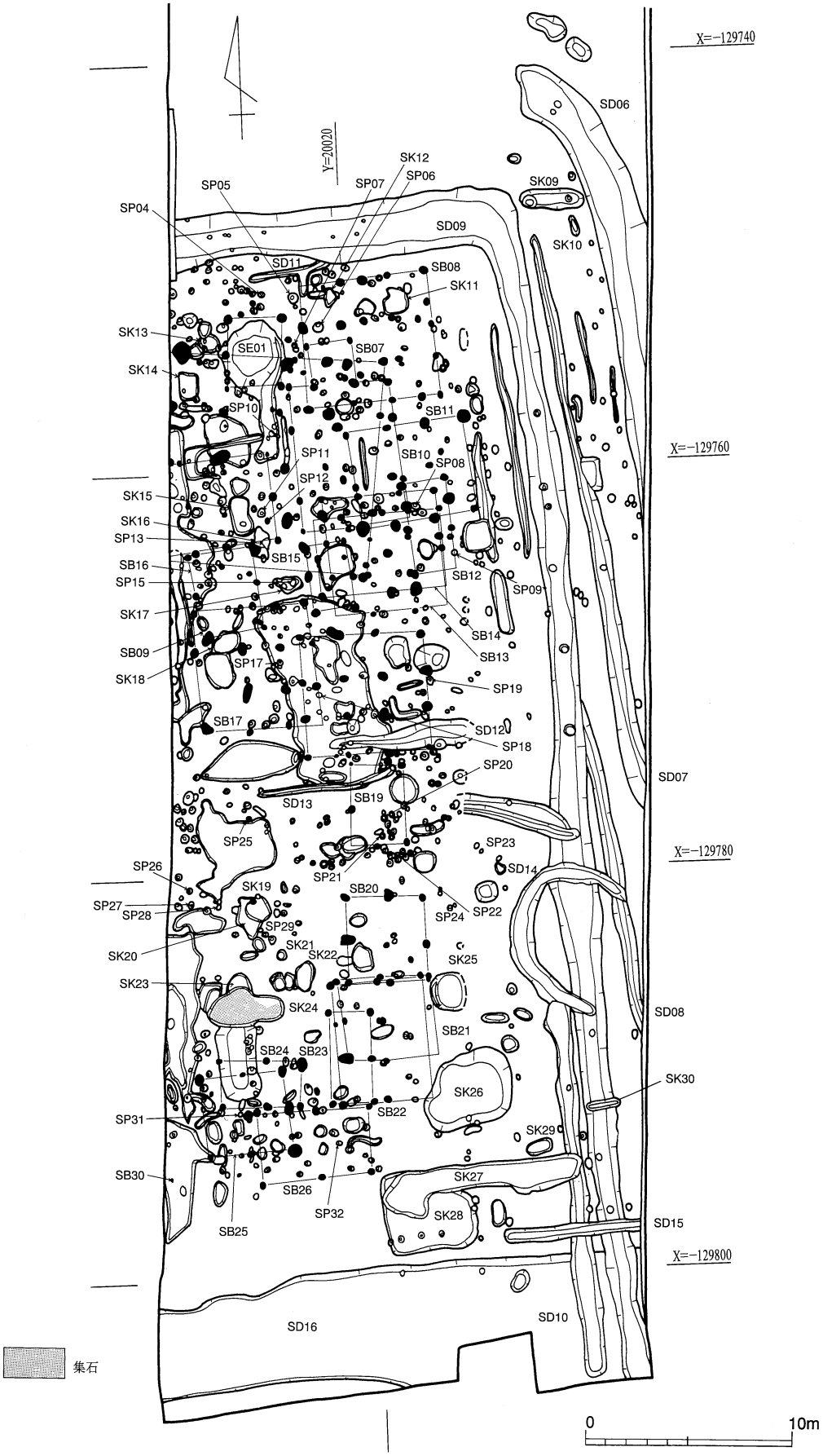
区画溝は一部で三重になるが、このうちSD01とSD03が同時に存在し、この間に土塁状の施設が存在した可能性がある。また、区画溝南辺の中央付近には門らしき施設が確認された。

この居館の廃絶後、用水路と思われるSD05が掘削され、15世紀後半まで機能したようである。

SD01・SK02・SK03から比較的まとまった量の遺物が出土し、いずれも12世紀末から13世紀初頭の時期の実態を示す良好な一括資料と評価できる。またＡ地区からは、土器以外に滑石製品が８点と多く出土しており、墨書土器も４点確認された。



第８図　Ｂ地区の遺構全体図・土層図



第９図　Ｂ地区の主要遺構全体図

第3節　B地区の調査

1．概　要

位　置　中央の調査区である。龍野市揖保町中臣字駒所に位置し、復元条坊でいえば、揖保郡14条10坊19坪のやや西寄りにあたる。

B地区は東西24m、南北102mにわたり、調査面積は約2200㎡を測る。

基本層序　調査直前はほ場として利用されていた。当地の基本層序は、以下のとおりである。

1．暗灰黄色シルト質極細砂（現耕土）

2．黄褐色シルト質極細砂（旧耕土・床土）

3．にぶい黄褐色シルト質極細砂

4．礫層

遺構はこの第3層上面より切り込んでいるが、後世の水田化により当初の生活面は削平を受けているものとみられ、遺物包含層もほとんど存在しない。

調査の経緯　B地区は工事の都合上、東西の2地区に分割し、平成4年度に西半部を、平成5年度に東半部の調査を行った。平成4年度の調査の結果、北半に遺構が認められないため、平成5年度の調査区設定にあたり、この大部分を当初の調査区より除外した。ただし、この除外地にD地区（75㎡）を設定し、遺構の分布が及ばないことを確認した。

遺構の概要　B地区は、北半約45mの遺構分布がきわめて希薄な地区と、それ以南の遺構密集部に分けられる。

検出された遺構は、掘立柱建物20棟、土坑22基、溝11条、井戸1基、柱穴などである。これらの遺構の多くは、A地区と同様、12世紀末から13世紀初頭にかけての期間に営まれたものであるが、平安時代（9・10世紀、12世紀中葉）に遡る時期の遺構もわずかながら存在し、14・15世紀の遺構も一定量認められる点が特徴である。

遺構の大半は、A地区と同様、「L」字状に巡る溝（SD09など）に囲まれる内部に位置する。SD09は東辺と北辺が「L」字状を呈しているが、西辺の位置については調査区外のため不明とせざるをえない。この溝がさらに屈曲して南辺があるとすれば、それはC地区との間の、調査不能だった畔道直下、あるいはC地区で一部を検出したSD17ということになる。この「L」字状の溝SD09は、A地区のそれと同様、居館の四周に掘られた環濠の一部と考えるのが妥当である。これをもとにB地区の居館の規模を復元すれば、A地区よりも大規模で、一辺約60mを測ることになる。溝の南辺はA地区と異なり、復元される坪境と重ならず、これを越えた南側に位置することになる。ただし、ここにいう坪境は、直角に交わる地割りを原則とした復元案に基づくため、これが当時の地割りと同一であるという保証はない。このため、坪境を越えた土地利用を考えるよりも、これが当時の土地区画を示すものと捉えるのが自然であろう。

出土遺物　出土遺物はA地区ほど多くないが、墨書土器や、鉄鍋、銘をもつ硯などの特筆すべき遺物を挙げることができる。特に15世紀代の硯に刻まれた銘は、所有者が荘官クラスの人物であることを示唆するものとして注目される。

2．遺構と遺物

【SB07】図版７・30・写真図版28・32

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。遺構分布の密な地点にあり、SB08～11、13～16など、多くの遺構と重複する。これらの多くは同時存在しないことは明らかだが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　４×４間の規模をもち、西側柱が調査区端にかかり、さらに西側へ続く可能性がある。棟であり、床面積は107㎡を測り、SD09に囲まれた居館内では最大の建物である。

柱　穴　南北方向の柱の並びは比較的良好だが、南側柱は欠損があり、P４・５のみを検出した。したがって３間×４間の東西棟建物になる可能性も否定できない。

土師器　99はＰ３から出土した完形の小皿である。

須恵器　100はＰ３から出土した椀である。底部はわずかに突出する。

磁　器　101はP11から出土した白磁碗Ⅱ類の小片である。口縁部の玉縁は小振りである。焼成温度が低いため、釉に濁りがみられる。

時　期　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SB08】図版８・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB07・10などの遺構と重複するが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　４×３間の規模をもつ東西棟であり、床面積は40㎡を測る。

柱　穴　北西隅の柱穴のみ欠くが、柱の並通りは比較的良好である。柱間は約２ｍであるが、一部約１ｍの箇所があり、間仕切りなどの施設が想定される。

須恵器　102はP12から出土した椀の口縁部片である。

時　期　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SB09】図版８

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。他の遺構との先後関係は不明である。

形状・規模　２×２間の総柱建物である。床面積は18㎡を測る。

柱　穴　東西方向の柱間は約２ｍだが、南北方向の柱間は北半が約1.5m、南半が約2.5mである。

土師器　103・104はP12から出土した小皿である。

須恵器　105はＰ８から出土した椀である。口縁部はわずかに外反するもので、胎土は灰白色である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB10】図版９

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB07・08・11～14などの遺構と重複するが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　２×３間の南北棟で、北側に１間分の張り出し施設をもつ。床面積は40㎡を測る。

柱　穴　南東隅の柱穴を欠く。北端の柱間は、張り出し施設をもつためか不揃いである。

時　期　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明とせざるをえない。

【SB11】図版９・30・37・写真図版34・40

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB10・12～14などの遺構と重複するが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　２×３間の南北棟で、床面積は26㎡を測る。

柱　穴　柱穴の欠損は少ないが、柱間距離はややばらついている。

土師器　106はＰ３から出土した移動式竈の焚口部の破片である。焚口部の縁辺は粘土帯が剥離しており、焚口の周囲に庇が付いていたことが分かる。

鉄　器　M10は角釘である。頭部付近と思われるが、折り曲げ部分は欠損する。断面は0.4×0.7㎝の長方形を呈する。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB12】図版10・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB11・13・14などの遺構と重複する。SB14を構成する柱穴と切り合い関係にあり、本遺構を構成する柱穴が切っている。

形状・規模　１×３間の小規模な建物で、床面積は９㎡を測る。

柱　穴　南東隅の柱穴を欠くが南北方向の柱穴の通りはよい。

磁　器　107はＰ６から出土した白磁碗の小片である。やや小振りな玉縁状の口縁部をもつ。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB13】図版11・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB７・10・12・14などの遺構と重複するが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　３×３間の総柱建物で、床面積は30㎡を測る。

柱　穴　側柱を欠損する場所があり、柱間寸法も不揃いである。

土師器　108はＰ６から出土した椀である。器表面の摩滅が激しく調整等の詳細は不明である。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB14】図版10・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB７・10・12・14などの遺構と重複する。SB12を構成する柱穴に本遺構が切られている。

形状・規模　２×４間の東西棟で、床面積は23㎡を測る。

柱　穴　側柱を欠損する場所があり、柱間寸法も不揃いである。

土師器　　109は小皿、110は大皿である。ともにＰ６から出土した。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SB15】図版11・30

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB13・14などの遺構と重複するが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　　１×２間の小規模な南北棟建物で、床面積は６㎡を測る。

柱　穴　　側柱の通りは比較的よい。柱間寸法は、東西方向に対し、南北方向がやや狭い。

土師器　　111はＰ５から出土した小皿である。

陶　器　　112はＰ３から出土した備前焼Ⅳ期の甕である。直立する頸部と口縁部に幅広の玉縁をもつ。

時　期　　15世紀代の遺構である。

【SB16】図版11

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の北半に位置する掘立柱建物である。SB17やピット・土坑などの遺構と重複しているが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　　１×２間の小規模な南北棟建物で、床面積は13㎡を測る。

柱　穴　　東西の側柱の通りは比較的良好である。柱間は東西で約３ｍ、南北で約２ｍを測る。

須恵器　　113はＰ４から出土した椀である。底部が突出し、見込みがわずかに窪む。114もＰ４から出土した椀である。底部は突出するが、見込みへの窪みはみられない。

115はＰ４から出土した堝である。外面には煤が付着している。

時　期　　出土遺物には時期差がみられる。遺構の時期は、最も新しい15世紀代に求められる。

【SB17】図版12・30

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の中央付近に位置する掘立柱建物である。SB16・18やピット・土坑などの遺構と重複しているが、切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　　３×３間の総柱建物で、床面積は34㎡を測る。

柱　穴　　側柱の通りは東西、南北とも比較的良好である。

土師器　　116はP12から出土した托の底部片である。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB18】図版12

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の中央付近に位置する掘立柱建物である。SB17やピット・土坑などの遺構と重複しているが、切り合い関係にないため、それぞれとの先後関係は不明である。

形状・規模　　３×３間の規模をもつ建物である。床面積は35㎡である。

柱　穴　　東西に比べ、南北の柱間がやや短い。柱の通りは良好である。

時　期　　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明

とせざるをえない。

【SB19】図版14

検出状況　SD09に囲まれた居館内の中央付近に位置する掘立柱建物である。ピット・土坑などの遺構と重複しているが、その多くは切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　２×１間の規模をもつ建物である。床面積は10m²である。

柱　穴　南西隅の柱穴を欠くが、柱の通りは比較的良好である。南北方向の柱間は東西方向の約１/２である。

時　期　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明とせざるをえない。

【SB20】図版14・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB22と重複するが切り合い関係にないため、先後関係は不明である。またSB21を構成する柱穴と切り合い関係にあり、SB21に本遺構が切られている。

形状・規模　２×２間の規模をもつ建物で、床面積は16m²である。

柱　穴　柱穴の欠損はないが、南北方向の柱間は均等でない。

須恵器　117はＰ６から出土した椀である。底部が突出し、見込みがわずかに窪む。

時　期　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SB21】図版13

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB22・23と重複するが切り合い関係にないため、先後関係は不明である。またSB20を構成する柱穴と切り合い関係にあり、本遺構がSB20を切っている。

形状・規模　２×２間の規模をもつ建物で、床面積は18m²を測る。

柱　穴　東側柱を欠く他は比較的通りはよい。

時　期　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明とせざるをえない。

【SB22】図版13・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB20・21・23と重複し、またSB26とは近接する。いずれとも同時併存は考えがたいが、いずれとも切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　２×３間の規模をもつ南北棟の建物である。床面積は27m²である。

柱　穴　西・東側柱を欠く。中央の柱の並びはよい。東西方向の柱間は西側が２ｍ、東側が2.２ｍとやや不均等である。

土師器　118はＰ５から出土した鍋である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB23】図版14

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB21・22と重複し、またSB26とは近接する。いずれとも同時併存は考えがたいが、いずれとも切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　1×2間の規模をもつ、南北棟の建物である。床面積は9㎡である。

柱　穴　西側柱の1基を欠く。柱の通りはよく、柱間も約2mと均等である。

時　期　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明とせざるをえない。

【SB24】図版13

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB25と重複し、SB26とは近接する。いずれとも同時併存は考えがたいが、切り合い関係になく、先後関係は不明である。

形状・規模　1×1間の規模をもつ建物である。床面積は9㎡である。

柱　穴　柱に欠損はない。柱間は約2.2mを測る。

時　期　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明とせざるをえない。

【SB25】図版14・30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB24・26と重複するが、いずれとも切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　2×2間の規模をもつ建物である。床面積は16㎡である。

柱　穴　西側柱穴の1基を欠損する。東西方向の柱の並びがややいびつであり、柱間も均等でない。

土師器　119はP8から出土した小皿である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB26】図版14

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半に位置する掘立柱建物である。SB25と重複するほか、SB22・24と近接する。いずれとも同時併存は考えがたいが、切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　1×2間の規模をもつ東西棟の建物である。床面積は19㎡である。

柱　穴　柱穴の欠損もなく、東西方向の柱の並びは良好である。南北方向の柱間は東側へ短くなる傾向にある。

時　期　時期の限定できる遺物は出土しておらず、遺構の切り合いもみられないため時期は不明とせざるをえない。

【SP05】図版30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北端に位置する。他の遺構とは重複関係をもたない。

形状・規模　掘方は50×40cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。柱痕は径18cmを測る。

土師器　120は甕である。外面には煤の付着がみられる。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SP06】

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北端に位置する。位置的にはSB08内部となるが、同時併存するのか先後関係にあるのか不明である。

形状・規模　掘方は径25cmの円形を呈し、検出面からの深さは27cmを測る。柱痕は径20cmを測る。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SP07】図版30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半部、SE01の東側に位置する。

形状・規模　掘方は25×30cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。柱痕は径15cmを測る。

土師器　121は堝である。口縁部内面に粘土帯を付加した後強いナデを施す。外面は煤が付着する。

時　期　15世紀中頃の遺構である。

【SP12】図版30・写真図版28

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半部、SE01の東側に位置する。他のピットと切り合い関係にあり、本遺構が切っている。

形状・規模　掘方は径27cmの円形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。柱痕は径14cmを測る。

土師器　122は小皿である。

須恵器　123は小皿である。底部は突出し、体部は深く内湾する。底部には藁状の圧痕がみられる。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SP13】図版30・写真図版28

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半部に位置する。本遺構がSK16を切っている。

形状・規模　掘方は35×50cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは31cmを測る。柱痕は径16cmを測る。

土師器　124は小皿である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SP14】図版30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半部に位置する。SB09・16に近接するが、本遺構といずれかが同時併存するのか先後関係にあるのか不明である。

形状・規模　掘方は径20cmの円形を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。柱痕は確認できなかった。

土師器　125は堝である。口縁部内面には粘土帯を付加した後に施した強いナデが残る。外面には煤の付着がみられる。

時　期　15世紀中頃の遺構である。

【SP16】図版30・写真図版28

検出状況　SD09に囲まれた居館内の北半部、不整形な凹地の中で検出したが、その先後関係は不明である。その他の遺構との重複関係はみられない。

形状・規模　掘方は径20cmの円形を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。柱痕は確認できなかった。

土師器　126は高杯脚部である。面取りを行い、断面形は10角形を呈する。

時　期　9世紀前後の遺構である。

【SP19】図版30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の中央付近に位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

形状・規模　掘方は径30cmの円形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。柱痕は径15cmを測る。

陶　器　127は備前焼Ⅳ期の擂鉢である。幅広い口縁帯をもつ。

時　期　15世紀前葉の遺構である。

【SP22】図版30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の中央付近、SB19の南側に位置する。周囲にはピットが密集するが、切り合い関係にあるものは、本遺構が他を切っている。

形状・規模　掘方は径23cmの円形を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。柱痕は径13cmを測る。

土師器　128は小皿である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SP25】図版30・写真図版33

検出状況　SD09に囲まれた居館内の中央付近に位置する。他の遺構との切り合い関係は見られない。

形状・規模　掘方は20×25cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。柱痕は径15cmを測る。

須恵器　129は鉢である。口縁部端面は体部に対して斜交し、下方にわずかに肥厚する。

陶　器　130は深い体部をもつ古瀬戸の卸皿である。釉の残存は良くない。卸目は体部にも及ぶ。

時　期　12世紀末から13世紀初頭の遺物が含まれるが、最も新しい遺物は14世紀前半であり、これを遺構の時期とする。

【SP26】図版30

検出状況　SD09に囲まれた居館内の南半部に位置する。他の遺構との切り合い関係は見られない。

形状・規模　掘方は23×30cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは18cmを測る。柱痕は径15cmを測る。

土師器　131は小皿である。底部の円盤の外側に体部を積み上げた痕跡が観察できる。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SP27】図版30

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の南半部に位置する。他の遺構との切り合い関係は見られない。

形状・規模　　掘方は径25cmの円形を呈し、検出面からの深さは19cmを測る。柱痕は径13cmを測る。

陶　器　　132は灰釉陶器壺である。すぼまった頸部から外方に開く口縁部をもつ。中国産の可能性がある。

時　期　　9世紀代の遺構である。

【SP28】図版30

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の南半部に位置する。他の遺構との切り合い関係は見られない。

形状・規模　　掘方は径18cmの円形を呈し、検出面からの深さは11cmを測る。柱痕は確認できなかった。

土師器　　133は手づくねの小皿である。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SP29】図版30・写真図版28

検出状況　　SD09に囲まれた居館内の南半部に位置する。SK20を本遺構が切っている。

形状・規模　　掘方は20×27cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。柱痕は確認できなかった。底から土師器小皿が出土した。

土師器　　134は小皿である。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK09】図版31

検出状況　　SD09に囲まれた居館外に位置する土坑である。SD09の北東屈曲部付近にあたる。時期不明の2基の柱穴に切られている。

形状・規模　　1.05×3.15mの規模をもつ不整形の土坑である。深さは15cmである。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

磁　器　　135は細く高いく直立する高台をもつ。白磁碗V類であるが、体部下半の形状と見込みの櫛状工具による施文から、V-4類と分かる。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK11】図版15・31

検出状況　　居館を囲むSD09北東角の内側付近に位置する。他の遺構との重複は見られない。

形状・規模　　約1.2m四方の規模をもつ不整方形の土坑である。土坑底はやや凹凸があり、壁の立ち上がりは緩い。深さは8cmである。

土師器　　136は小皿である。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK12】図版17・31・写真図版12・28

検出状況　居館を囲むSD09内側、北辺の南肩付近に位置する。

形状・規模　60×40cmの規模をもつ楕円形の土坑である。深さは10cmである。底部中央付近で、須恵器椀、土師器小皿が出土した。

土師器　137は手づくねの小皿である。

須恵器　138・139は椀である。ともに底部がわずかに突出するが、見込みは窪まない。138は灰白色の胎土を呈する。139は焼成が不良である。

時　期　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SK13】図版31

検出状況　居館を囲むSD09の内側の北半、SE01西側に位置する。遺構の密集する箇所にあり、複数のピット、土坑と重複する。

形状・規模　0.8×1.0mの規模をもつ、楕円形の土坑である。深さは4cm程度である。

須恵器　140は杯蓋である。口縁部および体部に稜をもつ。

時　期　9世紀前後の遺構である。

【SK14】図版15・31・写真図版31

検出状況　居館を囲むSD09の内側の北半、SE01西側に位置する。

形状・規模　1.2×0.9mの規模をもつ、長方形の土坑である。ほぼ垂直に掘り込まれ、土坑の底は平坦で、深さは20cmを測る。

土師器　141は堝である。煤の付着は顕著でない。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK17】図版31・写真図版28

検出状況　居館を囲むSD09の内側、中央付近に位置する。SP15に切られている。

形状・規模　0.7×1.4mの規模をもつ、不整形の土坑である。深さは18cmである。

埋　土　埋土には若干の炭片を含む。

須恵器　142は小皿である。底部がわずかに突出する。胎土は灰色を呈する。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK19】図版15

検出状況　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。SK20を切る。

形状・規模　径1.2mの規模をもつ円形土坑である。深さは9cmである。底に接して亜円礫が2石ある。

時　期　時期の限定できる遺物は出土していないが、SK20を切ることから、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構と考える。

【SK20】図版15・31・写真図版28・31

検出状況　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。SK19に切られる。

形状・規模　2.0×1.2mの規模をもつ不整形の土坑である。土坑の底部はSK19と差はなく、平坦である。深さは10cmである。底に接して礫2石がある。

須恵器　143は椀である。体部は外方に直線的に開く。胎土は青灰色を呈する。東播産と思われる。

144は甕である。外面は平行タタキを施す。

土師器　145は甕である。球形を呈する体部外面には粗い平行タタキが残る。

時　期　出土遺物に時期差があるが、12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK21】図版17・31・写真図版12・28

検出状況　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。遺構が密集するが、他の遺構との重複は見られない。

形状・規模　円形を呈し、径45×50cmを測る。検出面からの深さは10cmで、底部は平坦である。

土師器　146・147は小皿である。146は口縁部の歪みが大きい。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK22】図版17・31・写真図版12・28

検出状況　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。一部土坑と重複し、土坑に切られる。またSB20とも重複するが、その先後関係は不明である。

形状・規模　楕円形を呈し、40×75cmを測る。検出面からの深さ4cmを測り、底部は平坦である。

土師器　148～150は同形の杯であり、調整手法も同一である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK23】図版15

検出状況　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。SK24に切られている。

形状・規模　検出した規模は1.0×1.2mである。本来の形状は楕円形を呈すると思われる。底部は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。深さは8cmを測る。

時　期　時期の限定できる遺物が出土していないが、SK24に切られることから、12世紀末から13世紀初頭以前の遺構と考えられる。

【SK24】図版15・31・写真図版12

検出状況　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。SK23を切る。

形状・規模　3.7×2.0mの規模をもつ楕円形の土坑である。底部は多少凹凸をもち、深さ20cmを測る。土坑内にはほぼ全面にわたって礫を投入する。礫のなかには被熱のみられるものが散見されるが、本遺構内での燃焼行為は考えがたい。

埋　土　埋土内には、焼土粒・炭片が若干混じる。

須恵器　151・152は鉢である。151は器壁と直角で上下に拡張のない口縁端部をもち、152は口縁

端部が下方に肥厚する。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK25】図版37・写真図版40

検出状況　　調査区の南半部、居館を囲むSD09の内側に位置する。SK24に切られる。

形状・規模　　短径1.2mを測る土坑である。長径は1.0mが残存している。深さは20cmである。

鉄　器　　M12は角釘で、頭部と基部を欠く。断面は１辺0.6cmの方形を呈する。M17は切先と思われる。幅2.7cm、厚さ1.0cmを測る。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構であろう。

【SK26】図版16・31・写真図版29

検出状況　　SD09に囲まれた居館外の南東に位置する土坑である。SB22の南東隅と重複する可能性があるが、切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　　0.36×0.44mの規模をもつ不整形の土坑である。深さは25cmである。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

土師器　　153は手づくねの小皿である。

154は羽釜の小片である。

155は鍋である。外面特に口縁部から体部上半には煤が顕著に付着している。

石製品　　S７は砥石である。表裏両面とも使用され、V字形の溝も刃先の研ぎ出しなどに使用された可能性がある。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK27】図版16・写真図版13

検出状況　　SD09に囲まれた居館外の南東に位置する溝状の土坑である。SD10・SK28を切っている。

形状・規模　　長さ9.5mの溝状の土坑である。幅は1.2mだが、部分的に広くなる。深さは13cmである。

埋　土　　土坑東半の一部で途切れるものの、それ以外には円礫が詰まっていた。礫のなかには火を受けたものが少なからず含まれているが、それが面的な分布を示さないこと、礫の下面が焼けているものがあることから、他の場所で火を受けたあと、この土坑内に投棄されたことを示している。

埋土中には炭、焼土は含まれていない。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK28】図版16・31・写真図版13・32・33・34

検出状況　　SD09に囲まれた居館外の南東に位置する土坑である。SK27に切られている。

形状・規模　　0.40×0.42mの規模をもつ方形の土坑である。深さは40cmである。

埋　土　　多くの炭片、土器片を含んだ細粒の堆積物が認められた。

瓦　器　　156は椀の底部の小片である。高台は低く、断面三角形を呈する。見込みの暗文は直線

的である。

土師器　157は竈の口縁部の小片である。口縁部下の外面に円錐状の突起がみられる。

磁　器　158は白磁の皿である。いわゆる平底高台をもち、底部の釉をヘラによって掻き取っている。口縁部は垂下気味に外反する。また、見込み外周に圏線を巡らせる。

159は白磁碗である。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに肥厚し、丸くおさめる。

160は同安窯系の青磁碗Ⅰ-b類である。外面に細かな縦の櫛目文、内面にヘラと櫛による施文を行う。

石製品　図化していないが、石臼の上臼の破片が出土している。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK29】図版17・31・写真図版12・29・33・40

検出状況　SD09に囲まれた居館外の南東に位置する土坑である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　1.26×0.63mの規模をもつ長方形の土坑である。深さは10cmである。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

土師器　161は鍋である。

陶　器　162は備前焼の擂鉢である。直立する幅広の口縁部をもつ。口縁外面には凹線をもたない。

鉄　器　M13は角釘と思われる。頭部と基部を欠く。断面は0.5×0.7cmの長方形を呈する。

時　期　15世紀末の遺構である。

【SK30】図版15・31

検出状況　SD09の埋没後に掘られた土坑である。

形状・規模　1.64×0.40mの規模をもつ長方形の土坑である。深さは18cmである。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

土師器　163は鍋の脚部の破片である。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SE01】図版17・32・37・写真図版14・29・32・40

検出状況　屋敷の北端に位置する。遺構の密集する中にあり、複数の柱穴などと重複する。また、埋没後ピットが掘り込まれている。南側に溝状遺構が延びる。

形状・規模　3.0×3.6mのやや不整な楕円形を呈する。断面形は検出面から約30cmで段をもつ逆台形で、深さ88cmを測り、下層の礫層まで掘削している。調査時には湧水は認められなかったが、井戸と推定する。

埋　土　埋土は検出面から40cm下にある段状の部分を境として、上下で異なる。上層には炭片を多く混じり、土器も混じる。遺構面を構成するシルトがブロック状に混じることから、埋め戻し土の可能性がある。

溝　SE01から南へ溝が延びる。断面を観察する限り、SE01に伴うものと考える。幅80cm、深さ10cmを測る。

覆　屋　　SE01を囲むように４基の柱穴があり、覆屋となる可能性がある。柱間は東西約2.8m、南北約3.3mを測る。

土師器　　164は完形の托である。

165～174は小皿である。165は手づくねによる整形によるもので、他はロクロを用い、底部の切り離しにヘラ切りを使用する。後者は、横ナデによって口縁部が外反する。

175・176は杯である。ともに直線的に斜め上方に開く体部をもつ。器表面の摩滅が激しく、底部の切り離しについては観察不可能である。

177は鍋である。外面には煤が付着している。

須恵器　　178は小皿である。底部はわずかに突出し、丸味をもった体部からわずかに外反する口縁部にいたる。

179～181は椀である。179は底部糸切りの後、輪高台を貼り付けている。180・181はともにわずかに突出する底部をもつ。見込みは窪まない。

磁　器　　182は白磁皿Ⅱ-１a類である。高台は厚く低い。183・184は白磁碗Ⅴ類である。ともに高く直立する高台をもち、体部下半に丸みをもつ。口縁部の外反度にわずかな違いから、183をⅤ-２a類、184をⅤ-１a類に分けられる。ともに、外面には口縁部付近までヘラケズリした痕跡が残る。

鉄　器　　M11は鉄釘である。基部を欠く。断面は１辺0.5cmの方形を呈する。

時　期　　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SD06】図版18・32・写真図版30・33・

検出状況　　居館の区画溝であるSD09の東方約４mで検出された南北溝である。南端は調査区外に伸びる。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　SD09に平行し、北端部は西方に屈曲して収束する。幅は2.55mであり、深さは10cmである。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が認められる。

磁　器　　185は比較的細く高く直立する高台をもつ白磁碗Ⅴ類の底部片である。釉は高台外面から内面全体にかけられる。186は龍泉窯系の青磁坏Ⅲ-２類である。外反する口縁部と丸みのある体部をもつ。

陶　器　　187は還元焔焼成による陶器の破片である。外面に花形押印文をもつ。器種は不明である。

時　期　　14世紀の遺構である。

【SD07】図版18・32・37・写真図版31・32・33・34・40

検出状況　　居館の区画溝であるSD09の東方に近接して検出された南北溝である。南端は調査区外に伸びる。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　SD09に平行し、幅は0.5～1.0mであり、深さは25cmである。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が認められる。

土師器　　188・189は体部外面に右上がりの平行タタキをもつ羽釜である。188は明確ではないが、

189の鍔は、粘土の貼り付けではなく、口縁部粘土帯を内側に積み上げることによって形成されている。

190は鍋である。口縁部は内面への粘土帯の継ぎ足しによって断面三角形に肥厚している。

須恵器　191は甕である。ナデにより強くすぼまった頸部と、比較的上方に開く口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみ上げられることにより、口縁部内面が窪む。

磁　器　192は大きな玉縁をもつ白磁碗Ⅳ類である。193は龍泉窯系の青磁碗のうちいわゆる雷文帯碗、上田分類のC-Ⅱ類である。外面に簡略化された雷文帯をもつ。194は無文の青磁碗の底部片である。高台の内面にも釉がかかる。196は青磁香炉である。外面全体に施釉される。脚は1箇所のみが残存している。

陶　器　195は唐津焼の灰釉椀である。低く粗いつくりの輪高台をもつ。

197は天目茶碗である。比較的直線的な体部と、稜をもって屈折する口縁部をもつ。

198～202はいずれも備前焼Ⅳ期に属するものである。198・199は大小の甕である。ともにほぼ直立する頸部と、口縁部に幅広い玉縁をもっている。200～202は擂鉢である。口縁部を上下に拡張し、内傾する幅広い端面を形成している。

石製品　S8は石硯を再加工した砥石である。砥石として利用している面はすべての面に及ぶが、擦痕の顕著なのは長側面と文字の線刻されている面である。この砥石は、破損した石硯の再利用品である。縁帯や海を欠くことから石硯の原形をとどめないものの、形態による型式分類に当てはめることは可能である。平面は長方形であり、裏面が平坦、側面は上方に向かってわずかに広がっていたものと判断されるため、「長方硯ⅠAc」型式に分類される（水野　1985）。硯の裏面には極めて細い線刻による文字が確認できる。文字が欠けていることから、石硯として利用されていた当時の線刻であることが分かる。文字は上半に一行、下半に二行にわたる。上半は「治四年六月日」とある。ただし「四」は「二」を横に併置した表記である。下半の右行は「常陸」と読め、さらに文字は続いている。左行にも一文字が確認できるが、判読不可能である。上半は硯の入手年月日を意味すると推測されるが、元号の一文字目を欠くため、年代決定には若干の検討を必要とする。二文字目が「治」の元号であり、さらに四年六月まで続いたものは、寛治（1087.4.7～1094.12.14）、大　治（1126.1.22～1131.1.28）、文　治（1185.8.14～1190.4.10）、貞　治（1362.9.23～1368.2.17）、明治（1868.9.8～1912.7.29）の5件である。伴出した土器が15世紀を主体とすること、硯そのものの形態が14世紀後半から15世紀後半のものであることを示していることから、この年号は貞治四年六月（1365年6月）と推測できる。なお、下半右行の「常陸」は所有者を意味するものと思われ、下へ続くのは「守」「介」などの官途である可能性が高い。

鉄　器　M14は鉄釘であり、基部を欠く。断面は1辺0.4～0.5cmの方形を呈する。

時　期　196・197のように、16～17世紀の遺物も散見されるものの、15世紀前葉の遺物が大半を占める。遺構の時期は15世紀前葉頃である。

【SD09】図版18・33・38・写真図版30・31・32・40

検出状況　B地区の南半で検出された「L」字形の溝である。溝の方向は、残存していた条里型地割りに平行している。この溝の内側には掘立柱建物等の遺構が密集し、この外側にはそれが顕著でなく、溝が数条検出されたのみである。A地区のSD01と同様、居館の外周を巡る区画溝と考えるのが自然である。居館外周のうち北辺と東辺の一部が確認されたことになる。西辺は調査区外であるが、南辺は南接するC地区の調査で検出されなかったため、それがあるとすれば、C地区との間の、調査不能だった畔道直下あるいはC地区でわずかに検出されたSD17に求められる。

この溝は、SD08・SD16を切り、SD14・SD15に切られている。

形状・規模　溝は北辺で最大幅3.0m、深さ40cmである。これに対して東辺はやや狭く、幅1.8mを測る。東辺の長さは約59m以上である。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

土師器　203～205は大皿である。口径、器高は似るが、整形方法が異なっている。203は手づくね整形、204はロクロ整形で、切り離しに糸切りを使用する。

206・207は鍋である。ともに外面には煤が付着している。

須恵器　208～212は椀である。焼成不良のため判然としない208を除き、白色の強いもの（209～211）と青灰色を呈する212に大別される。前者はⅡ期の備前焼と考えられる。212の底部外面には墨書がある。

磁　器　213は白磁碗Ⅴ-4類であろう。細く高く直立した高台をもつ。見込みに櫛状工具による草花文の施文がある。焼成温度が低く、釉は濁っている。

214は大きな玉縁をもつ白磁碗Ⅳ類である。

215は底部にわずかに高台状のものを削り出す白磁の皿であり、見込みにはヘラおよび櫛状工具による草花文が描かれる。器壁は薄く、胎土は他に比べ白い。当遺跡の他の白磁とは異なり、華南産とは考えがたい。

瓦　器　216は小皿である。

石製品　図化していないが、砥石片と思われる破片が2点出土している。

鉄　器　M21は雁又式鉄鏃である。切先部分と茎の大半を欠く。M22、M23は鉄鍋で、同一個体と推定する。M22は、口縁部分で半円状の吊耳が付く。M23は平底の底部である。復原しうる底径は16cm程度となる。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SD10】図版33・37・写真図版31・32・40

検出状況　居館の区画溝であるSD09の西方に近接して検出された南北溝である。SD09とは切り合わないが、SK27・SD14・SD15に切られる。

形状・規模　SD09に平行し、幅は1.0～1.2mであり、深さは約10cmである。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

須恵器　217は須恵器で、貼り付け高台をもついわゆる杯Bである。

土師器　218は羽釜である。

219・220は鍋である。ともに外面に煤が付着している。

須恵器　221は椀である。底部は突出しない。底部外面には「大」の墨書がある。

磁　器　222は白磁皿Ⅵ-1a類である。口縁部と体部の境は強く屈曲しており、その内面に沈線をもつ。焼成温度が低く、釉は白濁している。

瓦　器　223は椀である。底部を欠失する。

鉄　器　M15は角釘である。頭部の折り返し部分を欠く。断面は0.4×0.5cmの方形を呈する。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SD11】図版33

検出状況　居館を囲むSD09の内側に位置する。SD09北辺の南肩にあり、本遺構がSD09に切られている。

形状・規模　東西方向に延び、途中で南側へ分岐する。検出長4m、幅30cm、深さ8cmを測る。

須恵器　224は椀である。突出しないものの厚手の底部をもつ。丸みのある体部とゆるく外反する口縁部を有する。胎土の色調は青灰色である。

時　期　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SD12】図版18・33

検出状況　居館を囲むSD09の内側、中央付近に位置する。遺構の密集する箇所にあり、複数のピットなどと重複する。またSB18と重複し、SB18を構成する柱穴を本遺構が切っている。

形状・規模　東西方向に延びる。検出長7.2m、幅30cm、深さ14cmを測る。

埋　土　埋土には遺構面を構成するシルトがブロック状に混じる。

須恵器　225は椀である。わずかに突出する厚手の底部をもつ。焼成は不良である。

226は甕である。口縁部が外反し、端部に平坦面をもつ。

時　期　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SD13】図版33・37・写真図版40

検出状況　SD12と同じく居館を囲むSD09の内側、中央付近に位置する。複数のピットの他、SB19と重複するが、その先後関係は不明である。

形状・規模　西方向に延びる。検出長7.2m、幅30cm、深さ14cmを測る。

埋　土　埋土には遺構面を構成するシルトがブロック状に混じる。

磁　器　227は小振りな玉縁状口縁をもつ白磁碗である。

鉄　器　M19は鉄鏃あるいは刀子の切先部分と思われる。幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SD14】図版18・33・34・写真図版13・30・31・32

検出状況　SD08・09・10の埋没後に、これらを切る形で掘削された溝である。

形状・規模　他のほとんどの溝が条里型地割りに平行する直線的な溝であるのに対して、この溝は半円形を呈する点で特徴的である。溝の幅は1.2m、深さ15cmを測る。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

土師器　　228～232は鍋である。228・229は浅い体部に大きく開く口縁部をもつ。230はこのタイプの鍋に伴う脚部である。231は深い体部をもつ。232は同じく深い体部をもつが、口縁部が強く内湾する。

須恵器　　233は小皿である。胎土の色調は灰色である。

234～239は椀である。234は体部下半が大きく内湾しながら立ち上がり、外反する口縁部にいたるもので、胎土が青灰色を呈する龍野市竹原窯の製品である。235も形態的特徴、胎土の類似から竹原窯の製品と思われる。237は小さな底部から直線的に開く体部をもつ。胎土は青灰色であり、東播産と思われる。239は基本的な形態は234に似るが、胎土が白いことや形態的な特徴からⅠ期の備前焼と考えられる。

磁　器　　240は白磁皿Ⅲ-1類の小片である。見込みの釉を輪状に掻き取っている。

瓦　器　　241は小皿である。口縁部の歪みが大きい。

242は口縁部内面に沈線を施す楠葉型の椀である。残存状況は不良であるが、Ⅲ－1期のものである。

石製品　　図化していないが、砥石片が1点出土している。

時　期　　12世紀中葉から後半にかけての遺構である。

【SD16】図版18・34

検出状況　　B地区の南端で検出された東西溝である。SD09・10に切られる。

形状・規模　　東西両端は調査区外に伸びる。条里型地割りに平行する。幅は最大6m、深さ25cmを測る。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

須恵器　　243は須恵器杯である。ハ字状に開く低い高台をもつ。

244は小皿である。外反する口縁部をもつ。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【包含層出土遺物】図版34

須恵器　　245はわずかに突出する底部をもつ椀である。形態的特徴、胎土の類似から龍野市竹原窯の製品と思われる。

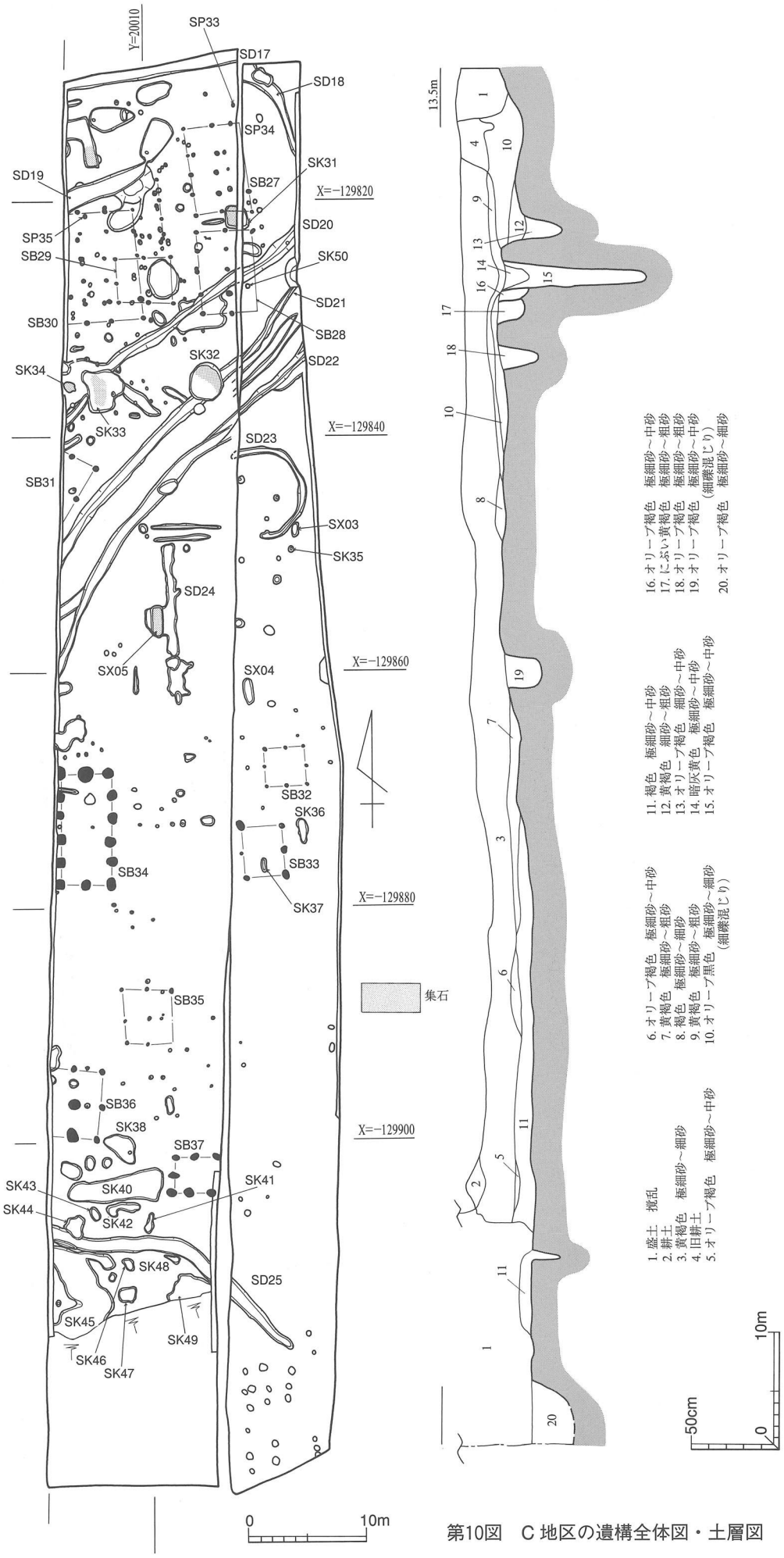
鉄　器　　M16、20は建具の一種と思われる。M16は断面方形の鉄棒を2つ折り状に曲げ、先端を内径1.0cmの輪状に仕上げる。M20も同様に1辺0.7cmの鉄棒の先端を内径1.4cmの輪状に曲げ、P字状に仕上げる。基部は尖り気味である。

3．小　結

調査区南半で、12世紀中頃から13世紀初頭にかけて営まれた居館の東半が検出された。一辺約60mと推定される区画溝の西辺および南辺は、揖保郡復元条坊の坪境にそれぞれ重なる可能性が高い。すなわち14条10坊19坪の南西隅に位置する居館の一部を検出したことになる。

居館内部では、掘立柱建物20棟、土坑22基、井戸１基、多数の柱穴等が検出された。これらの遺構の多くは、A 地区と同様、12世紀末から13世紀初頭にかけての期間に営まれたものであるが、平安時代（９・10世紀、12世紀中葉）や鎌倉後半以降（14・15世紀）の遺構もわずかながら存在する。15世紀代の遺構は、掘立柱建物２棟、土坑１基、柱穴３基である。

SE01・SD14、SD09から比較的まとまった量の遺物が出土した。前二者は12世紀中葉から後半にかけて、後者は12世紀末から13世紀初頭の時期の実態を示す良好な一括資料と評価できる。土器以外には鉄鍋、石硯が挙げられる。特に貞治四（1365）年六月と推定される銘をもつ石硯には、官途を伴う人名がうかがえ、その所有者が荘官クラスの人物であることを示唆する。



第10図　C地区の遺構全体図・土層図

第４節　Ｃ地区の調査

１．概　要

位　置　最も南に位置する調査区である。龍野市揖保町門前字熊代に位置し、復元条坊でいえば、揖保郡14条10坊18坪のやや西寄りから７坪の北西端にあたる。

Ｃ地区は東西24ｍ、南北122ｍにわたり、調査面積は約2800㎡を測る。

基本層序　調査直前はほ場として利用されていた。当地の基本層序は、以下のとおりである。

１．暗灰黄色シルト質極細砂（現耕土）

２．黄褐色シルト質極細砂（旧耕土・床土）

３．にぶい黄褐色シルト質極細砂

４．礫層

遺構はこの第３層上面より切り込んでいるが、後世の水田化により当初の生活面は削平を受けているものとみられ、遺物包含層もほとんど存在しない。

調査の経緯　Ｃ地区はＢ地区同様、工事の都合上、東西の２地区に分割せざるをえず、平成４年度に西半部を、平成５年度に東半部の調査を行った。

遺構の概要　Ｃ地区で検出された遺構は、掘立柱建物11棟、土坑19基、溝９条、墓３基、柱穴などである。これらの遺構は６～13世紀の間に営まれたものである。他地区にみられない古墳時代および奈良時代の遺構が営まれている点が特徴的である。

古墳時代の遺構には竪穴住居がみられず、掘立柱建物５棟と土壙墓２基が検出された。掘立柱建物はすべて側柱建物であり、住居の可能性がある。土壙墓には鉄器を副葬したものがある。

奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建物１棟、溝等が検出された。

中世の遺構は、Ａ・Ｂ両地区と異なり、居館の環濠らしき溝は検出されず、掘立柱建物５棟や屋敷墓１基などが営まれている。

出土遺物　出土遺物は他の地区ほど多くない。

古墳時代の土壙墓からは鉄剣、鉄刀が各１点出土している。

２．遺構と遺物

【SB27】図版19・写真図版17

検出状況　調査区北端で建物すべてを検出した。南側にほぼ方向を同じくするSB28が隣接する。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模　南北方向に主軸をもつ２×４間の総柱建物である。東西7.5ｍ、南北4.2ｍを測る。面積は31㎡である。

柱　穴　東側列の柱穴を欠くが、他の列は並びもよい。柱穴は径30～40㎝、検出面からの深さ８～30㎝を測る。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB28】図版19・写真図版17

検出状況　調査区北端で建物すべてを検出した。北側に主軸方向をほぼ同じくするSB27が隣接する。SD20と重複し、本建物を構成する柱穴がSD20に切られる。

形状・規模　南北方向に主軸をもつ２×４間の総柱建物である。東西7.0m、南北4.7mを測る。面積は33㎡である。

柱　穴　東側の柱穴の大半を欠くが、他の列は比較的並びもよい。柱穴は径30～40㎝、検出面からの深さ10～30㎝を測る。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB29】図版19・34

検出状況　調査区北半部で検出した。SB30や土坑などと重複するが、その先後関係は不明である。

形状・規模　２×２間の側柱建物である。東西3.8m、南北4.6mを測る。面積は17.5㎡ある。

柱　穴　柱穴の欠損もなく、通りは良好である。柱穴は径25～30㎝、検出面からの深さ20㎝を測る。Ｐ１は底に根石を置く。

磁　器　246はＰ５から出土した白磁碗Ⅳ-１ａ類の底部である。削り出し高台は低い。内面の見込み外周に圏線を巡らせる。

時　期　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB30】図版20・34・38・写真図版40

検出状況　調査区北半部の西端に位置する。北東隅の柱穴が土坑に切られる他は、遺構の重複は見られない。建物はさらに調査区の西側へ続く可能性がある。

形状・規模　２間以上×５間の総柱建物である。東西9.4m、南北4.7mを測る。面積は44.7㎡である。

柱　穴　柱穴の欠損もなく、通りは良好である。柱穴は径20～45㎝、検出面からの深さ15～25㎝を測る。

土師器　247はＰ２から出土した手づくねの小皿である。

鉄　器　M24は鉄釘である。断面は0.7㎝の方形を呈する角釘で、頭部を折り曲げる。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB31】図版20

検出状況　調査区中央部の西端に位置する。建物の北東角部分を検出したのみである。

形状・規模　東西・南北とも１間分のみ検出した。建物の全容は不明である。

柱　穴　検出した柱穴は３基のみである。柱穴は径35～45㎝、検出面からの深さ17～27㎝を測る。

時　期　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SB32】図版21

検出状況　Ｃ地区の中央東寄りで検出された掘立柱建物である。他の遺構とは切り合わない。

形状・規模　２×２間の規模をもつ側柱建物であり、東西3.2m、南北3.3mを測る。床面積は約11㎡を測る。

柱　穴　　側柱のみで構成される。各列とも柱穴の並びはよい。規模は径20～30㎝、検出面からの深さ８～20㎝を測る。柱間はほぼ等しい。

時　期　　時期の判明する遺物が出土していないため、不明であるが、古墳時代後期の可能性がある。

【SB33】図版21・写真図版18

検出状況　　C地区の中央東寄りで検出された掘立柱建物である。SK37と重複する位置にあるが、切り合い関係にないため、先後関係については不明である。

形状・規模　　１×２間の規模をもつ側柱建物であり、床面積は約14㎡を測る。

柱　穴　　側柱のみで構成される。梁行の柱間は桁行の約２倍である。各列とも柱穴の並びはよい。規模は比較的大型である。平面形はやや不整形で、径20～70㎝、検出面からの深さ10～40㎝を測る。

時　期　　時期の判明する遺物が出土していないため、不明であるが、古墳時代後期の可能性がある。

【SB34】図版22・34・写真図版18・35

検出状況　　調査区中央付近の西壁際で検出した。柱穴の西列が調査区西壁にかかるが、建物は全掘したと考える。他の遺構との重複はない。

形状・規模　　ほぼ南北方向に桁行をもつ２×５間の側柱建物である。東西4.2m、南北9.6mを測る。面積は39.8㎡である。

柱　穴　　他の建物と比較して柱穴掘方の規模が大きく、平面形は円形または隅丸方形を呈する。

土師器　　248はP10から出土した小皿である。底部の切り離しにはヘラ切りを用いている。

須恵器　　249はP10から出土した小皿である。底部はわずかに突出し、丸みのある体部下半をもつ。

時　期　　遺構の形態的特長から、奈良～平安時代のものと判断できる。12～13世紀の遺物が出土しているが、混入品と考えたい。

【SB35】図版21・写真図版17

検出状況　　調査区南半部に位置する。他の遺構との重複は見られない。

形状・規模　　２×２間の総柱建物である。規模は東西4.1m、南北4.5mを測る。面積は18.7㎡である。

柱　穴　　東側の柱穴を欠く他は比較的ならびもよい。規模は径20～40㎝、検出面からの深さ８～15㎝を測る。

時　期　　時期の判明する遺物が出土していないため、不明であるが、古墳時代後期の可能性がある。

【SB36】図版21・写真図版17

検出状況　　調査区南半部の西端に位置する。さらに調査区西側へ続くものと思われる。

形状・規模　　南北２間、東西１間以上の総柱建物である。東西2.3m以上、南北5.8mを測る。面積は

12.8㎡以上である。

柱　穴　　柱穴の通りはよく、規模も45㎝以上と大型である。検出面からの深さは15～20㎝を測る。

時　期　　時期の判明する遺物が出土していないため、不明であるが、古墳時代後期の可能性がある。

【SB37】図版22・写真図版17

検出状況　　調査区南半部、調査区中央付近に位置する。他の遺構との重複はない。

形状・規模　　2×2間の側柱建物である。東西3.0m、南北3.3mを測る。面積9.9㎡である。

柱　穴　　柱穴は東列を欠くが、柱の通りはよく、規模も50㎝以上と大型である。検出面からの深さは15～30㎝を測る。

時　期　　時期の判明する遺物が出土していないため、不明であるが、古墳時代後期の可能性がある。

【SP36】図版34

検出状況　　調査区北半部、SB29内部に位置する。SB29との先後関係は不明である。その他の遺構との切り合い関係は見られない。

形状・規模　　掘方は径52㎝の円形を呈し、検出面からの深さは24㎝を測る。柱痕は径16㎝を測る。

須恵器　　250は鉢である。口縁端面が外側に傾斜するものである。端部の肥厚はない。

時　期　　12世紀末から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK31】図版23・写真図版19・35

検出状況　　C地区北半で検出された土坑である。SB27とSB28の間に位置する。SB27と重複するが、切り合い関係にないため、先後関係は不明である。

形状・規模　　1.48×1.84mの規模をもつ長方形の土坑である。深さは16㎝である。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認でき、土坑底に接して円礫が多数検出された。礫のなかには火を受けたものがわずかに含まれている。埋土中より移動式竈の破片のみが出土した。

土師器　　251は移動式の竈である。多くの破片が出土しており、辛うじて図上で全形をうかがうことができる。焚口部分を切り取る際に、ヘラで切れ目を入れる程度で折り取っているようである。焚口側辺の庇の高さは2.5㎝を測る。内面には煤が付着している。胎土には雲母が多く含まれている。

時　期　　12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺構である。

【SK32】図版23・34・写真図版19

検出状況　　調査区北半部に位置する。SD21と重複し、SD21を切る。

形状・規模　　やや不整形な円を呈し、2.9×3.15m、深さ5㎝を測る。土坑底部に接して5～30㎝の礫を多数検出した。

時　期　　時期の判明する遺物が出土していないため、不明である。

【SK33】図版23・34・写真図版19・35

検出状況　調査区北半部に位置する。SD20と重複し、SD20を切る。また、底でピット１基を検出したが、その先後関係は不明である。

形状・規模　3.2×3.3m、深さ５㎝を測る。土坑の底は平坦で、底に接して1.5×2.5mの長方形の範囲で円礫を多数検出した。

陶　器　252は亀山焼の甕である。口縁部は低く外方にのびる。体部外面には一辺２～３㎜の格子状のタタキが施されており、内面にはこれと対応する同心円タタキがナデ消されている。

時　期　13世紀代の遺構である。

【SK35】図版23・35・写真図版18・35

検出状況　Ｃ地区北半で検出された土坑である。SX03の南約１ｍに位置する。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　43×45㎝の規模をもつ円形の土坑である。深さは13㎝である。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認でき、土坑中央部の土坑底からは、正位よりやや傾く形で須恵器提瓶が出土した。

須恵器　253は須恵器提瓶である。形態はフラスコ状で、体部に焼成時の置台と思われる須恵器破片が溶着している。

時　期　６世紀末の遺構である。

【SK37】図版35・写真図版38

検出状況　Ｃ地区の中央東寄りで検出された土坑である。SB33と重複する位置にあるが、切り合い関係にないため、先後関係については不明である。

形状・規模　0.3×1.2mの規模をもつ長方形の土坑である。深さは10㎝である。Ｃ地区の古墳時代の他の墓と同様、長軸は南北方向を指す。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

須恵器　254は杯Ｈ蓋である。外面の上半部はヘラケズリを施す。

時　期　６世紀代後半の遺構である。

【SK38】図版35

検出状況　調査区南半部、SB36東側に位置する。他の遺構との重複はない。

形状・規模　不整な楕円形を呈し、規模は1.7×2.7m、検出面からの深さ７㎝を測る。土坑底部の南東よりにピットを１基検出した。径20㎝、土坑底からの深さ25㎝を測る。壁面の立ち上がりは緩く、底部はやや凹凸がある。

埋　土　シルト混じりの細砂～極細砂を埋土とし、礫を含む。

須恵器　255は甕口縁部である。端部を肥厚させ、波状文と沈線を交互に施す。

時　期　６世紀代の遺構である。

【SK40】図版35・写真図版38

検出状況　調査区南半部で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　東西方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。2.1×7.6m、検出面からの深さ7～12cmを測る。壁面の立ち上がりは緩く、底部は水平である。

埋　土　にぶい黄褐色シルト質極細砂が単層堆積する。埋土には焼土や炭片を含む。

須恵器　256は杯身である。内外面とも横ナデを施し、底部は回転ヘラケズリである。

時　期　7世紀代の遺構である。

【SK42】図版35・写真図版37

検出状況　調査区南半部、SK40の南側で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　SK40と同じく東西方向に主軸をもち、平面形は不整長楕円形を呈する。規模は0.75×2.75m、検出面からの深さ9cmを測る。断面形は緩いU字状を呈する。

埋　土　にぶい赤褐色シルト質極細砂が単層堆積する。

須恵器　257は杯B身である。底部のみ残存し、低い高台を貼り付ける。。

時　期　7世紀末～8世紀代の遺構である。

【SK43】図版35・写真図版35

検出状況　調査区南半部、SK40の南側で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　北西－南東方向に主軸をもつ0.7×1.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。断面形は緩いU字状を呈する。

埋　土　にぶい赤褐色シルト質極細砂単層である。

須恵器　258は杯B身である。口径に対し、器高が低く、低い高台を貼り付ける。

時　期　7世紀末～8世紀代の遺構である。

【SK44】図版35・写真図版35・37

検出状況　調査区南半部、SK40の南側で検出した。本遺構がSD25を切っている。

形状・規模　平面形は不整楕円形で、1.8×2.1mを測る。検出面からの深さ9～18cmである。断面形は逆台形を呈し、壁面の立ち上がりは比較的緩い。

須恵器　259・260はいずれも杯身である。内外面とも横ナデを施し、260の底部はヘラ切り未調整である。

土師器　261は碗である。ハ字状に高台を貼り付け、内面には暗文が認められる。262は甕である。外反する口縁部をもち、端部はわずかに面をもつ。外面は煤が付着する。

時　期　7世紀後半の遺構である。

【SK45】図版35・写真図版38

検出状況　調査区南半部、SD25の南側で検出した。西側は調査区外へ続き、南側は削平のため、全容は明らかでない。埋没後ピットを掘削する。

形状・規模　平面形状は明らかでない。断面は西へ緩やかに傾斜し、底部はかなり凹凸がある。検出

面から最も深いところで20cmを測る。

埋　土　　自然堆積の様相をみせる。肩部付近で炭片や焼土粒の散布がみられる。

須恵器　　263は杯Ａである。底部は平底で、口縁端部は丸くおさめる。

時　期　　８世紀代の遺構である。

【SK47】図版35・写真図版35・37・38・39

検出状況　　調査区南半部、SD25の南側で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　　平面形はやや不整な方形を呈する。規模は、1.05×1.4m、検出面からの深さは10cmを測る。断面形は緩いＵ字状を呈し、壁面の立ち上がりは非常に緩やかである。

埋　土　　灰色シルト質極細砂が単層堆積する。埋土内には炭片や焼土粒が混じる。

須恵器　　264・265は須恵器杯身である。

土師器　　266は杯Ａである。口縁部を欠くが、平底で、やや丸みをもって立ち上がる。

石製品　　Ｓ９・S10はともに凝灰岩質の砥石である。いずれも断面の形状は四角形である。４面使用し、摩滅が著しい。S10は刃先を研いだと思われるＶ字状の溝が６条認められる。

時　期　　７世紀代の遺構である。

【SK48】図版35・38・写真図版38・40

検出状況　　調査区南半部、SD25の南側で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　　平面形は東西方向に主軸をもつ不整楕円形で、0.55×1.3m、検出面からの深さ５cmを測る。断面形は緩いＵ字状を呈し、壁面の立ち上がりは非常に緩やかである。

埋　土　　比較的シルト質の強い細砂を埋土とする。

須恵器　　267は杯Ｇ身である。底部は平底で口縁端部は丸くおさめる。

鉄　器　　M25は鉄鏃の茎部分である。

時　期　　７世紀代の遺構である。

【SK49】図版35

検出状況　　調査区南半部、SD25の南側で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。南側は削平のため、全容は明らかでない。

形状・規模　　検出した部分の形状は不整形である。検出長3.5m、検出面からの深さ10cmを測る。断面は残存部分を見る限り逆台形を呈し、底部は比較的水平である。

埋　土　　細砂～極細砂が堆積し、焼土粒が混じる。

須恵器　　268は杯Ｂ身である。ハ字状に踏ん張る高台を貼り付ける。

時　期　　８世紀代の遺構である。

【SK50】図版35・写真図版19・36

検出状況　　調査区北半部、SD20南肩付近に位置する。他の遺構との重複は見られない。

形状・規模　　40×50cmの規模をもつ平面楕円形の土坑である。土坑内より土師器鉢が出土した。

土師器　　269・270は椀である。269はほぼ直立する短い口縁をもち、体部はヘラミガキを施す。

内面には放射状の暗文がみられる。胎土は非常に精良である。

時　期　　6世紀代の遺構である。

【SX03】図版24・36・38・写真図版20・36・40

検出状況　　C地区北半、SK35の北約1mで検出された土壙墓である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　0.52×1.10mの長方形の掘り方をもつ。南北両端における幅および土坑底の高低差はない。深さは20cmである。

埋　土　　埋土の観察からは木棺痕跡は認められない。

出土状況　　副葬品と思われる遺物が出土した。中央に鉄刀、その南に小型の鉄刀がこれと重なるように置かれ、また中央北西寄りに完形の須恵器蓋杯のセットが置かれていた。杯は壙底に接して正位で出土し、蓋はこの横で壁に立てかけるような形で出土したもので、副葬当時の状況をとどめるものと思われる。

須恵器　　271は杯蓋である。頂部はヘラ切り後軽いナデで仕上げる。272は杯身で受部が内傾し、短く立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデを施す。

鉄　器　　M26・M27は鉄刀である。M26は全長35.3cm、刃部の幅3.0cm、厚さ0.9cm。関は僅かな段差をもって茎へつながる。目釘孔は先端に1箇所確認でき、釘が残存する。刃部・茎に木質が残存し、鞘入りの状態で副葬されたようである。M27は全長54.3cm、刃部の幅3.3cm、厚さ0.9cm。関は僅かな段差をもって茎へつながる。目釘孔は2箇所確認できた。

時　期　　6世紀末の遺構である。

【SX04】図版24・36・写真図版20・36

検出状況　　C地区中央東寄りで検出された土壙墓である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　0.64×2.30mの長方形の掘り方をもつ。南北両端における幅および土壙底の高低差はない。深さは10cmである。

埋　土　　埋土の観察からは木棺痕跡は認められない。

出土状況　　土壙底より副葬品と思われる遺物が出土した。北端から約50cm南で完形の須恵器蓋と杯がともに逆位で置かれていた。また、これより南約1.5mには、土師器杯が正位に置かれていた。

須恵器　　273は杯蓋である。頂部はヘラ切り後荒いナデを施す。274は杯身である。受部が内傾し、短く立ち上がる。底部はヘラ切り未調整である。

土師器　　275は鉢である。丸みを帯びた体部と内傾する口縁部をもつ。

時　期　　6世紀末の遺構である。

【SX05】図版24

検出状況　　調査区中央付近で検出した。遺構面の削平により、基底部のみが残存する。SD24の西側肩部と重複し、本遺構がSD24を切っている。

形状・規模　　墓壙の平面形は、南北に主軸をもつ長楕円または長方形を呈する。長軸2.5m、短軸0.95m

を測る。この墓壙内に石室状の埋葬施設をもつ。残存はよくないが、30cm大の礫で側を囲い、底に20cm以下の礫を敷く。底部は北端がやや高く、大型の礫の面を揃えて置いている。この点から、被葬者の頭位は北と想定する。

埋　土　　墓壙埋土と石室内の敷均し土に大別できる。敷均し土は側石を置いた後、敷き入れており、その後床面の礫を置いている。したがって床面の礫で、直接墓壙底部に接しているものはない。

時　期　　遺物が全く出土していないが12～13世紀に属すると推定する。

【SD17】図版36

検出状況　　調査区北端で検出した。検出したのは南側の肩部のみで、北側は調査区の制約で確認していない。溝は東西方向にのび、さらに調査区外へ続く。他の遺構との切り合いは見られない。

形状・規模　　検出長は14.5m、検出面からの深さ10cm程度である。

土師器　　276は土師器の鍋である。強いナデによって、口縁部は強く内湾する。

時　期　　5世紀、15世紀代の遺物も出土しているが、B地区の居館の区画溝と思われるため、12世紀中葉から13世紀初頭の遺構と考える。

【SD20】図版25・36・写真図版36

検出状況　　C地区北半で検出された、北東から南西方向を指す溝である。SB28・SK33・SK34に切られる。

形状・規模　　東西両端は調査区外にあり、調査区内で約26mが直線的に検出された。最大幅は約120cm、深さ約30cmである。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

土師器　　277・278・279は土師器の小皿である。いすれも手づくね整形によるもので、口縁部には横ナデを行う。

須恵器　　280は須恵器の小皿である。底部の切り離しは回転糸切りによる。

時　期　　SD21と平行することから、8世紀代の遺構と考えられる。

【SD21】図版25・36

検出状況　　C地区北半で検出された、北東から南西方向を指す溝である。SK32に切られる。

形状・規模　　東西両端は調査区外にあり、調査区内で約31mが検出された。西端はやや南寄りに向きを変える。最大幅は約100cm、深さ約10cmである。

埋　土　　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

須恵器　　281は杯B身である。低い高台を貼り付ける。

土師器　　282は皿である。内外面とも横ナデで仕上げる。

時　期　　8世紀代の遺構である。

【SD22】図版25

検出状況　C地区北半で検出された、北東から南西方向を指す溝である。SD21にほぼ平行し、これと約2.2mの間隔を有する。SK32に切られる。

形状・規模　東西両端は調査区外にあり、調査区内で約35mが検出された。西端は南寄りに大きく向きを変える。最大幅は約120cm、深さ約15cmである。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

時　期　時期の判明する遺物が出土していないため、不明であるが、SD21と平行することから、8世紀代の遺構と考えられる。

【SD23】

検出状況　C地区北半東寄りで検出された溝である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　他のほとんどの溝が条里型地割りに平行する直線的な溝であるのに対して、この溝はB地区SD14と同様、半円形を呈する点で特徴的である。溝の幅は約60cm、深さ10cmを測る。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

時　期　時期の判明する遺物が出土していないため、不明である。

【SD24】図版25・36・写真図版39

検出状況　調査区中央付近で検出した南北方向に延びる溝である。SX05と重複し、本遺構をSX05が切っている。

形状・規模　直線的に延びるが、肩部分はやや出入りがある。検出長は9.5m、幅0.55～1.25mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは4～10cmである。

埋　土　黄色系のシルト質極細砂が単層で堆積する。

弥生土器　283は壷である。頸部に貼り付け突帯を施した痕跡がある。

時　期　出土遺物から弥生時代中期末から後期の遺構と思われる。

【SD25】図版25・36・写真図版36・37・38

検出状況　C地区南端近くで検出された溝である。SK44に切られる。

形状・規模　東端は調査区内で浅くなり収束するが、西端は調査区外にある。東西方向を向くが、東半は南東方向へ向きを変える。溝の最大幅は約2.1m、深さ25cmを測る。

埋　土　埋土には細粒の堆積物が確認できる。

須恵器　284は杯蓋、285は杯B身である。ほぼ直立した短い高台を貼り付ける。286は杯G身である。底部はヘラ切りである。288は皿である。底部はヘラ切り後、軽いナデを施す。290は壷である。外面は格子タタキの後、カキ目を施す。

土師器　287は碗である。口縁は外に屈曲させ、端部は上方につまみ出す。289は皿である。内面には暗文が認められる。291は壷である。口縁部をわずかに上方へ拡張している。

時　期　8世紀代の遺構である。

3．小　結

揖保郡復元条坊の14条10坊18坪の西寄りから７坪の北西隅にあたる。

中世の遺構については、A・B地区のような居館の環濠は検出されず、掘立柱建物５棟、屋敷墓１基、土坑２基等が検出された。これらは、12世紀中葉から13世紀初頭にかけての期間に営まれたものである。屋敷墓は石室風の構造である。掘立柱建物に近接して移動式竈と被熱礫を出土した土坑がある。

他の地区と異なり、古墳、奈良・平安時代の遺構が検出された。

古墳時代後期の掘立柱建物５棟と副葬品をもつ土壙墓２基が検出され、県内に類例の少ない須恵器模倣の土師器椀も出土した。

奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物１棟と溝等である。掘立柱建物は方形堀方をもつ大型建物である。

第４章　遺物の検討

第１節　中世以前の土器

中世以前の土器は中世の土器に比べ出土点数は少ないが、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代のものが出土している。地区で見ると、A・B地区からの出土は少なく、大半がC地区から出土したものである。

１．弥生時代

出土点数は２点と少なく、出土状況や土器の残存も良好とはいえないことから、他所から本調査区に流入したものと思われる。283は頸部に指頭圧痕文突帯を施したと思われ、それが剥離した痕跡が残る。凹線はみられないため、中期末から後期初頭の時期が考えられる。

２．古墳時代

C地区のSK50、SX03・04から出土したもので、いずれも土坑や墓になんらかの意図をもって埋納されたものである。特記する遺物としてはSK50出土の269・270がある。これらは須恵器杯蓋を模倣した土師器椀であるが、北部九州や関東・東北地方に類例があるものの、県内では三原郡西淡町の雨流遺跡（長谷川　1990）に報告例があるのみである。龍野市周辺は須恵器の導入が遅れた地域とはいえず、渡来人との接触も考えられることから、単に須恵器を真似て製作した土器とは考えがたい。限られた遺物ではあるが、畿内中枢と北部九州の流通の中で把握できないだろうか。

３．奈良・平安時代

中世以前の遺物としては最もまとまりをもつ。個体数は少ないものの供膳具、煮沸具、貯蔵具があり、器種は多様である。周辺の片吹遺跡や宮脇遺跡と比べても土器の出土点数や器種は多い。前回の調査では硯片の出土をみたが今回はなく、墨書土器もみられない。遺物からみる限り官衙や特殊な集落といった様相はうかがえない。

第２節　中世の土器

１．時期決定の根拠

第３章で各遺構に記した時期の主な根拠となった土器型式を明示する。ただし、時期細別の指標のひとつである須恵器椀については、東播磨・西播磨・備前産のものが出土しているものの、その全てを識別することができなかった。このため、以下では東播磨で示された椀の形態変化は西播磨・備前においてもほぼ適用できる、との仮定にたって検討を進めてみる。

12世紀中葉から後半：東播系須恵器編年（森田　1995）における「第Ⅱ期第１段階」。

12世紀末から13世紀初頭：東播系須恵器編年（森田　1995）の「第Ⅱ期第２段階」・備前焼編年（平井　1984）の「Ⅰ期」・和泉型瓦器椀編年（尾上・森島・近江　1995）の「Ⅲ-１期」。

12世紀中葉から13世紀初頭：東播系須恵器の編年（森田　1995）の「第Ⅱ期」。上記の２時期の細別が困難な資料。

15世紀前葉：備前焼擂鉢編年（乗岡　2000）の「中世４ａ期」。

15世紀末：備前焼擂鉢編年（乗岡　2000）の「中世５ｂ期」。

このように、各地からもたらされた遺物の検討によって遺構に暦年代を与えることが可能であるが、それとは別に、当地における一貫した土器編年の確立が急がれるものである。残念ながら、当遺跡においては編年の材料となる各時期の良好な一括資料は多いとはいえないため、12世紀末から13世紀初頭の一括資料であるSD01出土遺物をとりあげ、いくつかの点を以下に指摘するにとどめたい。

２．土師器皿の変遷について

先述したように、SD01は「第Ⅱ期第２段階」の東播系須恵器（森田　1995)、「Ⅰ・Ⅱ期」の備前焼椀（平井　1984)、「Ⅲ-１期」の和泉型瓦器椀（尾上・森島・近江　1995）等の存在から、12世紀末から13世紀初頭の一括資料といえる。

これに先行する「第Ⅱ期第１段階」の東播系須恵器を出土する遺構のうち、遺物量の比較的多いSE01を材料とし、土師器の変遷についての見通しを得るべく両者の比較を行った。差異の際立つのは土師器皿の底部調整である。SD01の小皿には手づくねと回転糸切りの両者があり、後者が多い。これに対して、SE01は回転ヘラ切りを主流とする。この差が出土した遺構の性格による可能性もあるため、試みに龍野市域の遺跡における土師器小皿と須恵器椀の共伴関係の確認を行った（第３表)。これによれば、ヘラ切り小皿は平高台をもつ椀に伴うこと、糸切り小皿はそれに重なりながらも古い型式を欠き、高台が消失した新しい須恵器椀にも共伴する。この両者が時間的な重複をもちながら推移するのに対し、手づくね小皿はこの間一定量存在することが確認された。

３．瓦器について

調査中から、特にＡ地区における瓦器の出土量の多さは注意されるところであったが、以下では東部瀬戸内北岸地域の他遺跡との比較のなかで、当遺跡の瓦器保有量を検討する。

大阪府の諸遺跡では瓦器の比率が高いのに対し、兵庫県では須恵器の割合が大きいことが既に指摘されており、東播磨、西播磨における須恵器生産地からの供給がその背景にあるとされている(橋本　1984a)。また、瀬戸内・北部九州で出土する畿内産瓦器は、楠葉型・和泉型の両タイプに限られること、瀬戸内海を利用した活発な交通、商業活動により、瓦器出土遺跡は海岸沿いに集中する傾向があること、小規模集落でも出土するため、瓦器に一定程度の商品価値があったものと考えられている。また、流通するのは、11世紀は楠葉型瓦器に限定されるのに対して、12世紀にはこれに和泉型が加わり、13世紀には和泉型が大半を占めるようになる、という全体的な傾向も指摘されている（橋本　1984b)。

当遺跡の瓦器椀は、判明するものについては、全て和泉型でありⅢ-１期に限られる。先行研究と矛

第３表　土師器小皿と須恵器椀の共伴関係

遺　跡	遺　構	文　献	土師器・小皿			須恵器・椀				
			ヘラ切り	糸切り	手づくね	平高台・見込窪む	平高台・見込平坦	わずかな平高台	高台なし・深い	高台なし・浅い
宮　脇	Ｄブロック SK１	平田ほか1995	■			■	■			
	ＣⅠブロック SD１		■			■		■		
	ＣⅠブロック SK22		■			■				
	ＢⅠブロック SD９		■				■			
宝林寺北Ⅱ	SE01	本　書	■		■			■		
宮　脇	ＢⅢブロック SK36	平田ほか1995		■			■	■		
	ＡⅢブロック SK23			■			■			
尾崎Ⅱ	660－土坑	岸本・古本　1995		■				■		
長尾谷	122－土坑	岸本　1999		■					■	
	234－土坑			■					■	
	140－土坑			■					■	
	214－土坑			■					■	
宝林寺北Ⅱ	SD01	本　書		■	■				■	
	SK02				■				■	
竹　原	582（618）－溝	岸本　1999			■	■	■		■	
宮　脇	ＣⅠブロック SK32	平田ほか　1995			■			■		
	ＣⅡブロック SK１				■	■		■		
	ＢⅢブロック SD40				■		■	■	■	
宝林寺北	中央地区屋外炉	渡辺ほか　1987			■		■	■		
	中央地区落ち込み１				■		■	■	■	
	中央地区落ち込み２				■			■		
	中央地区土壙１				■				■	
福田天神	SK02	市村ほか　1982			■			■		
	SD01				■			■	■	■

盾しない出土状況であるが、保有量についてはどうであろうか。

口縁部破片の数による当遺跡 SD01の組成は第３章で先述したとおりであり、須恵器38.4％、土師器48.8％、瓦器11.9％、輸入陶磁器0.9％である。これを器種別にみれば、椀は須恵器が76.3％、瓦器が22.1％、輸入陶磁器が1.6％で構成され、小皿は須恵器が0.4％、土師器が96.3％、瓦器が3.3％を占める。

摂津と播磨の境に近い明石川流域の諸遺跡のうち、下流域にある垂水・日向遺跡（神戸市）では瓦器は全体の22％を占める。ただし、中流域になると流通量は減少し、玉津田中遺跡・居住遺跡（ともに神戸市）では全体の３％に満たない（谷　1984、中川　1996）。さらに西方の加古川流域では、美乃利遺跡（加古川市）で瓦器がほとんど出土しないことが注意されている（山田　1997）。

さらに西に位置する揖保川流域に営まれた当遺跡A地区SD01における12%という瓦器の量を特異なものとするべきかどうかは、龍野市所在の近隣他遺跡との比較を待たなければならない。福田天神遺跡では瓦器の割合は0.6%である（鈴木・橋本　1984）。また、宮脇遺跡、宝林寺北遺跡（太子龍野バイパス部分）においても、報告書に掲載された個数を数える限り、瓦器の量は前者が0.5%、後者が2%程度にすぎない。以上のことから読み取れるのは、一定地域における均等な瓦器流通のあり方ではなく、宝林寺北遺跡、特にA地区の居館に住んだ階層の、瓦器へのきわめて強い志向である。

第3節　石製品

1．滑石製品について

今回の調査で、中世の滑石製品は9点出土した。すべてA地区から出土したもので、内訳は石鍋片が5点、温石3点（うち1点は石鍋からの転用品と判明）、いわゆるペン立て状石製品が1点である。伴出遺物から、多くは12世紀末から13世紀初頭にかけての時期のものといえる。石鍋の型式はⅢ-a-1類、Ⅲ-b類（木戸　1993）の両者がみられ、前者が13世紀前半、後者が13世紀後半に流通したものとされる（鈴木　1998）。

石鍋をはじめとする中世滑石製品は、主に長崎県西彼杵半島の製作地から、瀬戸内航路によって供給されたものと評価されている（下川　1992）。兵庫県においては、瀬戸内北岸を中心とした50遺跡から116点の出土が確認されており、中国山地山間部まで分布が及ぶものの、県北の但馬地方には流通しなかったようである。また、このなかにおいては均質的な分布状況ではなく、港湾遺跡、官人層の居宅、港湾近くの中核的な集落にあってより多くの滑石製品を保有する傾向があり、本遺跡の位置する龍野市域はきわめて多量の出土が知られている地域である（甲斐　2001）。

宝林寺北遺跡は「港湾近くの中核的な集落」といえ、それは多量保有を可能にする条件のひとつではあるが、その理由とはいえない。ちなみに前節にみた、瓦器の組成率0.6%である福田天神遺跡では12点の石鍋が、2%の宝林寺北遺跡では7点、今回の調査におけるA地区では12%の瓦器をもち、石鍋は9点の出土であるため、瓦器出土率との相関関係はない。おそらく輸入陶磁器との関係も同様の結果を示すと思われる。

一般に、物資の調達等の条件がほぼ同じと考えられる一定地域にあっては、保有する遺物の組成は大きく変わらないという意識を持つ傾向にあるが、以上のように仔細に比較すれば、差異を見出すことが可能である。多くの商品が広範囲に流通する時期にあっては、その差異の示すところは、特定商品への志向性といった有意なものである可能性がある。以上のような粗い分析では把握できないが、狭い地域における遺跡の性格の差を把握する際の一つの見通しとして注意しておきたい。

2．銘をもつ石硯について

SD07から15世紀前葉の遺物とともに出土した砥石（S8）は、破損した石硯の再利用品であり、硯としては「長方硯ⅠAc」型式に分類される（水野　1985）。この型式の石硯は、14世紀後半から15世紀後半にかけて製作されたものとされている。

硯の裏面に確認できる極めて細い線刻文字は、石硯として利用されていた当時のものであり、「治四年六月日」「常陸」などが判読できる。

前者は第３章で詳述したように貞治四年六月（1365年６月）と判断でき、硯の入手年月を意味するのだろう。「貞治」は北朝側の使用した元号であり、当時の播磨は赤松氏の勢力が強く、文書にも北朝年号が多用されているという。

後者は人名の一部と思われることから、所有者を記したものと考えるのが自然である。ここで注意したいのは、「常陸」の下へ続くのが「守」「介」などであり、あわせて官途を記したものである可能性が高い、ということである。「坊」が付された僧侶の名である可能性も否定できないが、寺を裏付ける他の資料がないため、ここでは考慮しないことにする。

官途を使用する階層の特定を行うために、県内に所蔵されている中世文書の集成を行った『兵庫県史史料編　中世３』（兵庫県史編集専門委員会　1988）から人名の検索を行った。14世紀の事例は２例と非常に少ない。観応３（1352）年の「宇野備前守」は播磨守護代の小寺頼季をさすとされ、翌文和２（1353）年にみえる「安積出羽権守盛氏」は、安積保に下司・公文両職をもつ土豪とされる。官途を有する階層は、一般に荘官級以上であると捉えるのが自然とされており、これを裏付ける結果となった。

居館区画溝から出土したこの石硯は、15世紀前葉の居館に、「浦上荘」の荘官が居住していた可能性も含めて、それとの濃密な関係を示すものと考えられる。

第４節　金属製品

鉄製品の出土量は総数63点である。時期としては中世が大半を占め、古墳時代後期が２点ある。出土は中世の遺構が濃密なＡ・Ｂ地区に多く、遺構の少ないＣ地区では出土点数も少ない。

１．中世の鉄製品

釘が大半を占め、36点出土した。その他は鍋片２点（同一個体と思われる）、鏃４点、スラグ３点、不明製品である。釘は実測したものも含め、全容がわかるものはない。すべて和釘であり、残存するものはすべて頭部を折り曲げ、断面形状は方形を呈する。Ｃ地区SB30P10出土のM24が断面の一辺が８㎜とやや大型の他は５㎜前後とほぼ同規模のものである。不明製品は工具か武器の刃部と思われるもの（M17～19）、頭部を環状に加工したもの（M16・20）を実測したが、未実測のものは大半が不定形で断面が板状を呈するものである。鍋は平底で、口縁部に半円状の吊耳がつく形態である。鏃は形状のわかるものが２点（Ｍ９・21）あり、いずれも雁又鏃である。型式不明の２点は破片であり、（Ｍ８）は鏃身関部付近、（M25）は頸部から茎が残存する。

２．古墳時代後期の鉄製品

土壙墓SX03に副葬された刀（M26・27）がある。全長はM26が44.3㎝、M27が28.2㎝と小型である。M26は刃部に縦方向の木質が部分的に残存し、鞘に入った状態で副葬された可能性がある。また関部付近に鉄製の柄縁の一部が残存する。柄の端部付近には目釘孔が１箇所あり、釘が残存していた。

第５章　遺跡の検討

第１節　中世以前の遺跡

本調査区内の当該時期の遺構は中世の遺構の分布範囲と重複せず、Ｃ地区南半部に分布する。主な時期は古墳時代後期と奈良・平安時代である。宝林寺北遺跡の所在する揖保川と林田川にはさまれた平野部は、遺跡数こそ多くないが、1980年代以降、片吹遺跡・宝林寺北遺跡・宮脇遺跡と道路建設に伴う大規模な発掘調査が行われ、地下の状況が次第に明らかとなっている。これらの調査成果は中世が主体であったが、それ以前の時代の様相も断片的ながら明らかとなっている。

１．古墳時代以前

周辺の遺跡では縄文時代と弥生末から古墳時代初頭の遺構・遺物が確認され、前回の調査でもこれらの時期の遺物が少量ながら確認されていた。しかし今回の調査では全く確認できなかった。

弥生時代は他所から流入したと思われる数片の土器が出土しただけである。土器の時期は中期末から後期初頭と考えられ、龍野市周辺では集落数がピークとなる時期である。宝林寺北遺跡周辺では、実態の明らかでない中臣山、桜ヶ坪遺跡が中期の遺跡として知られるのみである。当遺跡は立地が桜ヶ坪遺跡と同じ揖保川旧流路沿いの微高地にあたることから、周囲に集落の存在を指摘するに留めたい。

２．古墳時代以降

本調査区で明らかに遺構・遺物が確認できるのは古墳時代後期に入ってからであり、以後集落が営まれる。なお、SK50出土の遺物は５世紀代にさかのぼる可能性もあり、古墳時代の空白時期を埋める資料になるだろう。

古墳時代後期の遺構はＣ地区東半部で土坑墓と推定されるSX03・04を検出したのみであるが、集落の墓域を検出したと思われる。ただし調査区内は遺構面の削平が著しく、中世の遺構ですら遺存状況は良好でないため、本調査区内で検出できた遺構以外に、竪穴住居などの遺構が存在した可能性は否定できない。前回調査の成果と合わせると、本調査区の東側、そして国道２号線の北側に古墳時代後期（または中期から存続する）を主体とする集落の存在が想定されるだろう。

Ｃ地区南半部で検出した掘立柱建物群のうち、SB34は、遺物の出土はないものの、柱穴の規模・形状から奈良時代の可能性が高い。残る掘立柱建物についても、柱穴の規模が明らかに中世のものより大きく中世以前のものと考えられる。龍野市周辺では調査例から５世紀後半に掘立柱建物が導入され、以後竪穴住居と併存しつつ、７世紀代に竪穴住居に代わって主流となる傾向にある（岸本　1997）。今回検出した掘立柱建物群は、所属時期が明らかでないが、集落で掘立柱建物が優位となる６世紀末から７世紀に属するものと考えられる。また、掘立柱建物の主軸は現存する条里制地割の方向とほぼ合致することから、現在の地割の原型が奈良時代をさかのぼる可能性がある。ただしSD20～22のように地割に合致しない遺構も存在するため、今後周囲の調査例の増加を待ちたい。

奈良時代の遺構は主にＣ地区南半部にあり、この調査区に隣接する前回調査の西地区でも少量なが

ら同時期の遺構・遺物を検出し、さらに同時期の遺構が南へ続くことが指摘されている。古墳時代後期以降の集落はＣ地区周辺で展開するが、掘立柱建物などの遺構は重複がみられないことから、小規模な集落が断続的に継続していると思われる。

第２節　中世の遺跡

１．文献にみえる浦上荘の概要

第１章第２節の内容と一部で重複するが、当地に存在した浦上荘の位置と調査区の関係について、あらためて確認しておく。

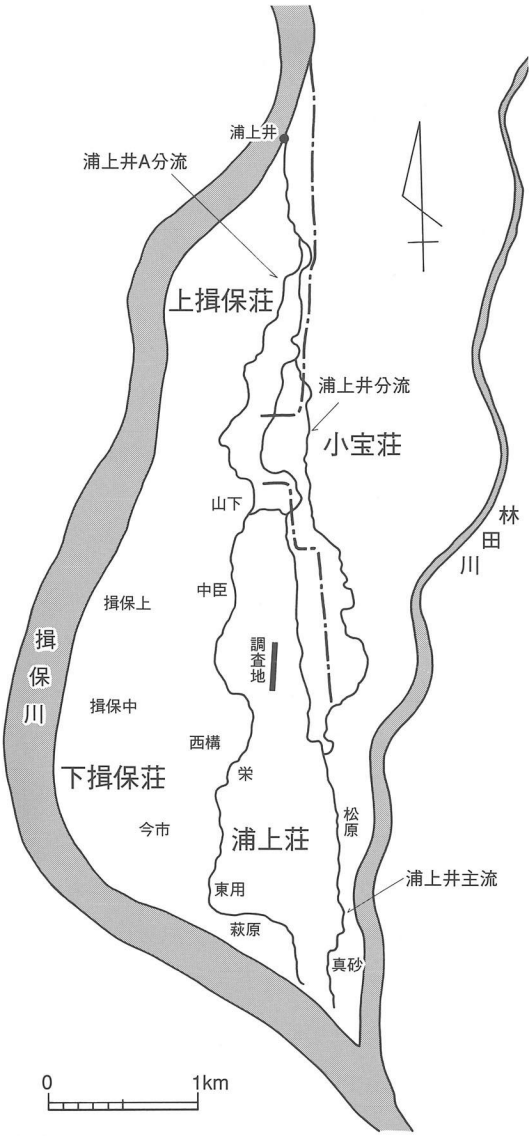
浦上荘に関する中世の絵図は知られていないが、隣接する小宅荘の絵図『大徳寺領小宅庄三職方条坊坪付図』によって、浦上荘は、荘域北部の東で小宅荘に接していることが明らかである。さらに、個々の荘園について近世の村名との比定作業を行った『荘園志料』によれば、浦上荘は龍野市揖保町山下・中臣・東用・萩原・真砂・門前・栄・西構・上河原・市場の10ケ村を含むとされているため（清水　1933)、荘域の南部については東が林田川に接し、西には揖保川との間に、揖保上・揖保中・今市の集落があることから、揖保川旧流路をはさんで下揖保荘に接していたことが分かる。

これらから、今回の調査地が中世浦上荘に含まれ、そのほぼ中央に該当することが明らかである。また、中世史料には「播磨国浦上庄内栄、山下部、熊代等村」と３ケ村の名がみえる（『大徳寺文書』）が、調査地南端のＣ地区付近は大字門前字熊代であり、熊代村の遺称地と考えられる。

浦上荘の文献上の初見は養和元（1181）年であり、当初は新熊野社領であった。

鎌倉時代にはいると、源頼朝の腹心である梶原景時が、播磨国初代の守護だけでなく、近隣の福井荘、高岡荘等とともにここ浦上荘の地頭に任命されたが、文治５（1189）年に罷免されるまでの間、熊野社に対する年貢や社役を納めないなどという数々の非法を行っていたことも知られている。

史料の乏しい期間を経て、貞和４（1348）年



第11図　浦上荘の位置と調査地

以降に『峰相記』が著される。それによれば、13世紀末以降、治安の乱れに乗じて出現した様々な階層からなる反体制的集団（「悪党」）が横行するさまがうかがえる。やがて幕府は倒壊し、南北朝の対立が始まるが、当地ではこれら悪党たちが赤松武士団に組織化されていったものと考えられている。

この動乱期に、京都大徳寺の開山である宗峰妙超（父は浦上一国、母は赤松円心の姉）が、父祖の地として当荘の領有を望んだため、浦上荘は元弘３（1333）年、大徳寺に寄進された。その後、宗峰妙超の死後（1337年）、浦上氏が次第にこれを私領化したといわれている（石田　1983）。

２．ふたつの方形区画をめぐって

Ａ・Ｂ地区で検出されたこの種の方形区画は、一般に12世紀末頃に出現するもので、Ａ型居館（広瀬　1988）、方形居館２型（宇野　2001）等とよばれ、多くは荘所や国衙において活躍する在地有力層の経営拠点であったり、寺社関係の施設と解釈される遺構である。

今回の調査区は南北に細長く、東西方向の遺構の広がりについては不明である。Ｃ地区において、区画施設をもたない掘立柱建物群が確認されたように、今回検出されたＡ・Ｂ地区の方形区画は、その周辺に広がる多くの掘立柱建物群、あるいは方形区画からなる村落の一部を構成していた可能性が高い。検出されたふたつの方形区画の間には、規模・継続性・遺構量等の点で差異が認められる。一辺42mを測るＡ地区の方形区画は短期間で終息し、間もなくその跡地に用水路が敷設される。これよりわずかに早く営まれるＢ地区の方形区画は、一辺60mの規模と推測され、断続的に中世末まで継続する。

Ａ地区の小字名が「連宇寺」であることから、この方形区画は、地域の灌漑計画のなかで移転を余儀なくされた寺院跡とみることもできよう。しかしながら、そこに屋敷墓が営まれていることや、仏具・瓦等の出土がないことなど、寺院であることを示す積極的な根拠がないため、周辺での調査が進むまで、断定は差し控えておきたい。

Ｂ地区については、第４章第３節で、14世紀後半段階における浦上荘荘官との深い関わりを想定したように、村落の中心的な位置を占めていた可能性が高い。

３．浦上荘の水利システム

小林基伸によれば、揖保川下流域平野の各荘園は、揖保川を用水源とするそれぞれひとつないしふたつの専用の基幹用水路をもち、荘域はその灌漑域を包摂するように成立している、という。浦上荘の用水路は、主流とＡ・Ｂふたつの分流からなり、そのうち主流が村々の主要部分を潤していたことが復元された（第12図）。また、『大徳寺領小宅庄三職方条坊坪付図』に浦上井主流が描かれていることから、これらは少なくとも14世紀まで遡る水利システムだったことが明らかにされている（小林　1993）。

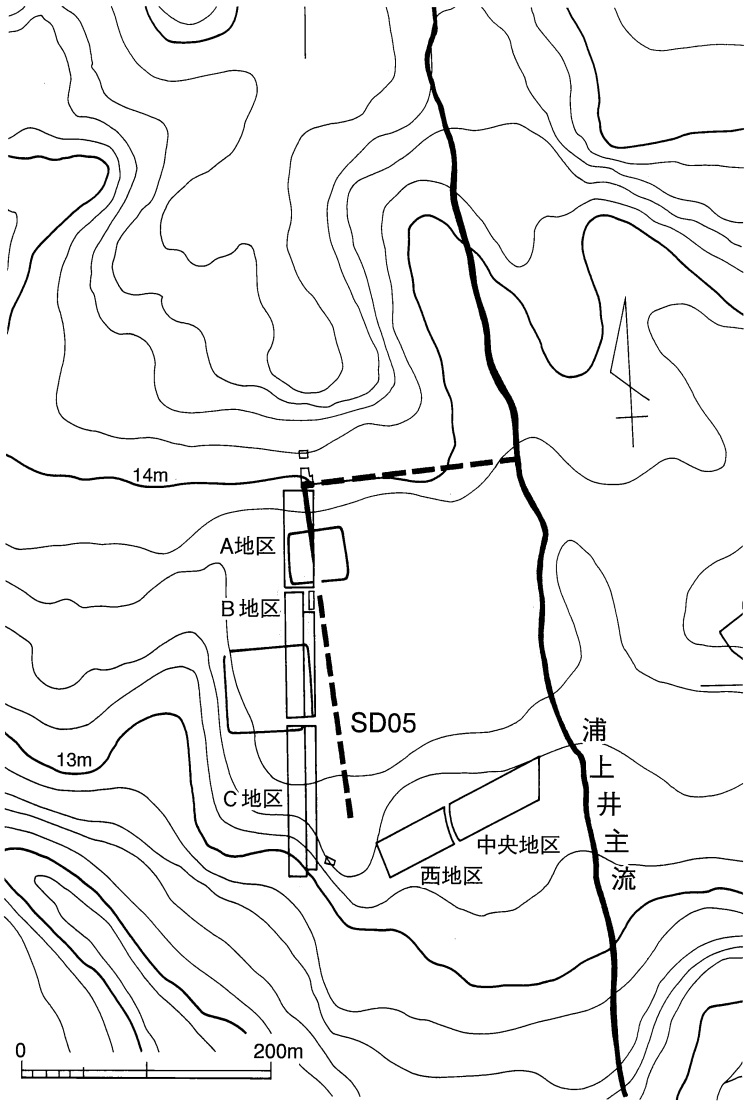
さて、第12図に、微地形を反映する等高線図に、浦上井主流とＡ・Ｆ地区で検出されたSD05等を示した。SD05は第３章に記述したとおり、水路と考えられる遺構である。図の中央に広い平坦地があり、これより西から南にかけては完新世段丘崖をはさんで氾濫源となっている。東には段丘上の埋没旧河道が存在している。

今回の調査区は、段丘崖にほど近い平坦地の西端に位置することとなる。浦上井主流は平坦地の東端を南流し、SD05はこれに平行する形で平坦地の西半を南流する。SD05の北端部は東方へ屈曲すること

から、SD05は浦上井主流から分岐し、段丘上の平坦地西半の耕地を潤す役目をもっていた可能性が高いと考えられる。この平坦部の土地利用の実態を示すデータは乏しいものの、浦上荘のなかでも最も広大な平坦地であることから、ここに安定した耕地が展開しており、その西縁にあたるA・B地区に荘園管理の中心的な施設が設けられていた可能性を考えたい。これに対してC地区や、平坦地の南縁にあたる、昭和58年度の中央地区・西地区は区画溝を伴わない居住地あるいは墓域として利用されたようである。

現代に続くこの水利システムは、完新世段丘崖の形成という地形環境の変化を契機に再編されたものとされる（高橋　1985・1987）。段丘崖の形成は12世紀末～13世紀初頭頃までに起きたとされているから、その後に営まれたA地区の方形区画を支えた生産基盤は、これまでのものに替わる新しい水利システムを基礎として成り立っていたことは疑いない。また、平坦地西半を灌漑するためのSD05は、このA地区の方形区画を切って営まれているため、再編直後の初期水利にはSD05が組み込まれていなかったことは明らかである。

以上のように、SD05の掘削時期の検討から、新しい水利システムの導入後も、段階的な耕地化が進んだこと、あるいは灌漑の効率化を目指してシステムの整備が繰り返されたことが分かり、さらに、それにあたっては、前項でふれたようにA地区の方形区画の移転を伴うものだった可能性も考えられる。



第12図　浦上荘中心部における主要水路復元図

第6章　総　括

揖保川下流左岸の条里型地割りの残る沖積地に、南北に細長い調査区を設定した。
当地は、中世浦上荘のほぼ中央にあたり、それに関わる居住地等が検出された。それ以前の遺構もわずかに検出され、地形環境の変化に伴う遺構の分布状況の変遷を確かめることができた。

古墳時代から平安時代にかけては、調査区南端のC地区のみに小規模に遺構が営まれるが、完新世段丘崖が形成された12世紀末以降は、浦上荘荘官層の主導のもとに用水路が整備された。これにより、崖際の広い段丘上平坦地の水田開発あるいは再開発が行われる。A・B両地区に、条里型地割りに沿った計画的な方形区画を伴う遺構が営まれるが、15世紀まで連続するのは荘園の中心的な施設と思われるB地区のものである。

1　古墳時代（6・7世紀）

C地区の中央付近に集中して、住居と思われる掘立柱建物5棟、土坑墓2基等の遺構が検出され、墓域を伴う小集落の実態をうかがうことのできる資料となった。土坑墓のなかには、枕と思われる須恵器が置かれ、鉄剣・鉄刀の副葬が認められるものもあった。また、県下でも類例の極めて少ない、須恵器蓋杯を模倣した土師器杯が出土した。

2　奈良・平安時代（8・9世紀）

C地区のほぼ全域から溝、掘立柱建物1棟等の遺構が検出された。奈良・平安時代に属する掘立柱建物は2×5棟の規模をもち、柱穴は平面方形の堀方を有する。これは残存条里型地割りに沿うものであるが、これ以外に斜交する遺構もある。当地における条里型地割りの施工時期を特定する資料は得られなかった。

3　鎌倉時代（12・13世紀）

A地区南半、B地区南半、C地区北半において遺構が集中的に検出された。

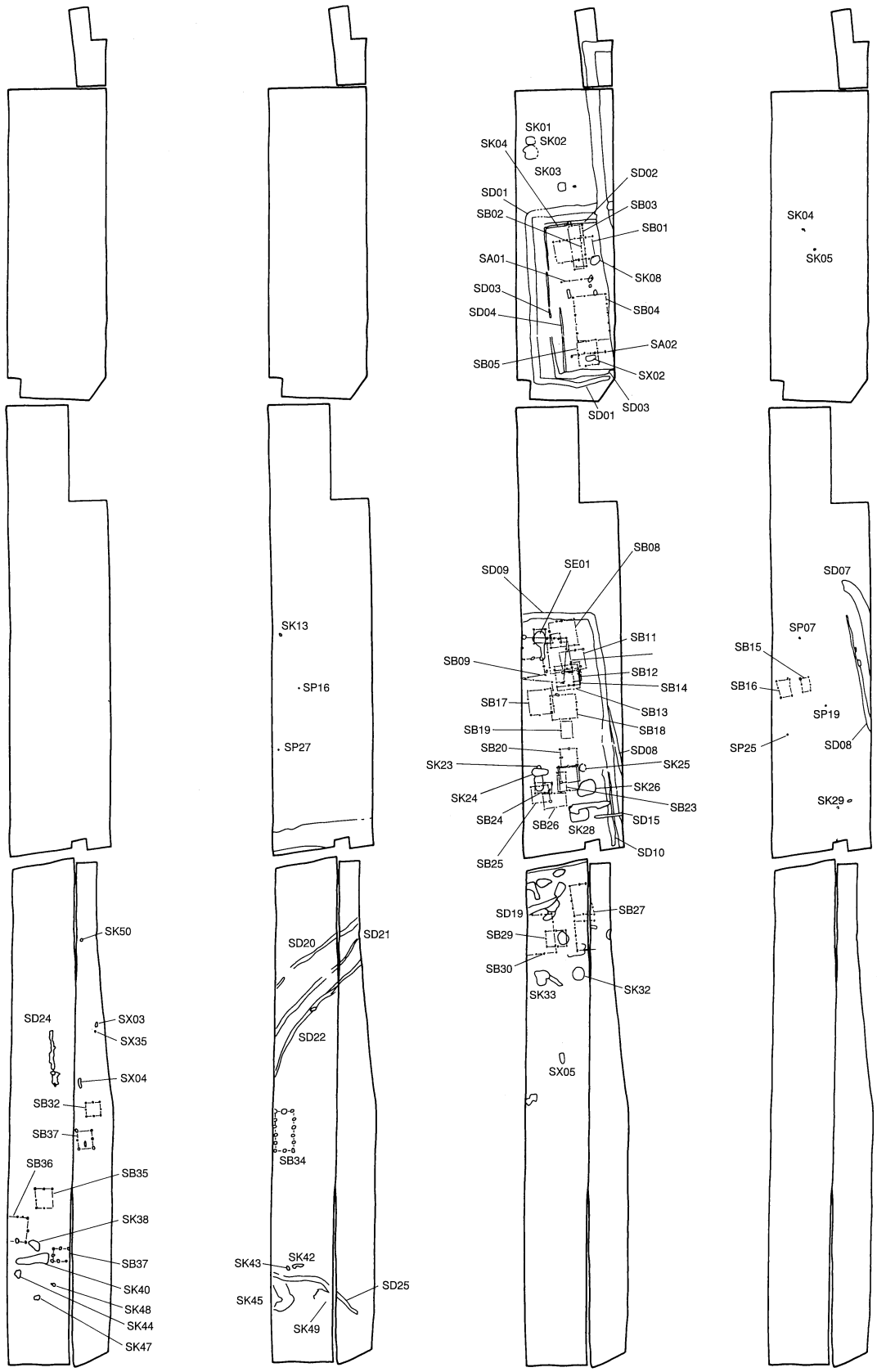
A地区南半では、12世紀末から13世紀初頭の短期間に営まれた、一辺42mの方形区画が検出され、その内部から掘立柱建物6棟、屋敷墓2基等の遺構が確認された。遺物は、土器のなかでは瓦器の占める割合が周辺の遺跡のなかでも比較的高く、また多くの滑石製品も出土した。寺院の可能性も考えられる。廃絶後に、浦上荘段丘上の西半を潤すための用水路が敷設される。

B地区南半で、12世紀前半に営まれる一辺約60mと推測される方形区画が検出された。区画の内部からは、掘立柱建物18棟等多くの遺構が検出された。遺構の量が多いこと、継続性の高さ等から浦上荘における中心的な施設の存在がここに想定できる。

C地区北半では、溝等に区画されない掘立柱建物5棟、礫敷墓等の遺構が検出された。

4　室町時代（14・15世紀）

A・C各調査区ではわずかに遺構が認められる程度だが、B地区では、鎌倉時代の方形区画を拡張する形で区画溝が設けられ、内部から掘立柱建物2棟等も検出されている。区画溝SD07からは15世紀前葉の一括資料とともに浦上荘荘官層の存在を思わせる石硯も出土した。



5～7世紀　8～10世紀　12・13世紀　14・15世紀

第13図　時期別遺構分布状況

参考文献

石田善人　1983「浦上荘」『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター

市村高規ほか　1982『福田天神遺跡』兵庫県龍野市教育委員会

井上喜久男　1988「美濃窯の研究（一）」『東洋陶磁』第15・16号　東洋陶磁学会

宇野隆夫　1994「考古学からみた日本生産流通史－2000余年の歴史を二分する転換点について－」『日本史研究』第380号　日本史研究会

宇野隆夫　2001『シリーズ日本史のなかの考古学　荘園の考古学』青木書店

尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』古代を考える会

尾上　実・森島康雄・近江俊秀　1995「瓦器椀」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』

甲斐昭光　2001「兵庫県出土の中世滑石製品」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

亀井明徳　1986『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版

岸本道昭　1997『南山古墳群　南山高野遺跡』龍野市教育委員会

岸本道昭・古本　寛　1995『尾崎遺跡Ⅱ』龍野市教育委員会

岸本道昭　1999『長尾・小畑遺跡群』龍野市教育委員会

岸本道昭　1999『竹原遺跡』龍野市教育委員会

木戸雅寿　1993「石鍋の生産と流通について」『中近世の基礎研究』Ⅸ　日本中世土器研究会

小林基伸　1993「平野部の水利と荘園　－揖保川下流域平野調査レポート－」『荘園絵図とその世界』国立歴史民俗博物館

清水正健　1933『荘園志料』帝都出版社

下川達彌　1992「西北九州の石鍋とその伝播」網野善彦ほか『海と列島文化　第４巻　東シナ海と西海文化』　小学館

鈴木重治・橋本久和　1984「龍野市福田天神遺跡 SD01出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究』No.4日本貿易陶磁研究会

鈴木康之　1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』広島県立歴史博物館

高橋　学　1985「丁・柳ケ瀬遺跡の地形環境」岡崎正雄・深井明比古ほか『丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会

高橋　学　1987「揖保川下流域平野の地形環境Ⅱ」渡辺　昇ほか『宝林寺北遺跡』兵庫県教育委員会

高橋　学　1994「古代末以降における地形環境の変貌と土地開発」『日本史研究』380　日本史研究会

谷　正俊　1984「居住遺跡における土器・陶磁器の組成について」『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会

谷岡武雄　1964『平野の開発』古今書院

中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

長勝寺遺跡発掘調査団　1978『長勝寺遺跡』かまくら春秋社

中川　渉　1996「中世の土器」『玉津田中遺跡　第６分冊（総括編）』　兵庫県教育委員会

乗岡　実　2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

橋口定志　1987「中世居館の再検討」『東京考古』５　東京考古学談話会

橋本久和　1984a「関西の鎌倉時代を中心とした貿易陶磁」『貿易陶磁研究』№４日本貿易陶磁研究会

橋本久和　1984b「瀬戸内・北部九州出土の畿内産瓦器」『古文化談叢』第14集　九州古文化研究会

長谷川　眞ほか　1990『雨流遺跡』兵庫県教育委員会

兵庫県史編集専門委員会　1988『兵庫県史　史料編　中世３』兵庫県

平井泰男　1984「中世の遺構・遺物について」『百間川原尾島遺跡Ⅱ』岡山県教育委員会

平田博幸ほか　1995『宮脇遺跡発掘調査報告』兵庫県教育委員会

広瀬和雄　1988「中世村落の形成と展開」『物質文化』50　物質文化研究会

間壁忠彦　1991『備前焼』考古学ライブラリー60　ニューサイエンス社

松井敬代ほか　1996『見蔵岡遺跡』　竹野町教育委員会

水野和雄　1985「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第70巻４号　日本考古学会

森田　稔　1995「中世須恵器」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』

山田清朝　1997「平安～鎌倉時代の土器」『美乃利遺跡』兵庫県教育委員会

横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について　－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

渡辺　昇ほか　1987『宝林寺北遺跡－太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会

付表１　遺構名対照表(1)

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
A地区	掘立柱建物	SB01	P1		P88.89
			P2		P170
			P3		P114
			P4		P111
			P5		P355
			P6		P39
			P7		P21
			P8		P55
			P9		P257
			P10		P70
			P11		P91
			P12		P108
			P13		P110
			P14		SK22
			P15		P255
			P16		P256
		SB02	P1		P2
			P2		P5
			P3		P172
			P4		P103
			P5		P101
			P6		P115
			P7		P135
			P8		P94
			P9		P67
			P10		P9
			P11		P352
		SB03	P1		SK05
			P2		P4
			P3		P75
			P4		P103
			P5		P116
			P6		P134
			P7		P120
			P8		P113
			P9		P96
			P10		P93
			P11		P68
			P12		P353
			P13		P8
		SB04	P1		P259
			P2		P151
			P3		P152
			P4		P153
			P5		—
			P6		P358
			P7		P204
			P8		P203
			P9		P150
			P10		P140
			P11		P141

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
A地区	掘立柱建物	SB04	P12		P142
			P13		P193
			P14		P136
			P15		P144
			P16		P145
			P17		P146
			P18		P147
			P19		P148
			P20		P149
			P21		P139
			P22		P138
			P23		P137
		SB05	P1		P207
			P2		P212
			P3		P214
			P4		P228
			P5		P234
			P6		P239
			P7		P238
			P8		P236
			P9		P206
			P10		P218
		SB06	P1		P213
			P2		P229
			P3		P232
			P4		P239
			P5		P225
			P6		P220
	柵	SA01	P1		P44
			P2		P131
			P3		P128
			P4		P247
		SA02	P1		P241
			P2		P237
			P3		P221
			P4		P216
			P5		P245
		SA03	P1		P246
			P2		P248
			P3		P249
	柱穴	SP01			P56
		SP02			P61
		SP03			P102
	土坑	SK01			SK19
		SK02			SK20
		SK03			SK01
		SK04			SK03
		SK05			SK07
		SK06			SK15
		SK07			P102
		SK08			SK23

付表１　遺構名対照表(2)

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
A地区	墓	SX01			SX01
		SX02			SK29
	溝	SD01			SD01
		SD02			SD02
		SD03			SD07
		SD04			SD06.08
		SD05			SD03
B地区	掘立柱建物	SB07	P1	P107	
			P2	P129	
			P3	P263	
			P4	P249	
			P5	P186	
			P6	P621	
			P7	P47	
			P8	SK09	
			P9	P703	
			P10	P91	
			P11	P94	
			P12	P157	
			P13	P141	
			P14	P195	
			P15	P181	
			P16	P195	
			P17	P258	
			P18	P132	
			P19	P144	
		SB08	P1	P64	
			P2	P67	
			P3	P72	
			P4	—	
			P5	P117	
			P6	P119	
			P7	P121	
			P8	—	
			P9	P158	
			P10	—	
			P11	P256	
			P12	P93	
			P13	P57	
			P14	P60	
			P15	P76	
			P16	P109	
			P17	P101	
			P18	P81	
			P19	P79	
		SB09	P1	—	
			P2	P153	
			P3	P194	
			P4	—	
			P5	P359	
			P6	P626	

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
B地区	掘立柱建物	SB09	P7	P610	
			P8	SK12	
			P9	P180	
		SB10	P1	P106	
			P2	—	
			P3	P137	
			P4	P266	
			P5	P198	
			P6	P253	
			P7	P131	
			P8	—	
			P9	P96	
			P10	P100	
			P11	P156	
			P12	P166	
			P13	P85	
			P14	—	
		SB11	P1	P122	
			P2	P423	
			P3	P229	
			P4	P243	
			P5	P209	
			P6	P165	
			P7	P160	
			P8	P128	
			P9	P125	
			P10	P135	
			P11	P139	
		SB12	P1	P134	
			P2	P227	
			P3	P230	
			P4	P239	
			P5	P242	
			P6	P219	
			P7	P138	
		SB13	P1	P136	
			P2	P235	
			P3	P268	
			P4	P275	
			P5	P336	
			P6	P200	
			P7	P332	
			P8	P213	
			P9	P261	
			P10	P241	
			P11	P240	
			P12	P248	
			P13	P210	
		SB14	P1	P228	
			P2	P234	
			P3	P262	

付表１　遺構名対照表(3)

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
B地区	掘立柱建物	SB14	P4	P272	
			P5	P285	
			P6	P287	
			P7	P202	
			P8	P215	
			P9	P218	
			P10	P244	
			P11	—	
		SB15	P1	P701	
			P2	P283	
			P3	P280	
			P4	P341	
			P5	P286	
			P6	P289	
		SB16	P1	—	
			P2	P304	
			P3	P299	
			P4	SK25	
			P5	—	
			P6	P313	
		SB17	P1	P339	
			P2	—	
			P3	P353	
			P4	P378	
			P5	P371	
			P6	P368	
			P7	P327	
			P8	P520	
			P9	P323	
			P10	P294	
			P11	P348	
			P12	P325	
			P13	SK24	
			P14	P337	
		SB18	P1	P620	
			P2	P711	
			P3	P615	
			P4	P402	
			P5	P315	
			P6	—	
			P7	P386	
			P8	P354	
			P9	P355	
			P10	P344	
			P11	SK52	
			P12	P297	
			P13	P279	
			P14	P382	
			P15	P705	
			P16	P350	
		SB19	P1	P398	

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
B地区	掘立柱建物	SB19	P2	P638	
			P3	P442	
			P4	P440	
			P5	—	
		SB20	P1	P660	
			P2	P489	
			P3	P492	
			P4	P497	
			P5	P508	
			P6	SK39	
			P7	P475	
			P8	P438	
			P9	P657	
		SB21	P1	P491	
			P2	P646	
			P3	SK62	
			P4	P504	
			P5	P511	
			P6	P498	
			P7	P500	
		SB22	P1	P493	
			P2	P568	
			P3	P565	
			P4	P505	
			P5	P510	
			P6	P499	
			P7	P501	
			P8	P645	
		SB23	P1	P502	
			P2	P644	
			P3	P567	
			P4	P564	
			P5	P506	
		SB24	P1	P536	
			P2	—	
			P3	P555	
			P4	P549	
			P5	P530	
			P6	P532	
		SB25	P1	P535	
			P2	SK71	
			P3	SK73	
			P4	SK84	
			P5	—	
			P6	P539	
			P7	P545	
			P8	P552	
		SB26	P1	P566	
			P2	P592	
			P3	P586	
			P4	P600	

付表１　遺構名対照表(4)

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
B地区		SB26	P5	P553	
			P6	P562	
	柱穴	SP04		P19	
		SP05		P49	
		SP06		P82	
		SP07		P89	
		SP08		P221	
		SP09		P236	
		SP10		P717	
		SP11		P192	
		SP12		P193	
		SP13		P331	
		SP14		P190	
		SP15		P685	
		SP16		P290	
		SP17		P667	
		SP18		P354	
		SP19		P616	
		SP20		P417	
		SP21		P433	
		SP22		P428	
		SP23			P408
		SP24		P663	
		SP25		P461	
		SP26		P516	
		SP27		P518	
		SP28		P521	
		SP29		P484	
		SP30		P653	
		SP31		P550	
		SP32		P587	
	井戸	SE01		SK01	
		SK09			SK30
	土坑	SK10			SK50
		SK11		SK02	
		SK12		SK99	
		SK13		SK07	
		SK14		SK10	
		SK15		SK17	
		SK16		SK18	
		SK17		SK55	
		SK18		SK26	
		SK19		SK37	
		SK20		SK38	
		SK21		SK41	
		SK22		SK40	
		SK23		SK50−2	
		SK24		SK50	
		SK25		SK46	
		SK26		SK63.SK64	SK42

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
B地区	土坑	SK27			SD13
		SK28		SK79	SK41
		SK29			SK38
		SK30			SK40
	溝	SD06			SD10
		SD07			SD17
		SD08			SD19
		SD09		SD13	SD11.SD15
		SD10			SD14
		SD11		SD01	
		SD12		SD10	
		SD13		SD09	
		SD14			SD18
		SD15			SD12
		SD16		SD14	SD19
C地区	掘立柱建物	SB27	P1	P899	
			P2		P301
			P3		P502
			P4	P946	
			P5	P847	
			P6	P915	
			P7	P914	
			P8	P925	
			P9	P907	
			P10	P901	
			P11	P903	
			P12	P911	
			P13	P913	
		SB28	P1		P504
			P2	−	
			P3	P932	
			P4	P852	
			P5	P857	
			P6	P929	
			P7	P848	
			P8	P849	
			P9	P934	
			P10	P935	
			P11	−	
		SB29	P1	P927	
			P2	P853	
			P3	−	
			P4	P833	
			P5	P931	
			P6	P820	
			P7	P828	
		SB30	P1	−	
			P2	P822	
			P3	P827	
			P4	P831	

付表１　遺構名対照表(5)

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
C地区	掘立柱建物	SB30	P5	P854	
			P6	—	
			P7	P816	
			P8	P815	
			P9	P812	
			P10	P810	
			P11	P809	
			P12	P804	
			P13	P806	
			P14	P818	
			P15	—	
			P16	—	
			P17	P834	
		SB31	P1	P872	
			P2	P873	
			P3	P871	
		SB32	P1		P817
			P2		P519
			P3		P525
			P4		P524
			P5		P523
			P6		P521
			P7		P525
			P8		P516
		SB33	P1		P527
			P2		SK77
			P3		SK78
			P4		P529
			P5		P528
			P6		SK75
		SB34	P1	P877	
			P2	P880	
			P3	P882	
			P4	P884	
			P5	P886	
			P6	P889	
			P7	P888	
			P8	P887	
			P9	P885	
			P10	P883	
			P11	P881	
			P12	P878	
			P13	P875	
			P14	P876	
		SB35	P1	—	
			P2	—	
			P3	—	
			P4	—	
			P5	—	
			P6	—	
			P7	—	

地区	種別	遺構名		92年調査	93年調査
C地区	掘立柱建物	SB36	P1	P892	
			P2	P896	
			P3	P897	
			P4	SK113	
			P5	P894	
			P6	P890	
		SB37	P1	—	
			P2	—	
			P3	—	
			P4	—	
			P5	—	
			P6	—	
			P7	—	
	柱穴	SP33		P898	
		SP34			SK62
		SP35		P807	
		SP36		P830	
	土坑	SK31		SK128. SK135	SK66
		SK32		SK106	
		SK33		SK105	
		SK34		SK104	
		SK35			SK65
		SK36			SK73
		SK37			SK76
		SK38		SK115	
		SK39		SK125	
		SK40		SK116	
		SK41		SK120	
		SK42		SK117	
		SK43		SK118	
		SK44		SK119	
		SK45		SK123	
		SK46		SK121	
		SK47		SK127	
		SK48		SK126	
		SK50			SK60
	墓	SK49		SK122	
		SX03			SK66. SX03
		SX04			SX02
	溝	SX05		SX01	
		SD17		SD15	
		SD18			SD30
		SD19		SD24	
		SD20		SD16. SD20	SD31
		SD21		SD22	SD32
		SD22		SD26	SD34
		SD23			SD35
		SD24		SD17	
		SD25		SD18. SD19	SD36

付表２　掘立柱建物一覧

地区名	遺構名	時　　期	東辺 (m)	西辺 (m)	平均 (m)	北辺 (m)	南辺 (m)	平均 (m)	面積 (㎡)	方位 (E-x-N)	桁行	梁行
A 地区	SB01	12C 末～13C 初頭	5.2	5.1	5.15	9.1	9.3	9.20	47.4	101°18′	5	3
	SB02	12C 末～13C 初頭	10.3	10.2	10.25	2.6	2.4	2.50	25.6	95°42′	5	1
	SB03	12C 末～13C 初頭	10.2	10.0	10.10	2.5	2.5	2.50	25.3	95°42′	5	1
	SB04	12C 末～13C 初頭	11.0	10.8	10.90	7.8	7.9	7.85	85.6	92°51′	5	3
	SB05	12C 末～13C 初頭	5.6	5.5	5.55	4.7	4.7	4.70	26.1	95°42′	3	2
B 地区	SB06	12C 末～13C 初頭	2.9	3.0	2.95	3.1	3.0	3.05	9.0	91°08′	2	1
	SB07	12C 中葉～12C 後半	10.5	10.4	10.45	10.2	9.7	9.95	104.0	85°25′	4以上	4
	SB08	12C 中葉～12C 後半	6.1	6.0	6.05	6.4	6.6	6.50	39.3	95°42′	3	3
	SB09	12C 中葉～13C 初頭	4.2	4.5	4.35	4.2	4.1	4.15	18.1	94°34′	2以上	2
	SB10	不明	6.9	7.1	7.00	4.9	5.1	5.00	35.0	95°08′	3	2
	SB11	12C 中葉～13C 初頭	4.7	4.7	4.70	5.7	5.6	5.65	26.6	94°34′	3	2
	SB12	12C 中葉～13C 初頭	4.6	4.5	4.55	2.2	2.0	2.10	9.6	92°51′	1	1
	SB13	12C 末～13C 初頭	5.8	6.0	5.90	5.4	5.5	5.45	32.2	95°08′	3	3
	SB14	12C 中葉～13C 初頭	3.9	3.9	3.90	6.2	6.1	6.15	24.0	95°42′	4	2
	SB15	15C	3.3	3.3	3.30	1.9	2.0	1.95	6.4	96°50′	2	1
	SB16	15C	4.0	4.2	4.10	3.0	2.9	2.95	12.1	97°24′	2以上	1
	SB17	12C 中葉～13C 初頭	6.0	5.8	5.90	5.5	5.7	5.60	33.0	95°08′	3以上	3
	SB18	不明	5.7	6.0	5.85	6.0	6.0	6.00	35.1	92°51′	3	3
	SB19	不明	3.8	4.2	4.00	2.5	2.7	2.60	10.4	92°51′	2	1
	SB20	12C 中葉～12C 後半	4.0	4.2	4.10	3.9	4.0	3.95	16.2	90°34′	2	2
	SB21	不明	4.0	3.8	3.90	4.6	4.4	4.50	17.6	90°34′	2	2
	SB22	12C 中葉～13C 初頭	6.0	5.9	5.95	4.4	4.5	4.45	26.5	94°34′	3	2
	SB23	不明	4.4	4.5	4.45	2.0	2.0	2.00	8.9	90°34′	2	1
	SB24	不明	2.1	2.3	2.20	4.0	3.9	3.95	8.7	90°00′	1	1
	SB25	12C 中葉～13C 初頭	4.0	3.9	3.95	4.0	4.1	4.05	16.0	94°00′	2以上	2
	SB26	不明	3.2	3.6	3.40	5.5	5.4	5.45	18.5	90°34′	2	1
C 地区	SB27	12C 中葉～13C 初頭	7.6	7.4	7.50	4.1	4.2	4.15	31.1	97°24′	4	2
	SB28	12C 中葉～13C 初頭	7.0	7.0	7.00	4.8	4.6	4.70	32.9	92°17′	4	2
	SB29	12C 末～13C 初頭	3.9	3.7	3.80	4.6	4.6	4.60	17.5	92°51′	2	2
	SB30	12C 中葉～13C 初頭	9.3	9.5	9.40	4.7	4.8	4.75	44.7	96°16′	5	2以上
	SB31	12C 中葉～13C 初頭	－	－	－	－	－	－	－	57°15′	1以上	1以上
	SB32	古墳時代後期？	3.3	3.2	3.25	3.3	3.4	3.35	10.9	95°42′	2	2
	SB33	古墳時代後期？	4.2	4.3	4.25	3.4	3.3	3.35	14.2	95°42′	2	1
	SB34	８C～10C?	9.7	9.5	9.60	4.1	4.2	4.15	39.8	90°00′	4	2
	SB35	古墳時代後期？	4.5	4.6	4.55	4.2	4.0	4.10	18.7	90°05′	2	2
	SB36	古墳時代後期？	5.8	5.8	5.80	2.3	2.1	2.20	12.8	88°30′	1以上	2
	SB37	古墳時代後期？	3.0	3.0	3.00	3.4	3.2	3.30	9.9	86°33′	2	2

付表３　出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	残存状況	口径	器高	最大径	底径	色　調	調整および特徴
SB01									
1	陶器	甕	体部小片	－	－	－	－	灰白	外面に綾杉状押印文、内面横ナデ
2	青磁	椀	底部1/2	－	－	－	5.1	灰オリーブ	
3	青白磁	合子蓋	口縁部・体部1/4	5.9	2.1	＊	4.8	明緑灰	
SB05									
4	青白磁	合子	底部1/4	－	－	－	4.3	灰白	
5	土師器	小皿	口縁部・体部3/4、底部完存	8.8	1.8	＊	4.6	にぶい黄橙	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
6	須恵器	椀	完形	15.4	4.9	＊	5.9	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
7	瓦器	小皿	完形	9.1	2.3	＊	4.5	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
8	土製品	土錘	完形	－	－	－	－	にぶい黄橙	長さ71㎜、直径19㎜。直径5㎜の孔、重量24.5g
SK02									
9	土師器	小皿	完形	9.3	1.6	＊	5.5	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
10	土師器	椀	底部完存	－	－	＊	7.3	灰白	内外面横ナデ
11	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	35.6	－	＊	－	褐灰	口縁部横ナデ、体部内面ハケ、体部外面摩滅のため観察不能
12	土師器	甕	口縁部・体部1/8	33.9	－	＊	－	にぶい赤褐	口縁部外面横ナデ、口縁部内面ハケ、体部内外面ハケ
13	須恵器	小皿	完形	8.4	1.8	＊	3.0	淡黄	内外面横ナデ、底部ヘラ切り
14	須恵器	鉢	口縁部小片	－	－	＊	－	灰白	内外面横ナデ
15	須恵器	椀	口縁部1/6、体部1/4、底部1/2	15.2	4.7	＊	6.9	灰	内外面横ナデ、底部糸切り
16	瓦器	小皿	口縁部・体部3/4	8.4	2.0	＊	3.0	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
17	白磁	椀	口縁部・体部1/8	16.0	－	＊	－	灰白	
S1	石製品	温石？	残存長6.6㎝、残存幅3.7㎝、厚さ1.2㎝					灰	欠損部以外は細かい加工痕残る
SK03									
18	土師器	小皿	1/2	8.5	1.4	＊	4.5	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
19	土師器	小皿	完形	8.7	1.5	＊	5.9	にぶい黄橙	口縁部横ナデ、底部糸切り、内面摩滅のため観察不能
20	土師器	小皿	口縁部・体部5/8、底部完存	8.5	1.8	＊	5.9	にぶい黄橙	内外面横ナデ、底部糸切り
21	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	32.1	－	＊	－	浅黄橙	口縁部外面横ナデ、口縁部内面ハケ、体部内外面ハケ
22	須恵器	小皿	完形	8.2	2.2	＊	4.9	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
23	須恵器	椀	1/4	16.4	3.5	＊	5.6	灰	内外面横ナデ、底部糸切り
24	須恵器	鉢	口縁部小片	30.9	－	＊	－	灰	内外面横ナデ
25	瓦器	小皿	1/2	9.2	2.1	＊	7.4	灰	口縁部横ナデ、内外面摩滅のため観察不能
26	瓦器	椀	体部1/4、底部完存	－	－	＊	4.8	灰	外面指押さえ、内面摩滅のため観察不能
27	白磁	椀	底部完存	－	－	＊	5.6	灰白	
28	白磁	椀	口縁部・体部1/6、底部1/4	15.4	－	＊	7.2	灰白	
SK04									
29	青磁	香炉？	底部1/8	－	－	＊	13.0	褐灰	
SK05									
30	青磁	椀	口縁部1/4	12.0	－	＊	－	明オリーブ灰	
SK08									
31	瓦器	羽釜	口縁部僅か	28.3	－	－	－	暗灰	内外面摩滅のため観察不能
SX01									
32	土師器	小皿	口縁部・体部3/4	8.3	1.4	＊	5.4	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
33	土師器	小皿	口縁部・体部3/4	8.3	1.3	＊	7.1	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
34	土師器	大皿	底部1/4	14.2	2.4	＊	11.9	灰白	内外面摩滅のため観察不能
35	土師器	大皿	底部3/4・他はほぼ完形	14.0	2.5	＊	10.8	淡黄	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
SX02									
36	土師器	甕	口縁部1/8	23.4	－	＊	－	にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部内外面摩滅のため観察不能
SD01									
37	土師器	小皿	完形	8.1	1.5	＊	7.0	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
38	土師器	小皿	完形	8.0	1.5	＊	7.7	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
39	土師器	小皿	口縁部3/4	7.7	1.1	＊	5.8	浅黄橙	内外面横ナデ、底部糸切り
40	土師器	杯？	底部1/2	－	－	＊	6.5	にぶい黄橙	内外面摩滅のため観察不能
41	土師器	大皿	1/4	14.2	3.1	＊	8.8	浅黄橙	口縁部横ナデ、体部外面指押さえ、内面摩滅のため観察不能
42	土師器	杯	口縁部・体部1/6、底部1/4	14.4	3.4	＊	7.3	浅黄橙	内外面横ナデ、底部糸切り
43	土師器	杯	口縁部・体部1/6、底部1/4	13.6	3.2	＊	7.4	浅黄橙	内外面摩滅のため観察不能
44	土師器	托	底部完形	－	－	＊	7.2	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、直径13㎜の孔
45	土師器	托	底部完形	－	－	＊	6.7	褐灰	内外面横ナデ、底部糸切り
46	土師器	壺？	底部1/4	－	－	＊	8.6	浅黄橙	内外面横ナデ、底部外面ナデ
47	土師器	甕	口縁部1/10	－	－	＊	－	にぶい褐	口縁部横ナデ、体部内外面摩滅のため観察不能
48	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	28.4	－	＊	－	明褐灰	口縁部外面横ナデ、口縁部内面ハケ、体部内外面ハケ
49	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	32.7	－	＊	－	にぶい褐	口縁部横ナデ、体部内外面ハケ
50	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	36.8	－	＊	－	褐灰	口縁部外面横ナデ、口縁部内面ハケ、体部内外面ハケ
51	土師器	鍋	口縁部1/2、体部1/4	37.2	－	＊	－	にぶい橙	口縁部外面横ナデ、口縁部内面ハケ、体部内外面ハケ
52	土師器	鍋	脚部完形	－	－	＊	－	にぶい黄橙	
53	土製品	土錘	完形	－	－	－	－	明褐灰	長さ43㎜、直径11㎜。直径3㎜の孔、重量5.0g
54	土製品	土錘	完形	－	－	－	－	灰白	長さ42㎜、直径12㎜。直径3㎜の孔、重量5.7g
55	土製品	土錘	完形	－	－	－	－	にぶい橙	長さ62㎜、直径16㎜。直径4㎜の孔、重量16.4g
56	須恵器	小皿	完形	7.6	1.7	＊	4.4	褐灰	内外面横ナデ、底部糸切り
57	須恵器	小皿	完形	8.1	1.6	＊	4.3	灰	内外面横ナデ、底部糸切り
58	須恵器	椀	口縁部・体部7/8	15.8	4.2	＊	5.5	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
59	須恵器	椀	口縁部1/2	16.2	4.9	＊	7.3	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
60	須恵器	椀	口縁部5/6	15.9	4.8	＊	7.1	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
61	須恵器	椀	口縁部・体部1/4、底部3/8	15.3	3.9	＊	5.6	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に墨書
62	須恵器	椀	口縁部1/4、体部1/3、底部1/2	15.0	4.9	＊	5.6	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に板の圧痕
63	須恵器	椀	口縁部3/4	15.7	4.7	＊	6.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
64	須恵器	椀	口縁部3/4	15.7	4.9	＊	6.7	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に板の圧痕
65	須恵器	椀	口縁部・体部1/2	15.0	5.3	＊	6.1	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に板の圧痕
66	須恵器	椀	底部1/4	－	－	＊	5.8	灰白	底部糸切り、底部外面に墨書
67	須恵器	椀	体部1/4、底部3/4	－	－	＊	6.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に墨書・板の圧痕
68	須恵器	椀	底部1/2	－	－	＊	6.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に墨書・板の圧痕

付表３　出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	残存状況	口径	器高	最大径	底径	色　調	調整および特徴
69	須恵器	鉢	口縁部1/4	29.7	－	＊	－	灰白	口縁部横ナデ、外面指押さえ、口縁部内面ハケ？
70	須恵器	鉢	口縁部1/4、体部1/6、底部1/4	29.9	11.0	＊	10.5	灰白	片口、内外面横ナデ、底部糸切り
71	須恵器	鉢	口縁部・体部1/4	27.7	9.5	＊	－	灰褐	内外面横ナデ
72	瓦器	小皿	完形	9.0	2.1	＊	4.0	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
73	瓦器	小皿	口縁部3/4	9.7	2.3	＊	5.0	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
74	瓦器	小皿	完形	8.4	1.9	＊	5.0	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面摩滅のため観察不能
75	瓦器	椀	口縁部・体部1/2	15.1	4.4	＊	5.4	暗灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
76	瓦器	椀	口縁部・体部1/2	13.8	4.6	＊	4.7	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面摩滅のため観察不能
77	瓦器	椀	口縁部・体部1/2	14.3	4.5	＊	6.2	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面摩滅のため観察不能
78	白磁	壺	口縁部1/4	10.0	－	－	－	オリーブ灰	
79	白磁	椀	口縁部1/6	14.4	－	＊	－	灰白	
80	白磁	椀	口縁部1/16、体部・底部1/8	15.9	6.6	＊	7.8	明オリーブ灰	
81	陶器	甕	体部破片	－	－	－	－	暗青灰	外面に綾杉状押印文
82	陶器	甕	体部破片	－	－	－	－	暗青灰	外面に押印文2列
S2	石製品	石鍋	口縁部1/16	33.8	－	40.6	－	オリーブ灰	外面に細かい加工痕、内面使用により滑らか
S3	石製品	石鍋	底部1/8	－	－	－	32.2	暗灰	外面に細かい加工痕と煤
S4	石製品	不明	長さ7.0cm、残存幅3.8cm、高さ1.6cm					灰白	2個の方形の窪みをもつ。裏面緩やかに内湾
SD03									
83	須恵器	椀	口縁部・体部1/4、底部3/4	16.8	4.2	＊	5.5	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
84	須恵器	鉢	口縁部・体部1/2	27.8	10.5	＊	8.5	灰白	内外面横ナデ、体部外面下端にヘラケズリ、底部糸切り、底部外面に板の圧痕、内面は使用による摩滅が顕著
85	瓦器	椀	口縁部・体部5/8	15.1	5.1	＊	4.8	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
SD04									
S5	石製品	温石	完形。長さ7.7cm、幅5.2cm、厚さ1.5cm、突帯の高さ1.2cm					褐灰	石鍋の再加工品。口縁部外面から突帯にかけて穿孔、裏面に模様。
SD05									
86	須恵器	椀	1/4	11.8	4.3	＊	7.1	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
87	土師器	羽釜	口縁部・体部1/8	25.2	－	－	－	にぶい橙	突帯から口縁部内面横ナデ、体部内面ハケ、体部外面摩滅のため観察不可能
88	土師器	壺	完形	4.6	4.0	6.9	4.6	にぶい橙	内外面横ナデ、底部糸切り
89	土師器	甕	口縁部の小片	－	－	－	－	暗灰	口縁部横ナデ、頸部外面ハケ後ナデ、体部外面ハケ
90	須恵器	小皿	口縁部・体部1/6、底部1/4	7.9	1.6	＊	4.4	青灰	内外面横ナデ、底部糸切り
91	須恵器	壺	肩部小片	－	－	－	－	灰白	突帯、ヘラにより記号・文様
92	瓦器	羽釜	口縁部僅か	－	－	－	－	灰	内外面横ナデ
93	青白磁	合子	口縁部僅か、体部・底部1/4	5.5	2.1	6.3	4.8	灰白	
94	土製品	土錘	完形	－	－	－	－	にぶい橙	長さ77mm、直径18mm。直径6mmの孔、重量22.0g
95	土師器	鍋	口縁部1/12	25.4	－	＊	－	灰褐	口縁部横ナデ、体部外面タタキ
96	瓦器	火鉢	口縁部・体部・底部ともわずか	－	14.3	－	－	灰	全体に摩滅激しい、外面に菊花文
A地区包含層									
97	土師器	托	体部・脚部とも3/4	16.4	7.8	＊	8.4	浅黄橙	全体に摩滅激しい
98	瓦器	羽釜	口縁部1/8	24.4	－	28.4	－	にぶい黄橙	体部下半外面にハケ、外面体部上半から内面にかけて横ナデ
S6	石製品	温石？	残存長5.6cm、残存幅3.6cm、厚さ1.0cm					暗灰	2個の穿孔、側面に加工痕、表裏面の大部分は剥離
SB07									
99	土師器	小皿	完形	8.1	1.6	＊	5.1	浅黄橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
100	須恵器	椀	体部・底部1/4	－	－	＊	6.5	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
101	白磁	碗	口縁部わずか	－	－	＊	－	灰白	
SB08									
102	須恵器	椀	口縁部・体部1/4	16.0	4.1	＊	－	灰白	内外面横ナデ
SB09									
103	土師器	小皿	口縁部・体部1/2、底部完存	8.1	1.4	＊	5.3	淡橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
104	土師器	小皿	1/4	8.6	1.6	＊	5.8	橙	口縁部横ナデ、底部切り離しは不明
105	須恵器	椀	口縁部1/12、体部1/8	15.8	4.3	＊	－	灰白	内外面横ナデ
SB11									
106	土師器	竈	焚き口破片	－	－	－	－	橙	外面ナデ、内面摩滅により観察不可能
SB12									
107	白磁	碗	口縁部わずか	－	－	＊	－	灰白	
SB13									
108	土師器	椀	1/2	14.6	4.1	＊	8.7	浅黄橙	外面摩滅により観察不可能、内面横ナデ
SB14									
109	土師器	小皿	1/4	8.5	1.4	＊	5.9	浅黄橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
110	土師器	小皿	1/4	11.5	1.6	＊	9.0	明褐灰	底部ヘラ切り、他は摩滅により観察不可能
SB15									
111	土師器	小皿	口縁部・体部1/6、底部1/8	7.9	1.4	＊	6.5	にぶい橙	内外面横ナデ
112	備前焼	甕	口縁部わずか	－	－	－	－	灰褐	横ナデ
SB16									
113	須恵器	椀	底部1/6	－	－	－	8.4	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
114	須恵器	椀	口縁部1/8、体部・底部1/2	15.3	5.6	＊	6.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
115	土師器	鍋	口縁部・体部1/16	25.7	－	＊	－	にぶい赤褐	体部外面平行タタキ、他は横ナデ
SB17									
116	土師器	托	底部完存	－	－	－	5.9	にぶい橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
SB20									
117	須恵器	椀	体部1/4、底部1/2	－	－	－	6.7	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
SB22									
118	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	35.9	－	＊	－	にぶい橙	体部内外面ハケ、口縁部横ナデ
SB25									
119	土師器	小皿	口縁部・体部・底部3/8	8.0	1.5	＊	4.7	灰白	底部糸切り、他は横ナデ
SP05									
120	土師器	甕	口縁部・体部1/12	22.9	－	－	－	にぶい橙	体部外面ハケ、口縁部横ナデ、体部内面ナデ

付表３　出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種	残存状況	口径	器高	最大径	底径	色　調	調整および特徴
121	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	30.2	－	＊	－	にぶい橙	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ナデ、外面煤付着
SP12									
122	土師器	小皿	口縁部・体部3/8、底部1/2	8.9	1.6	＊	6.9	浅黄橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
123	須恵器	小皿	口縁部・体部3/4、底部完存	7.7	2.5	＊	4.3	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部に藁状の圧痕
SP13									
124	土師器	小皿	口縁部・体部1/2、底部完存	8.5	1.5	＊	5.8	にぶい橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
SP14									
125	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	29.7	－	＊	－	にぶい橙	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ナデ、外面煤付着
SP16									
126	土師器	高坏	脚部のみ	－	－	－	－	淡橙	外面面取り後ナデ
SP19									
127	備前焼	擂鉢	口縁部小片	－	－	＊	－	にぶい赤褐	内外面横ナデ
SP22									
128	土師器	小皿	口縁部・体部3/4、底部完存	7.6	1.3	＊	5.7	にぶい橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
SP25									
129	須恵器	鉢	口縁部1/12	30.7	－	＊	－	灰白	内外面横ナデ
130	陶器	卸皿	口縁部・体部1/4	12.0	－	＊	－	灰黄	内面に卸目
SP26									
131	土師器	小皿	2/3	8.3	1.1	＊	5.2	にぶい褐	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
SP27									
132	陶器	壺	口縁部？肩部1/4	4.4	－	－	－	灰褐	内外面横ナデ
SP28									
133	土師器	小皿	1/2	8.5	1.6	＊	7.2	灰白	口縁部横ナデ、底部外面ユビオサエ後ナデ
SP29									
134	土師器	小皿	口縁部・体部1/2、底部完存	8.7	1.8	＊	6.2	にぶい橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
SK09									
135	白磁	碗	底部1/4	－	－	＊	5.4	灰白	
SK11									
136	土師器	小皿	1/2	8.8	1.6	＊	5.9	橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
SK12									
137	土師器	小皿	完形	8.8	1.7	＊	6.0	にぶい黄橙	口縁部横ナデ、底部外面ナデ
138	須恵器	椀	口縁部3/4、体部・底部ほぼ完存	15.4	5.4	＊	6.4	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
139	須恵器	椀	口縁部・体部3/4、底部完存	15.9	5.9	＊	6.0	灰白・浅黄橙	内外面横ナデ、底部糸切り
SK13									
140	須恵器	杯蓋	口縁部1/8	16.1	3.1	＊	－	灰白・灰	口縁部横ナデ
SK14									
141	土師器	鍋	口縁部1/8	18.0	－	－	－	橙	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ナデ
SK17									
142	須恵器	小皿	口縁部・体部3/4、底部完存	7.6	2.7	＊	3.9	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
SK20									
143	須恵器	椀	口縁部1/8、体部・底部完存	16.8	4.6	＊	5.6	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
144	須恵器	甕	口縁部1/8	25.2	－	－	－	灰白	内外面横ナデ、体部内外面タタキ
145	土師器	甕	口縁部・体部1/4	21.4	－	27.1	－	灰褐	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ハケ
SK21									
146	土師器	小皿	完形	8.2	1.6	＊	5.4	橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
147	土師器	小皿	2/3	8.2	1.7	＊	6.4	浅黄橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
SK22									
148	土師器	杯	完形	13.9	3.6	＊	7.6	浅黄橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
149	土師器	杯	口縁部・体部3/4、底部ほぼ完形	14.3	3.6	＊	9.0	浅黄橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
150	土師器	杯	口縁部3/4、・体部・底部ほぼ完形	14.3	3.7	＊	8.8	にぶい橙	底部ヘラ切り、他は横ナデ
SK24									
151	須恵器	鉢	口縁部・体部1/12	30.6	－	＊	－	灰白	内外面横ナデ
152	須恵器	鉢	口縁部・体部1/12	31.3	－	＊	－	灰白	内外面横ナデ
SK26									
153	土師器	小皿	ほぼ完形	8.9	1.3	＊	5.0	橙	口縁部横ナデ、底部外面ユビオサエ後ナデ
154	土師器	羽釜	口縁部小片	－	－	－	－	浅黄橙	突帯から口縁部内面横ナデ、体部内面ハケ
155	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	35.2	－	＊	－	褐灰	内面ハケ、体部外面ハケ、口縁部横ナデ
S7	石製品	砥石？	残存長9.2cm、残存幅6.2cm、厚さ0.8cm					浅黄橙	断面Ｖ字状の溝
SK28									
156	瓦器	椀	底部1/2	－	－	＊	5.4	灰	見込みにヘラミガキ
157	土師器	竈	口縁部小片	－	－	－	－	橙	外面ナデ、内面横方向ハケ
158	白磁	皿	口縁部1/16、体部1/4、底部1/2	9.2	2.4	＊	3.5	灰白	
159	白磁	碗	口縁部・体部1/8	18.5	－	＊	－	灰白	
160	青磁	碗	口縁部・体部1/6	15.6	－	＊	－	灰オリーブ	
SK29									
161	土師器	鍋	口縁部・体部3/4	29.0	－	＊	－	にぶい橙	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ナデ
162	備前焼	擂鉢	口縁部・体部1/6	29.0	－	＊	－	灰黄	内外面横ナデ、内面擂目
SK30									
163	土師器	鍋	脚部上半	＊	＊	＊	＊	にぶい橙	外面ナデ
SE01									
164	土師器	托	完形	8.2	3.1	＊	4.2	橙	底部糸切り、他は横ナデ
165	土師器	小皿	ほぼ完形	8.8	1.6	＊	4.2	浅黄橙	口縁部横ナデ、底部外面ユビオサエ後ナデ
166	土師器	小皿	完形	8.0	1.6	＊	5.5	橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
167	土師器	小皿	完形	8.1	1.7	＊	5.6	にぶい橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
168	土師器	小皿	完形	8.3	1.5	＊	5.9	にぶい黄橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
169	土師器	小皿	完形	8.6	1.7	＊	5.5	橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
170	土師器	小皿	口縁部1/3を欠損	8.6	1.8	＊	5.4	橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
171	土師器	小皿	ほぼ完形	8.8	1.4	＊	6.0	浅黄橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
172	土師器	小皿	完形	9.0	1.4	＊	5.6	橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
173	土師器	小皿	1/4	9.0	1.4	＊	6.4	橙	口縁部横ナデ、底部は摩滅により観察不可能

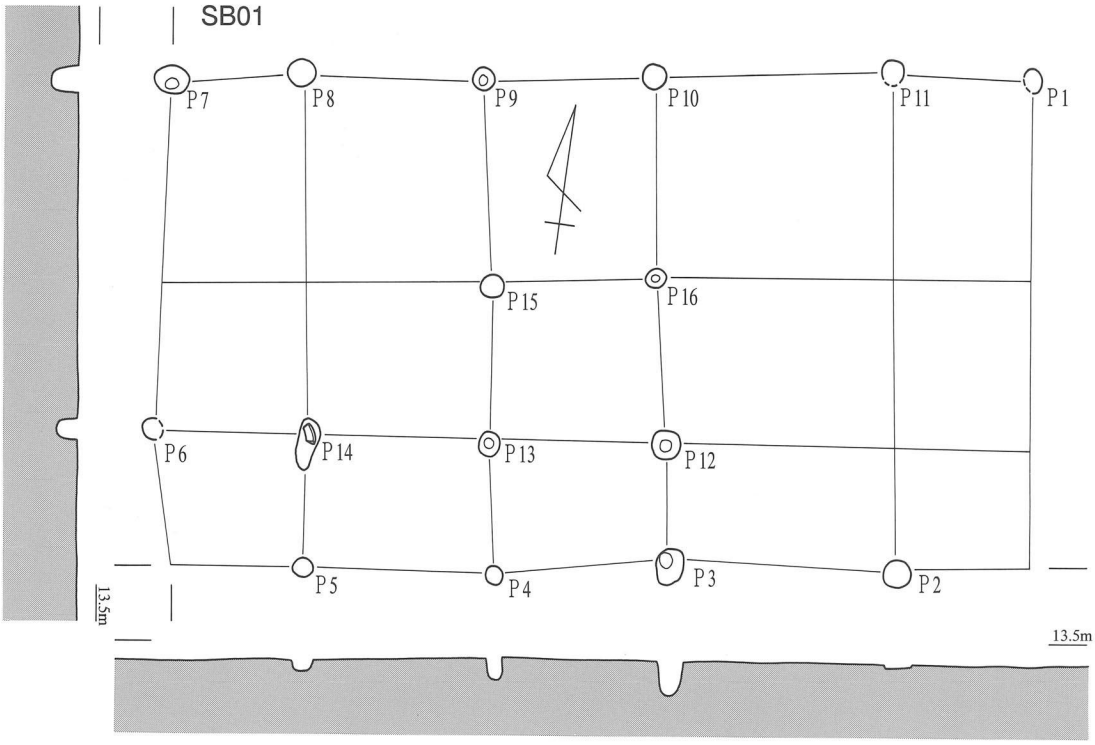
付表３　出土遺物観察表(4)

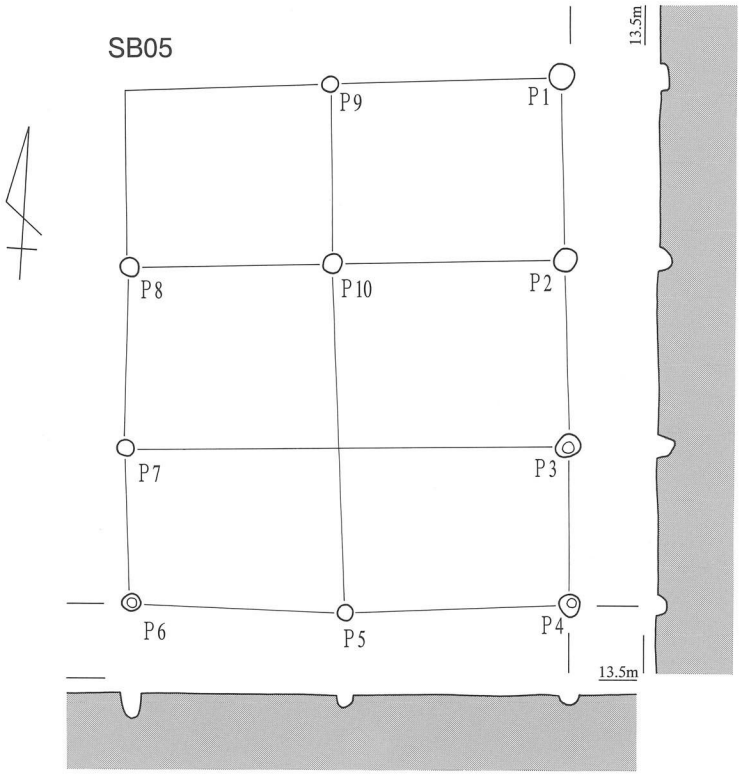
番号	種別	器種	残存状況	口径	器高	最大径	底径	色　調	調整および特徴
174	土師器	小皿	ほぼ完形	9.1	1.9	＊	5.2	浅黄橙	口縁部横ナデ、底部ヘラ切り
175	土師器	椀	口縁部1/8、体部1/4、底部完存	13.9	4.2	＊	6.8	灰白	全体的に摩滅により観察不可能、底部糸切りか？
176	土師器	杯	口縁部1/6、体部1/4、底部1/2	15.9	3.8	＊	8.0	橙	体部横ナデ、底部ヘラ切り？
177	土師器	鍋	口縁部1/8	31.3	－	－	－	にぶい橙	口縁部横ナデ、他は摩滅により観察不可能
178	須恵器	小皿	口縁部・体部3/4、底部完存	7.7	2.8	＊	4.0	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
179	須恵器	椀	底部のみ完存	－	－	＊	7.4	灰白	底部糸切り後に輪高台貼り付け
180	須恵器	椀	ほぼ完形	14.9	5.8	＊	5.9	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
181	須恵器	椀	口縁部・体部1/2、底部完存	15.4	5.2	＊	6.3	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
182	白磁	碗	口縁部・体部1/4、底部1/2	10.7	3.1	＊	4.4	灰白	
183	白磁	碗	口縁部1/8、体部1/2、底部完存	15.1	6.5	＊	6.2	灰白	
184	白磁	碗	口縁部1/16、体部1/6、底部完存	15.5	6.8	＊	6.2	灰白	
SD06									
185	白磁	碗	底部小片	－	－	－	6.0	灰白	
186	青磁	碗	口縁部1/8	13.6	－	＊	－	オリーブ灰	
187	陶器	不明	体部小片	－	－	－	－	灰黄褐	外面に花形の押印文
SD07									
188	土師器	羽釜	口縁部1/8	15.0	－	19.4	－	橙	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ
189	土師器	羽釜	口縁部1/8	25.0	－	－	－	橙	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ハケ
190	土師器	鍋	口縁部1/8	25.0	－	＊	－	黒褐	口縁部横ナデ、体部外面平行タタキ、体部内面ナデ
191	須恵器	甕	口縁部・体部小片	17.0	－	－	－	灰白	体部外面平行タタキ、頸部外面から内面にかけて横ナデ
192	白磁	碗	口縁部1/6	14.6	－	＊	－	灰白	
193	青磁	碗	口縁部1/8	15.6	－	＊	－	灰白	不連続な雷文
194	青磁	碗	底部完存	－	－	＊	4.4	オリーブ灰	
195	青磁	碗	底部完存	－	－	－	5.0	オリーブ黄	
196	青磁	香炉	底部1/4	－	－	－	7.8	灰オリーブ	
197	陶器	天目茶碗	口縁部・体部小片	11.6	－	－	－	黒	
198	備前焼	甕	口縁部1/8	44.8	－	－	－	褐灰	内外面横ナデ
199	備前焼	甕	口縁部1/3	32.0	－	－	－	灰赤	内外面横ナデ
200	備前焼	擂鉢	口縁部・体部1/8	25.6	－	＊	－	青灰	内外面横ナデ
201	備前焼	擂鉢	口縁部1/4	20.0	－	＊	－	にぶい橙	内外面横ナデ、内面擂目
202	備前焼	擂鉢	底部1/4	－	－	－	8.6	灰	内外面横ナデ、内面擂り目
S8	石製品	砥石	長さ8.3cm、幅6.5cm、厚さ1.2cm					オリーブ灰	硯の再加工品、線刻による年号等の文字あり
SD09									
203	土師器	大皿	ほぼ完形	14.1	2.7	＊	13.1	明褐灰	口縁部横ナデ、底部外面ユビオサエ後ナデ
204	土師器	大皿	口縁部・体部1/2、底部3/4	14.1	2.9	＊	8.9	灰白？浅黄	内外面横ナデ、底部糸切り
205	土師器	大皿	口縁部・体部1/2、底部3/4	14.9	2.7	＊	9.5	浅黄橙	内外面摩滅により観察不可能
206	土師器	鍋	口縁部1/2	36.0	－	＊	－	にぶい黄橙	体部内外面ハケ、口縁部横ナデ
207	土師器	鍋	口縁部1/8	42.3	－	＊	－	にぶい橙	内外面摩滅により観察不可能
208	須恵器	椀	底部3/4	15.8	5.5	＊	8.6	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
209	須恵器	椀	口縁部・体部1/8、底部完存	14.8	5.2	＊	6.1	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
210	須恵器	椀	口縁部・体部1/2、底部完存	15.4	4.8	＊	5.3	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に板圧痕
211	須恵器	椀	口縁部・体部1/3、底部完存	16.0	5.1	＊	6.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
212	須恵器	椀	口縁部・体部1/4、底部1/2	15.8	5.0	＊	6.4	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に墨書
213	白磁	碗	底部完存	－	－	＊	5.9	灰白	
214	白磁	碗	口縁部・体部1/6	15.7	－	＊	－	灰白	
215	白磁	皿	底部完存	－	－	＊	3.8	灰白	
216	瓦器	小皿	口縁部・体部1/8、底部1/4	10.2	1.7	＊	5.2	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ、内面ヘラミガキ
SD10									
217	須恵器	椀	底部1/5	－	－	－	7.8	灰白	貼り付け高台
218	土師器	羽釜	口縁部小片	－	－	－	－	にぶい橙	口縁部横ナデ、体部内面ハケ
219	土師器	鍋	口縁部・体部1/8	32.9	－	＊	－	灰褐	口縁部・体部の内外面ハケ、口縁端部横ナデ
220	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	36.9	－	＊	－	にぶい褐	外面ハケ、内面ナデ
221	須恵器	椀	底部3/4	－	－	＊	5.5	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り、底部外面に「大」の墨書
222	白磁	皿	口縁部・体部1/4	10.0	－	＊	－	浅黄	
223	瓦器	椀	口縁部・体部1/4	15.5	3.8	＊	4.1	灰白	内面摩滅激しく観察不可能、口縁部外面横ナデ、体部外面ユビオサエ
SD11									
224	須恵器	椀	口縁部・体部・底部1/8	14.9	5.8	＊	6.1	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
SD12									
225	須恵器	椀	口縁部1/6・体部1/4・底部完存	15.1	5.3	＊	6.2	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
226	須恵器	甕	口縁部1/12	27.2	－	－	－	灰	内外面横ナデ
SD13									
227	白磁	碗	口縁部・体部1/8	16.5	－	＊	－	灰白	
SD14									
228	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	29.8	－	＊	－	褐灰	口縁部・体部の内外面ハケ、口縁端部横ナデ
229	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	29.2	－	＊	－	にぶい黄褐	口縁部・体部の内外面ハケ、口縁端部横ナデ
230	土師器	鍋	脚部完存	＊	＊	＊	＊	灰白	外面ナデ、ハケ
231	土師器	鍋	口縁部・体部1/4	40.0	－	＊	－	にぶい橙	体部内外面・口縁部内面ハケ、口縁部外面横ナデ
232	土師器	鍋	口縁部・体部小片	40.0	－	＊	－	にぶい橙	体部内外面ハケ、口縁部横ナデ
233	須恵器	小皿	口縁部・体部・底部1/6	9.0	4.2	＊	5.4	灰	内外面横ナデ、底部糸切り
234	須恵器	椀	口縁部・体部・底部1/2	14.2	4.0	＊	6.0	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
235	須恵器	椀	口縁部・体部1/4、底部完存	14.2	4.2	＊	5.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
236	須恵器	椀	口縁部・体部・底部1/4	15.8	4.8	＊	6.8	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
237	須恵器	椀	完形	16.4	4.6	＊	5.0	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
238	須恵器	椀	口縁部・体部・底部1/4	15.0	4.6	＊	6.0	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
239	須恵器	椀	口縁部・体部・底部1/2	14.8	4.8	＊	6.2	灰白	内外面横ナデ、底部糸切り
240	青磁	皿	口縁部・体部・底部1/12	8.8	2.4	＊	3.4	灰	
241	瓦器	小皿	完形	9.2	1.8	＊	4.0	灰	口縁部横ナデ、外面指押さえ
242	瓦器	椀	口縁部1/4、底部1/2	14.0	4.5	＊	4.1	暗灰	摩滅激しく観察不可能
SD16									
243	須恵器	杯	底部1/4	－	2.0	＊	7.8	灰白	内外面横ナデ、底部高台貼り付け
244	須恵器	小皿	口縁部・体部・底部1/4	8.8	1.4	＊	6.0	灰	内外面横ナデ、底部糸切り

付表３　出土遺物観察表(5)

番号	種別	器種	残存状況	口径	器高	最大径	底径	色調	調整および特徴
B地区包含層									
245	須恵器	椀	口縁部･体部1/4､底部完存	15.4	5.1	*	6.4	灰白	内外面横ナデ､底部糸切り
SB29									
246	白磁	碗	底部1/4	－	－	*	7.8	灰白	
SB30									
247	土師器	小皿	1/4	8.4	1.2	*	5.0	にぶい橙	口縁部横ナデ､底部外面ユビオサエ
SB34									
248	土師器	小皿	口縁部3/4､底部完存	8.4	1.6	*	6.0	浅黄橙	口縁部横ナデ､底部ヘラ切り
249	須恵器	小皿	口縁部1/8､･体部1/4､底部完存	7.7	3.0	*	4.0	灰白	内外面横ナデ､底部糸切り
SP36									
250	須恵器	鉢	口縁部･体部1/16	22.1	－	*	－	灰白	内外面横ナデ
SK31									
251	土師器	竈	口縁部･体部1/4､底部1/8	35.8	25.5	－	－	にぶい橙	全面ナデ仕上げ､内面に煤付着
SK33									
252	陶器	甕	口縁部1/8	33.8	－	－	－	暗青灰	口縁部横ナデ､体部外面一片3㎜の格子目タタキ､体部内面は同心円タタキ後ナデ
SK35									
253	須恵器	提瓶	口縁部欠損､体部ほぼ完存	－	16.8	14.4	－	灰白	口縁部横ナデ､体部外面ヘラ削り
SK37									
254	須恵器	杯蓋	1/4	11.6	3.7	－	－	灰白	口縁部内外面横ナデ､頂部ヘラ削り
SK38									
255	須恵器	甕	破片	－	－	－	－	灰白	外面横ナデ後波状文と沈線､内面横ナデ
SK40									
256	須恵器	杯身	1/2	10.8	4.0	－	－	灰白	内外面横ナデ
SK42									
257	須恵器	杯身	底部2/3	－	2.9	－	11.4	灰白	体部内外面横ナデ､貼付高台
SK43									
258	須恵器	杯身	口縁部1/8､底部完存	15.1	4.3	－	11.4	灰白	内外面横ナデ､貼付高台
SK44									
259	須恵器	杯身	口縁部破片	12.6	3.2	－	－	灰白	内外面横ナデ
260	須恵器	杯身	1/2	11.8	4.0	－	－	灰白	内外面横ナデ､底部ヘラ削り
261	土師器	杯	1/12	14.6	5.2	－	10.0	浅黄橙	外面横ナデ､内面放射状暗文､貼付高台
262	土師器	甕	口縁部1/6	37.8	9.0	－	－	浅黄橙	内外面横ナデ後ハケ
SK45									
263	須恵器	杯身	3/8	10.9	3.3	－	7.3	灰	内外面横ナデ､底部ヘラ切り
SK47									
264	須恵器	杯身	底部1/5､口縁部ほぼ完存	11.9	3.7	－	6.3	灰白	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
265	須恵器	杯身	1/3	10.8	3.7	－	7.6	灰白	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
266	須恵器	杯身	1/4､口縁部欠損	14.6	5.1	－	9.4	にぶい橙	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
S9	石製品	砥石	完存	長10.45	厚2.1	幅5.2		灰白	4面に使用痕あり
S10	石製品	砥石	完存	長7.1	厚2.5	幅3.7		淡黄	4面に使用痕あり
SK48									
267	須恵器	杯身	1/3	10.5	3.6	－	7.1	灰白	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
SK49									
268	須恵器	杯身	体部1/5､底部1/2	15.7	4.7	－	11.6	灰白	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ､貼付高台
SK50									
269	土師器	椀	ほぼ完形	11.7	5.7	－	－	灰褐､暗灰	外面ヘラミガキ､内面横ナデ後放射状の暗文
270	土師器	椀	2/3	10.4	5.1	－	－	橙	外面横ナデ､内面ナデ
SX03									
271	須恵器	杯身	口縁部3/4､底部完存	12.9	3.6	－	7.4	灰白	内外面回転ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
272	須恵器	杯身	ほぼ完形	10.8	3.2	－	6.0	灰白	内外面回転ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
SX04									
273	須恵器	杯身	ほぼ完形	11.9	4.1	－	7.3	灰	内外面回転ナデ､底ヘラ切り
274	須恵器	杯身	ほぼ完形	10.5	3.7	－	6.0	灰白	内外面回転ナデ､底ヘラ切り
275	土師器	椀	ほぼ完形	13.1	6.1	－	5.7	淡黄	外面縦方向のハケ､下半はハケ後ナデ
SD17									
276	土師器	鍋	口縁部小片	－	－	*	－	にぶい黄橙	口縁部横ナデ､体部外面平行タタキ
SD20									
277	土師器	小皿	ほぼ完形	12.0	2.7	*	8.2	にぶい橙	口縁部横ナデ､底部外面ユビオサエ
278	土師器	小皿	2/3	12.2	2.8	*	5.8	にぶい橙	口縁部横ナデ､底部外面ユビオサエ
279	土師器	小皿	口縁部2/3､底部欠損	12.6	2.5	*	7.2	褐灰	口縁部横ナデ､底部外面ユビオサエ
280	須恵器	小皿	2/3	8.6	2.1	*	5.2	青灰	内外面横ナデ､底部糸切り
SD21									
281	須恵器	杯身	底部1/4	－	2.3	－	13.0	灰白	内外面横ナデ､貼付高台
282	土師器	皿	1/2	12.8	2.6	－	－	にぶい黄橙	口縁部内外面横ナデ
SD24									
283	土師器	壺	口縁部1/4	12.8	7.8	－	－	浅黄橙	口縁部内外面横ナデ､外面貼付突帯の痕跡
SD25									
284	須恵器	杯蓋	1/4	16.6	3.0	－	－	灰白	内外面横ナデ
285	須恵器	杯身	1/4	15.0	4.0	－	11.0	灰	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ､貼付高台
286	須恵器	杯身	1/8	10.8	4.0	－	－	灰白	内外面横ナデ
287	土師器	杯	口縁部1/6	15.6	2.5	－	－	淡赤橙	内外面横ナデ
288	須恵器	皿	1/4	20.0	2.8	－	－	灰白	内外面横ナデ､底部ヘラ切り後ナデ
289	土師器	皿	口縁部1/4	11.6	2.2	－	－	橙	外面横ナデ､内面横ナデ後放射状暗文
290	須恵器	壺	体部1/2	－	13.4	18.8	－	灰	外面叩き後カキメ､内面当て具痕
291	土師器	壺	口縁部1/8	19.6	6.8	－	－	浅黄橙	外面ナデ後ハケ
確認69G									
292	須恵器	甕	体部1/8	18.2	32.5	32.2	－	灰	外面格子叩き後カキメ､内面当て具痕
確認52G									
293	弥生土器	甕？	口縁部1/4	11.0	4.8	－	－	にぶい黄橙	内外面ハケ

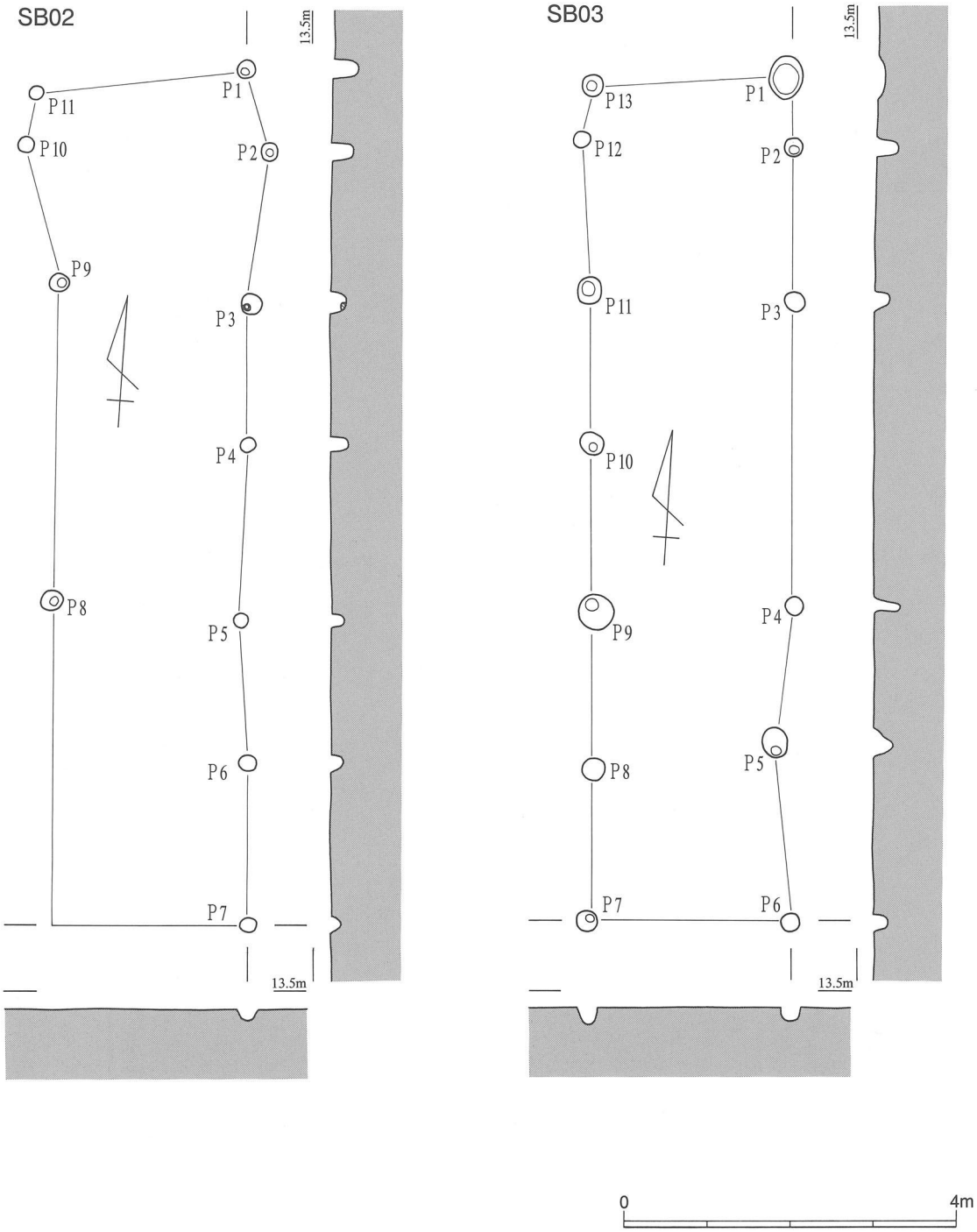
図　版


SB01
P7
P8
P9
P10
P11
P1
P15
P16
P6
P14
P13
P12
P5
P4
P3
P2
13.5m
13.5m

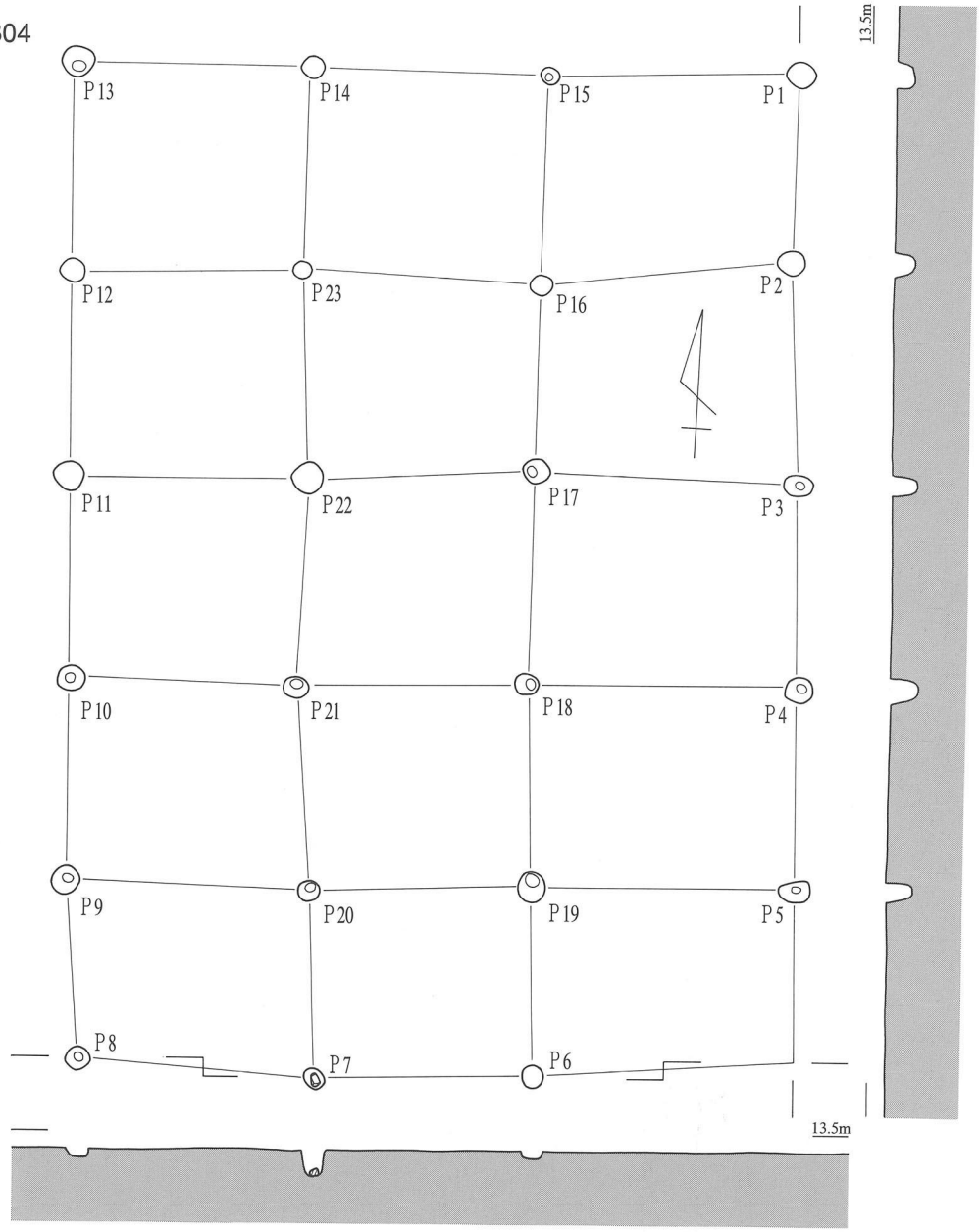

SB05
13.5m
P9
P1
P8
P10
P2
P7
P3
P6
P5
P4
13.5m

0　4m

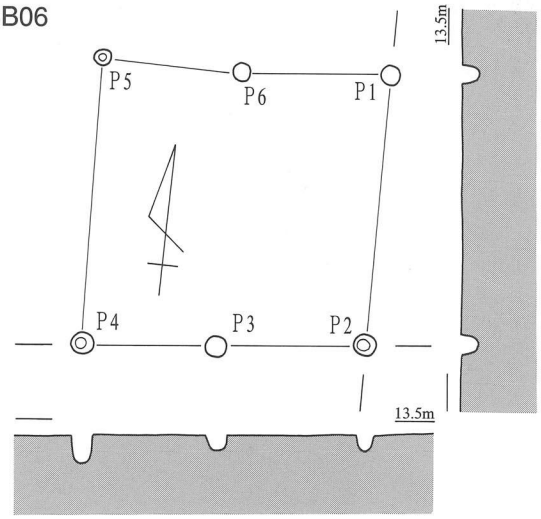
図版2　A地区遺構（2）


SB02
13.5m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
13.5m
SB03
13.5m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
13.5m
0
4m

SB04



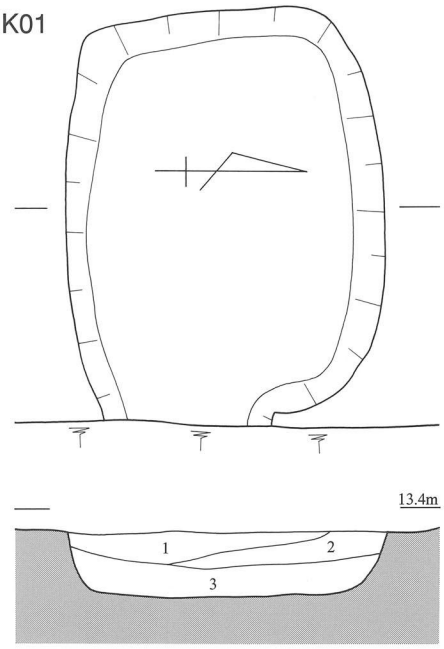
SB06



0　4m

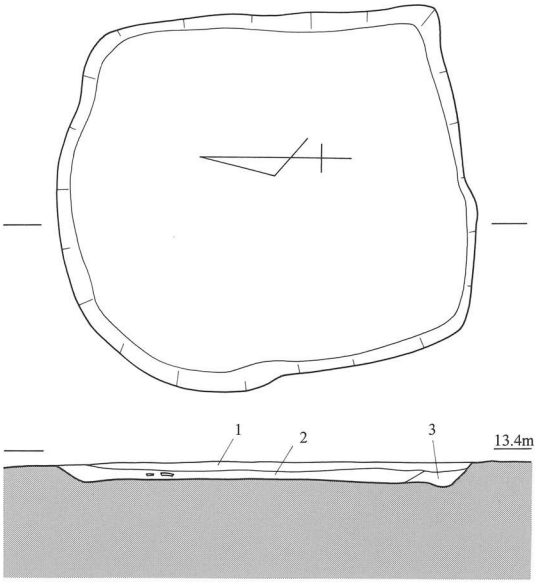
図版4　A地区遺構（4）

SK01



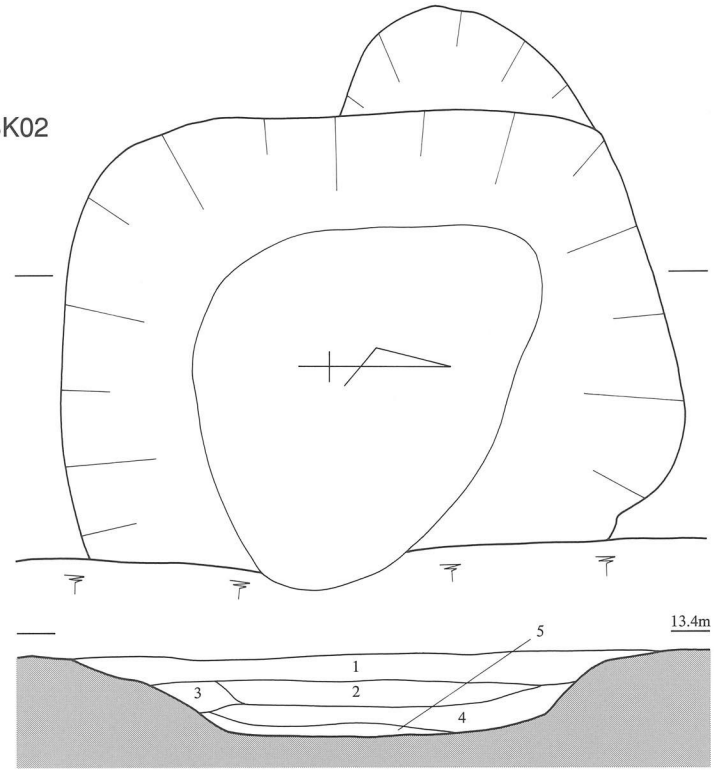
1. 灰黄褐色　シルト質極細砂（黄褐色ブロック混）
2. 灰褐色　シルト質極細砂（黄褐色ブロック混）
3. 灰色　シルト質極細砂（黄褐色ブロック混）

SK03

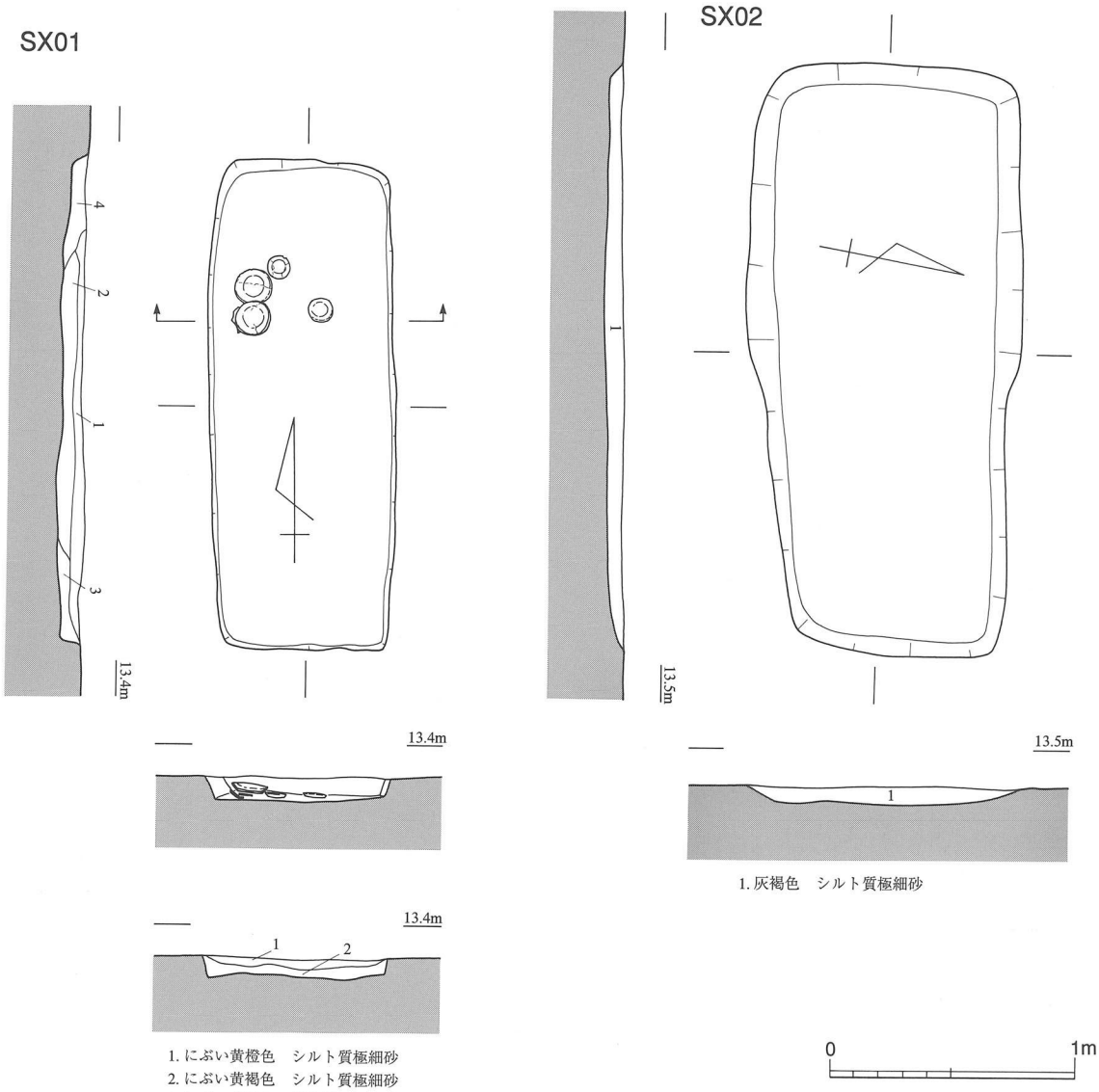


1. にぶい黄橙色　極細砂混シルト質
2. にぶい黄褐色　シルト質極細砂（炭含）
3. 灰黄褐色　極細砂混シルト質極細砂

SK02



1. 灰黄褐色　シルト極細砂（黄褐色シルトブロック混）
2. にぶい黄橙色　シルト質極細砂（黄褐色シルトブロック混）
3. 明褐灰色　シルト質極細砂（黄褐色シルトブロック混）
4. にぶい黄橙　シルト質極細砂（黄褐色シルトブロック混）
5. 褐灰色　シルト質極細砂



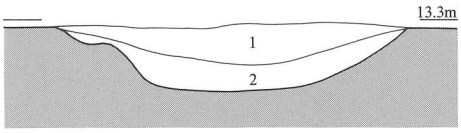
1. 灰褐色　シルト質極細砂

1. にぶい黄橙色　シルト質極細砂
2. にぶい黄褐色　シルト質極細砂
3. にぶい黄褐色　粗砂混シルト質極細砂
4. 灰黄褐色　シルト質極細砂

0　1m

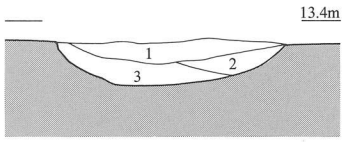
図版6　A地区遺構（6）

SD01①



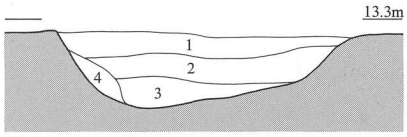
1. 灰黄褐色　極細砂混シルト質極細砂
2. 褐灰色　シルト質極細砂

SD01②

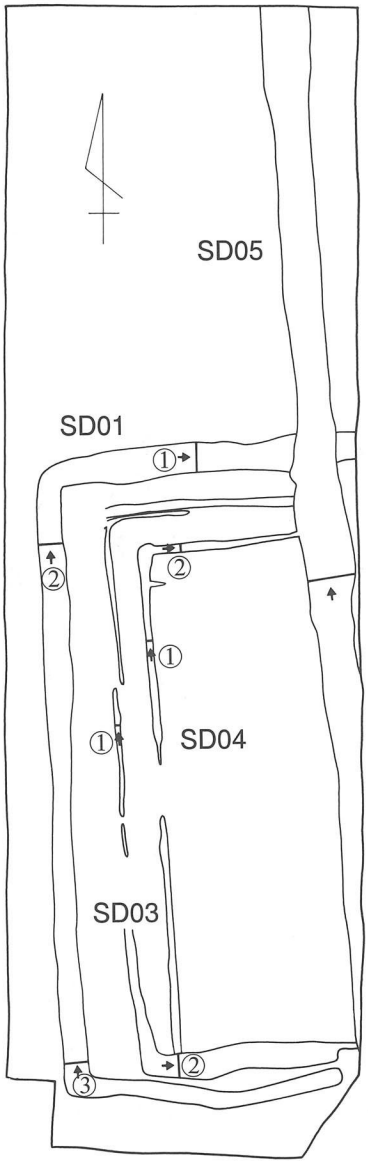


1. 灰黄色　シルト質極細砂
2. 黄灰色　シルト質極細砂
3. 暗灰黄色　シルト質極細砂

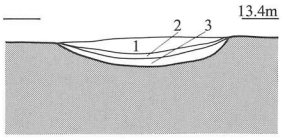
SD01③



1. 灰黄色　シルト質極細砂
2. 灰黄色　シルト質極細砂
4. 灰白色　シルト質極細砂
5. 褐灰　シルト質極細砂

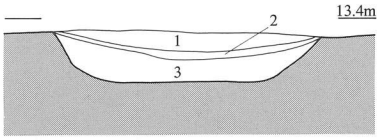


SD03①



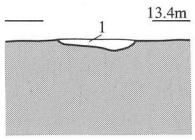
1. にぶい黄橙色　シルト質極細砂
2. 灰黄褐色　シルト質極細砂
3. 灰黄褐色　シルト質極細砂

SD03②



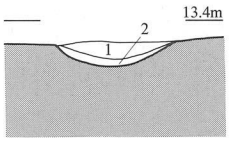
1. 灰黄褐色　シルト質極細砂
2. 灰黄褐色　シルト質極細砂
3. 灰黄褐色　中砂

SD04①



1. にぶい黄橙色　シルト質極細砂

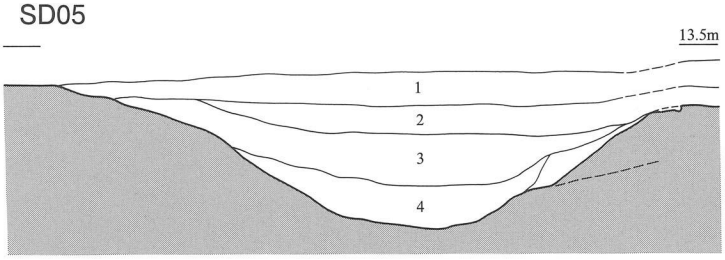
SD04②



1. 暗灰黄色　シルト質極細砂
2. 黄褐色　シルト質極細砂

0　20m

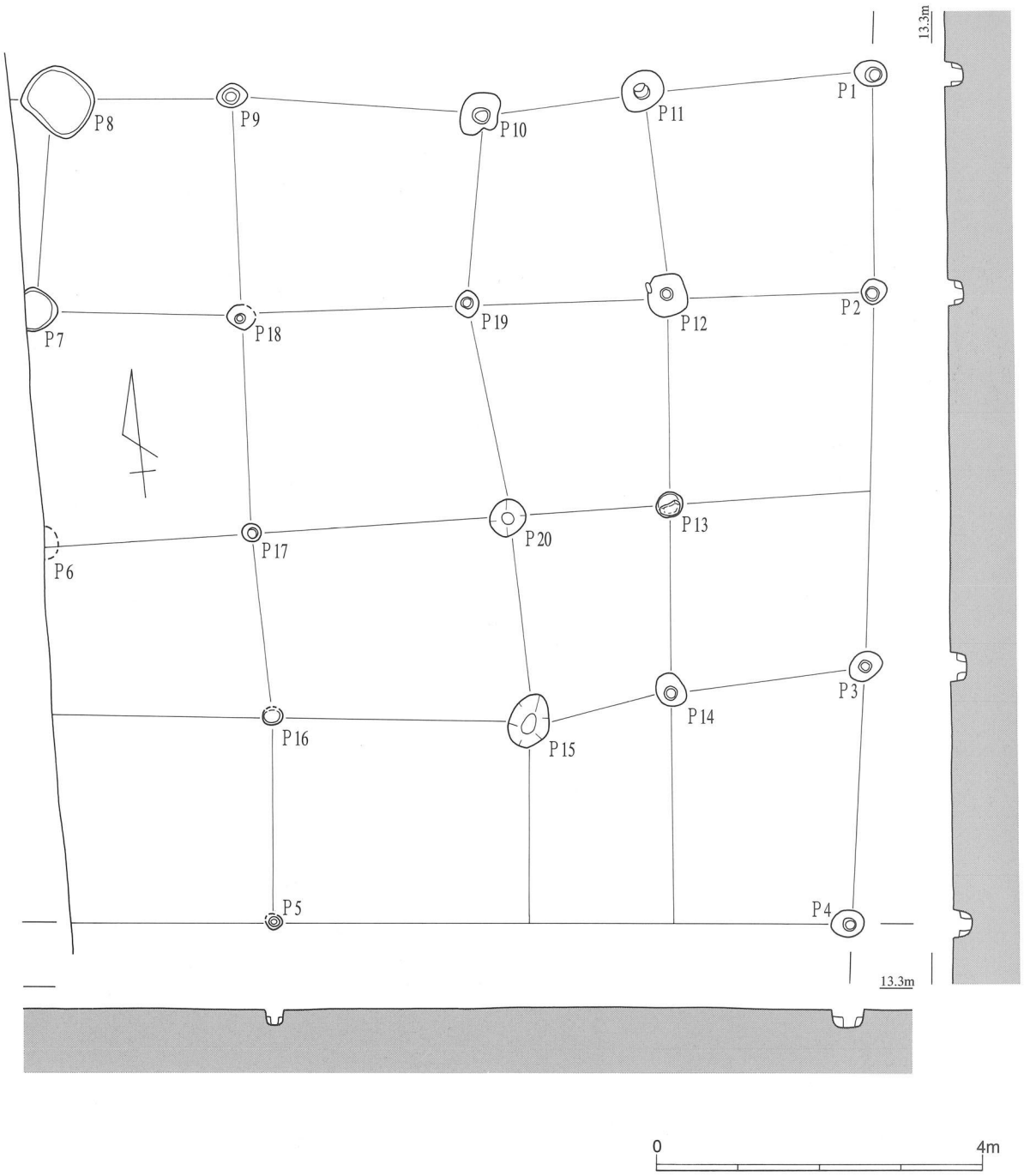
SD05



1. にぶい黄橙色　シルト質極細砂
2. 暗灰黄色　シルト質極細砂
3. にぶい黄褐色　シルト質極細砂
4. 灰黄褐色　シルト質極細砂
5. 褐灰色　極細砂混細砂

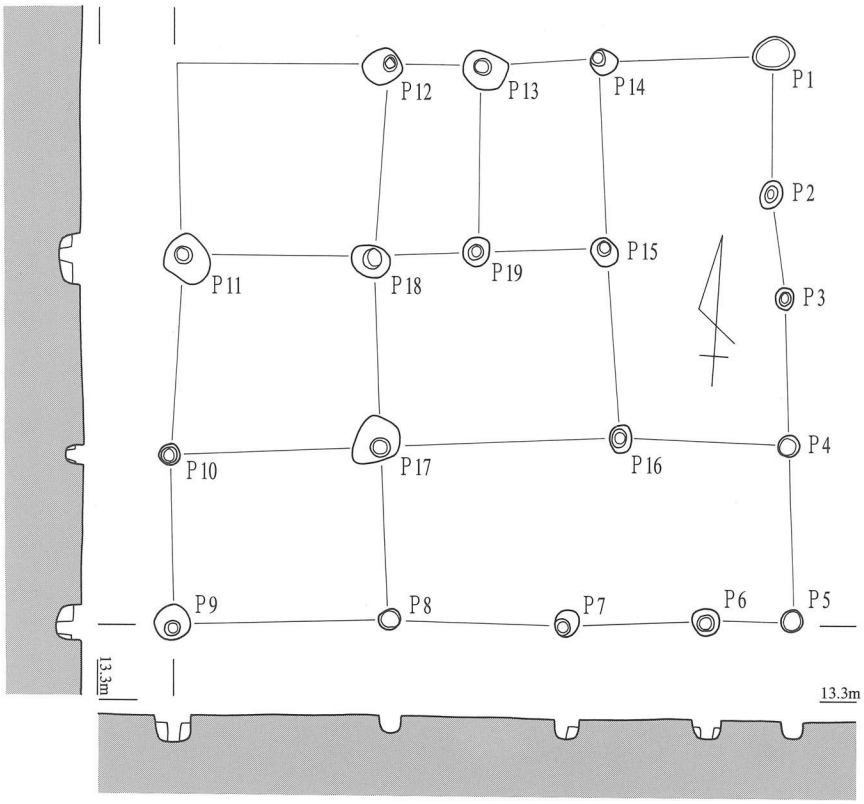
0　2m

SB07

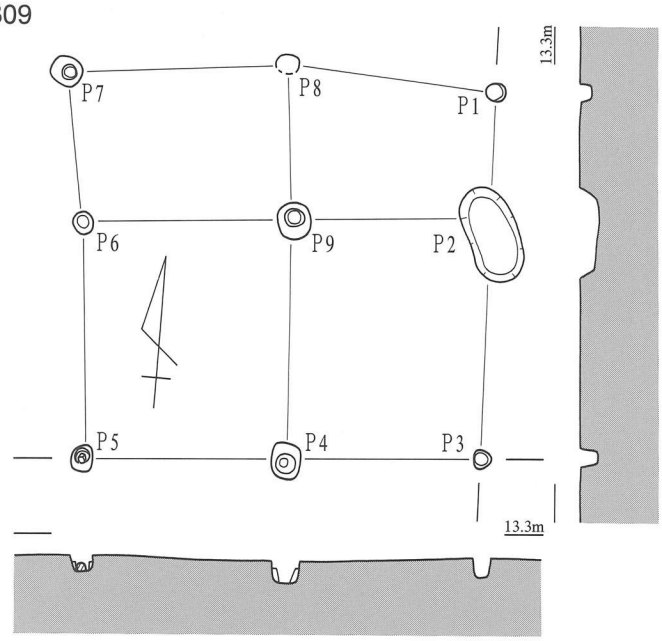

13.3m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
13.3m
0
4m

図版8　B地区遺構（2）

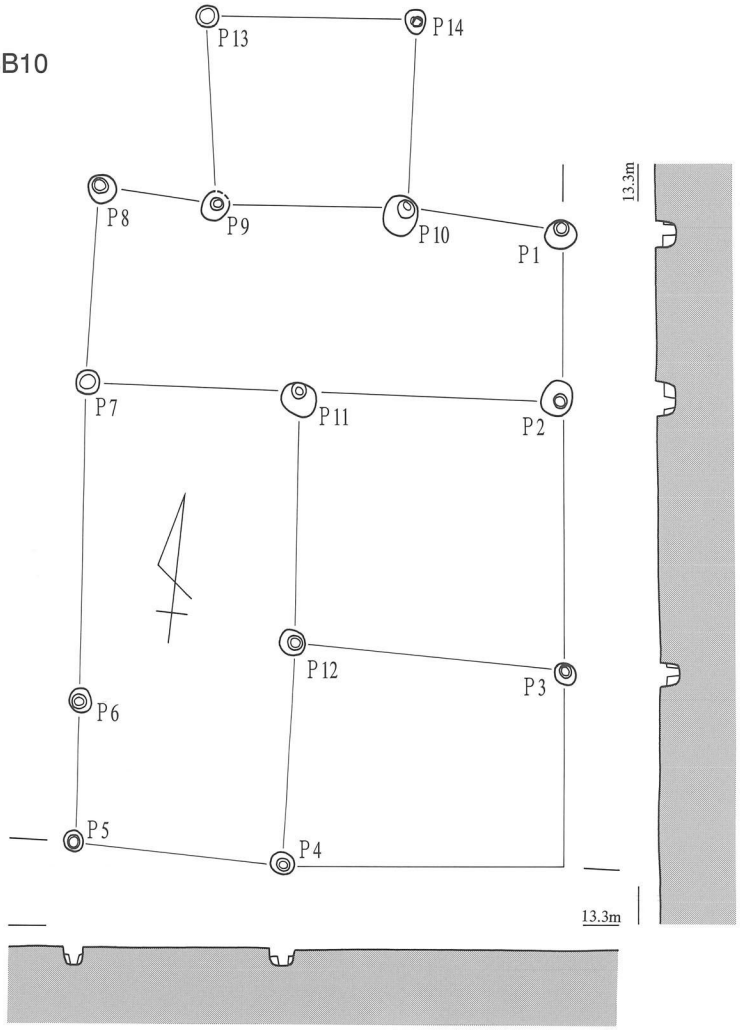
SB08



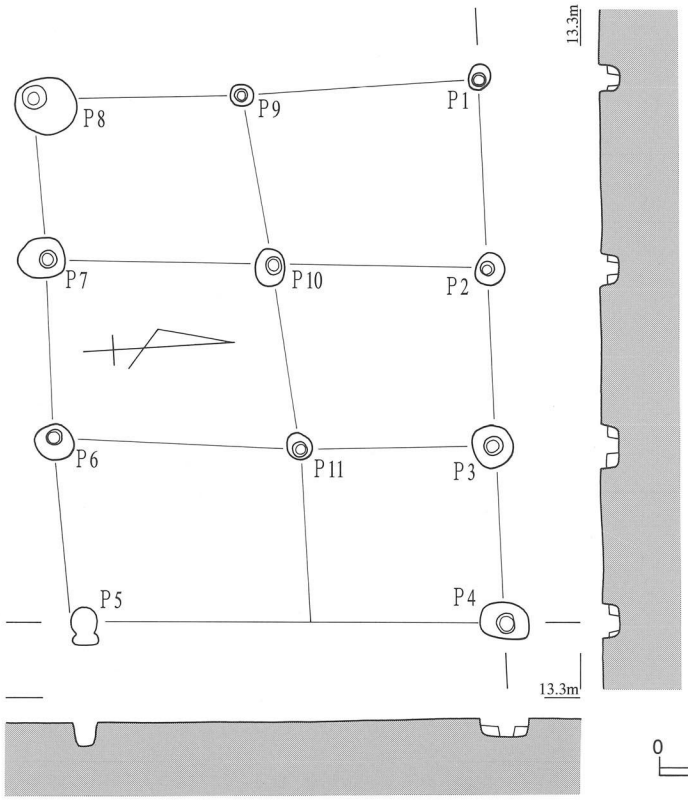
SB09



SB10

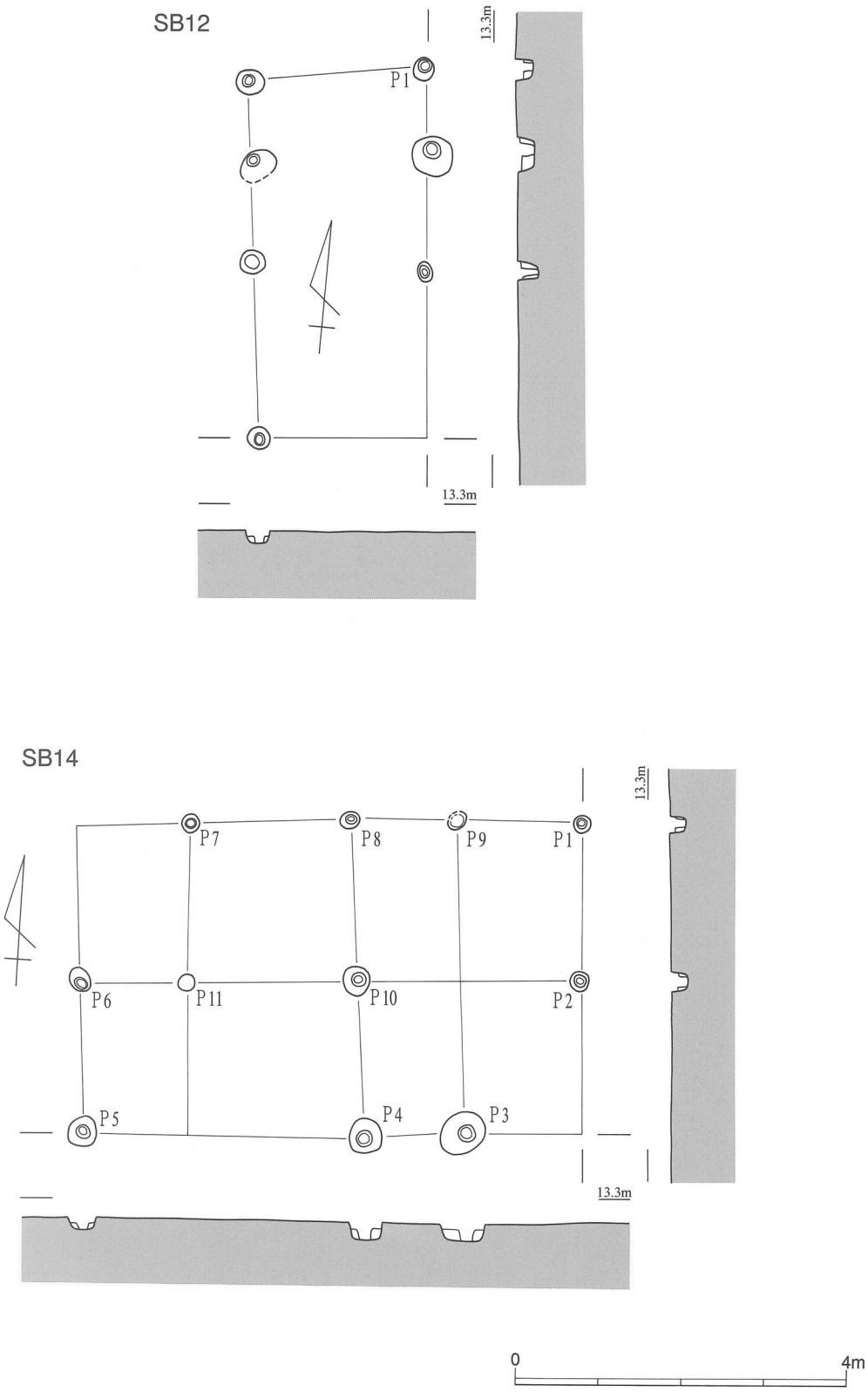


SB11

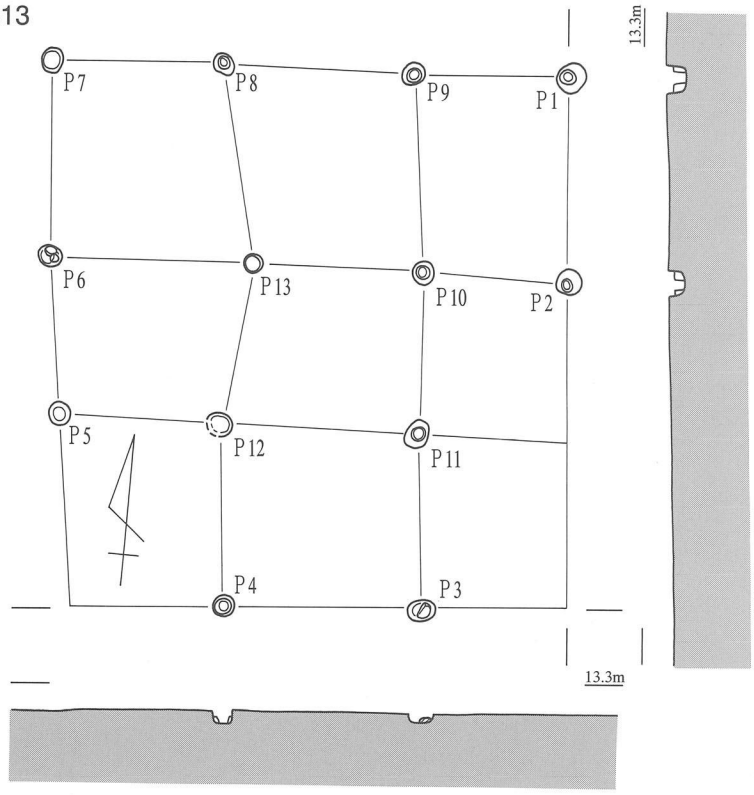


0　3m

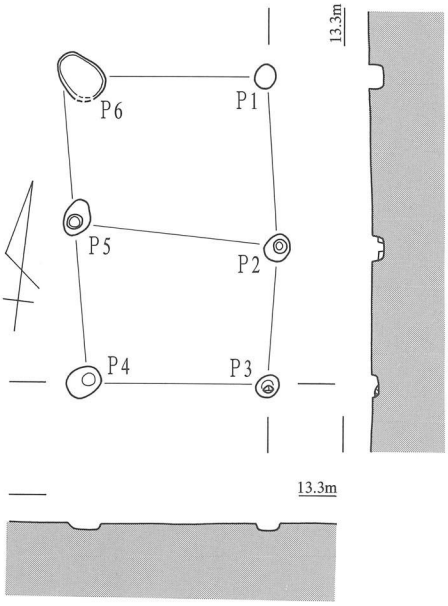
図版10　B地区遺構（1）


SB12
P1
13.3m
13.3m
SB14
P7
P8
P9
P1
P6
P11
P10
P2
P5
P4
P3
13.3m
13.3m
0
4m

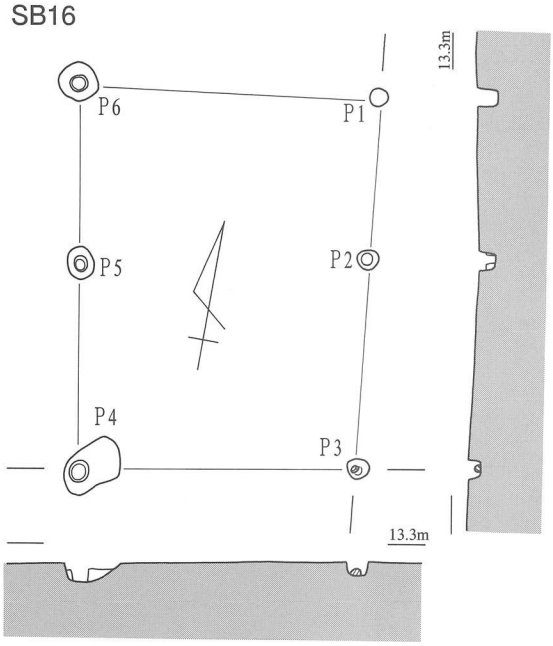
SB13



SB15

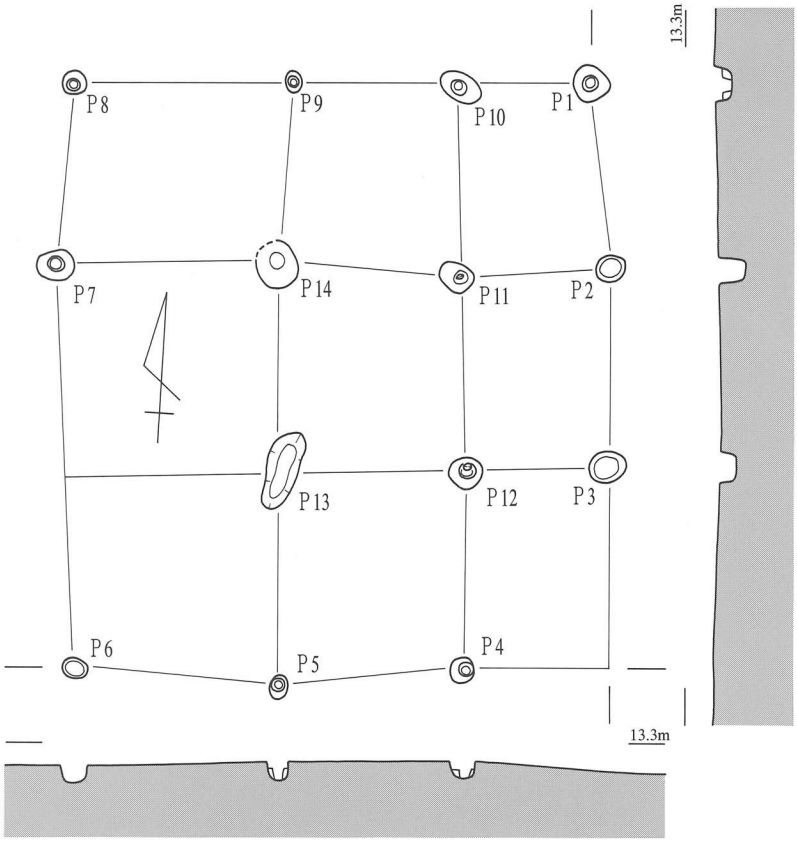


SB16

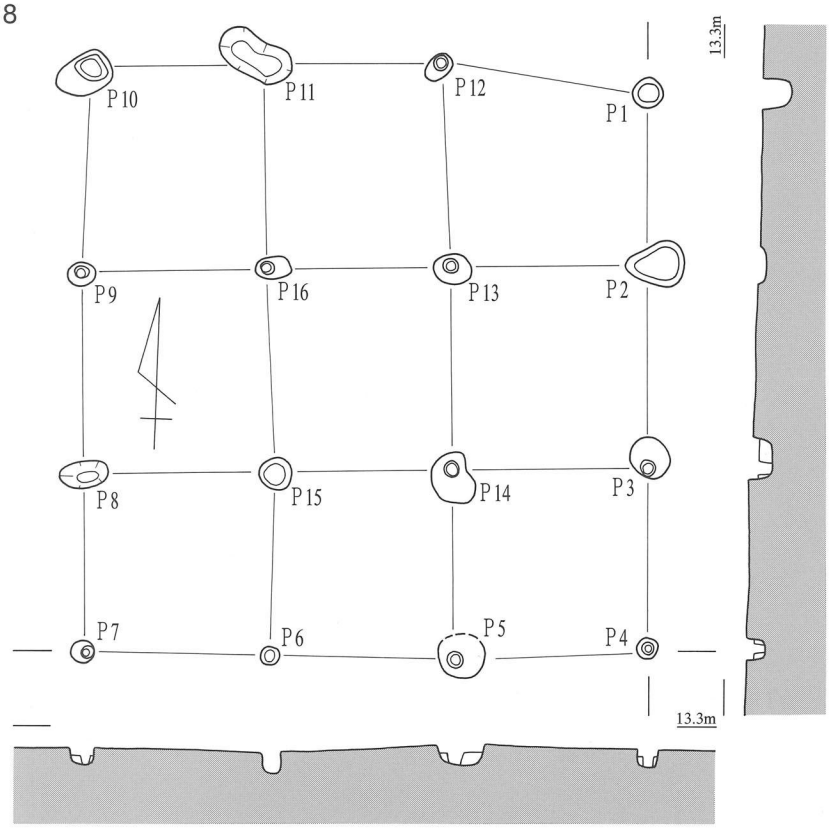


図版12　B地区遺構（3）

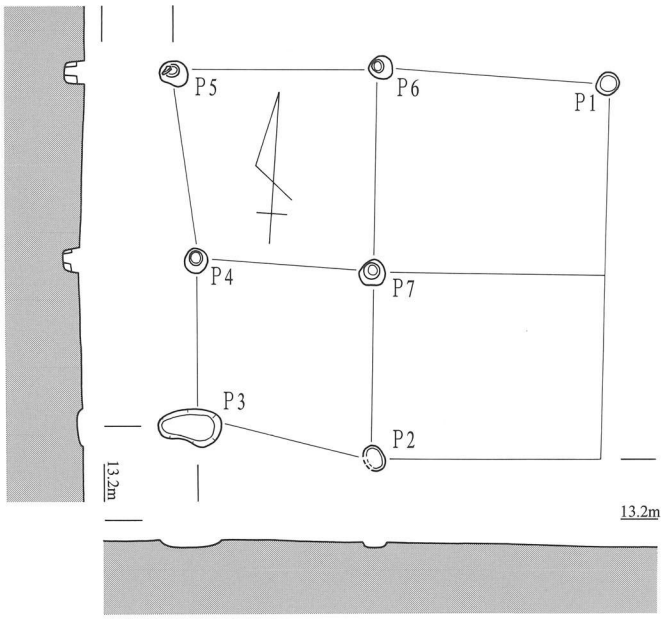
SB17



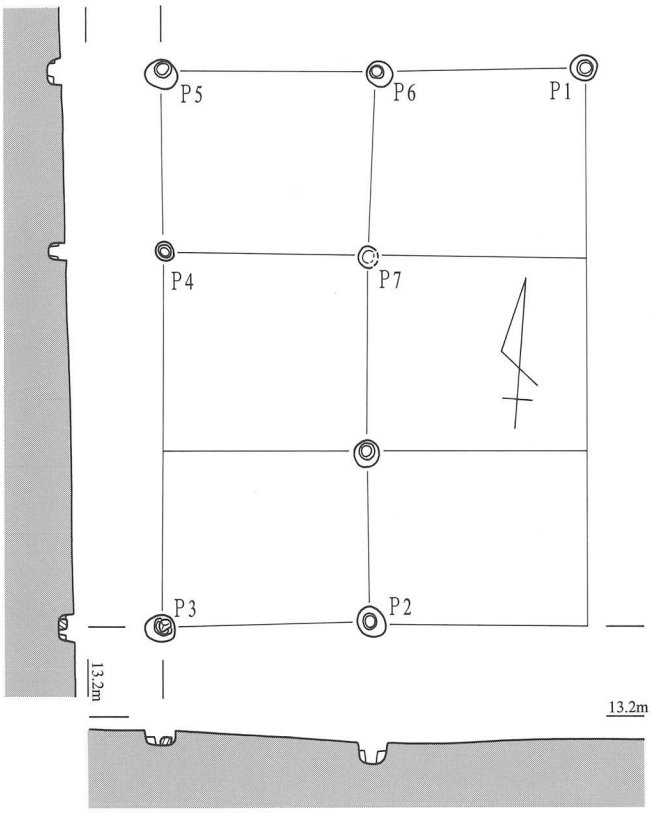
SB18



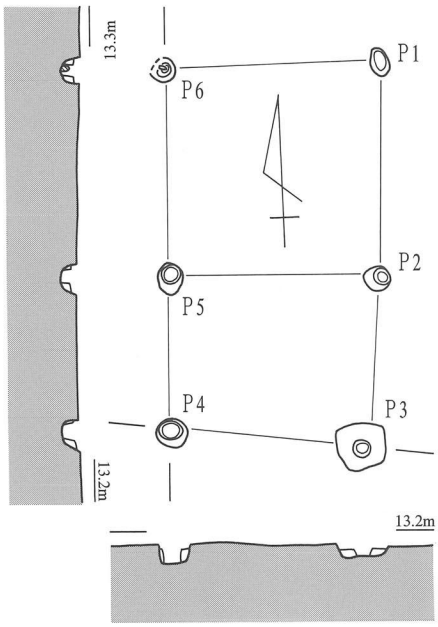
SB21



SB22

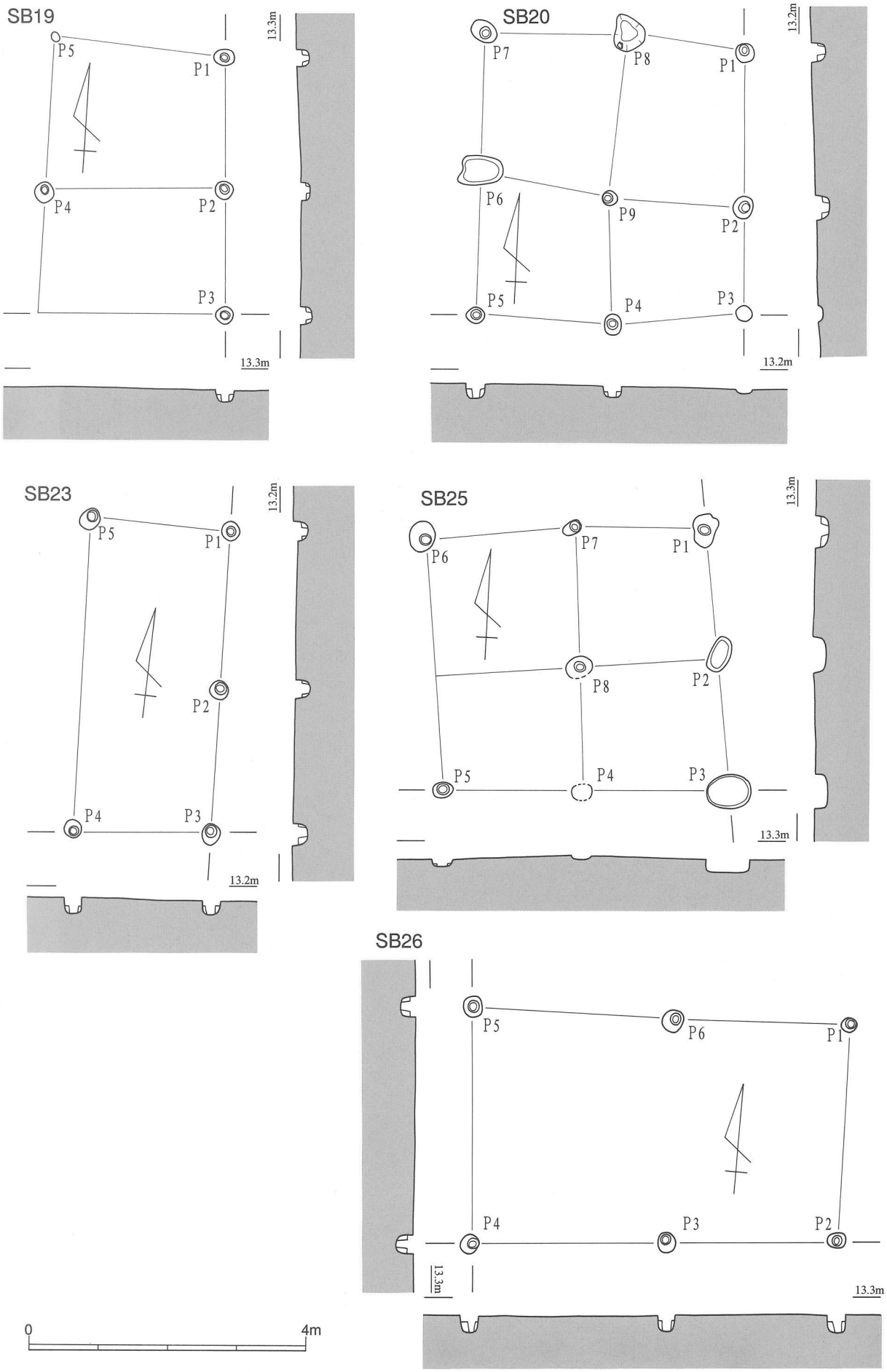


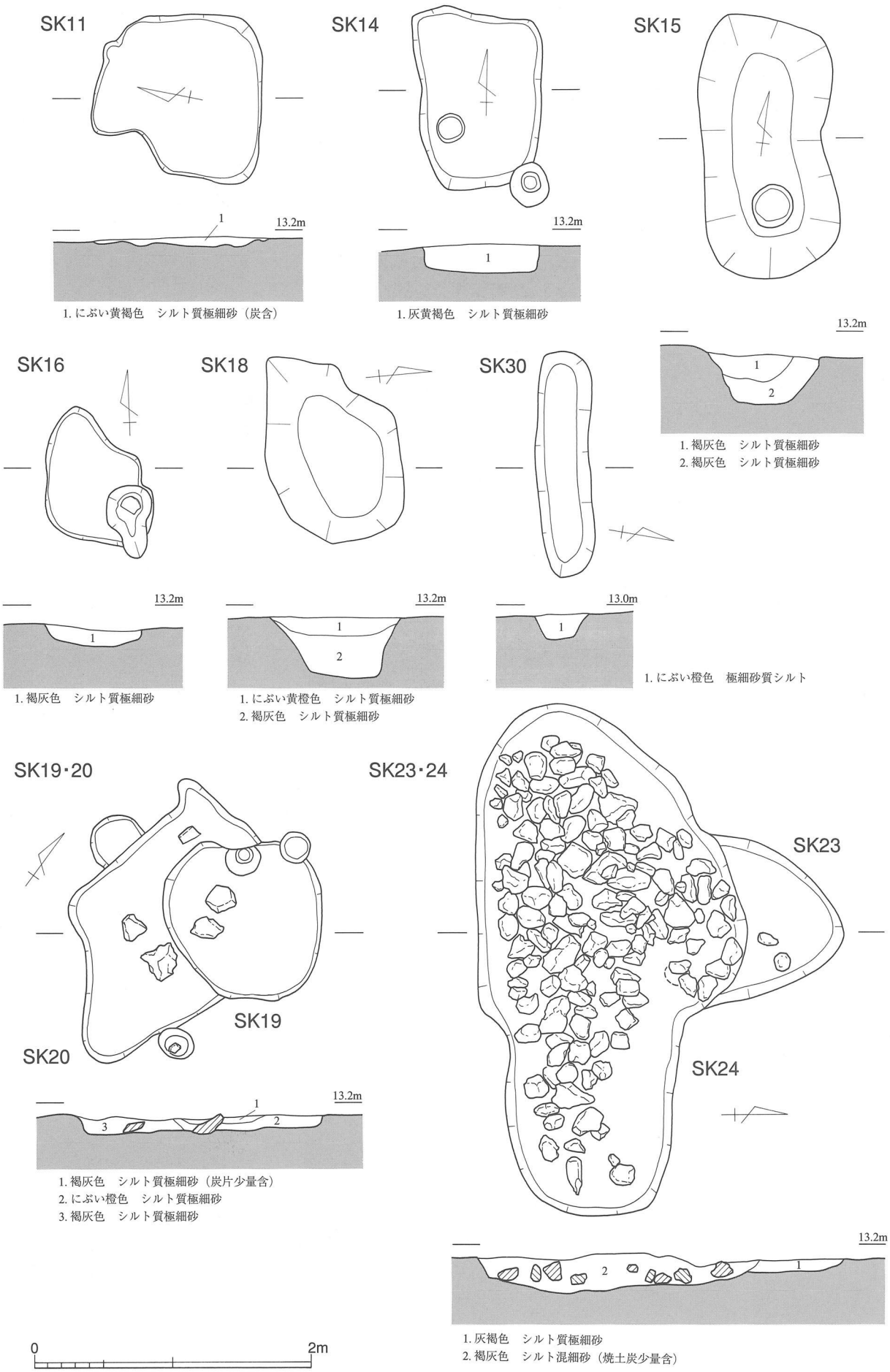
SB24



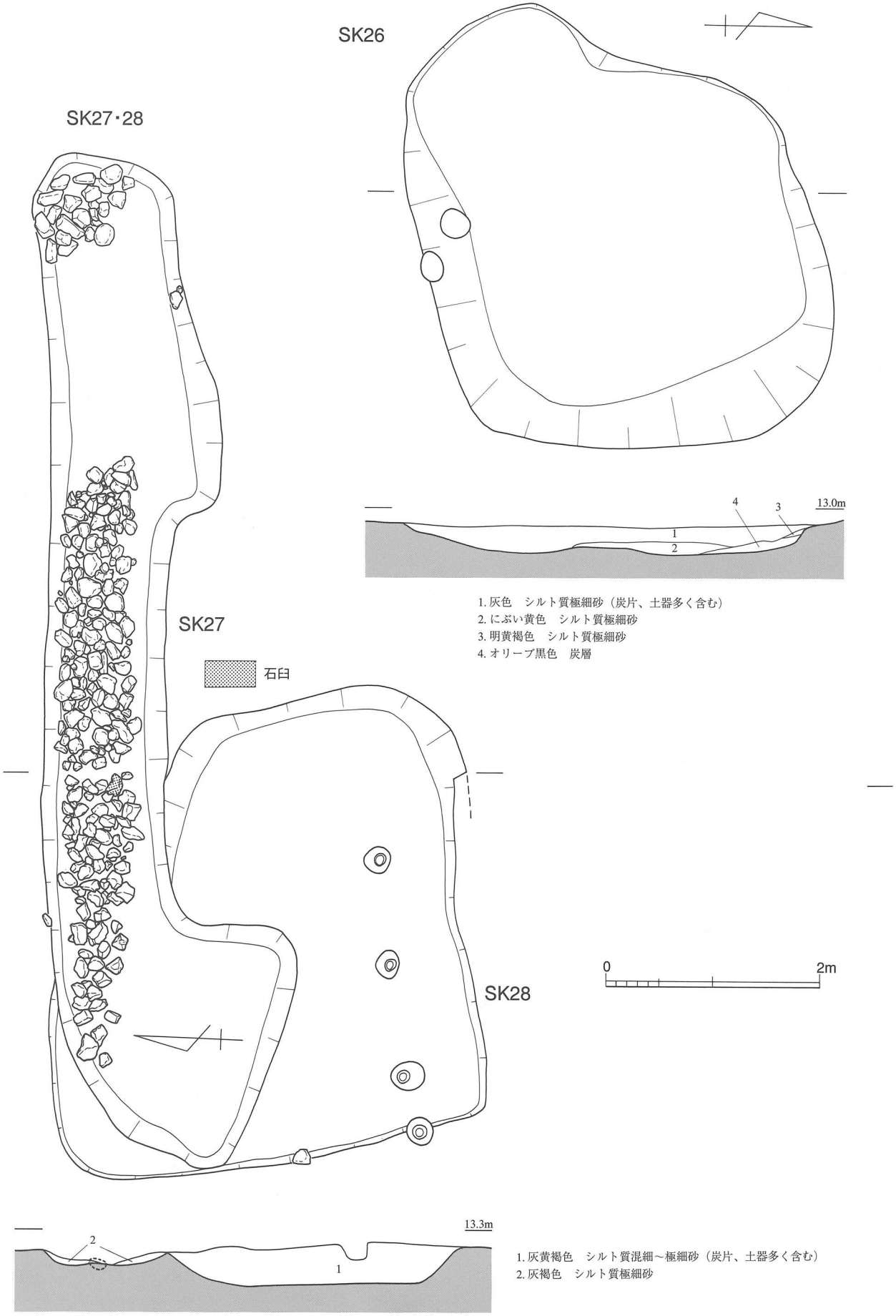
0　4m

図版14　B地区遺構（5）


SB19
P5
P1
P4
P2
P3
13.3m
13.3m
SB20
P7
P8
P1
P6
P9
P2
P5
P4
P3
13.2m
13.2m
SB23
P5
P1
P2
P4
P3
13.2m
13.2m
SB25
P6
P7
P1
P8
P2
P5
P4
P3
13.3m
13.3m
SB26
P5
P6
P1
P4
P3
P2
13.3m
13.3m
0
4m


SK11
13.2m
1
1. にぶい黄褐色　シルト質極細砂（炭含）
SK14
13.2m
1
1. 灰黄褐色　シルト質極細砂
SK15
13.2m
1
2
1. 褐灰色　シルト質極細砂
2. 褐灰色　シルト質極細砂
SK16
13.2m
1
1. 褐灰色　シルト質極細砂
SK18
13.2m
1
2
1. にぶい黄橙色　シルト質極細砂
2. 褐灰色　シルト質極細砂
SK30
13.0m
1
1. にぶい橙色　極細砂質シルト
SK19・20
SK19
SK20
13.2m
1
2
3
1. 褐灰色　シルト質極細砂（炭片少量含）
2. にぶい橙色　シルト質極細砂
3. 褐灰色　シルト質極細砂
SK23・24
SK23
SK24
13.2m
1
2
1. 灰褐色　シルト質極細砂
2. 褐灰色　シルト混細砂（焼土炭少量含）
0
2m

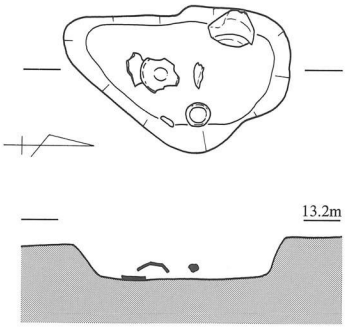
図版16　B地区遺構（7）



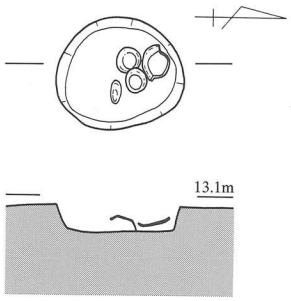
1. 灰色　シルト質極細砂（炭片、土器多く含む）
2. にぶい黄色　シルト質極細砂
3. 明黄褐色　シルト質極細砂
4. オリーブ黒色　炭層

1. 灰黄褐色　シルト質混細～極細砂（炭片、土器多く含む）
2. 灰褐色　シルト質極細砂

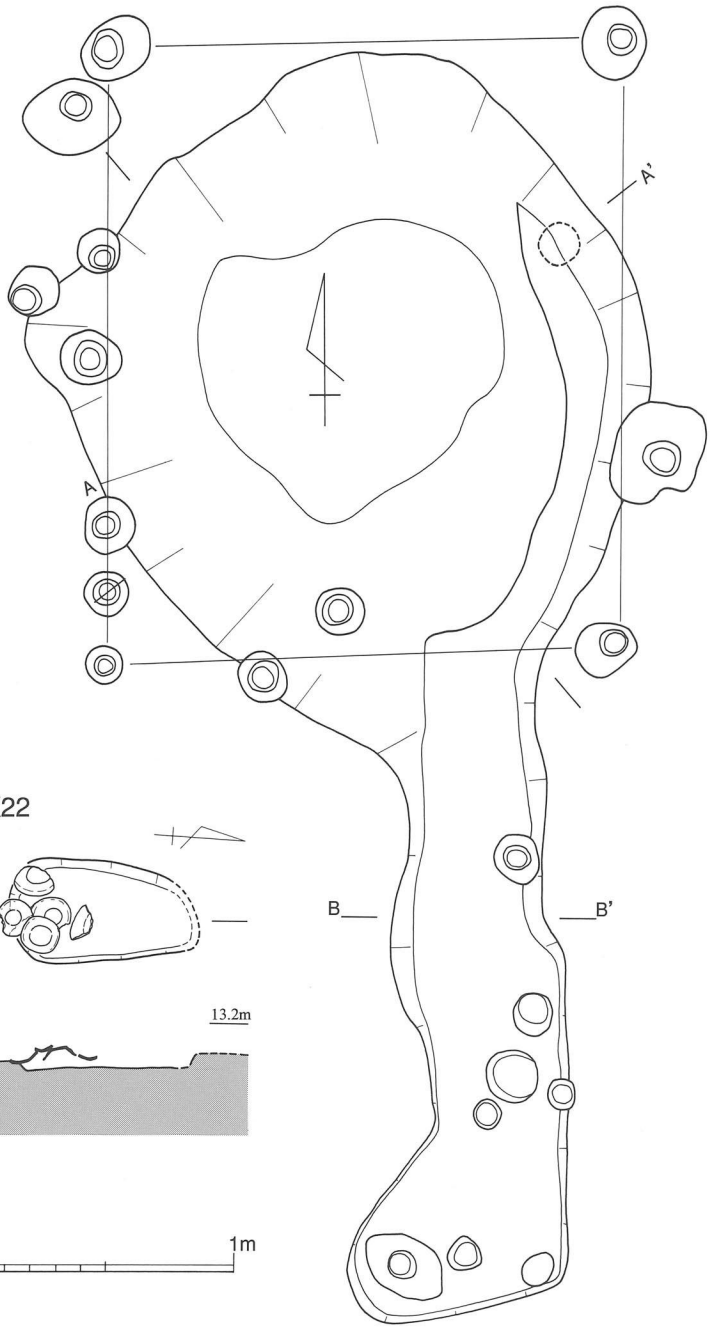
SK12



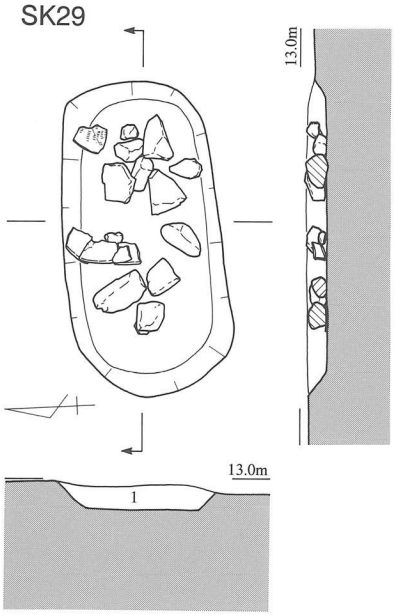
SK21



SE01

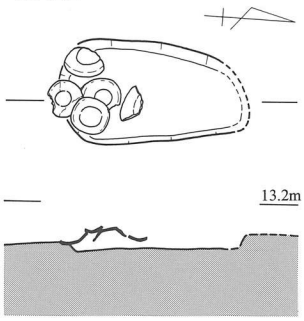


SK29

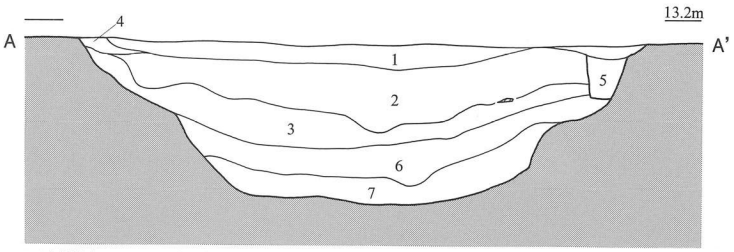


1. にぶい橙色　極細砂質シルト

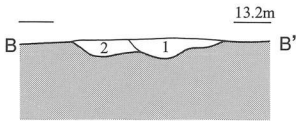
SK22



0　1m



1. 灰黄褐色　シルト質極細砂
2. 暗褐色　シルト質極細砂（炭多く含）
3. にぶい黄褐色　シルト質極細砂
4. 暗褐色　シルト質極細砂
5. 褐灰色　シルト質極細砂
6. 褐灰色　シルト質極細砂
7. 褐灰色　シルト質極細砂

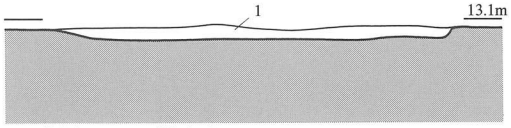


1. 褐灰色　シルト質極細砂
2. 褐灰色　シルト質極細砂

0　2m

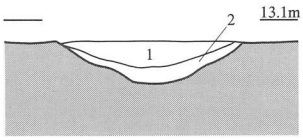
図版18　B地区遺構（9）

SD06



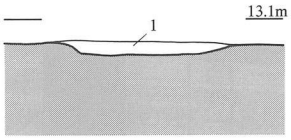
1. 灰黄褐色　シルト質極細砂

SD07



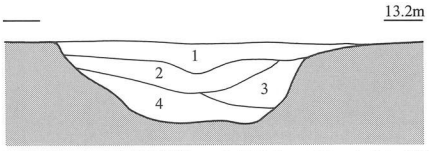
1. 灰色　シルト質極細砂
2. 灰色　極細砂質シルト

SD10



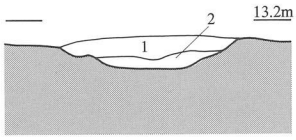
1. 黄灰色　シルト質極細砂

SD09



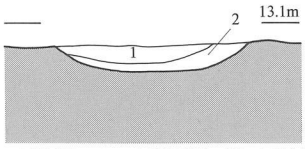
1. 黄灰色　シルト混極細砂
2. 暗灰黄　シルト混極細砂
3. 灰オリーブ色　シルト質極細砂
4. 黄灰色　極細砂質シルト

SD12



1. 灰褐色　シルト質極細砂
2. にぶい橙色　シルト混極細砂

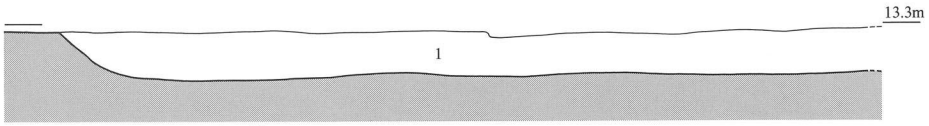
SD14



1. 灰黄褐色　シルト質極細砂（炭・土器含）
2. にぶい黄褐色　シルト質極細砂

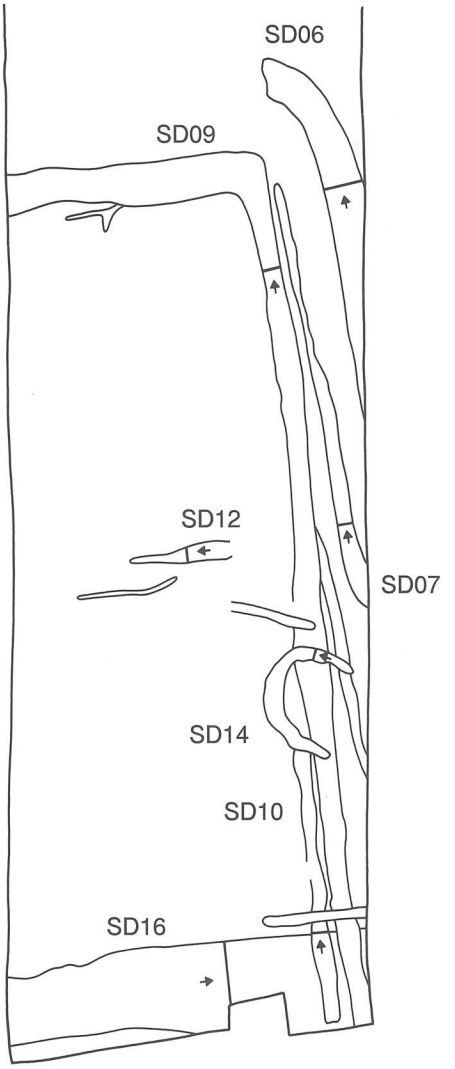
0　1m

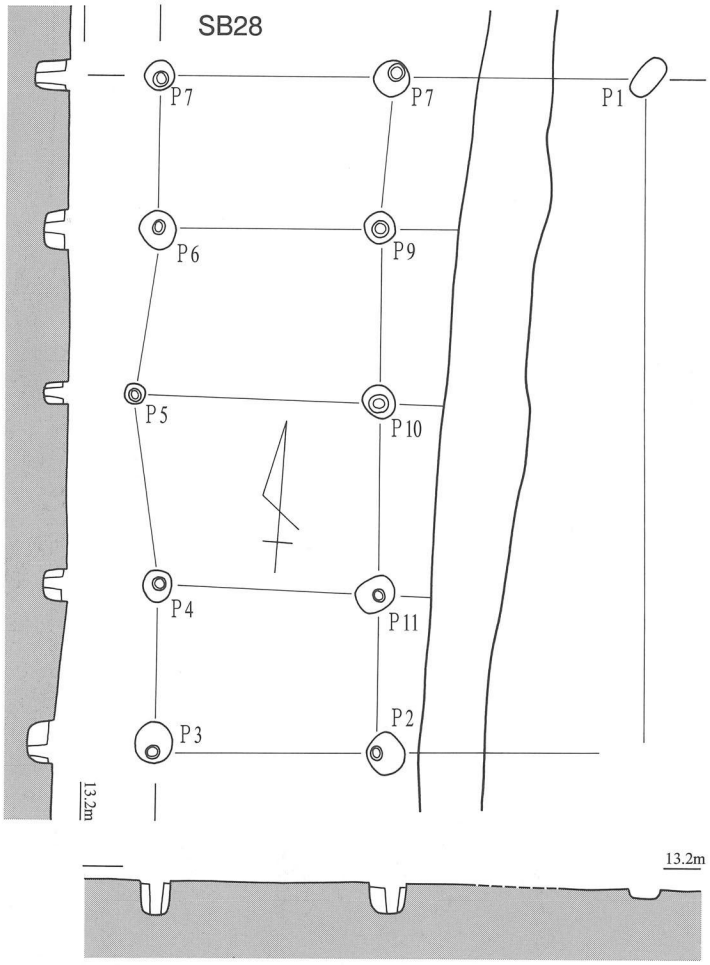
SD16

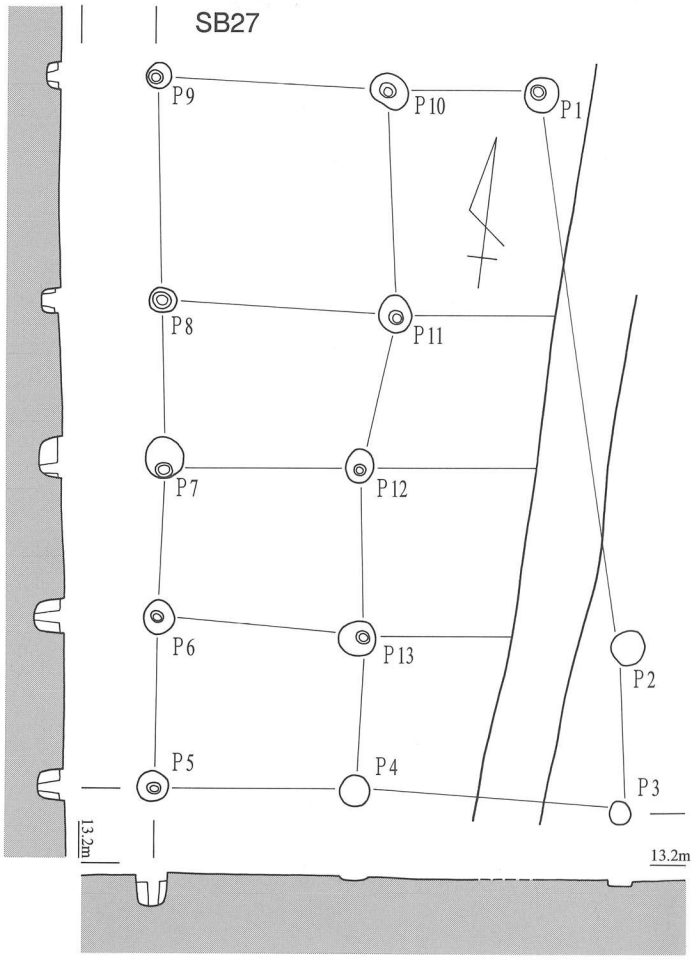


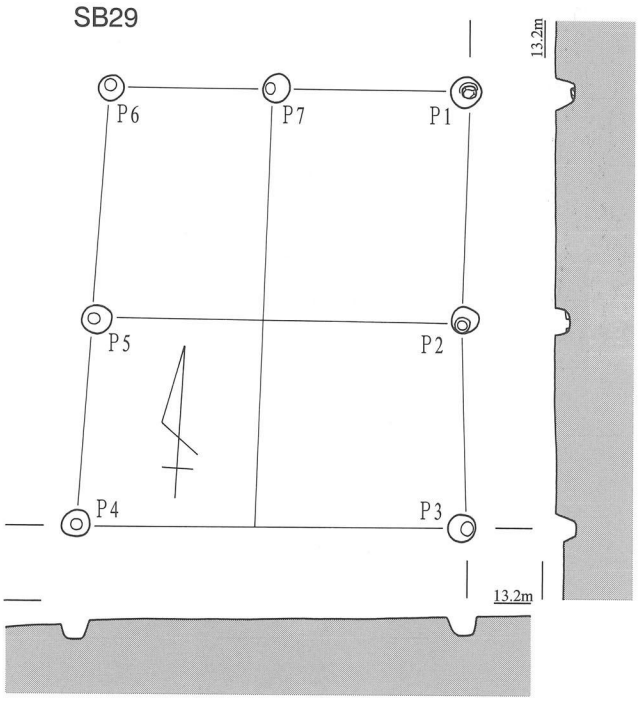
1. 暗灰黄色　細～粗砂（円礫若干含）

0　2m




SB28
P7
P7
P1
P6
P9
P5
P10
P4
P11
P3
P2
13.2m
13.2m

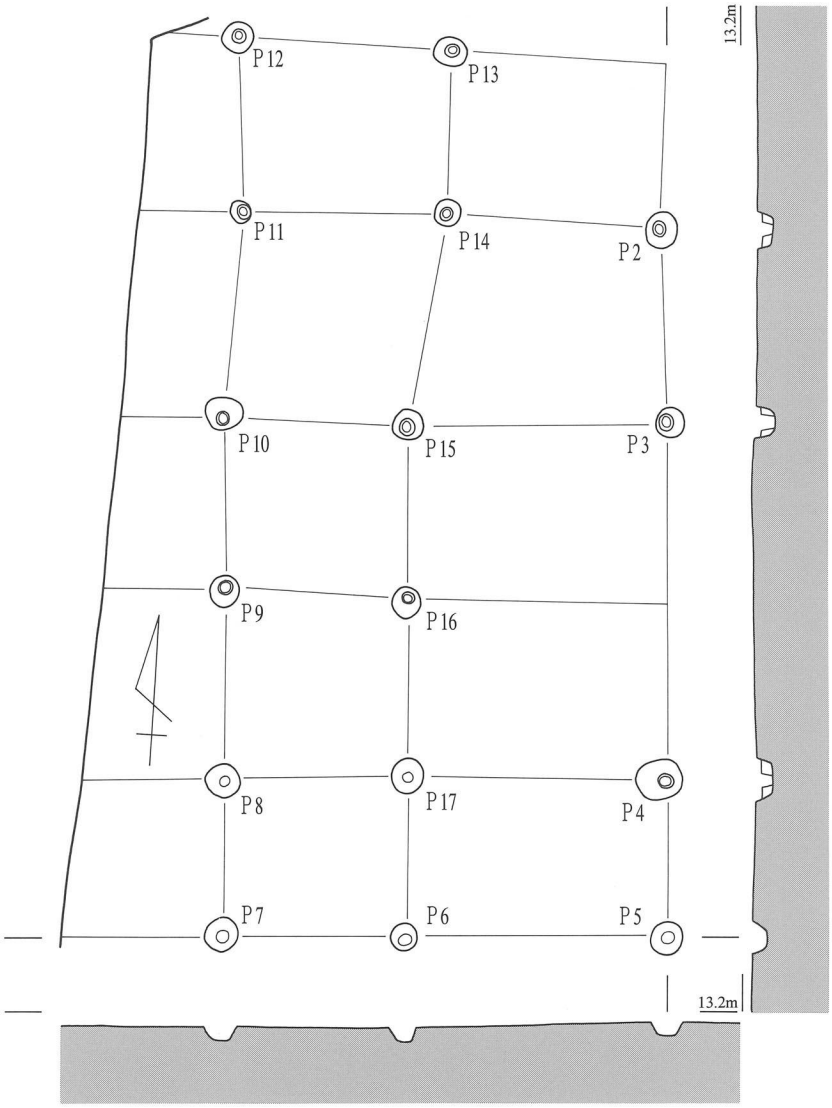

SB27
P9
P10
P1
P8
P11
P7
P12
P6
P13
P2
P5
P4
P3
13.2m
13.2m


SB29
13.2m
P6
P7
P1
P5
P2
P4
P3
13.2m

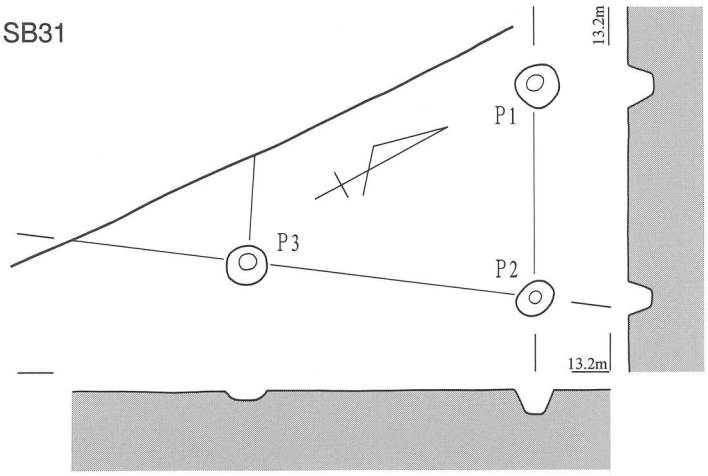
0　4m

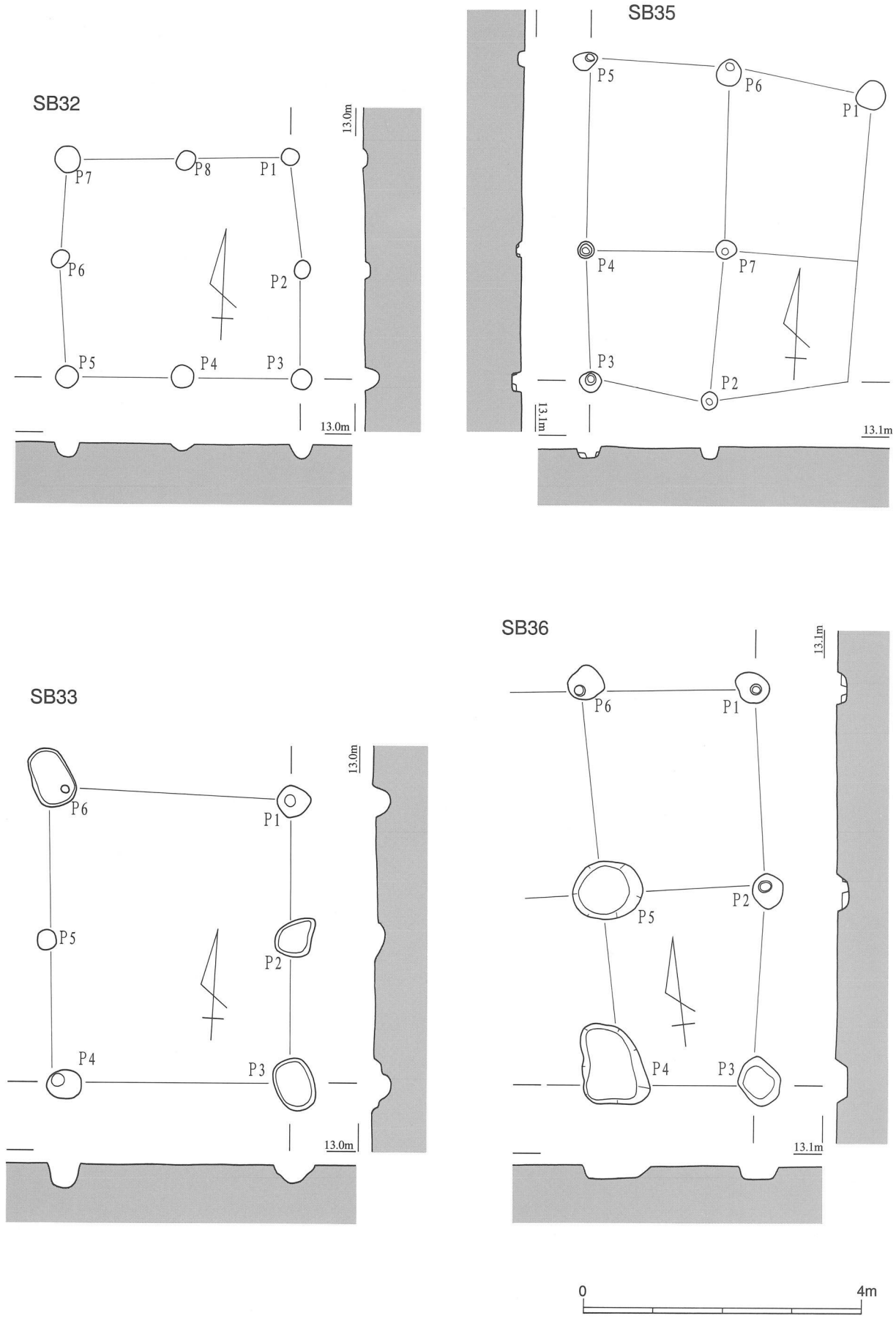
図版20　C地区遺構（2）

SB30



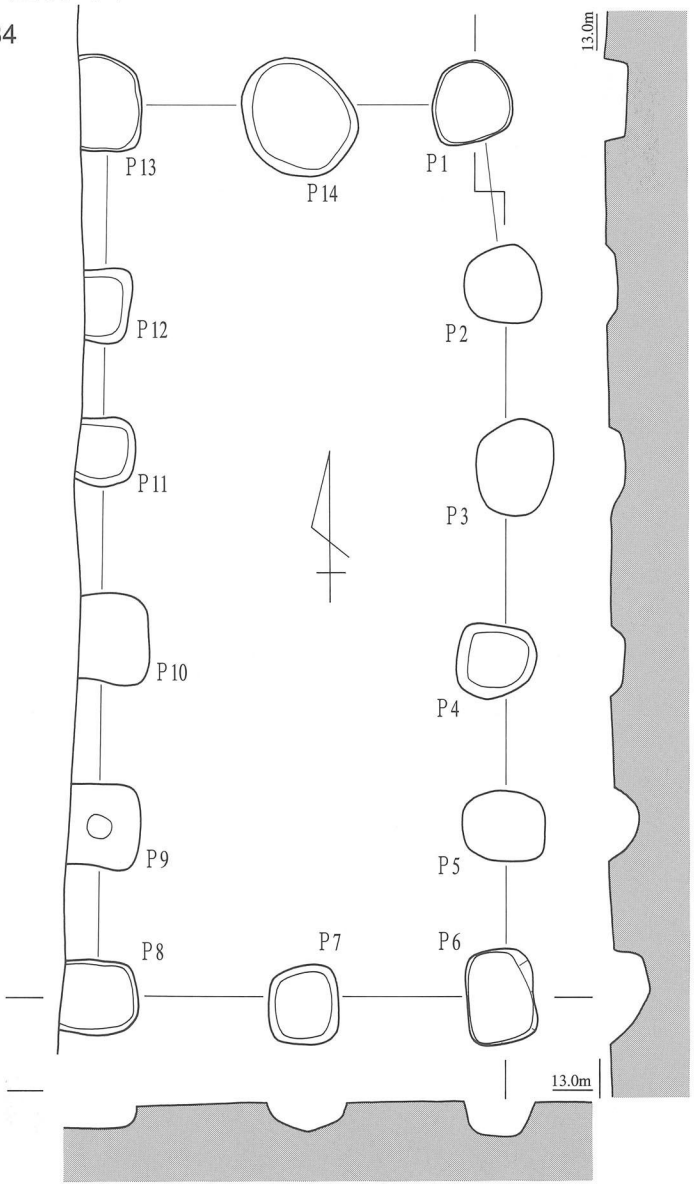
SB31



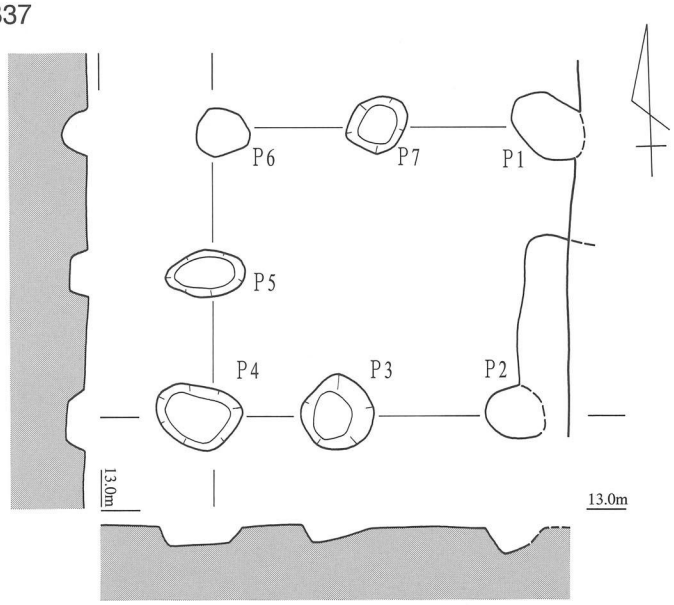

SB32
P7
P8
P1
P6
P2
P5
P4
P3
13.0m
13.0m
SB35
P5
P6
P1
P4
P7
P3
P2
13.1m
13.1m
SB33
P6
P1
P5
P2
P4
P3
13.0m
13.0m
SB36
P6
P1
P5
P2
P4
P3
13.1m
13.1m
0
4m

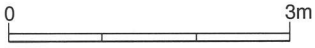
図版22　C地区遺構（4）

SB34

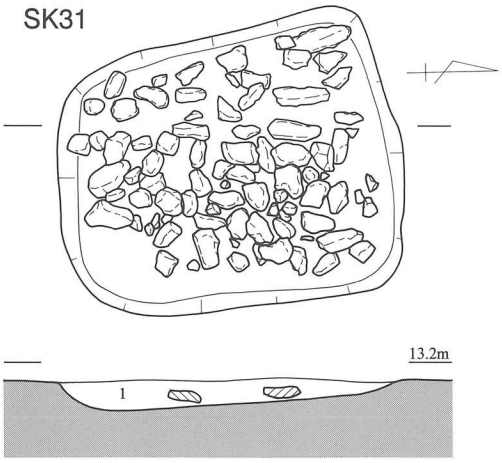


SB37



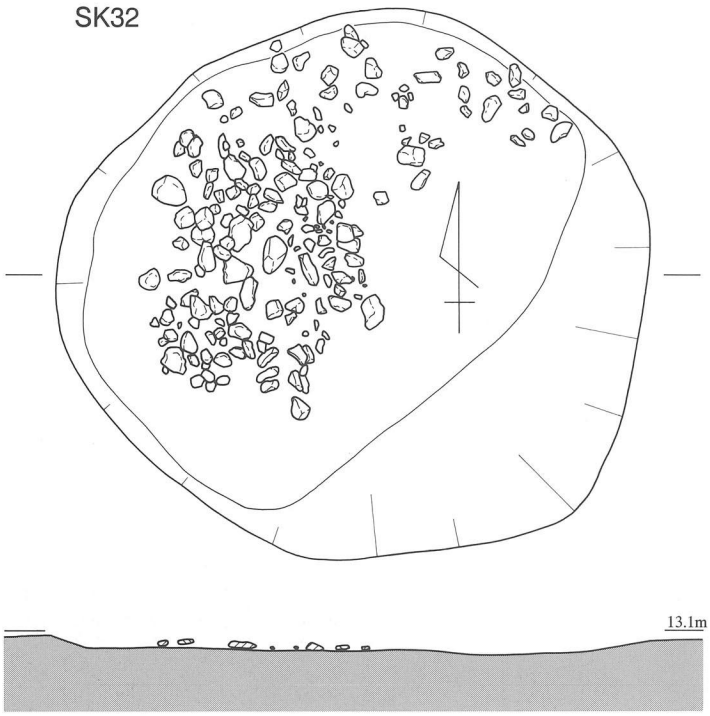


SK31

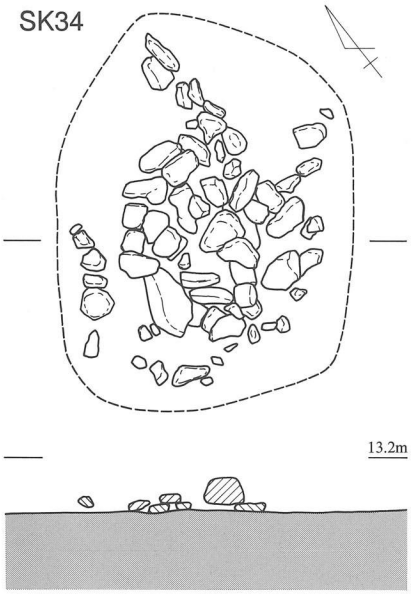


1. 黄灰色　シルト質極細砂

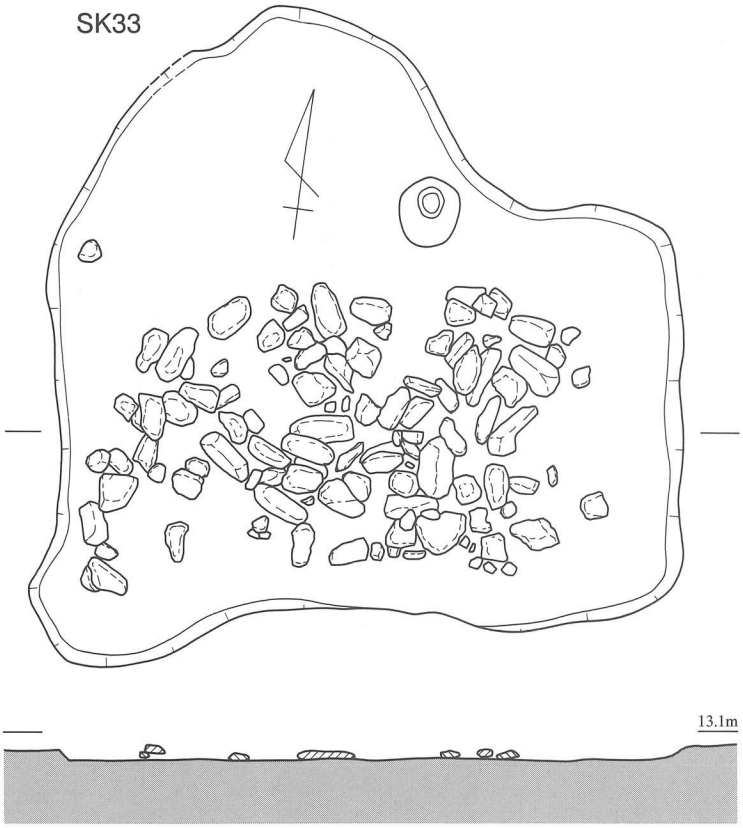
SK32



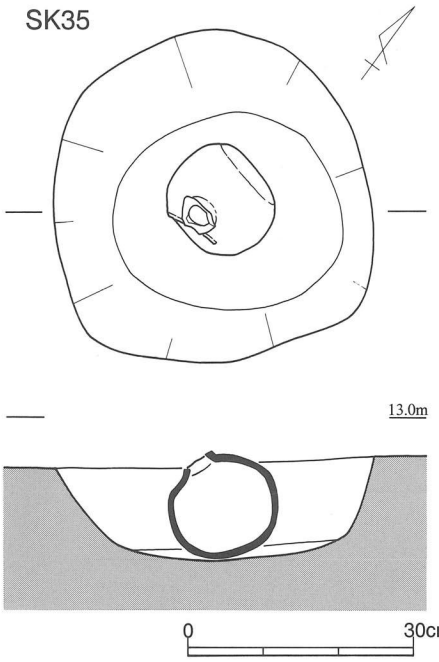
SK34



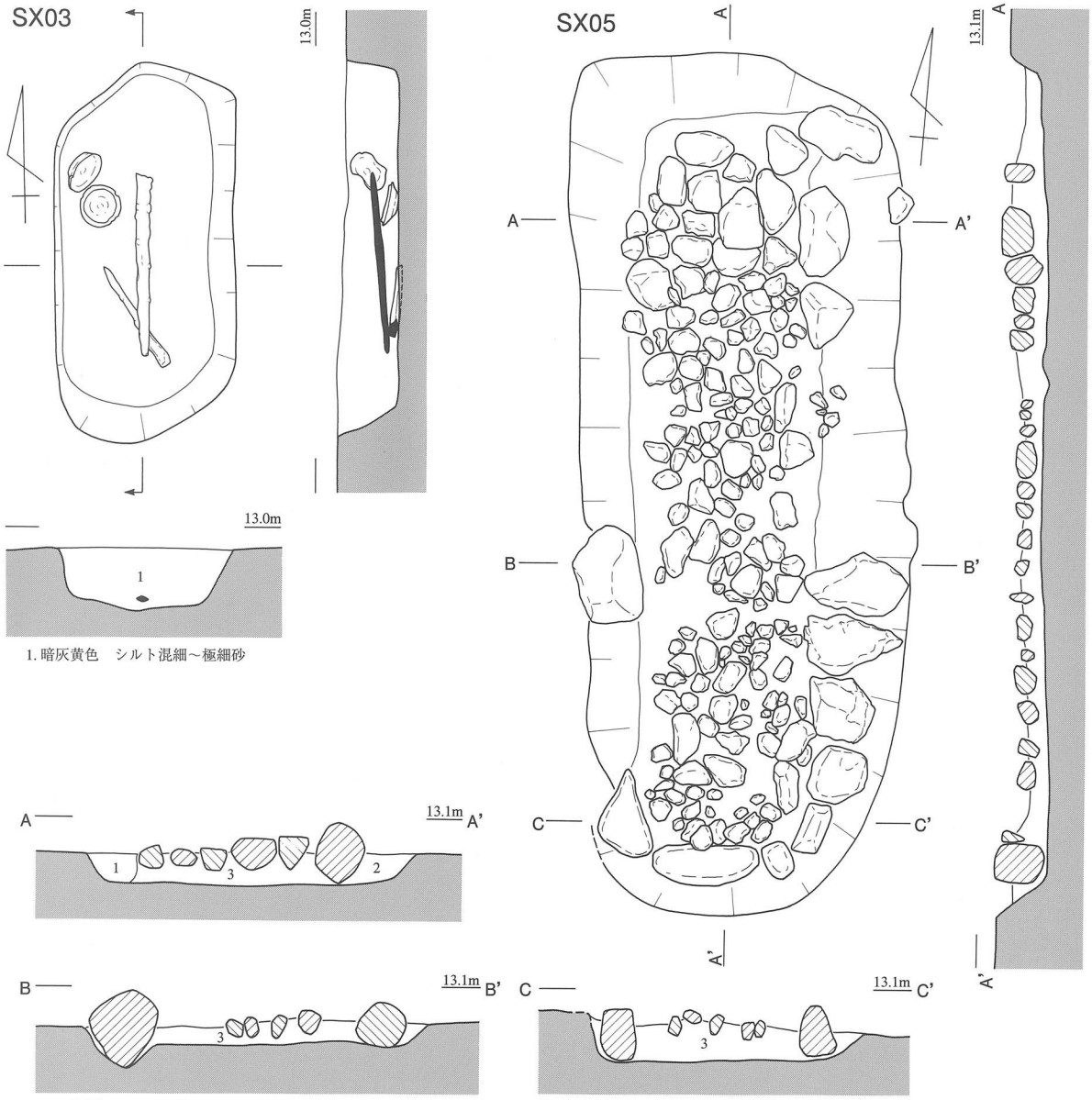
SK33



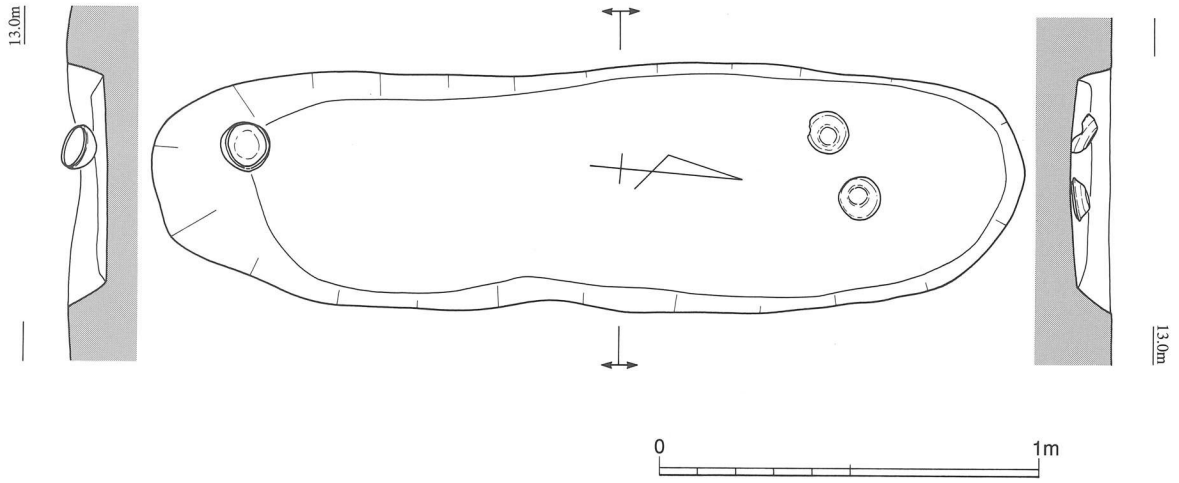
SK35

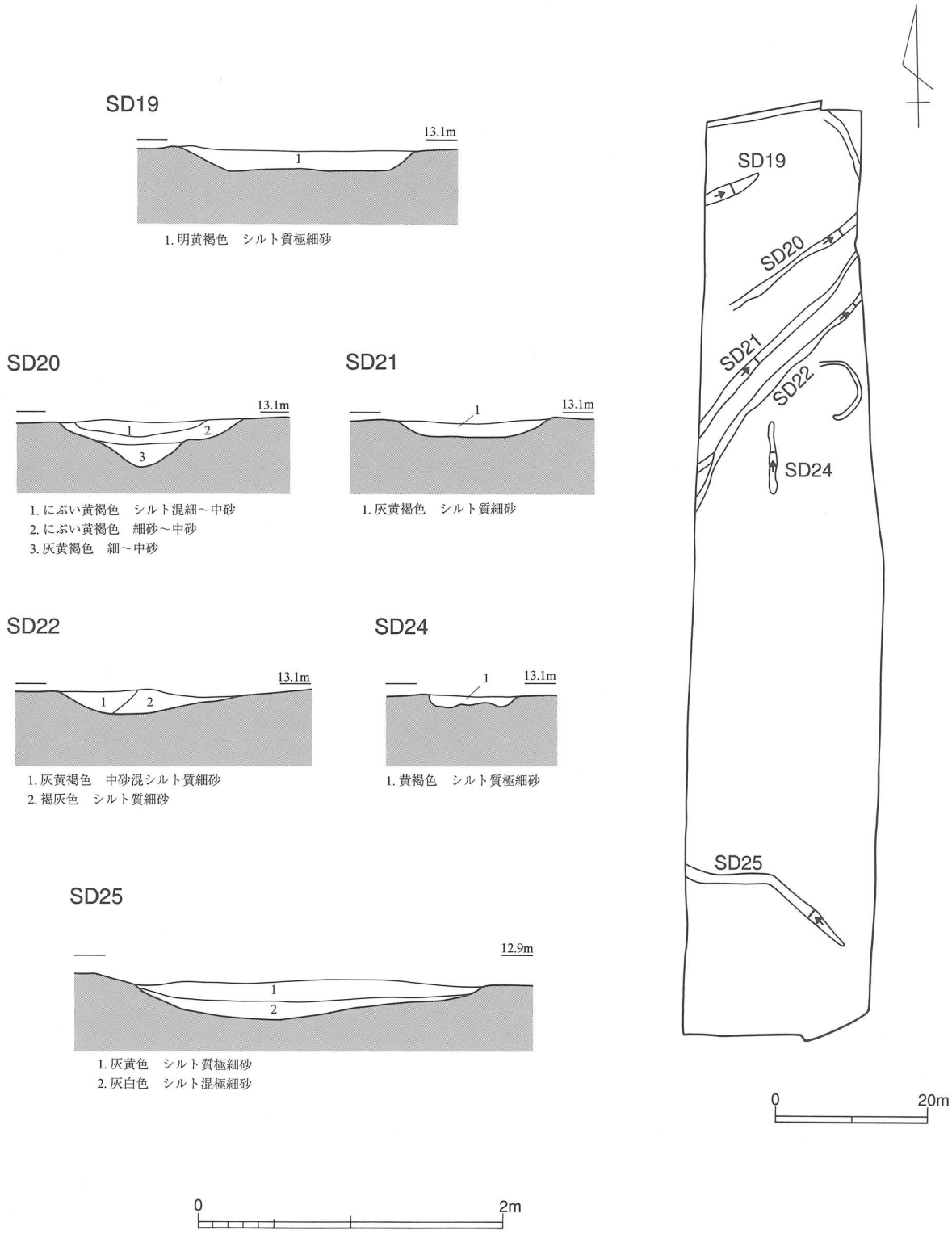


図版24　C地区遺構（6）

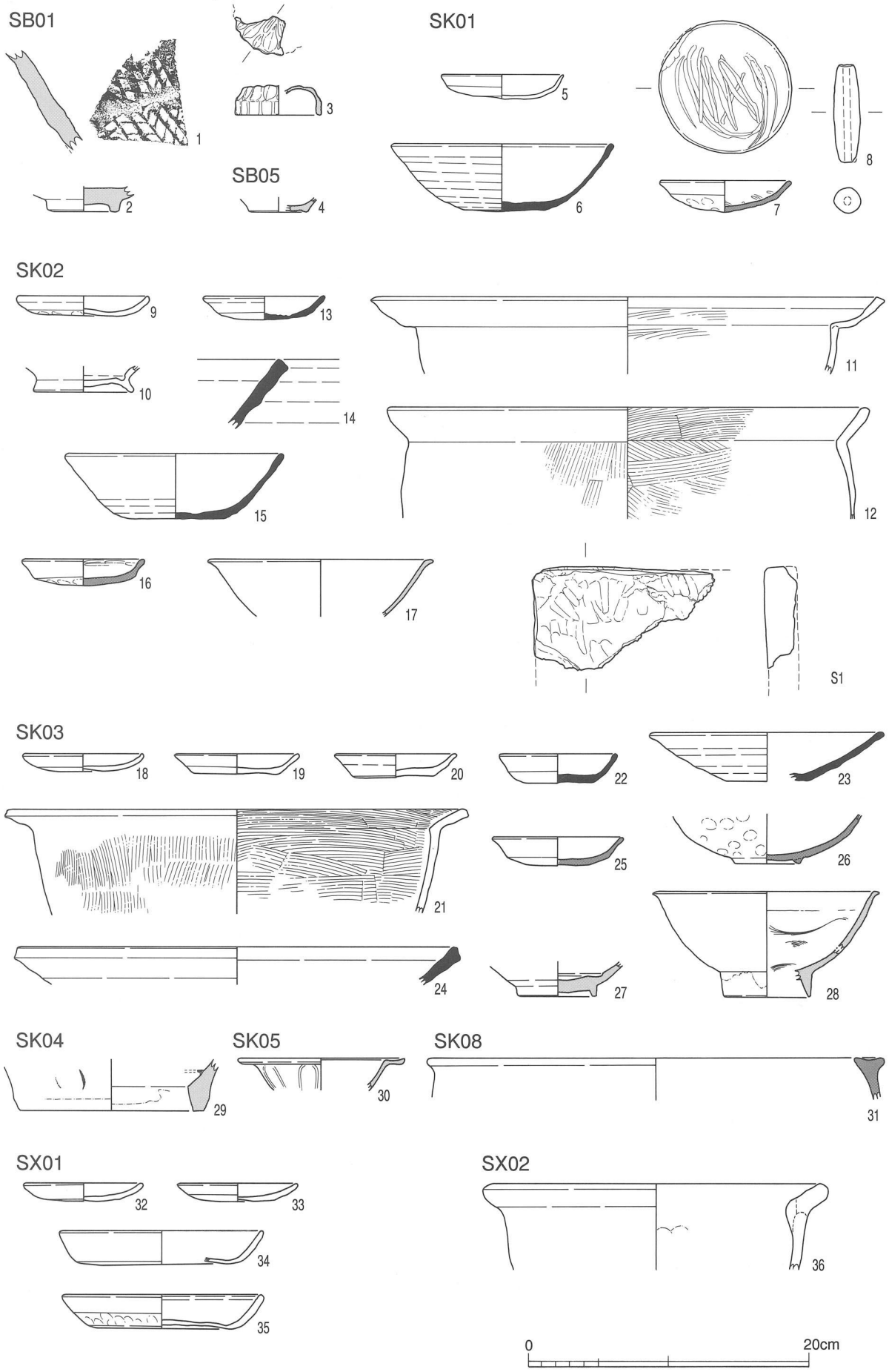


SX04

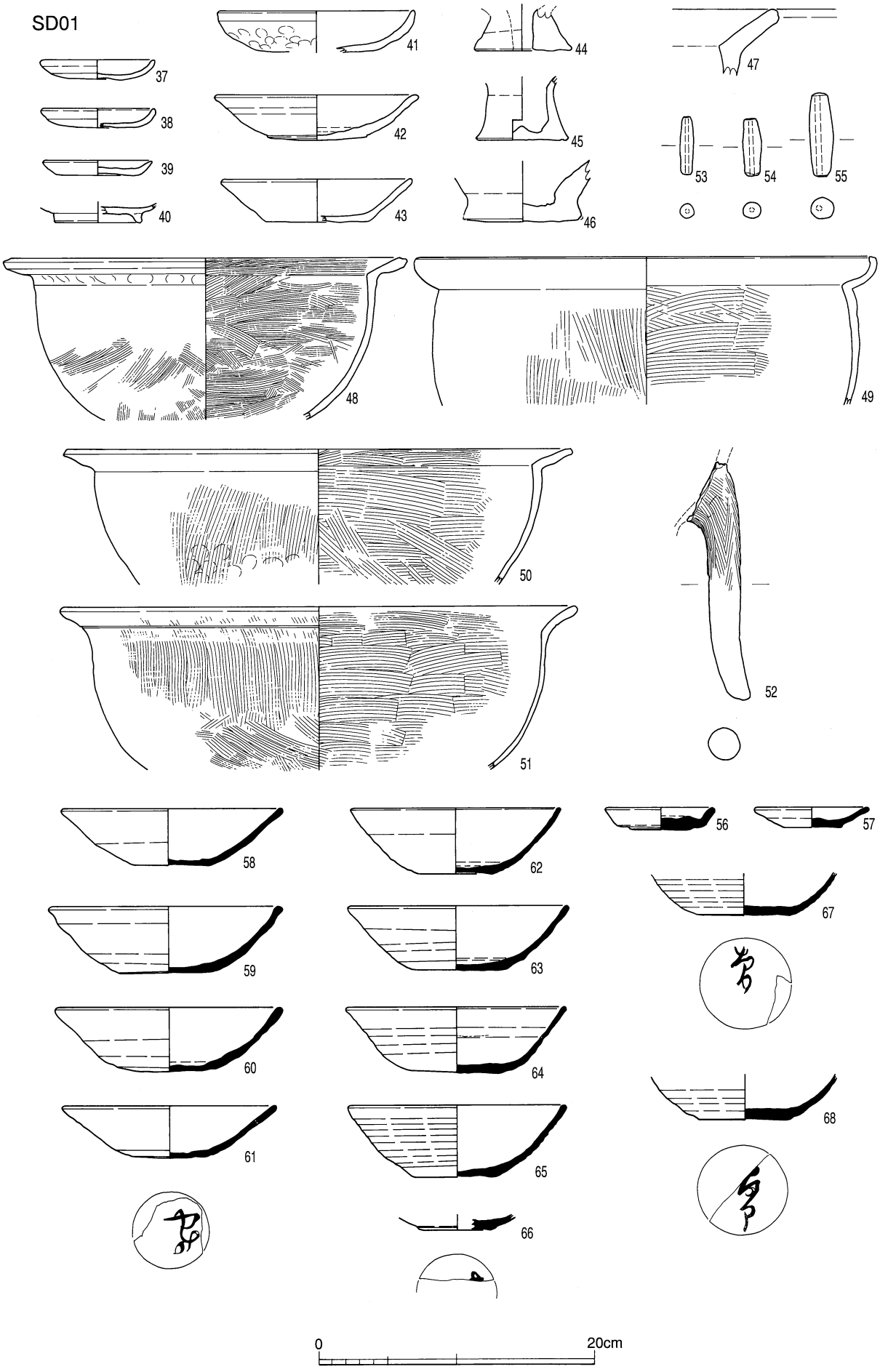



SD19
13.1m
1
1. 明黄褐色　シルト質極細砂
SD20
13.1m
1
2
3
1. にぶい黄褐色　シルト混細～中砂
2. にぶい黄褐色　細砂～中砂
3. 灰黄褐色　細～中砂
SD21
13.1m
1
1. 灰黄褐色　シルト質細砂
SD22
13.1m
1
2
1. 灰黄褐色　中砂混シルト質細砂
2. 褐灰色　シルト質細砂
SD24
13.1m
1
1. 黄褐色　シルト質極細砂
SD25
12.9m
1
2
1. 灰黄色　シルト質極細砂
2. 灰白色　シルト混極細砂
0
2m
SD19
SD20
SD21
SD22
SD24
SD25
0
20m

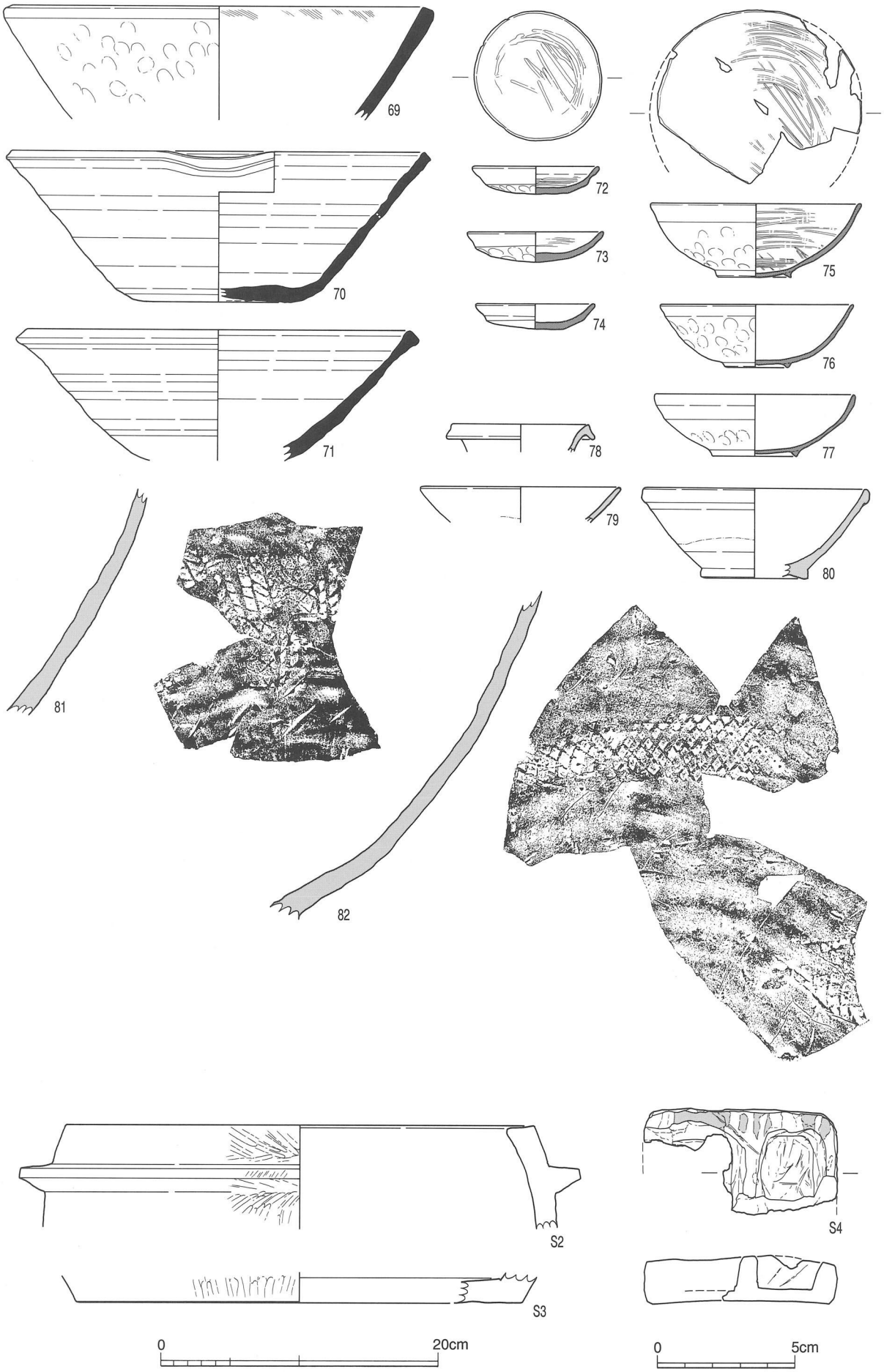
図版26　A地区遺物（1）



SD01


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
53
54
55
48
49
50
51
52
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0
20cm

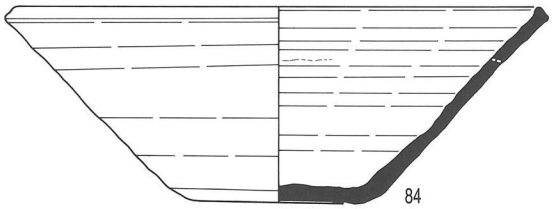
図版28　A地区遺物（3）

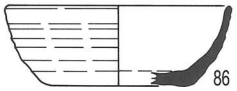


SD03

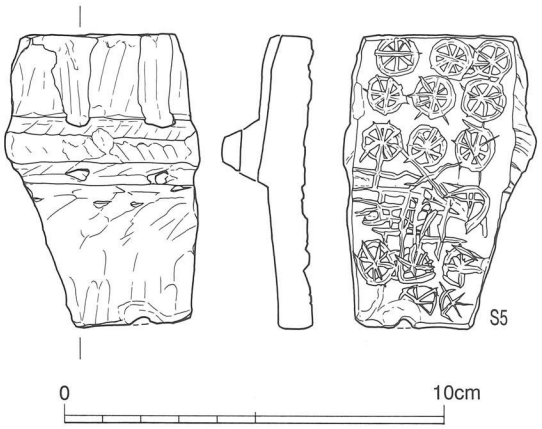
83

85


84

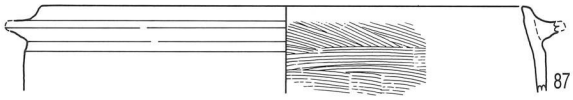

86

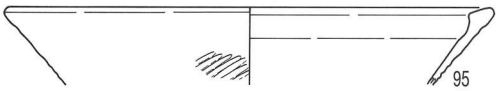
SD04

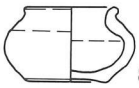

S5

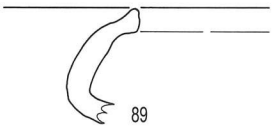
0　10cm

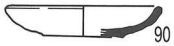
SD05

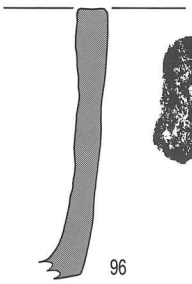

87

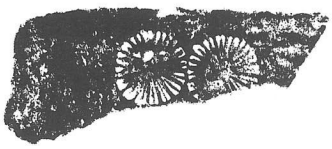

95


88

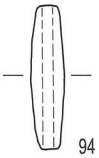

89

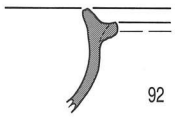

90


96



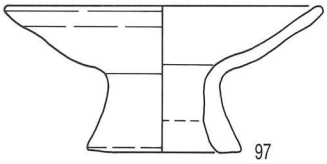
91

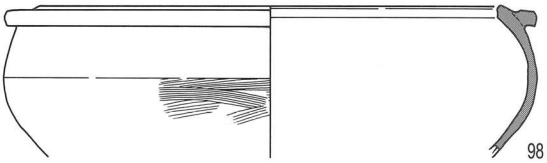

94

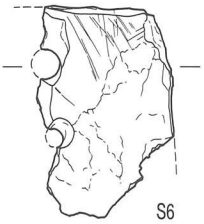

92

93

包含層


97

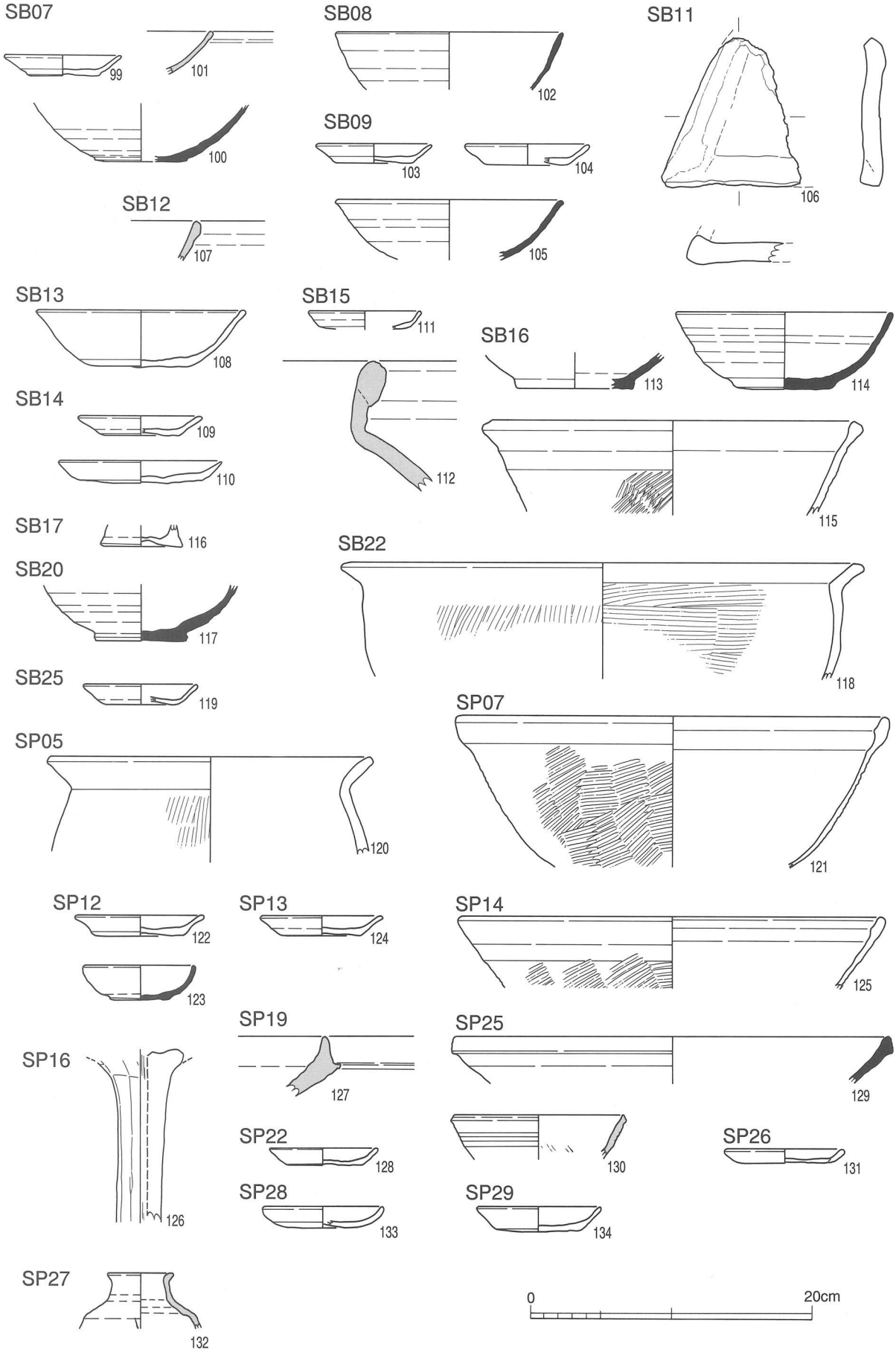

98

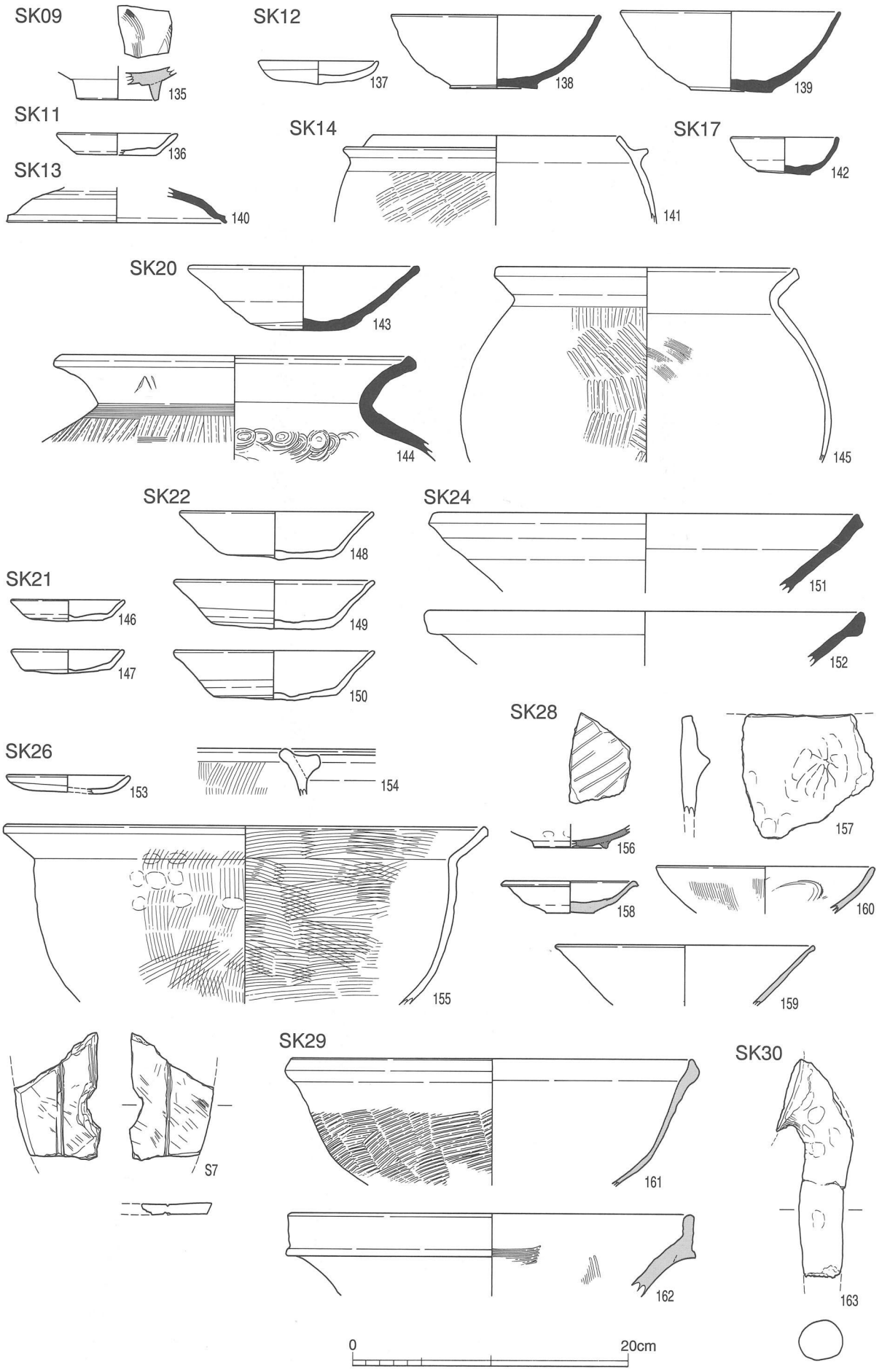

S6

0　20cm

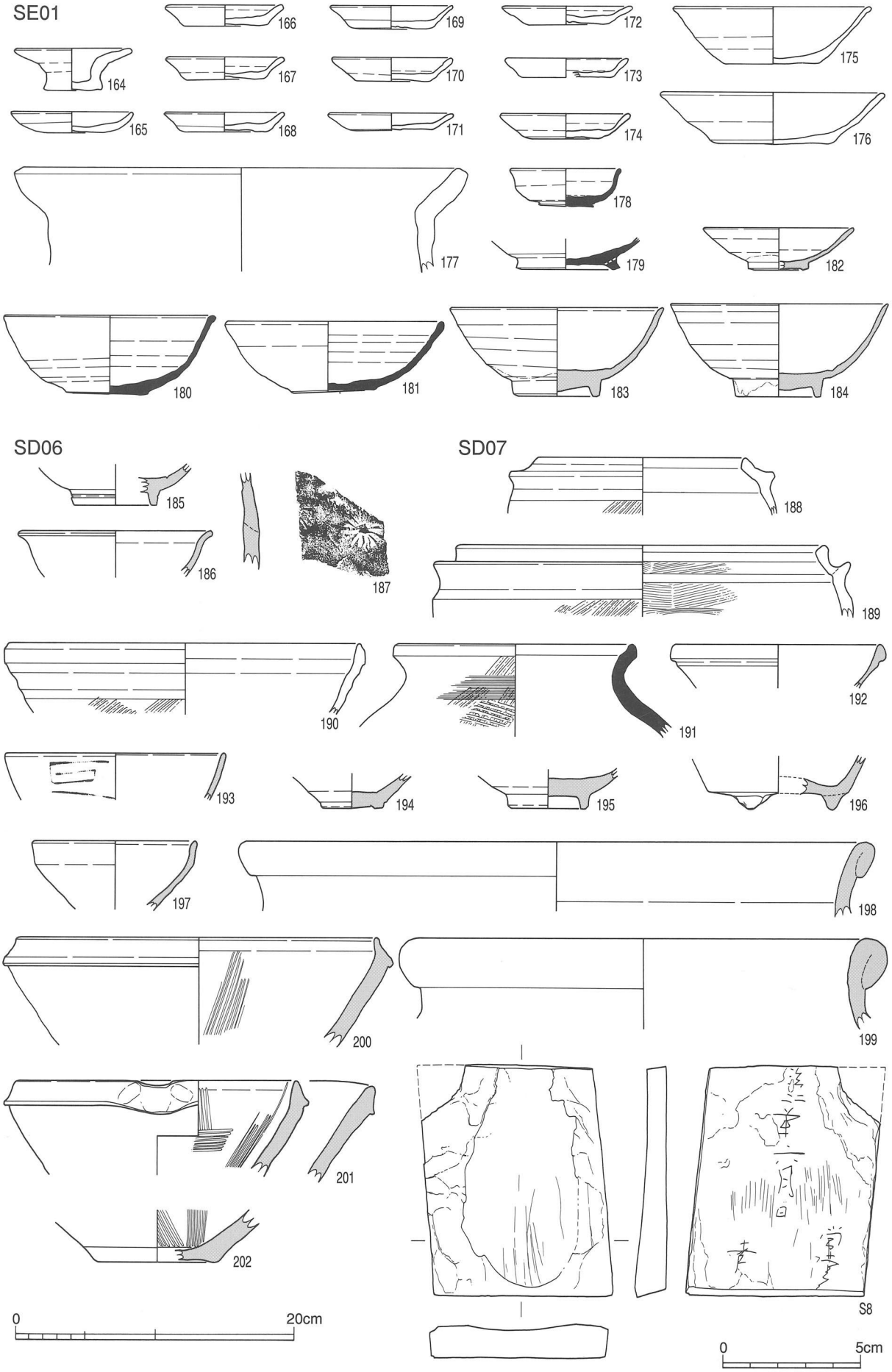
0　5cm

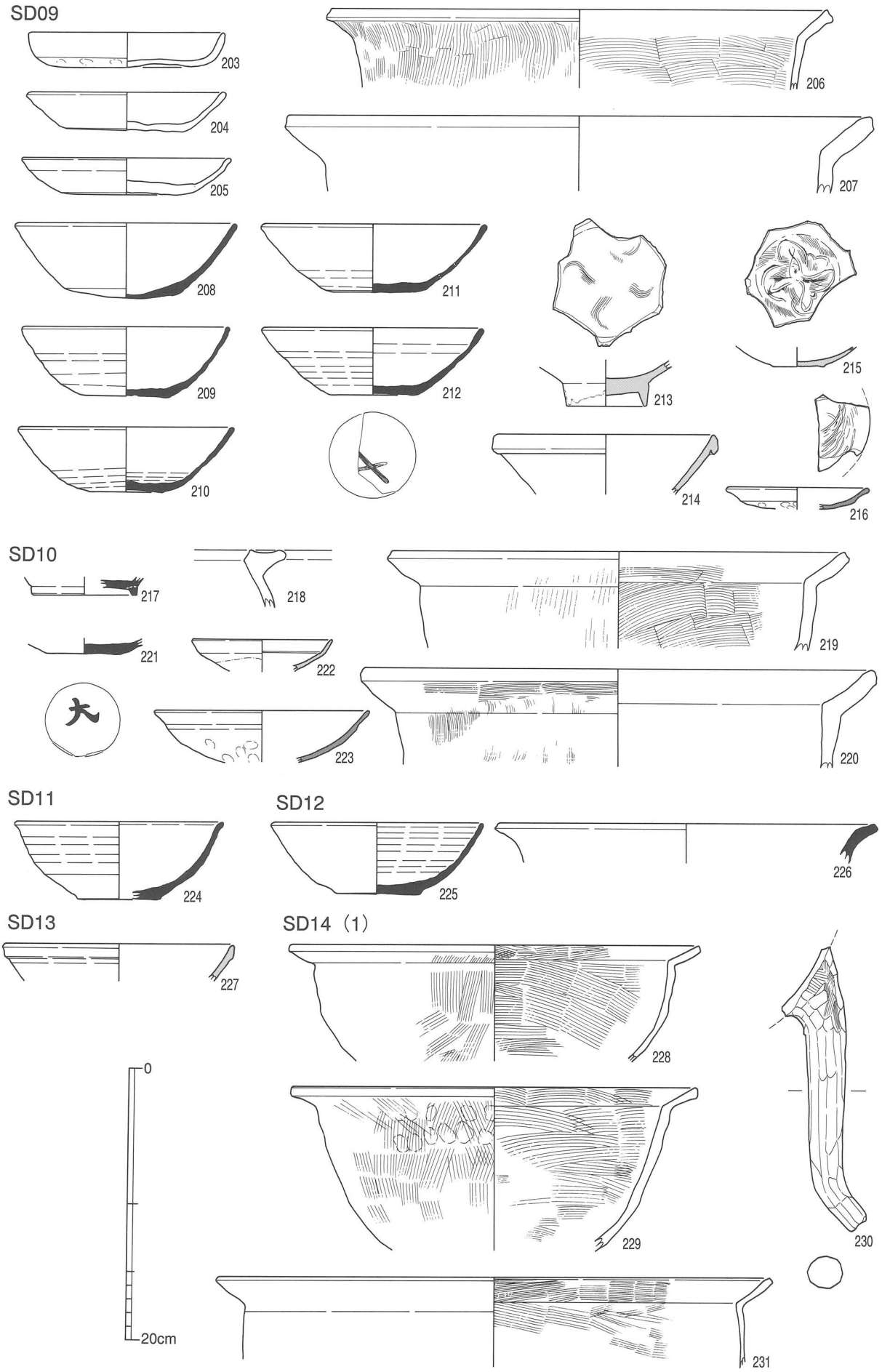
図版30　B地区遺物（1）


SB07
99
101
100
SB08
102
SB09
103
104
105
SB11
106
SB12
107
SB13
108
SB14
109
110
SB15
111
112
SB16
113
114
115
SB17
116
SB20
117
SB22
118
SB25
119
SP05
120
SP07
121
SP12
122
123
SP13
124
SP14
125
SP16
126
SP19
127
SP22
128
SP25
129
130
SP26
131
SP27
132
SP28
133
SP29
134
0
20cm

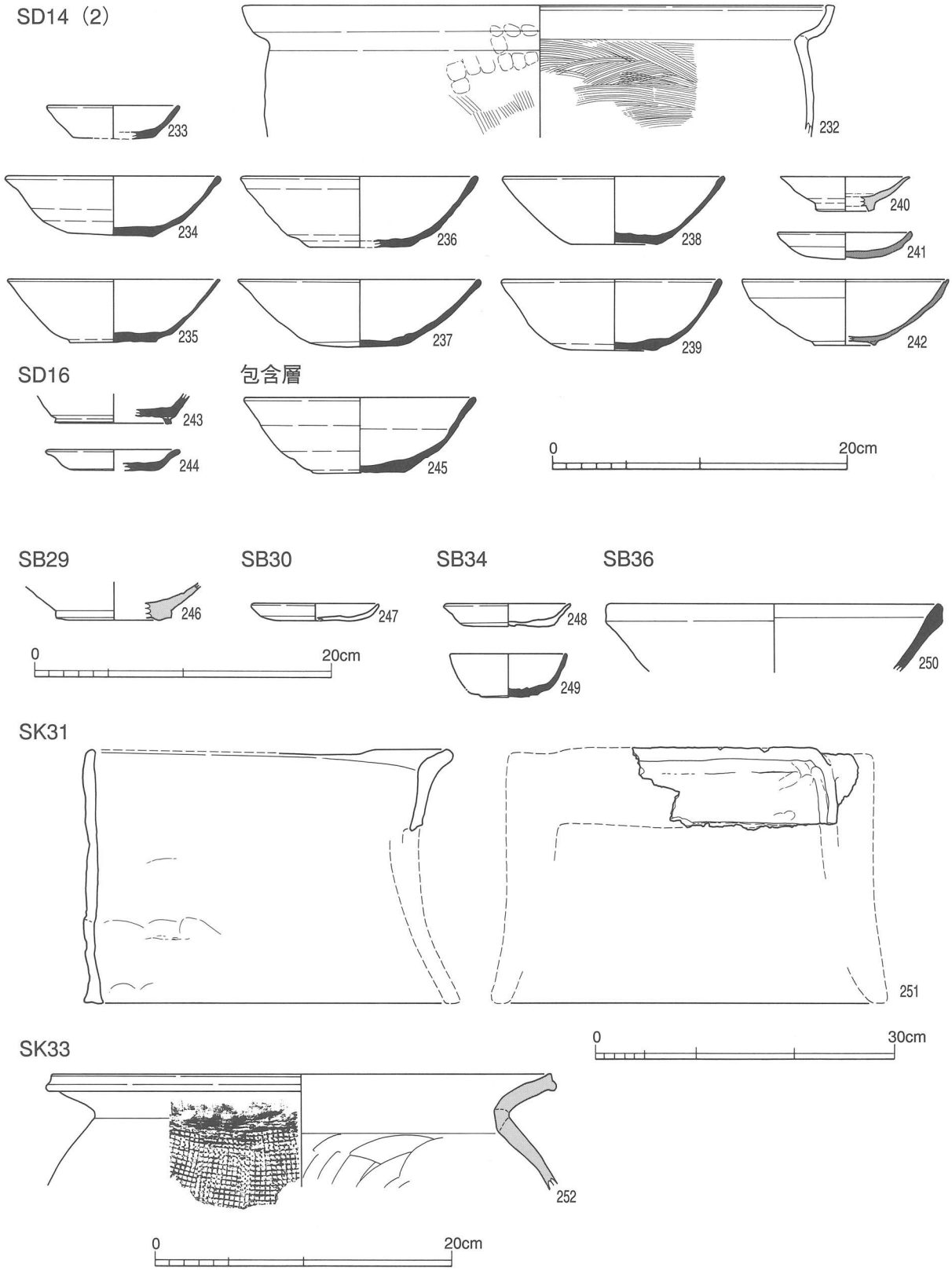

SK09
135
SK12
137
138
139
SK11
136
SK13
140
SK14
141
SK17
142
SK20
143
144
145
SK22
148
SK21
146
149
147
150
SK24
151
152
SK28
156
157
158
160
SK26
153
154
155
159
S7
SK29
161
162
SK30
163
0
20cm

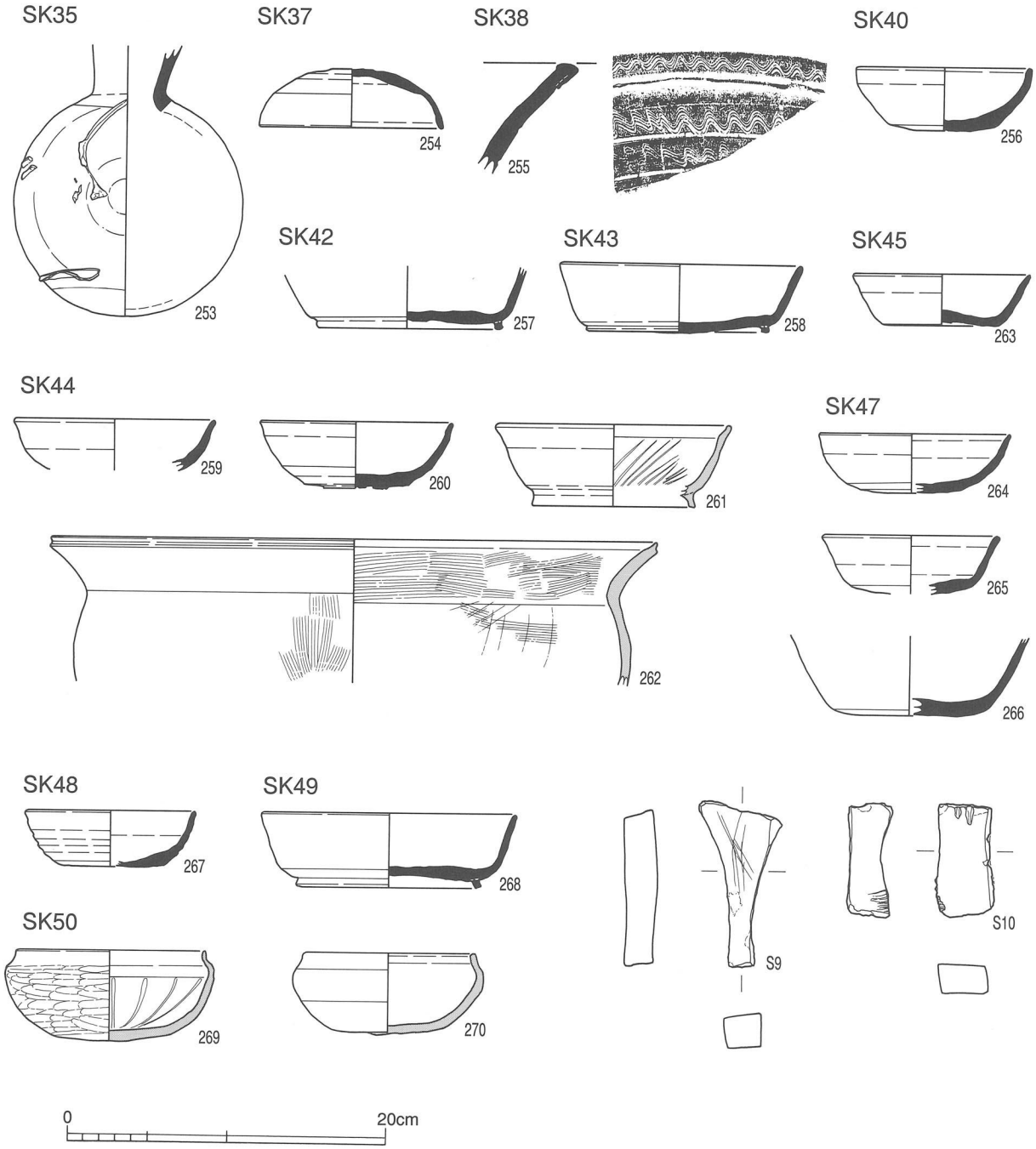
図版32　B地区遺物（3）



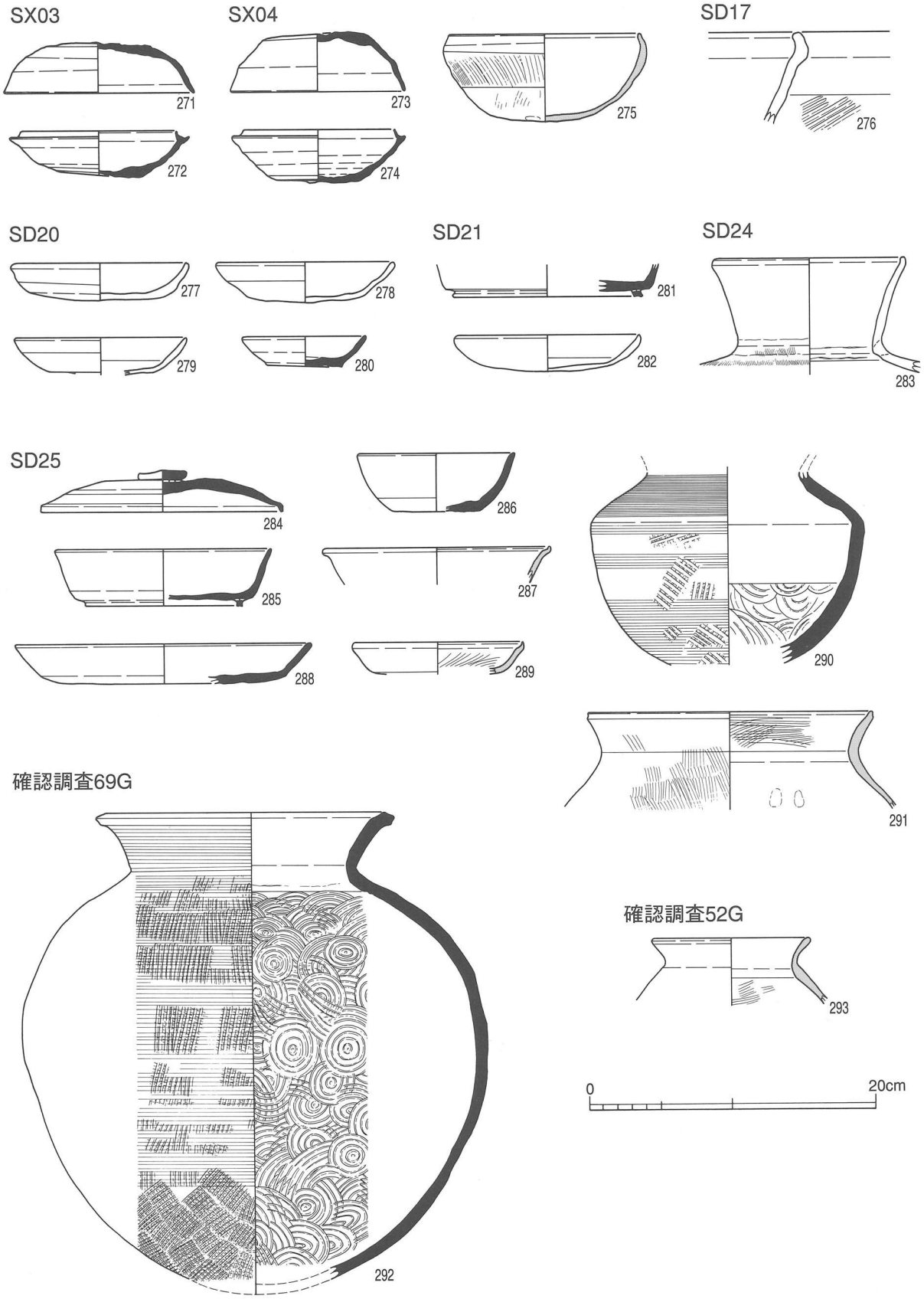

SD09
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
SD10
217
218
219
220
221
222
223
大
SD11
224
SD12
225
226
SD13
227
SD14（1）
228
229
230
231
0
20cm

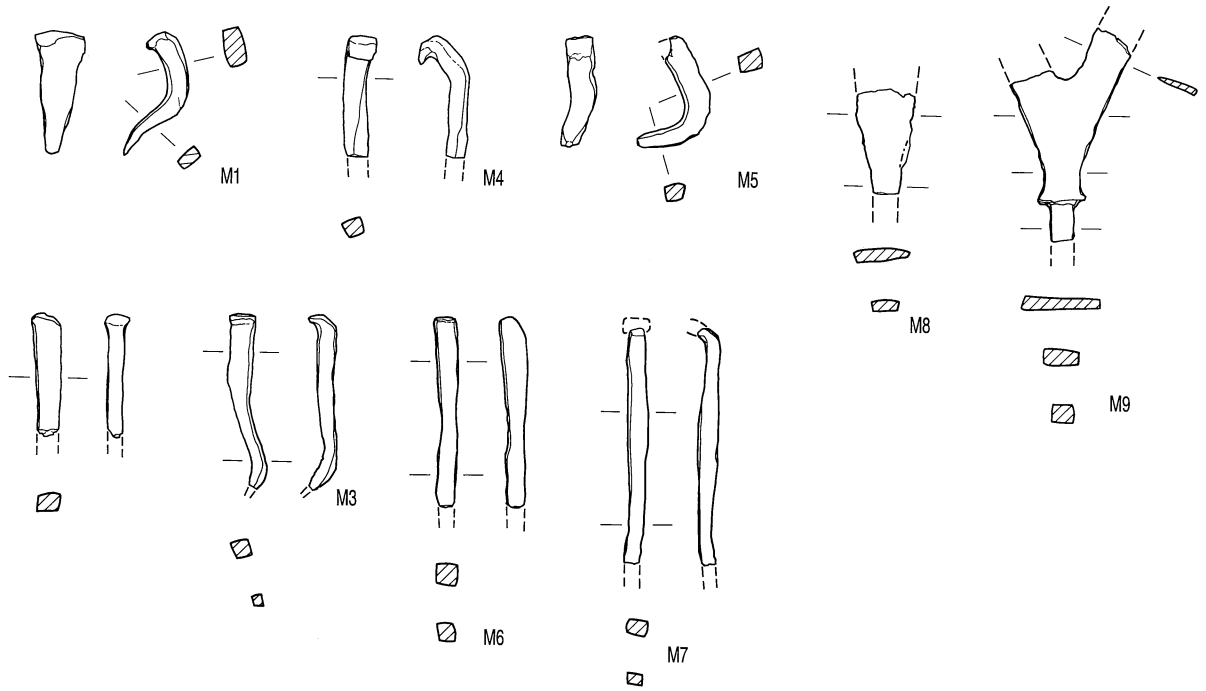
図版34　B地区遺物（5）／C地区遺物（1）



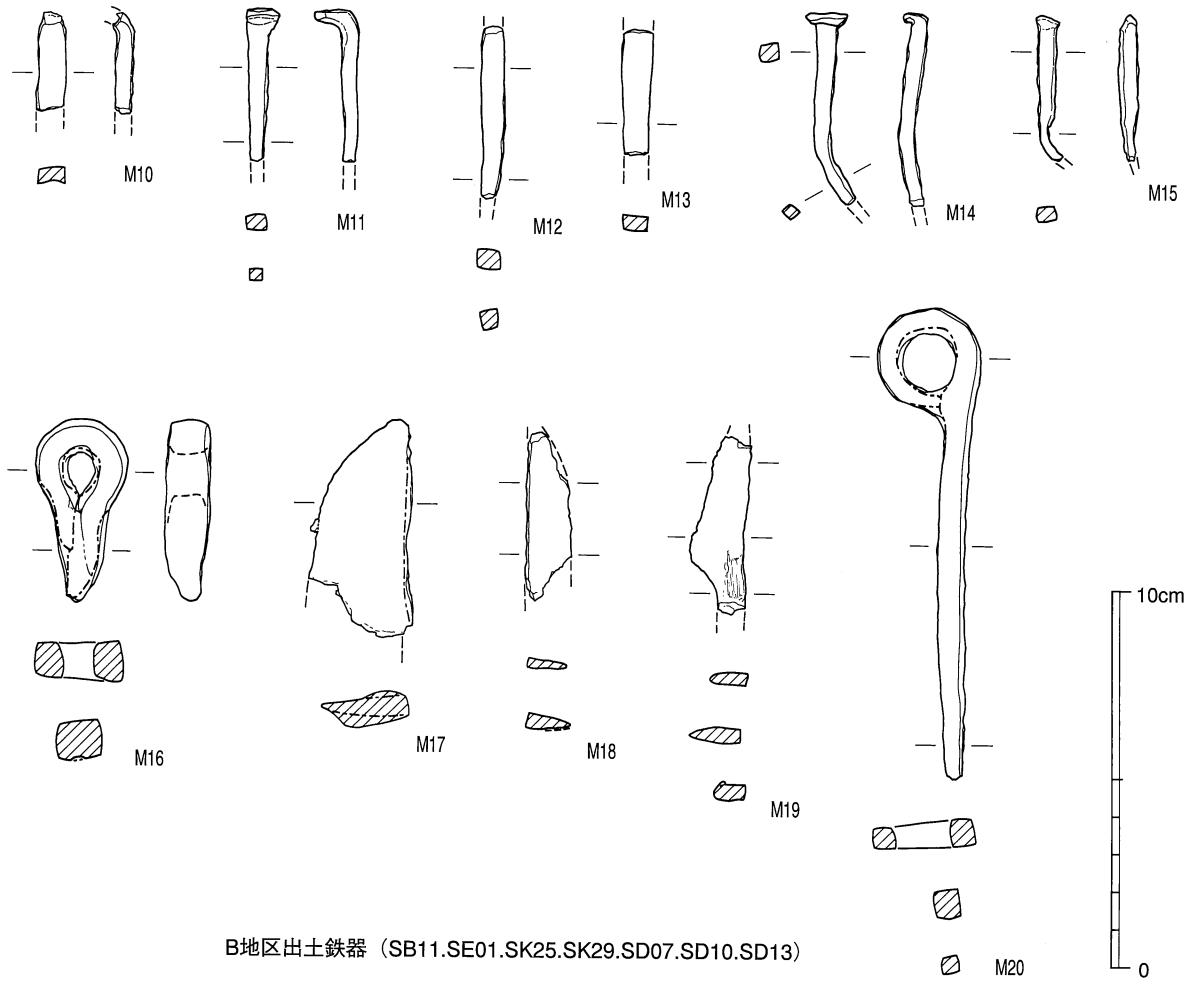

SK35
253
SK37
254
SK38
255
SK40
256
SK42
257
SK43
258
SK45
263
SK44
259
260
261
262
SK47
264
265
266
SK48
267
SK49
268
SK50
269
270
S9
S10
0
20cm

図版36　C地区遺物（3）


SX03
SX04
SD17
SD20
SD21
SD24
SD25
確認調査69G
確認調査52G
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
0
20cm

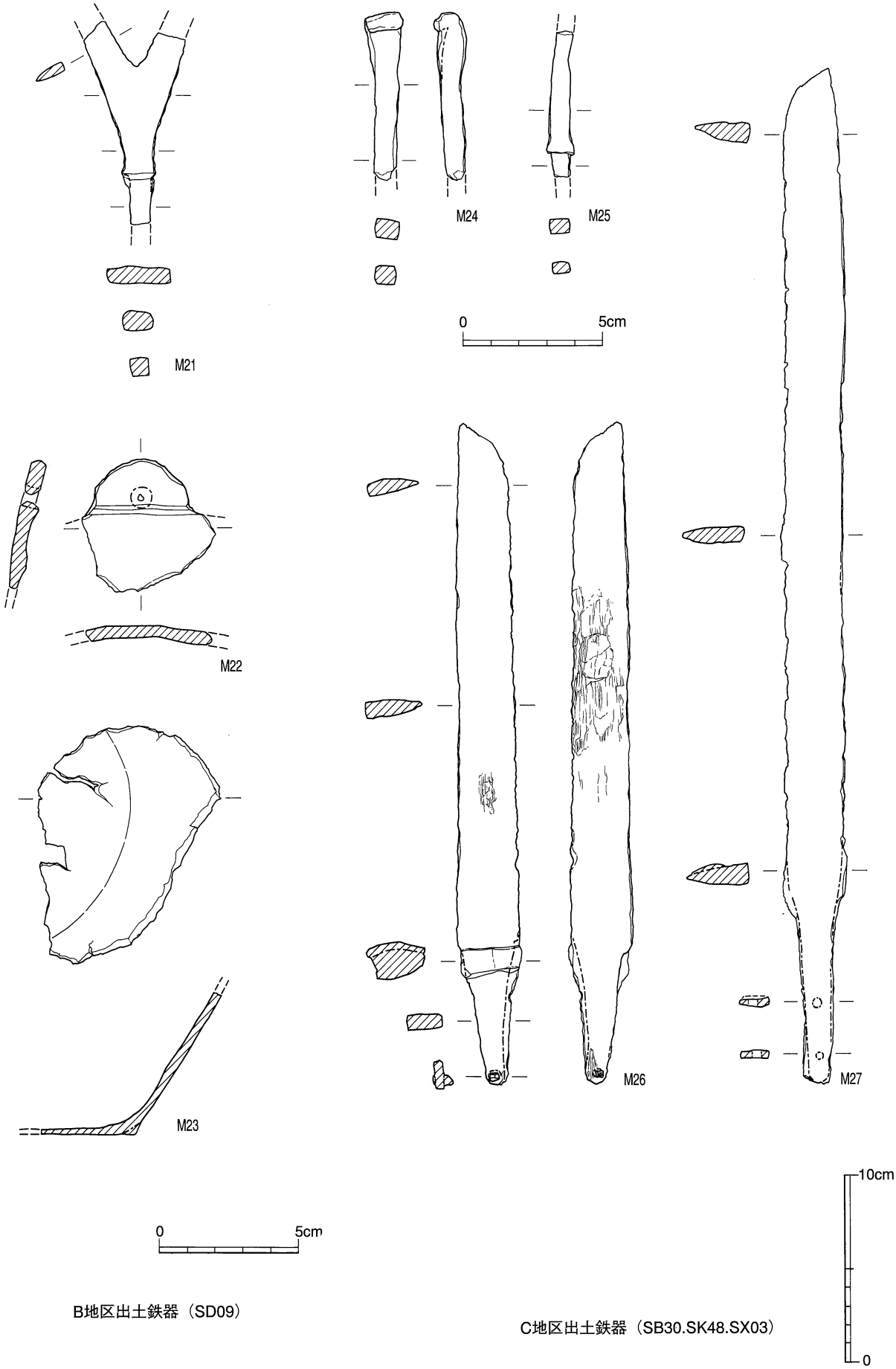


A地区出土鉄器（SK08.SD01.SD02.SD03.SD04.SD05.包含層）



B地区出土鉄器（SB11.SE01.SK25.SK29.SD07.SD10.SD13）

図版38　B･C地区出土鉄器



B地区出土鉄器（SD09）

C地区出土鉄器（SB30.SK48.SX03）

写真図版

揖保川河口付近から
遺跡を望む

東方から遺跡を望む

写真図版２　遺跡の遠景(2)

東方から遺跡を望む

北方から遺跡を望む

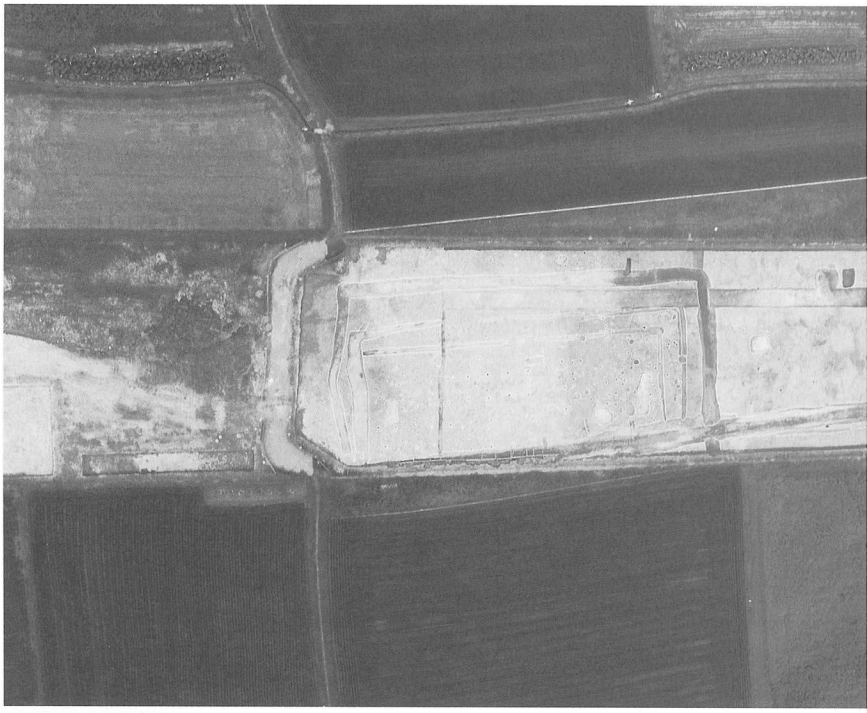
平成４年度調査区を
南方から望む

平成５年度調査区を
北方から望む

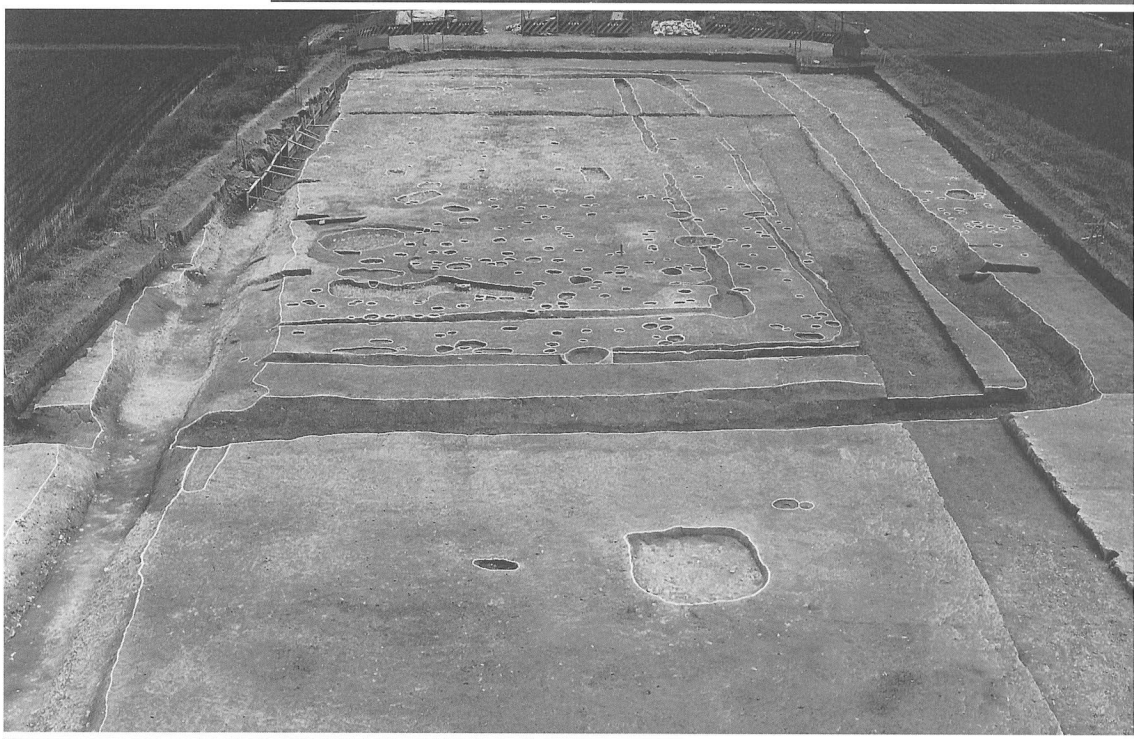
写真図版４　遺跡の遠景(2)

平成４年度調査区（上方が北）

平成５年度調査区
（上方が東）



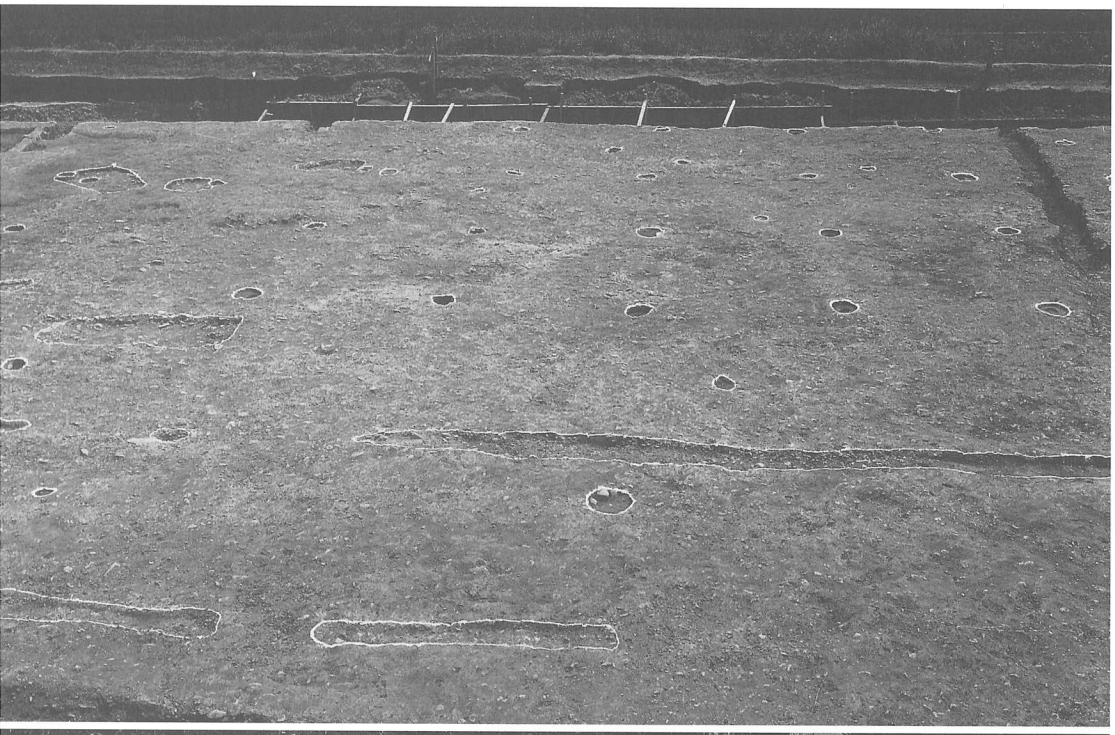
空中写真（上方が西）



全景（北から）

全景（南から）

写真図版６　Ａ地区遺構(1)



SB04（西から）

SB05（西から）

SD01北西屈曲部
（西から）

SK01・02（東から）

SK02土器出土状況
（東から）

SD04温石出土状況（北から）

SD04温石出土状況（西から）

写真図版８　Ａ地区遺構(3)

左．SX01（南から）

右．SX02（西から）

SD05（北から）

SD05屈曲部(西から)

西半部（上方が北）

東半部（上方が北）

写真図版10　B地区全景(2)

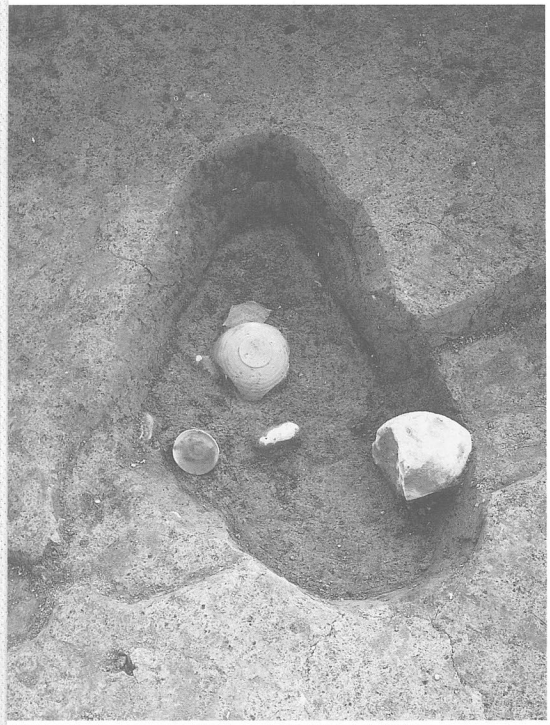
西半部（南から）

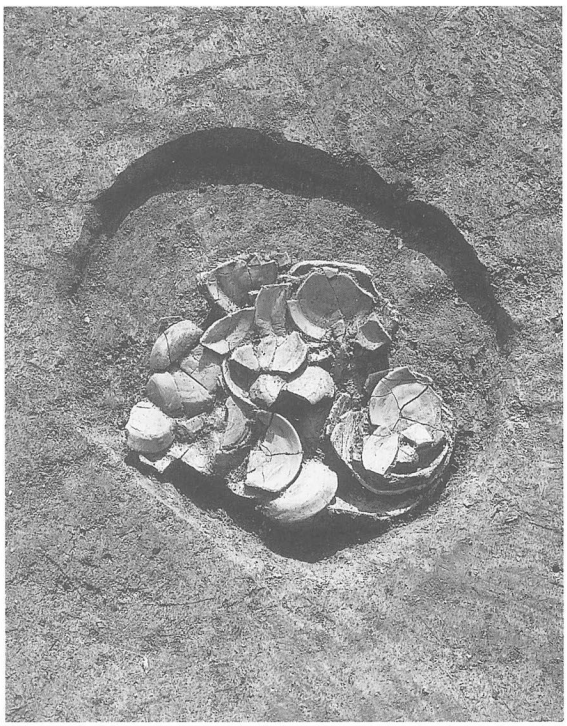
東半部（南から）

居館内部の遺構
（北から）

居館東側の区画溝
（北から）

写真図版12　B 地区全景(2)

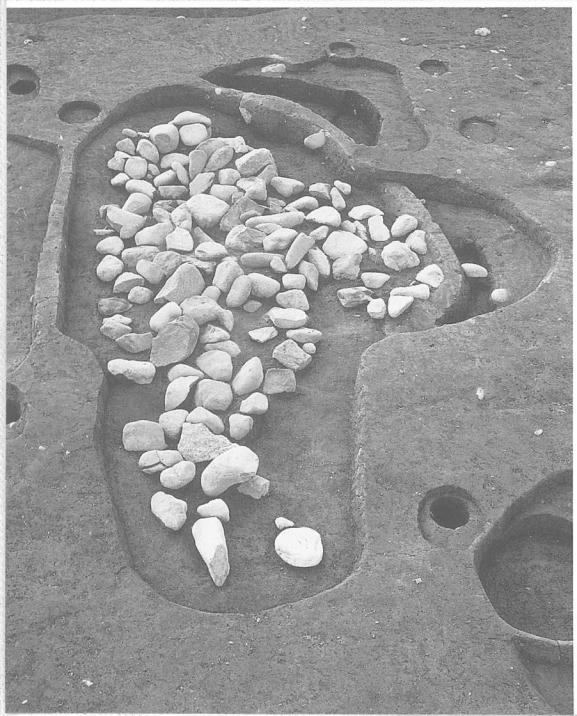




左．SK12（北から）

右．SK21(北東から)

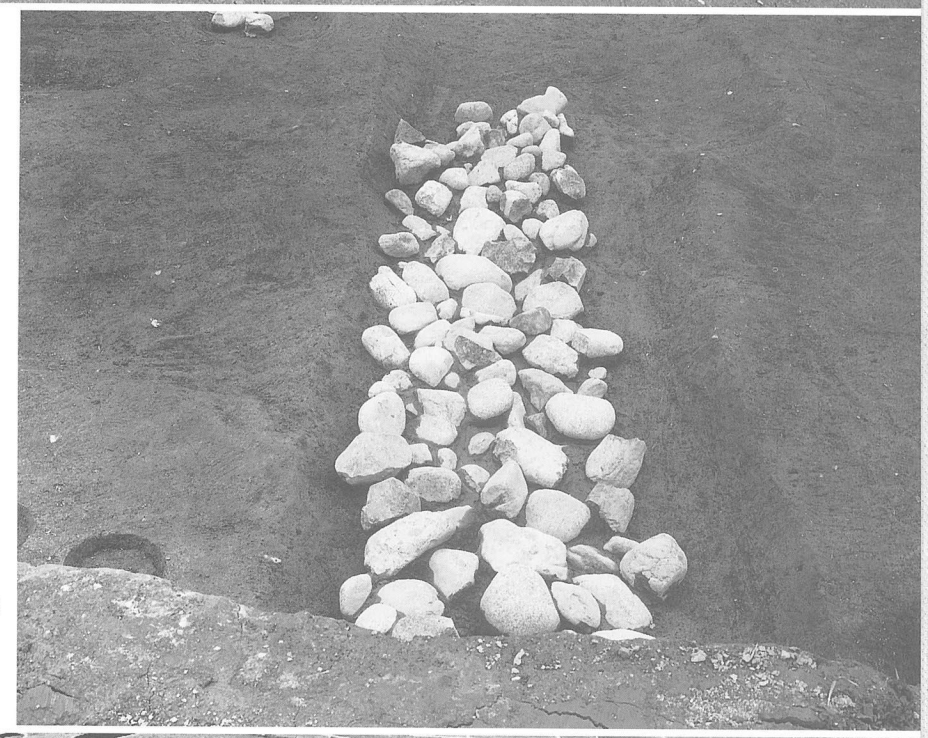
SK22（北から）



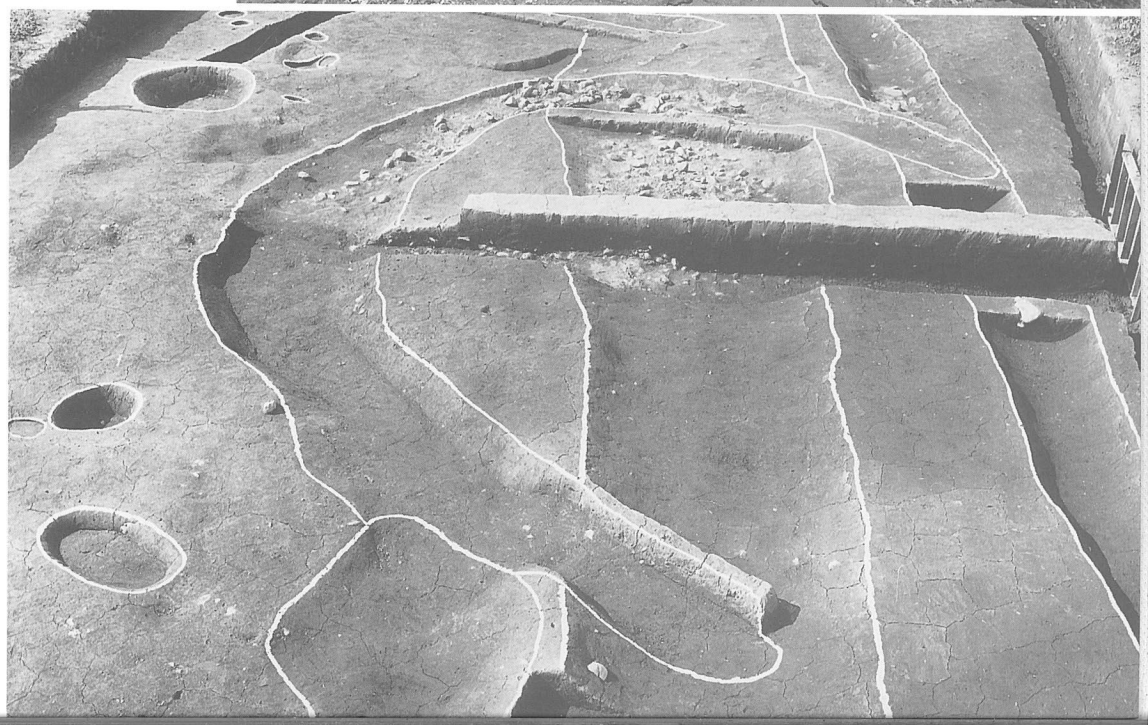
左．SK24（東から）

右．SK29（西から）

SK27・28西半部
（西から）



SK27東半部（西から）



SD14（南から）

写真図版14　B 地区全景(4)

SE01（南から）

SE01土器出土状況

柱穴土器出土状況

平成 4 年度調査区
（上方が南）

平成 5 年度調査区
（上方が東）

写真図版16　C地区全景(2)

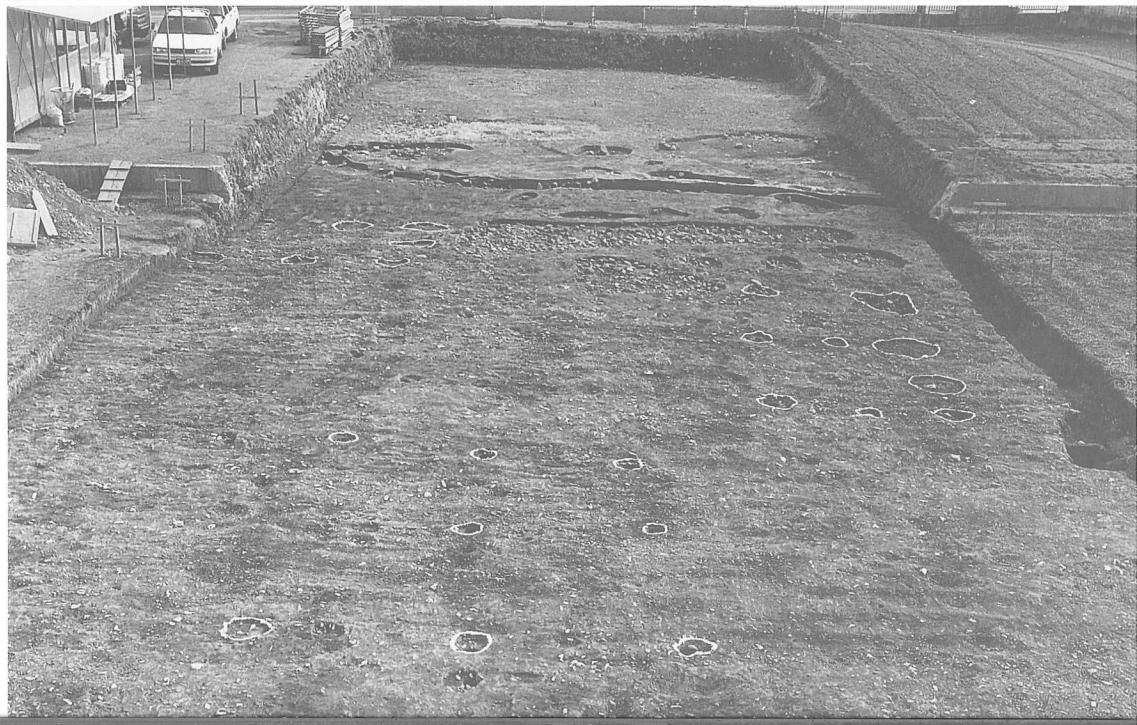
平成4年度調査区北半
（南から）

平成4年度調査区南半
（北から）

平成5年度調査区
（北から）

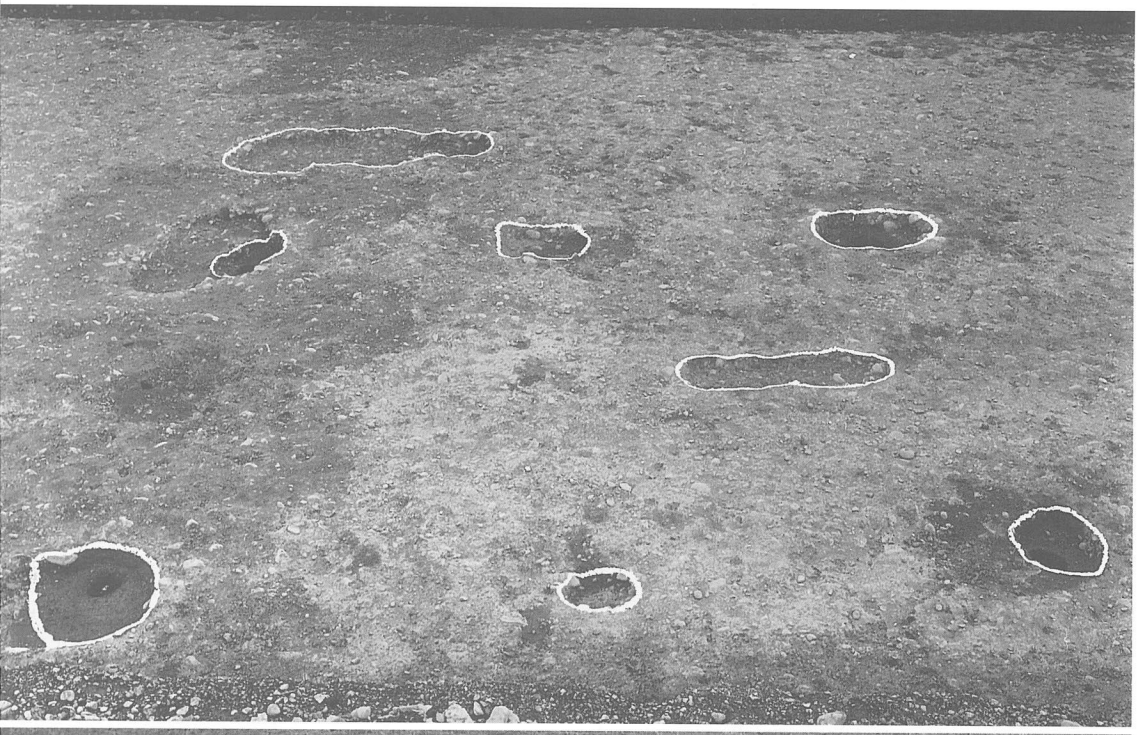
SB27（東から）

SB28（東から）



SB35・36・37
（北から）

写真図版18　C地区遺構(2)

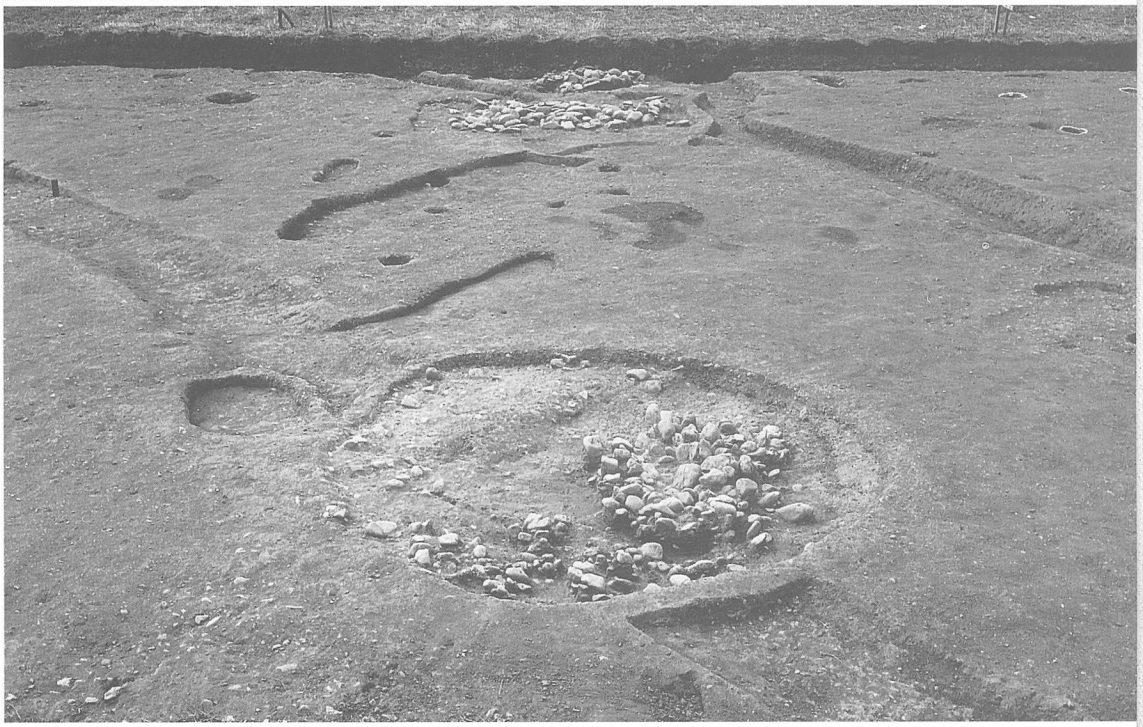


SB33（西から）

SB34（東から）

SK35（南東から）

SK31（西から）



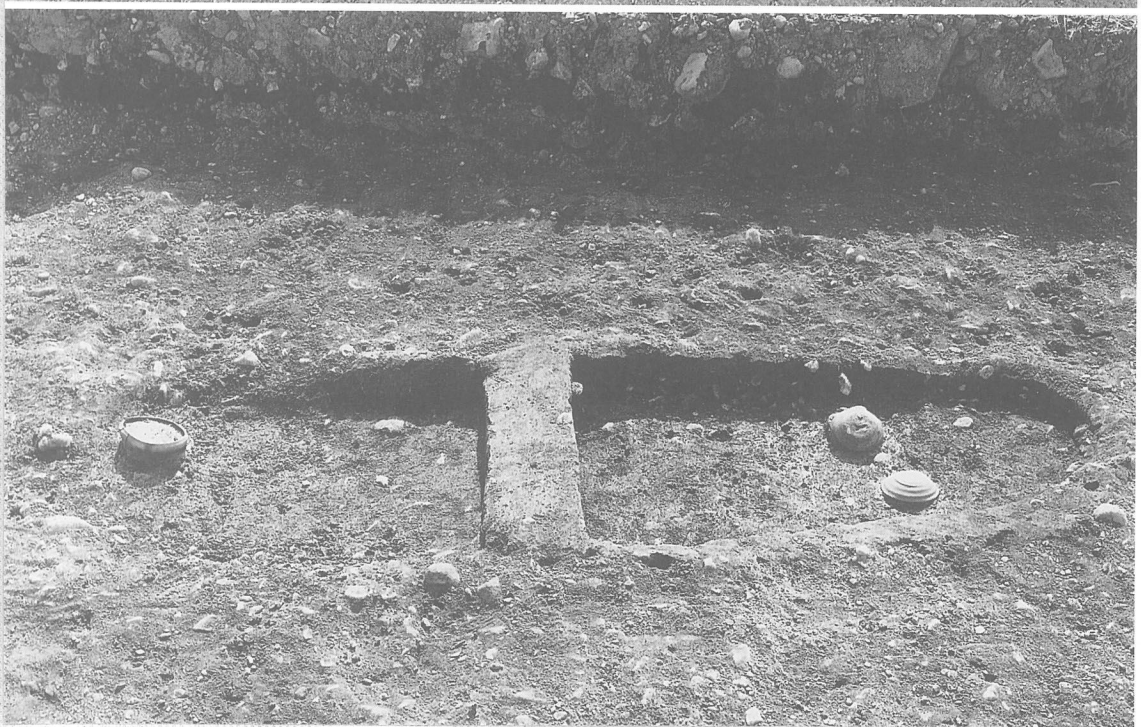
SK32・33・34（東から）

SK50（南東から）

写真図版20　C地区遺構(4)

SX02（西から）

SX03（東から）

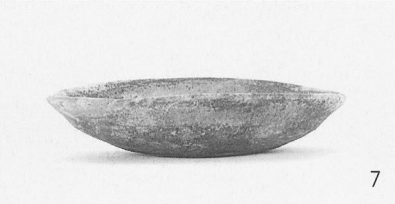


SX04（東から）

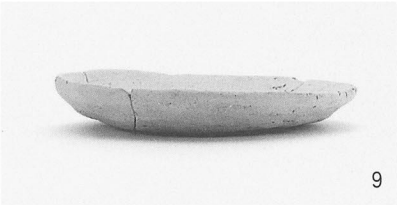
写真図版21　A 地区遺物(1)

SK01(5.6)/SK02(7.9.13)/SK03(22)/SX01(32.33.34.35)/SD01(37.38.39.44.45.48.56.57)

5


7

13

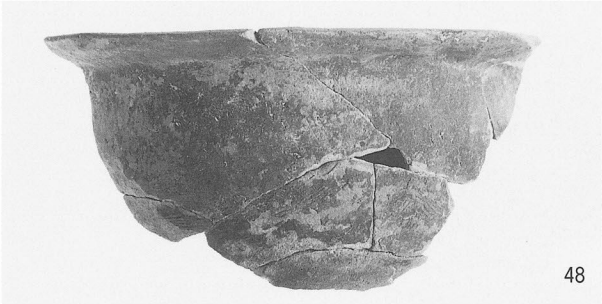

9

22

32

6

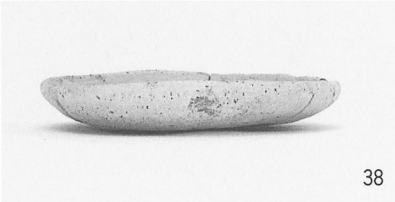
34


48

35

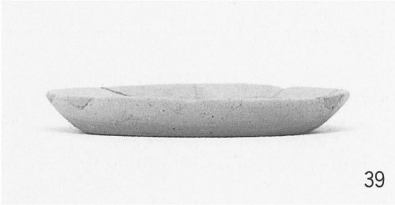
33

37


38

44

45


39

56

57

写真図版22　A 地区遺物(2)

SD01(58.59.60.63-65.69.72-75.81.82)

58

59

60

63

64

65

69

75

72

73

74

81

82

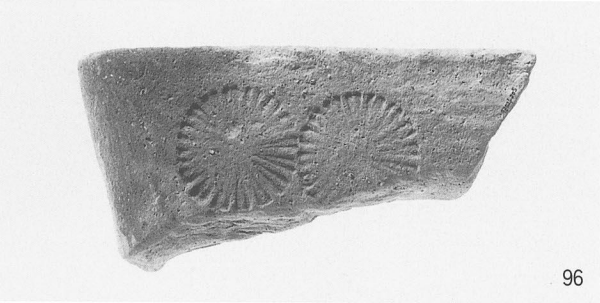
写真図版23　A 地区遺物(3)

SD03(84.85)/SD05(88.96)/包含層(97)/SK02(10)/SD01(41)
土錘:SK01(8)/SD01(53-55)/SD05(94)

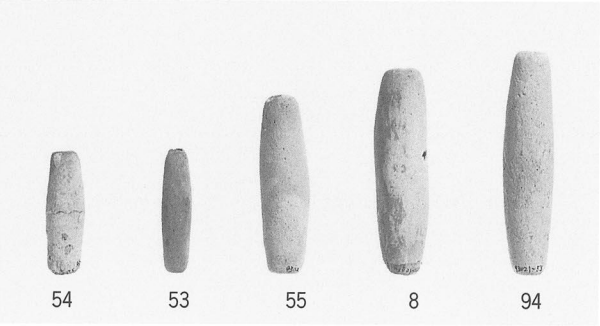
84

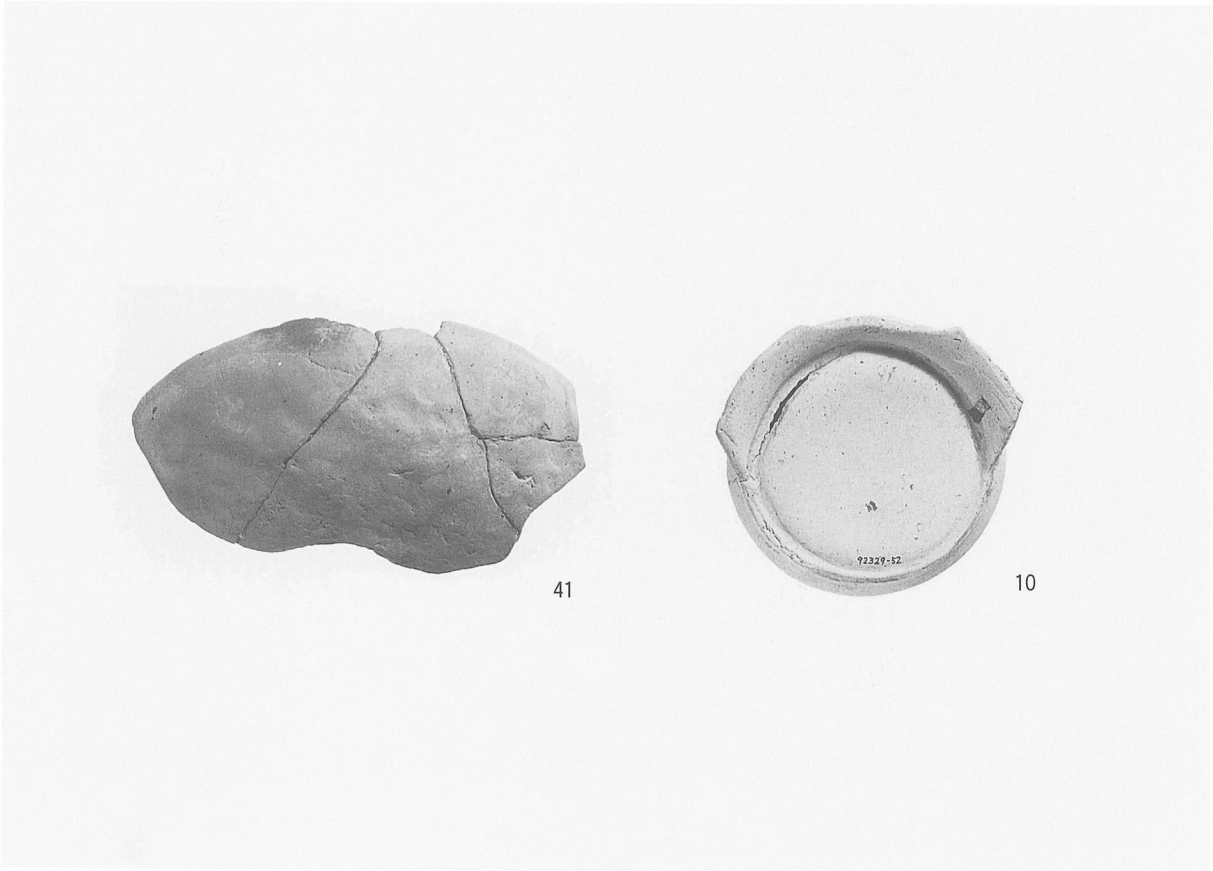
85

88


96

97

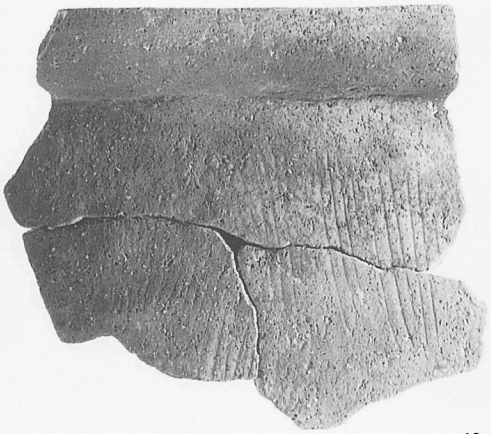

54　53　55　8　94


41　10

写真図版24　A 地区遺物(4)

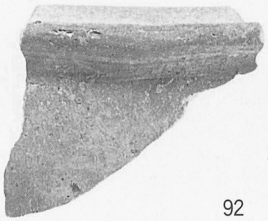
土師器:SD01(49.52)
瓦器:SK01(7)/SD05(92)

52



49

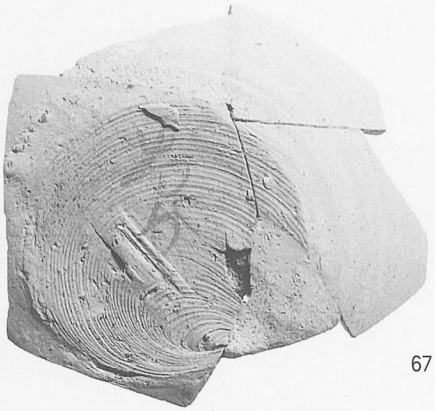
7



92

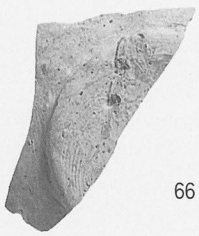
須恵器:SD01(61.66.67.68.)/SD05(91)

68



67

61

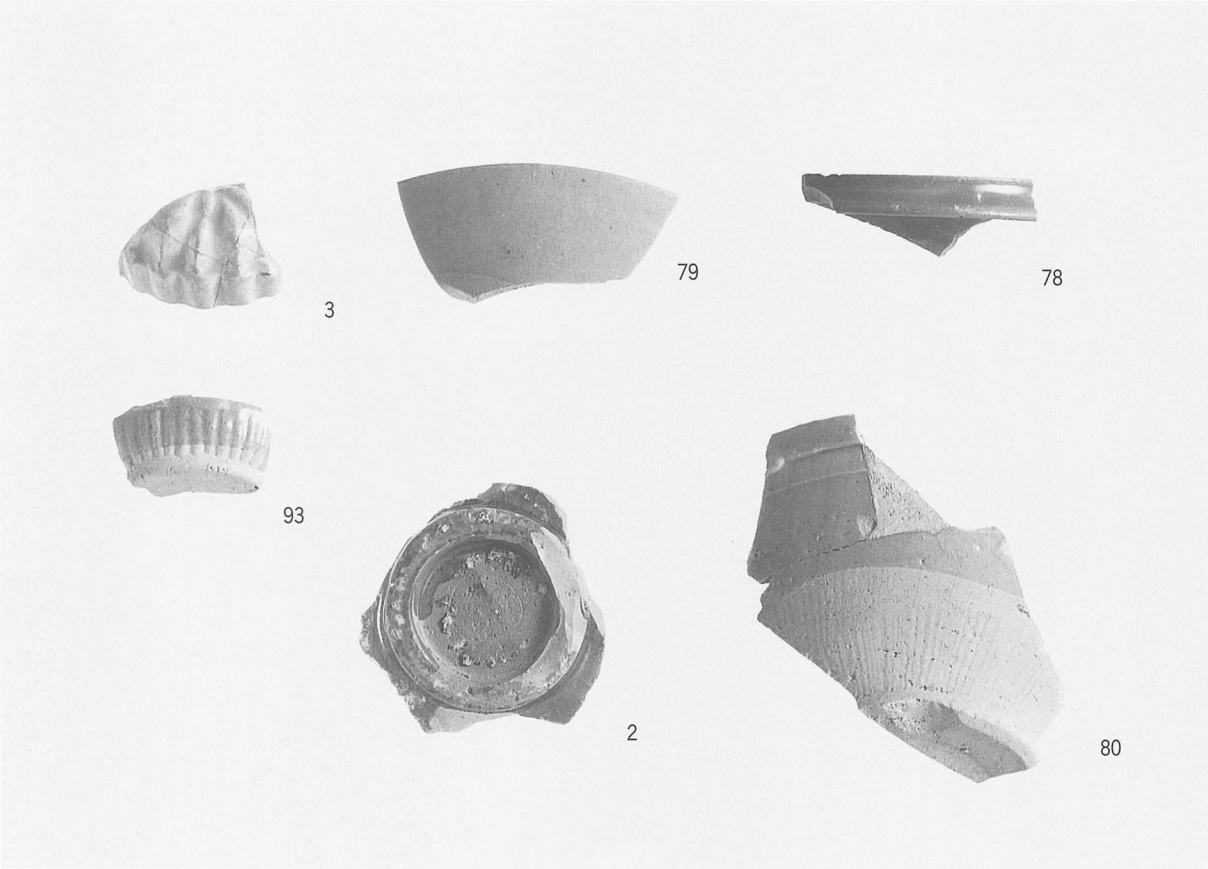


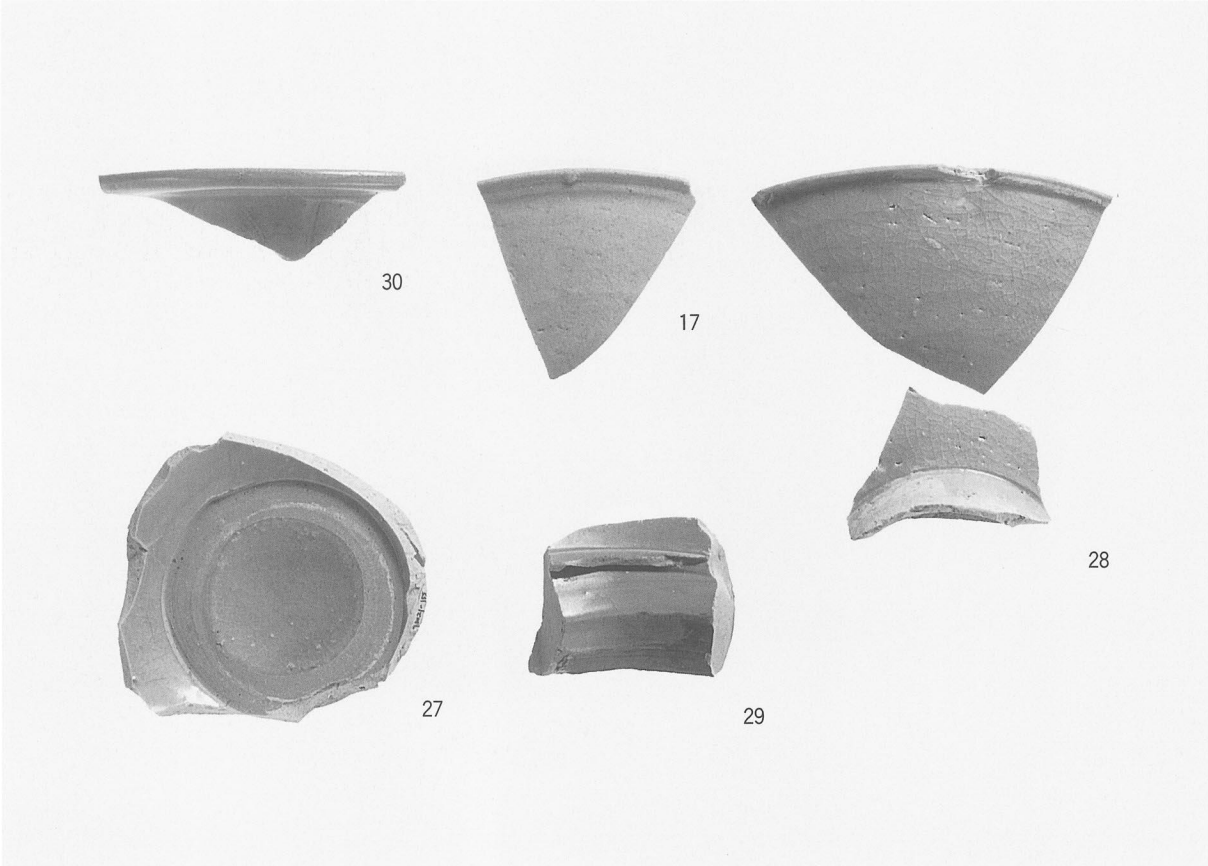
66

91

写真図版26　A 地区遺物(6)

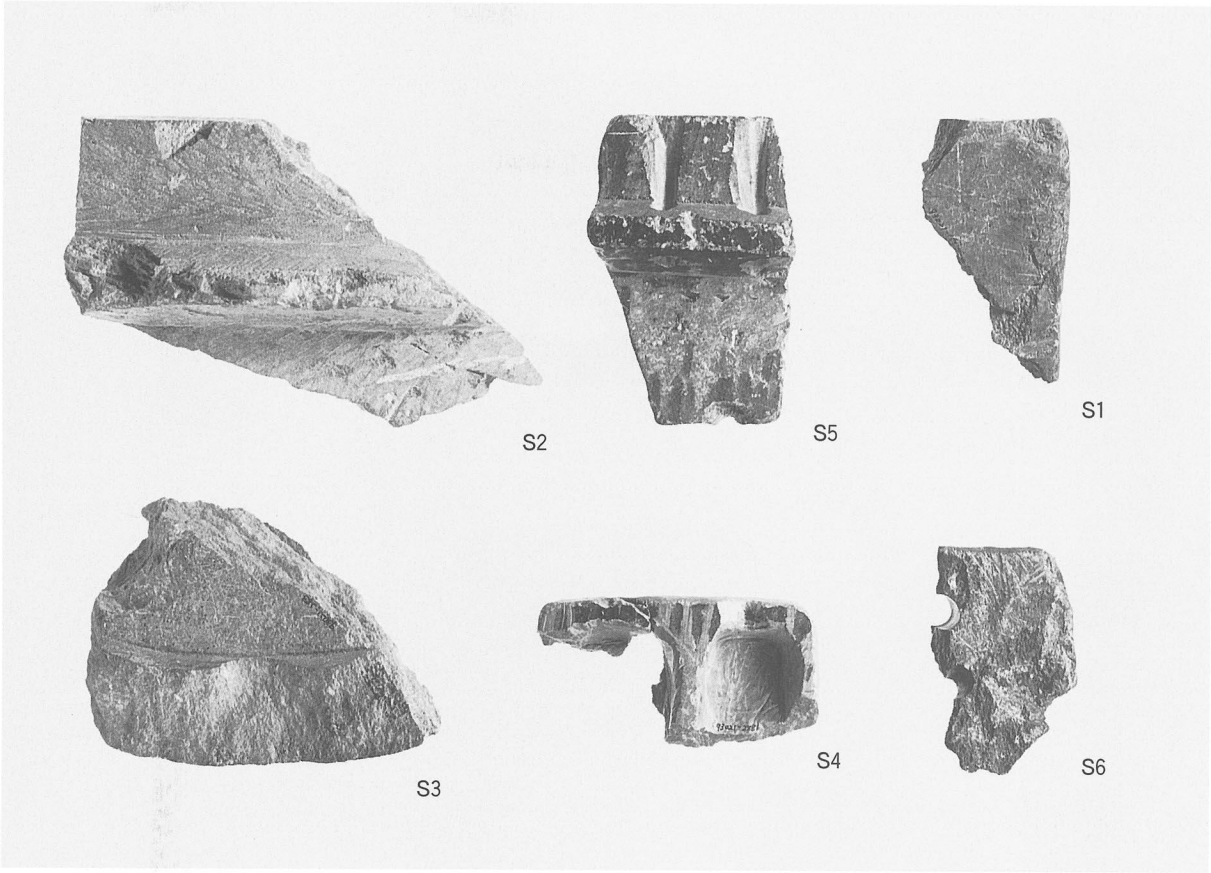
陶磁器：SB01(2.3)/SK02(17)/SK03(27.28)/SK04(29)/SK05(30)/SD01(78-80)/SD05(93)





写真図版27　A 地区遺物(7)

石製品:SK01(S1)/SD01(S2.3.4)/SD04(S5)/包含層(S6)



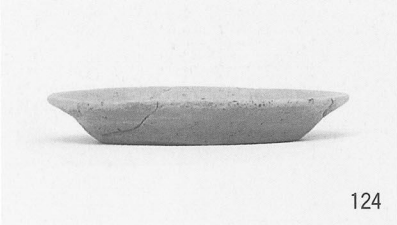
写真図版28　B地区遺物(1)

SB07(99)/SP12(123)/SP13(124)/SP16(126)/SP29(134)/SK12(137.138.139)/SK17(142)/SK20(144)/SK21(146)/SK22(148-150)

99

123

126


124

134

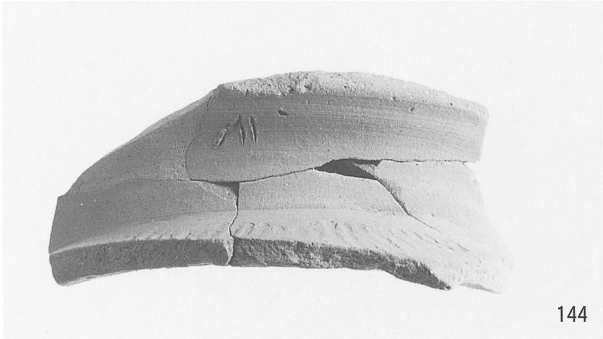
137

142

146

138

139


144

148

149

150

写真図版29　B 地区遺物(2)

SK26(155)/SK29(161)/SE01(164-166.168-172.174.178.180.181.183)

155

161

164

165

166

168

169

170

171

172

174

178

180

181

183

写真図版30　B地区遺物(3)

SD06(187)/SD09(203.204.210)/SD14(230.234.237.239.241)

203

237

204

239

210

187

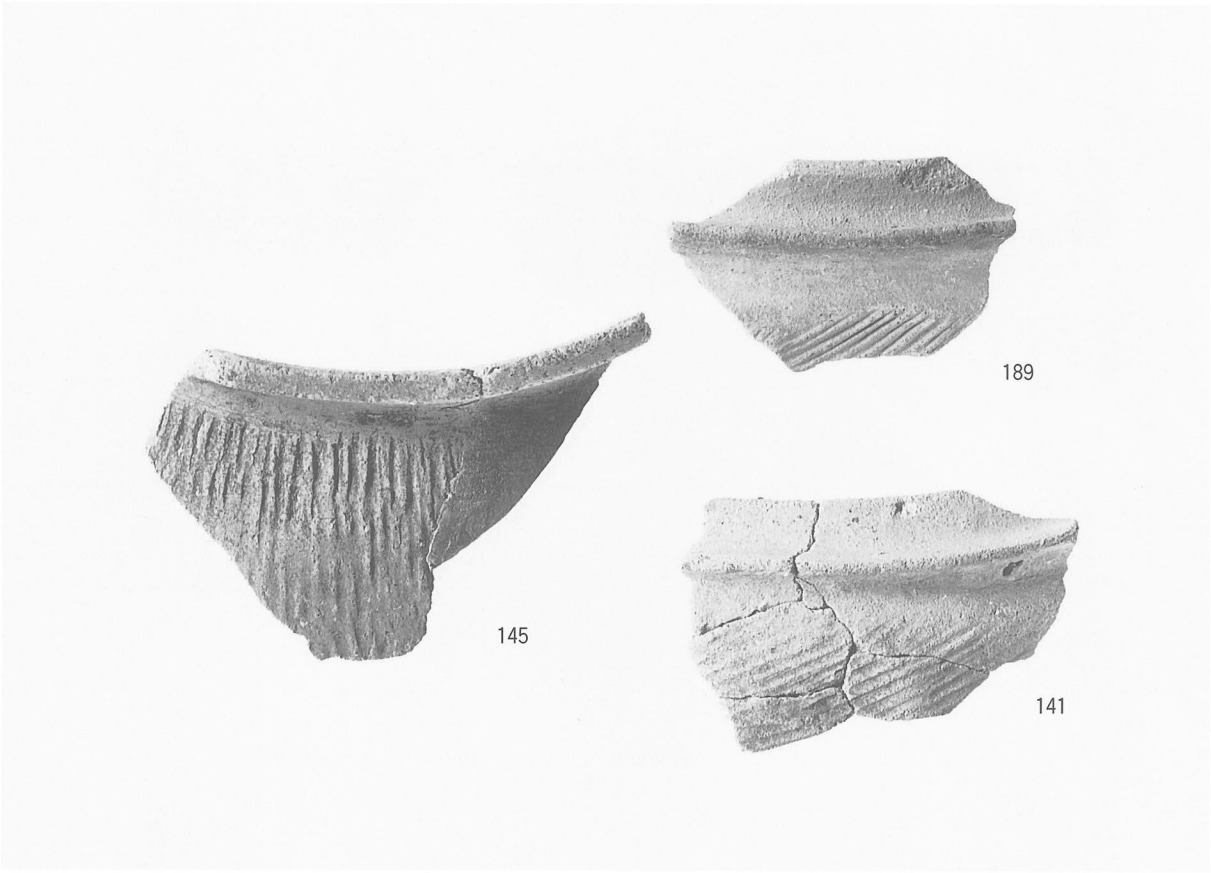
230

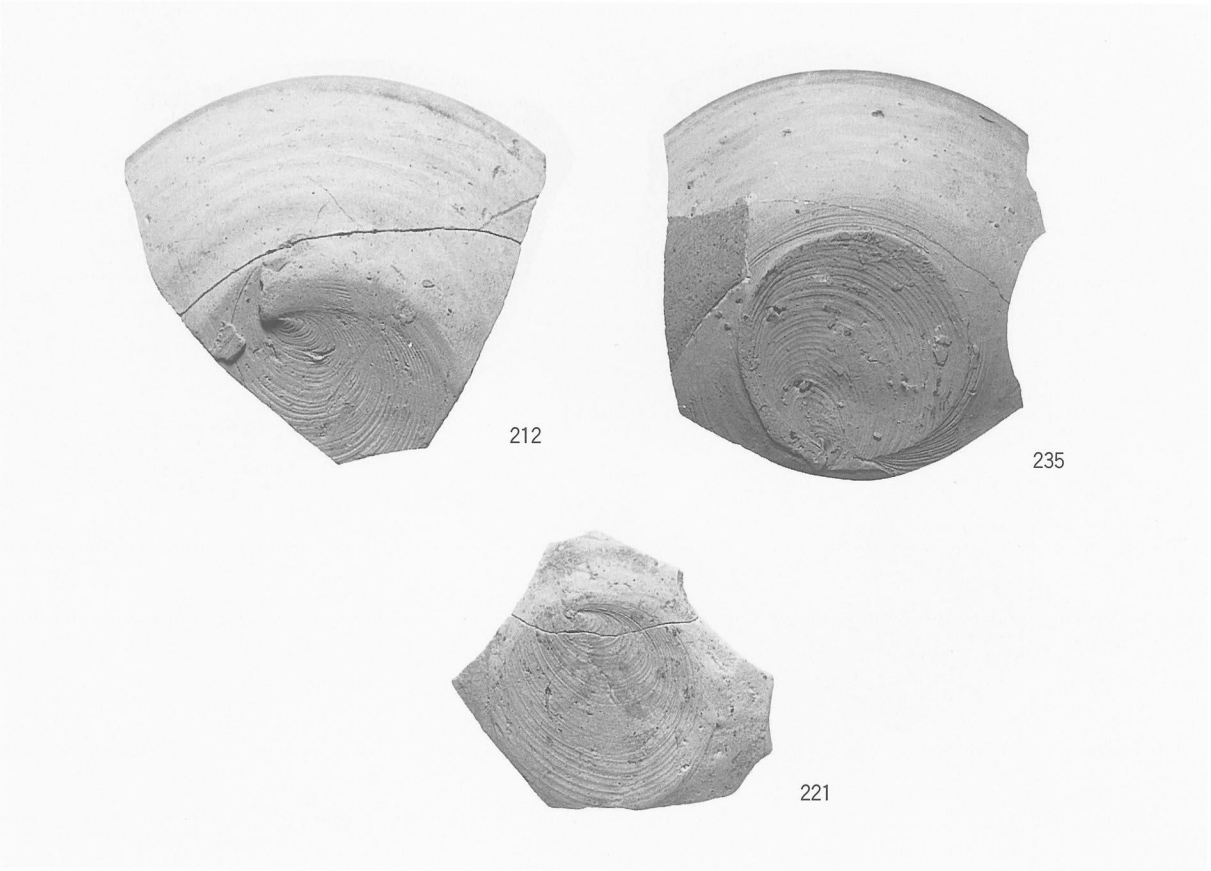
234

241

写真図版31　B 地区遺物(4)

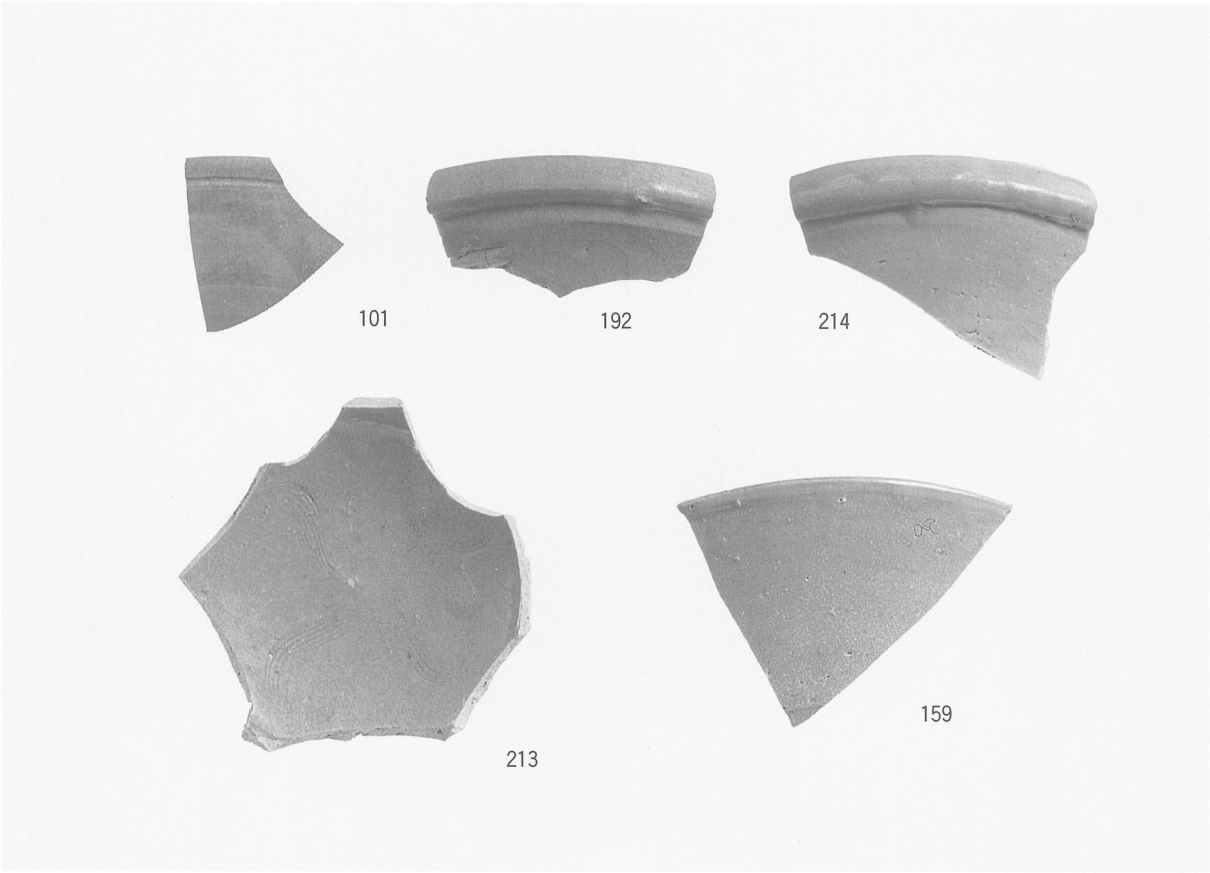
土師器:SK14(141)/SK20(145)/SD07(189)
須恵器:SD09(212)/SD10(221)/SD14(235)

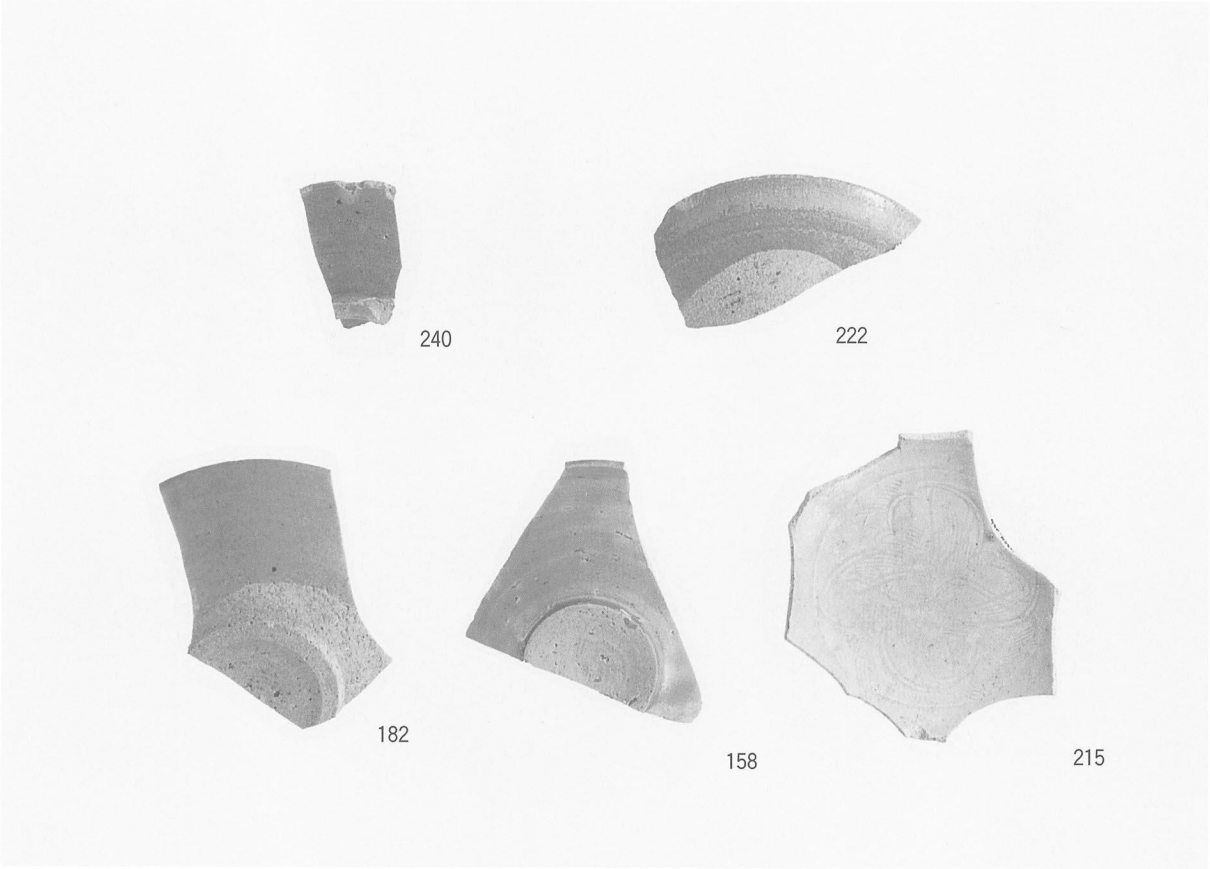




写真図版32　B地区遺物(5)

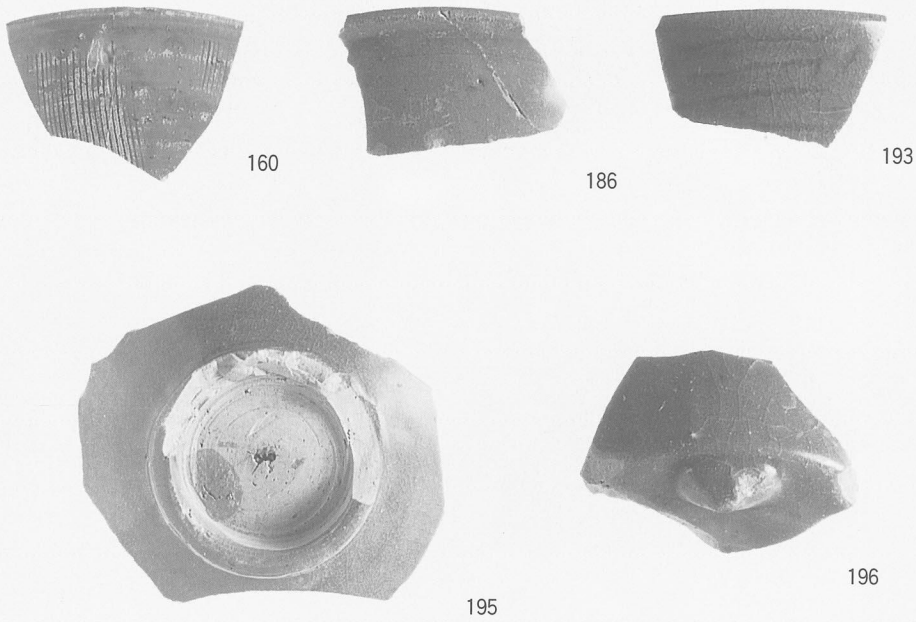
陶磁器：SB07(101)/SK28(158.159)/SE01(182)/SD07(192)/SD09(213.214.215)/SD10(222)/SD14(240)

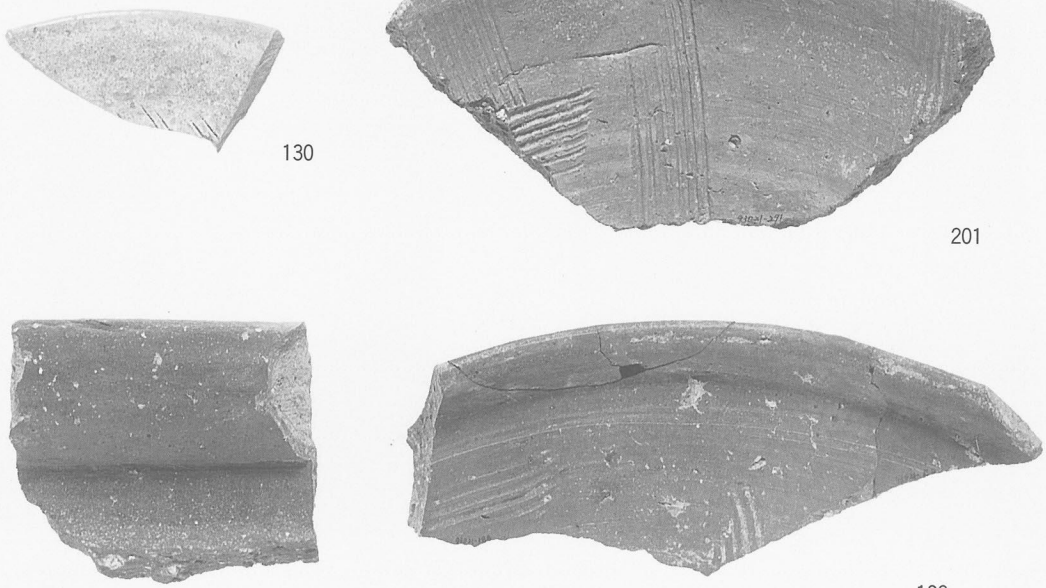




写真図版33　B地区遺物(6)

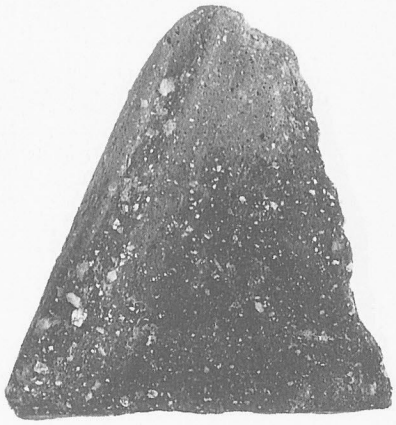
陶磁器：SP25(130)/SK28(160)/SK29(162)/SD06(186)/SD07(193.195.196.199.201)





写真図版34　B地区遺物(7)

土師器:SB11(106)/SK28(157)
石製品:SD07(S8)



106

157

S8

写真図版35　C地区遺物(1)

SB34(248)/SK31(251)/SK33(252)/SK35(253)/SK43(258)/SK44(260.262)/SK47(264)

251

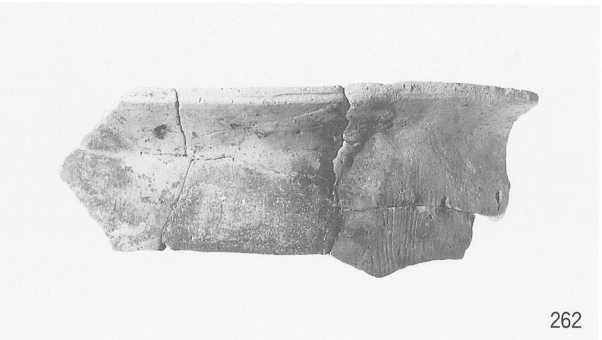
248

252

253

258

260



262

264

写真図版36　C地区遺物(2)

SK50(269.270)/SX03(272)/SX04(273.274.275)/SD20(277.280)/SD25(290)/確認調査(292)

269

270

272

273

274

275

277

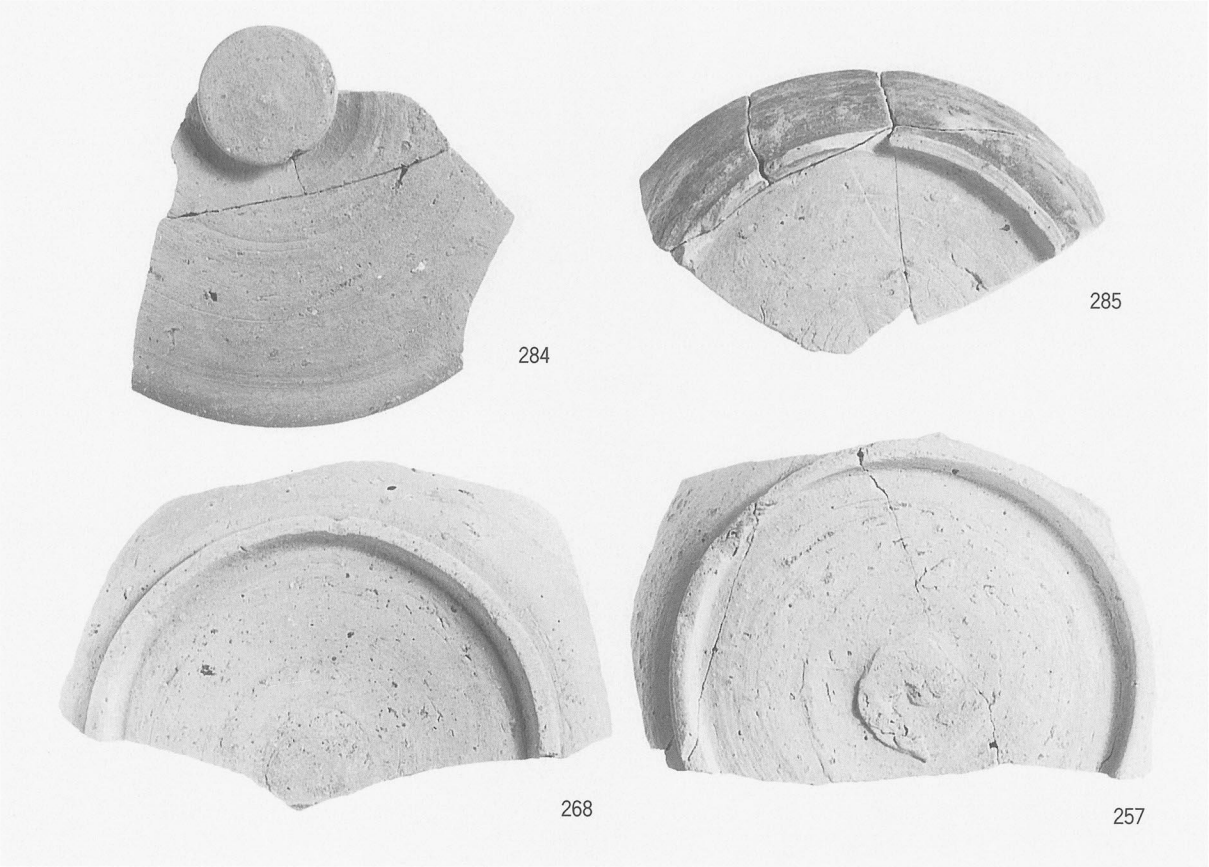
280

292

290

292

SK 42(257)/SK 44(261)/SK 47(266)/SK 49(268)/SD 25(284.285.289.291)



写真図版38　C 地区遺物(4)

SK37(254)/SK40(256)/SK45(263)/SK47(265)/SK48(267)/SD25(286)

254

256

265

263

267

286

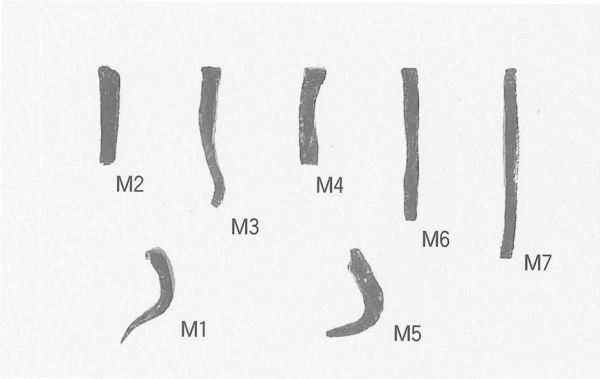
S9

S10

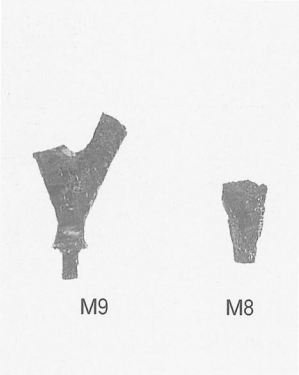
283

写真図版40　出土鉄器

包含層(M1.3.16.20)/SK08(M2)/SD01(M4.5)/SD03(M6)/SD04(M7)/SD05(M8)/SD02(M9)/SB11(M10)/SE01(M11)/SK25(M12.17)/SK29(M13)/SD07(M14.18)/SD10(M15)/SD13(M19)/SD09(M21)/SD09(M22.23)/SB30(M24)/SK48(M25)/SX03(M26.27)/

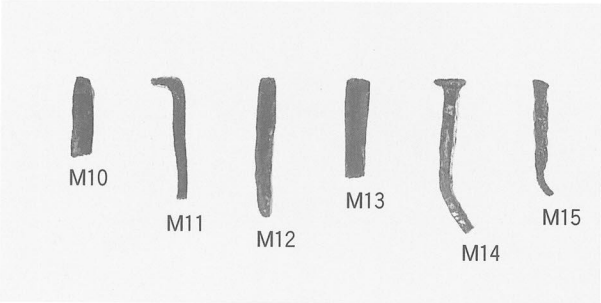


A 地区出土　鉄釘

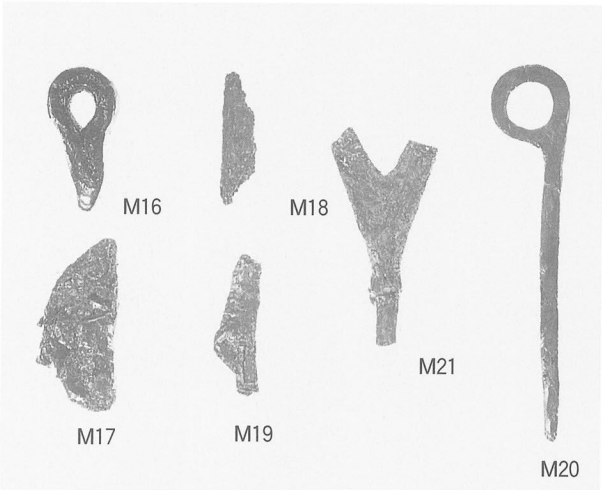


A 地区出土　鉄鏃

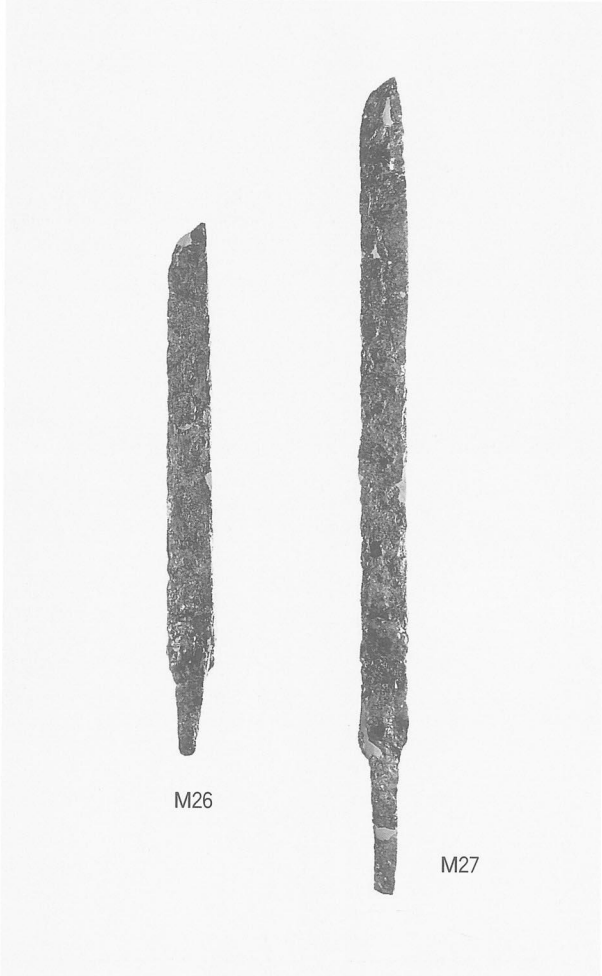
C 地区出土　鉄製品



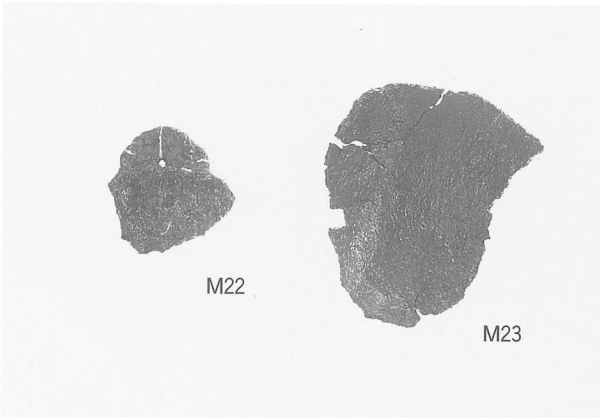
B 地区出土　鉄釘



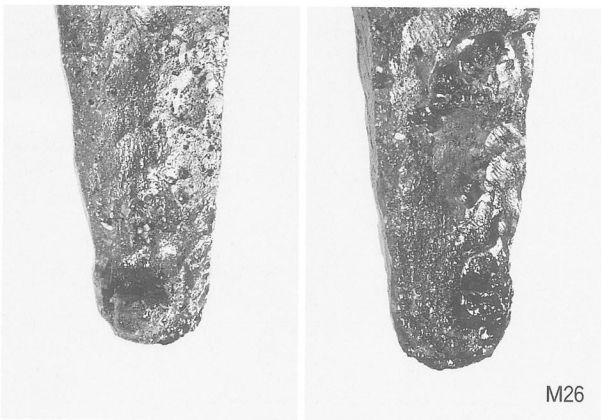
B 地区出土　鉄製品



C 地区 SX03出土　鉄刀



B 地区 SD09出土　鉄鍋



M26目釘　拡大写真

報告書抄録

ふりがな	ほうりんじきたいせきⅡ
書　　名	宝林寺北遺跡Ⅱ
副 書 名	道路改良事業及び揖保川流域下水道事業に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第223冊
編著者名	甲斐昭光・長濱誠司
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所 在 地	〒652 - 0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
発行年月日	西暦14（平成2002）年３月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
宝林寺北遺跡（ほうりんじきた）	兵庫県 龍野市 揖保町 中臣61-3 ほか	28211	910087 920329 930021	34度 49分 34秒	134度 32分 58秒	1991.11.18 ～11.22 1993.01.11 ～03.24 1993.05.11 ～08.19	296㎡ 3,722㎡ 3,589㎡	道路改良事業及び揖保川流域下水道事業に伴う調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宝林寺北遺跡	集落跡	古墳時代後期	掘立柱建物・土坑墓	須恵器模倣土師器・鉄刀・鉄剣	
	集落跡	奈良～平安時代	掘立柱建物		方形堀方をもつ建物
	集落跡	鎌倉～室町時代	方形区画・掘立柱建物・土坑墓・用水路	土器・滑石製品・石硯・鉄鍋	方形居館と区画をもたない集落

兵庫県文化財調査報告　第223冊

龍野市

宝林寺北遺跡 Ⅱ

道路改良事業及び揖保川流域下水道事業に伴う発掘調査報告書

平成14年３月29日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号

TEL　078(531)7011

発　行　兵庫県教育委員会

〒652－0032　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

TEL　078(341)7711

印　刷　交友印刷株式会社

〒650－0047　神戸市中央区港島南町５丁目４－５

TEL　078(303)0088